

黄昏の王国



秋の終わりの長い一日。

長い日差しが幾筋かの光の帯となり、窓から壁際までの空間を斜めに切っている。

その部屋の一面は、人の生業にはもう長い間背を向けたままなのだろう。干からびた文字と革の変色した古い書物が整然と納められていた。

窓から差し込んだ光はその足元に届くあいだ、幾多の浮遊物を空中にきらきらとさせ、緩やかに立ち上っている。それらはこの部屋にあって既に千年近くを経ているかもしれない。

まるで影だけが動いているかのように、給仕の男が食前のささやかな飲み物をささげたとき、若い男の顔は光の中にあり、老いた男は薄暗く、やに色の鈍い照り返しを受けていた。

オルクサンは、目の前に座っているこの古臭い親族と、王国の命脈の長さからすればほんの瞬きに近いこの時間をともにするだけで、自分もまた湿気たかび臭い石の下に埋められてしまうような、陰鬱な気がした。

北の古王国を治めるカラバ公は、その歴史の澱を凝り固め、人の型にしたような人物である。

オルクサンのように、新王国の世継ぎとして、世の流れや未来を見通そうとするものにとっては、なんともそりの合わない、—その年の差を考えにいれたとしてもなのだが—、二人の間には、体型の合わない衣服に、袖を通すような違和感が付きまとうのであった。

この会談は、いつもながらオルクサンが主導し、それにカラバ公が応える形式で進められた。

「東方では、ながく主な統治の時代が続いていましたが、このところは、名も知られなかった部族の、まだ誰とも分からぬ首領が、周囲の小さな部族を力によって支配下に組み入れています。四、五年もすると一つの国を名乗るかもしれません。」

オルクサンの起居する南のロンダルトを、さらに南下すると海に行き当たる。交易の船が、西へ東へと帆を上げれば、東から西からは、荷物と商人と噂話が帰ってくる。そんな話のうちのひとつが、宮廷人の口を賑わすこともある。

しかしその話題は、北の王、カラバ公の興味をあまりひかないようだった。

「それはだな、河の流れに浮かぶうたかたのように、興こっては消え、また新たに興こっては消えることを繰り返すものだ。民族というものは、そうした興亡を幾度と無く繰り返す。」

公の、それなりに長い人生の中で、同じようなことが西や東の諸国の間で何度かあった。

「そうであったかもしれませんが、この国を脅かすような存在となるのが、まれにはあるかもしれぬではないですか。」

その言葉の中には、これだから年寄りには困るのだ、というオルクサンの嘆きがある。

公の人生は、あと十年か長くても十五年。けれどもオルクサンは、これから五十年近くの長きに渡り、新王国で生きなければならない。行く末の長さを比べれば、その感じ方の違いは、いたし方無いことかもしれない。

「この千年の長きにわたって、我々を悩ませたのは北方の遊牧民族であった。しかしその憂いも、いまは昔のことになりつつある。」

— 取り付く島が無いというのは、このことだな。のらりくらりと躲される。まったく、、、

「まだ帰りませんか。奴は。」

いらだつ気持が、オルクサンの言葉の調子に出た。

だがカラバ公は、その若いいらだちを一向に気にする様子も無かった。「帰着すれば、何よりも先に、ここに来るのが習いだ。ここで待つのが
確実でなによりも早い。」
と応じた。

— それは、そうなのだろうが……。なぜこの年よりは、……。実際の
年齢よりも老けて見えるのだが、待つことが苦にならないのだろう。
老人というのは、そういうものなのだろうか。

「ところでイーリアスは、どうかな。」

—あの“おてんば”め、どこへ姿をくらましたのか。

「あのような年頃の娘には、こういう政りごとの話は退屈でしょう。中庭にでも出ているのか。それとも、ロンダルトの城の者の目の届かぬのをいいことに、何処かに出歩いているのか。もはや私の手にはおいかねます。」

手に負いかねる、というのは事実その通りだった。イーリアスが古王国に来なければならぬ理由など、何もなかった。が、何かにつけ、付いてくる。

宮廷の、とある事情により、王家のおかれた立場は蓮の葉の上の水玉のようであった。一見美しく見えるが、風が吹けばこぼれ落ちる。乾けば干上がり、消えてしまうやもしれぬ。

なので、宮城に置き去りにするのは可哀想と連れ出したのだが、それが仇となったかもしれない。しかし、だからといって、今更どうなるものでもなかった。

「あれはよい娘になったものだ。」
カラバ公の目が細められた。

「そろそろ、嫁ぎ先を見つけてやらねばならないのですが。」
「お前のような兄だと、相手の腰が引けて、なかなか成らぬのではないか。仮になるような話であったとしても。」

冗談のつもりか、カラバのジジイにしては珍しい、と思った。

オルクサンはそう思ったが、カラバ公が冗談一つ言わない堅物かといえばそうでもない。

カラバ公にとっても、ロンダルトとの関係は微妙な神経を使うことだった。それには、オルクサンにも関係する、ある男の存在が影を落としているのであるが、その登場はもう少し後になる。

まあ、話しづらいのは、“お互いさま”のことなのだ。

オルクサンは、その軽口をどういう風の吹き回しかと思いつつも、
「卑しくも王国の姫ともなれば、それに見合う縁談はなかなかありません。
他国にも今は適当な王子は無く、貴族どもの中から選ぶとなると、
それはそれで宮廷内の勢力争いの火種になりかねません。」

「ふむ。ロンダルトは特にそうだろう。宮廷での勢力争いと政りごとが
混乱しておる。嘆かわしいことだ。」

カラバ公は、白い髭の先を指でいじった。
それで妙案が浮かぶというわけではないが、髭というのはそういう
役割も持っている。

この一件に関しては、カラバ公はオルクサンに同意らしい。ただ、
言葉ではそう言うが、本心はあまり気にしていないようにもみえる。

「何よりイーリアスに、その気がないというか・・・。」

と言ったあと、まだ子供の気質がぬけないからとでもいうように、
肘掛けに載せた腕を立て、黒く波打った髪の前で手の平を開き、
首を振った。

「そんなことをいっている間に、婚期は過ぎるぞ。」

「いや、そうではなく、どうも意中の者が居るとか。とはいえ
口さがない侍女たちの噂話しですから、まことのところは分かりません。
私が問いただしても、兄には関係ないの一点張り。
王位継承者としての自覚も何も、あったものではありません。」

「なんと、お前の意のままにならぬは、先ほどの東方の国々だけでは
ないということか。」

カラバ公は、オルクサンの、“ままならぬ”という様子に愉快そうだった、が。

「是非にも、お忘れなき様。

ことが起こった暁には、古王国と新王国。合わせて向かわねば
なりません。新王国の都は、平和の都。けして守るには適しては

おりませぬゆえ。」

と、話しが元に戻ったところを捕らえて、言わねばならぬことを割り込ませることを、オルクサンは忘れはしなかった。

「分かっている、そのために我が公家が古王国をおさめ、わしがここに居る。」

— 存外、くどい男だな。この王子は。

食前酒を飲み干しながら、公は、そう思った。

王国は、およそ千年の昔、建国の祖アズール・イクン・ロンダベルが、弓と剣と智謀によりいまの古王国の原型を築いた。

以来、四十世代にわたり、歴代の王たちが治世と拡張を続け、広くなりすぎた領国をめぐり、貴族や王位の継承の絡んだ争いが、しばしば起こった。

王国の歴史が、陰謀と血によって書き換えられる時代が続くことも珍しくは無い。こうした王国の混乱を收拾する形で、というのか、分割統治により王権の支配力を高める目的で、南の新王国と北の古王国が設けられた。

そのとき王位継承者は南の新王国に遷都し、それから既に四百年の歳月が流れている。

新王国は、南は海に開け異国との交易も盛んで、温暖と肥沃に恵まれた土地柄であるが、古王国は冬ともなれば雪も降り積もるし、山や溪谷や森や湖沼も多く起伏に富んでいる。そうした地勢は、それぞれに人の形質にも影響した。

新王国の人々は楽天的で解放的なものに対して、古王国の民は総じて保守的であり、純朴でもある。

古王国の首都クラコワは、町全体を三重の城壁が取り巻き、外敵の侵入をたやすくは許さない。堅固な守りを誇ってはいるが、その対価として、町が容易に拡張できないという欠点を持っている。

王家が南に去ったのは、王国の肥大化に比して、この旧都の拡張がままならないこともひとつの原因ではあった。

クラコワはこの旧都の名前であり、古王国そのものを意味する名でもある。

同じようにロンダルトは新王国の名称でもある。旧都には当時の王弟が残り、公王として旧王国を支配した。その十二代目がカラバ公である。

当代の公王にして最も旧王国的な人物。には、子が居なかった。

カラバ公に世継ぎがないことで、彼がそのまま世を去ったからといって、古王国がそのまま消滅するということにはならない。新王国と分離し、長い年月を独自の歴史を刻んで歩んできた両国は、併合するには、あまりにも異なる体制を築いてしまった。

クラコワにはクラコワの貴族が居り、ロンダルトの宮廷にはロンダルトの貴族が生息している。その枠組みを変えたとしたら、国を覆い尽くすかのような巨大な指導力か、歴史を変革させるような民衆のエントロピーが必要となるだろう。

故に、カラバ公が亡き後は、いずれか王家の血を引くものが、この古びた国と体制を引き継ぐことになるだろうと、王国民たちは考えていた。ただ、王家に若い息吹がないことは、彼らに、この国をいっそう年老いたものに感じさせざるを得なかった。

そして、公の口癖は、
「この国は、長い黄昏の中にある。黄昏の王国に風が舞っている。」
であった。

木の軋む音、聞き様によっては厳かな音を立て、扉が開かれた。

回廊に蓄えられた冷気をまとうかのように、銀髪のを深々と垂れたのはカラバ公の側近中の側近、ハイアルト卿である。

「アレスミリアが戻りました。さきほど内城の門をくぐりましたので、まもなく……。」

と言い終えるころには、廊下の奥から急ぐような足音と、若い男女の話し声が石壁に反響しながら次第に大きくなってきた。

オルクサンもカラバ公も、まるで待ち焦がれた夕食が運ばれるのを待つ子供のように、入り口に視線をやっていた。

「ただいま戻りました！」

それは、牢獄に持ち込まれた燭台の光のように響いた。

「これはオルクサン様、ご機嫌麗しく……。旅装束の見苦しさはお赦してください。

カラバ様。ただいま戻りました。」

アレス（またはアレスミリア）と呼ばれた若者は、そこまでを一息に言ったあと、連れの娘を勢いよく振り返って言葉を続けた。

「お話の続きは、また改めていたしましょう。わたくしはカラバ様にご報告しなければなりません。」

「わたくしも、聞かせていただいてはいけませんか。」

「そうではありませんが、姫には退屈ではありませんか、表向きの話など。」

ばら色にほほを上気させた姫は、まだその感情を秘することも、駆け引きもしなかった。

「よろしいのです。それよりも、さんざん待たされた上に、子供扱いされて追い出されるのではたまりません。」

アレスミリアは、姫にあれこれ意見できる立場には無い。

「では。」

といって向き直ったとき、カラバ公はそういうことかというようなしたり顔で、一方、オルクサンは渋皮を奥歯で噛んだような渋面をつくりながら、二人のやり取りを見ていた。

カラバ公のしたり顔は、むしろそうであれば面白い、というような期待が顔に現れたに過ぎない。そういうものは、年長者特有の悪癖といってもいいかもしれないし、おおよその場合、それは外れているのだ。しかし、今回はそうではなかった。

それに対してオルクサンの憂慮は、イーリアスが昔ながらの遊び相手を見つけて浮かれているのだろう、この場の話を邪魔せねばよいが、と言う程度の思慮ではあった。

新王国の姫と、古王国の地方貴族の息子とではあまりにも身分が違いすぎた。故に、彼の思考の中では、そのようなことが起こるはずもなかったのである。

「早速ですが、今年取引は“毛皮五に対して麦十”とすることに決まりました。

こちらの収穫がよかったので、例年より上乘せしてあります。」

オルクサンは、興味深げを口調に漂わせて言葉を挟んだ。

「その毛皮をロンダルトの貴族どもに売りつけるときは、一体いくらになるのだ。」

「そう、金貨十枚というところでしょうか。」

「麦十が、金貨十枚だと！」

まさか、というような顔をしながら、アレスミリアンが答えた。

「いえ、毛皮一につき、金貨十です。二十枚でもお買い上げになるでしょう、ロンダルトの皆様は。」

極めて事務的、あるいは計算上の問題である、といたげな口調だった。

「だいたい温暖なロンダルトに毛皮など要るはずもないのに、わが貴族どもは！
見栄ばかり張りおって。それにつけこんで値を吊り上げるお前という奴も。
俺はゆるさんからな。」

カラバ公は、傍観者として、にやにやしてこのやり取りを聞いている。
オルクサンとアレスミア。王子と陪臣。立場は異なるが、夫々の国の
未来を担うかもしれない、というところは似通っている。

が、身分の差は厳然として存在する。

公は、アレスミアがここをどう乗り切るか。それを楽しんでいた。

アレスミアは、少々困惑したような雰囲気や顔を額に漂わせて言った。
「北の国には、これといった産物がないのです。クラコワの城壁や、
八つの支城も遷都よりこちらは大規模な改修もなされず、ことある
ときにはもろく崩れ去るでしょう。」

城の改修のため税を増やせば、民は困窮し国の力は衰えます。
けれども毛皮の対価は、これは商取引の儲けです。民を煩わすことは
なく、貴族の皆様は毛皮を手に入れることができますし、国の守りも
確かなものになる。お得意様である国王も喜ばれるでしょう。」

「わかった、もう言うな。お前の言う理屈は、飲み込こんでやろう。
が、聞けば聞くほど腹が立つ。とくに父上を引き合いに出すのはやめろ。」
オルクサンは、少々痛いところを突かれた、というような顔をした。

法外な取引を見過ごすことは出来ないと思いつつも、その利益が城の
改修に使われるのは、先ほどのカラバ公との会話からもやむないこと、
といわざるを得ない。

そして、彼にとって、凡庸な父王を持ったことに対する心の葛藤は、
往々にして、その話題を出来るなら避けたいという、歪んだ方法を
取らせてしまうのであった。

「お兄様、父上が毛皮好きなのは、みなが存じております。アレスミア
さまにあたり散らすのはお門違いですわ。」

オルクサンは「だまれ」といいたいところを抑えねばならなかった。

この場には、オルクサンの援軍が誰も居ないことを感じたからである。そしてそれは、ロンダルトの宮廷でも同じようなものだ、と心の中の影に、目を落とした。

「イーリアスさまには、上物の銀ぎつねを差し上げねばなりませんね。」アレスミリアは、承知の上で不用意な軽口を叩いた。

「まあ、あなたまで。わたくしには毛皮などは不要です。可愛そうな動物たちの命を奪ってまで、身を飾る趣味はございませんと常々申していますのに。」

イーリアスは、少し芝居がかった身振りでアレスミリアを振り返り、分かっています、というようにその言葉をたしなめた。

「これは、手厳しい。アレス、口は慎まねばのお。はっはっは。」カラバ公は、いかにも愉快というように、大柄な体をゆすって笑った。こうして、この話題の決着はついた。

「部族の長たちとは？」

カラバ公は、話の先を促した。

「お会いできました。みなさま、取引に満足しておいでです。」

「交易のおかげで、冬季の食糧不足に悩まされることもなくなった。」

「食料のために、危険を冒してわが国に攻め入る必要もなくなりました。」

「もっとも、遊牧の民に国境いなどという考え方はありませんが。」

カラバ公は考え深げな、そして過去をよみがえらせているような表情で、語った。

「そう、この平和が続けばよい。剣を右手に、手綱を左に戦場を駆け巡っていたころは、この命のやりとりが、これこそが生の証と感じていたが、多くの血が流され、民は親や子や兄弟を、家や家畜を失った。夫を亡くす妻、親をしらぬ子供。そういうものが生まれない世界はよいものだ。」

「多くの人が死ねば、国は衰えます。そしてそれを回復するのは容易なことではありません。」

たとえ子供が成長し、畑を耕し始めたとしても、生まれるはずであった子供が生まれることはないのです。」

この会話は、二人の間ではもう何度も繰り返された話であった。

「アレスミリア。」

オルクサンが、改まったようすで声をかけた。その声にくたえて、彼は声の主の方を丁重に見返した。

「お前の父も、北の部族との争いで命を失ったのか。」

「いえ・・・、そうではありません。病死と聞いております。」

「北の部族との争いが、いったいつ始まったのか、私もよくは知らない。だが、何十世代も前の王の時代から、引き継がれてきたのは間違いないだろう。」

力で侵すものがあれば、力で追い払う。何代もそうしてきたのだ。それをお前は、あえて交易と人の交わりに変えようとしている。

・・・なぜお前はそれを選ぶのだ。おたがい長きにわたる恨みもあるだろうし、習俗の違いもある、いつまで平穏が続くという保証もないだろう。」

オルクサンは、北の部族との融和には、なおも懐疑的だった。それは、彼自身がその当事者ではないからということだけではない。

この国の歴史が千年に及ぶといえども、北の遊牧民と、定住する農耕民たちの争いはそれ以前から続いている。

かつては農耕民が耕す大地を求めて北へと進出し、遊牧の民の土地を畑に変えた。今は北に追われた遊牧民が、時折その領域を侵しに来る。

いまが穏やかでも、それはまだ数年続いたに過ぎない、と彼は言うのであった。

「秋口の収穫が終わり、その年の気候がよくないときは、北から恐ろしい獣がやってくると、子供のころはよく言われました。

悪さをすると、怖い人が来るというわらべ歌まで聞かされたものです。人々は剣を磨き、弓のつるを張りなおし、たての紐を新しくしたのです。

普段穏やかな顔で、牛を追い、畑を耕している人たちだけに、なおさらそれを恐ろしく思いました。けれどもそれは毎年のことではありません。争いのない年が続くこともありました。

争いの歴史が古くから続くのと同じくらい昔から、商人は彼らと交易し、いろいろな物産をもたらしてまいりました。

私は、誰かが道筋を作ってやれば、その後を人が歩き、馬が踏みしめ、わだちが道を深くし、ゆるぎないものになると考えていました。

それにはお互いの利益をはっきりと見せてやる必要があります。」

—この話は、オルクサン様にはしたことが無かったろうか。

アレスミアは、息を継ぐ間に、そう、記憶の中を探った。同じ話を、何度も繰り返すのは良くない。退屈な頭の間人と思われてしまう。

無能と侮られてはならない。かといって、有能をひけらかしてはいけない。いまは、ほどほどの男と思われるのがよい。

アレスミリアの話は続いた。

「その年は、夏になっても気温が上がらず日差しが弱く、山の頂の雪がなかなか消えませんでした。

麦の収穫は前の年より少なくはありましたが、私たちの民が飢えるようなことはありません。

けれども、彼らの地では牧草が育たず、わずかな穀物を人と家畜が分け合うような有様でした。北の国では鋤や鎌の汚れを落とすよりも、剣と弓と盾の手入れをしなければなりませんでした。」

そのころ、すでにカラバ公の傍にあったアレスミリアは、
「北の部族に麦を供し、その対価として毛皮や羊毛を要求すること。交渉は部族と個別に行なうのではなく、全部族と一堂に会して行なうこと。アレスミリア自身が全権として交渉に赴くこと。」
を進言した。

カラバ公は、思いもよらぬ、その当時としてはあまりにも非常識な申し出に、心中では目を丸くして何を言い出すかといぶかったが、その出会いからして心地よい驚きに満ちたものであったので、たとえ子供じみた思いつきのように聞こえることであったとしても、ひとまずは話を聞いてみることを常としていた。

そして、その二日の後には、北の部族と交易を行なっている商人の中からシルヴェスタというものが選ばれ、まずはこの交渉の根回しに向かうことになった。

そう、表向きはその通りであった。

戦が起これば、商人は取引ができないばかりでなく、たまたまそのとき、彼の地に居合わせたというだけで、命を奪われることもしばしばあった。

戦争になるかならないか、それが人の知恵のおよばない天候に左右されるとなれば、商人の足場は非常に不安定となる。それは堅実な

商売とは程遠い、博打じみた取引と言わねばならない。

北との交易は珍しい産物が多いため、取引が上手くいけば、その旨みは南方の香料に匹敵し、時には生命との引き換えに値するように、おびえ警戒する心を麻痺させてしまう。

とはいえこの地方の安定を、彼らも強く望んでいた。

シルヴェスタの北行きは、実は、かねてからの計画が実行に移されることを伝えに行く旅であった。

その男、が選ばれたのは、偶然とか、たまたまではない。

アレスミアは、自分自身の代理として、北の部族と交渉をもてる信頼できる商人を探していた。商人たちが立ち寄る旅籠や、その近くの酒場に足を運んでは、それとなく人となりを観察する中で、偶然の中の運命が二人を引き合わせた。

身分を隠すような、旅装の薄汚れた外套で顔と身体を覆い、騒々しい男たちの会話に注意深く耳をそばだてながら、何度目かの夜、何度目かの店で、人探しはなにか他の手立てを考えたほうがよいのではないかと、アレスミリアは思いを巡らしていた。

それが灯心で燃える獣油の煙なのか、肉を焼く煙なのかは分からないが、酒場の中は霞がかかったように見通しが悪くなっている。

天井に渡された太い梁からつるされた幾つかの灯りが、この目くらましの中でも酒樽と人を見分ける助けをしていた。

男達は互いに昼間の顔を知らず、本当の名前も知らない。互いにボルクだかマッケンだか呼んでいるが、それがパンやスープでも大して困らないだろう。

頭の後ろを叩くような笑い声が、時折不意打ちを食らわせては引いていった。

床には小熊とも犬ともつかない黒い獣が寝そべり、その笑い声のたびに頭をむっくり上げては、また前足の間に鼻先を埋めたりを繰り返している。

男たちの中には、安っぽいドレスをまとった酌婦が侍り、適当に酔わせたあとには一夜の客としようとして誘っている。

ドレスは下品でなくてはならない。暗い明かりの下でも分かるように、顔にはおしろいを塗りたくらねばならない。男の欲情を掻き立てる様に、胸元は大きく開き、肩はあらわに出ていなければならない。

酒場の上には宿屋があり、その部屋は、時折そういうことのために使われているということだ。

不意に背後から、のこぎりでも引いているようなしわがれた声が聞こえた。

「おいお前、ちかごろちょくちょくみかけるがなにもんだ。だれと話すのでもなければ、のんだくれにもみえねえ。なあにをかぎまわってやがる。

おまえみたいなのにくろくろされると、酒がまずくなるじゃあねえか。」
という言葉も終わらないうちから、頭からかぶった外套に手をかけて、
力まかせに引き剥がそうとした。

不意に引かれてよろめいたアレスミリアは、止まり木から滑り落ち、
無様に床に転がった。

丸い扁平な顔の上に無造作に目、鼻、口を配置し、ぼさぼさの黒い鬘を
かぶせたような見知らぬ男が上から覗き込んで見ていた。

アレスミリアの若く汚れのない顔をみて、
「なんでえガキじゃねえか。ますますわからねえ。てめえなんぞの
くるところじゃねえんだ、ここは。」
といい、腰からなまくらな短剣を抜いて片手でひらめかしつつ、
「おいどうした、ここにはお天道様に顔向けできねえ裏道ばかりを
わたるものも集まってくるんだぜ。役人の手先か、小遣い稼ぎの
つもりか、へんとうによっちゃその顔を傷だらけにしてやるぜ。」
と気取った。

客達も、飲んでばかりは退屈だ。こういういざこざは、よい
見世物になる。わざわざ体の向きを変え、酒盃を持ち上げて
口々にはやし立てた。

観客達の声援に気をよくした男は、いよいよ調子に乗って
アレスミリアの腕を踏みつけ、鼻先に剣を突きつけた。

アレスミリアの顔には恐怖はなかったが、剣でも力でもこの男に
勝てるとは思えない。ではこの場をどうやって逃れたものか。

あれこれ思案をめぐらしたが、良い考えが一向に浮かんでは来ない。
どちらかと言えば、頭の中は真っ白だった。
とにかくこういう経験を、過去に一度もしたことが無い。

一 殺されるのか、という思考が頭をよぎった。

そこに、「よさないか。」と若い男が割って入り、ナイフを持ったその男の腕を軽くねじ上げた。

「いてっ、なにしやがる！」

「この身なりを見れば、お前が言うような、そこらの蓮っ葉な小僧ではないことぐらい分かるだろう。」

もし危害を加えれば、この国では二度と表通りを歩けなくなるか、牢屋にぶち込まれるか。悪くすれば首を撥ねられる。どうみても貴族の服装だ。」

「うるせい、余計な手出しをすんじゃねえ。おれはこういう、“こうき”なおかたって奴をみると虫唾が走るのよ。」

男は、黄色く汚れた歯をむき出しにして、言葉を吐き捨てた。

「なぜ貴族を嫌うのだ。」

いままで一言も発しなかった、子供の響きを残したアレスミリアの声が、その場に響いた。

ならず者に因縁をつけられ、床に転がされ、刃物を突きつけられても、悲鳴をあげるどころか抵抗すらしなかったその声は、反駁とか怒りとかでもなかった。

どちらかといえば、理解できないものに対する、好奇心や興味といった声音に近い。

「なぜだとお。ろくにはたらきもしねえくせに、うまい料理やきれいな服を着やがって。その元手といえば、俺たちから吸い上げた税や年貢の上がりだ。けっ、けなしているだけでもむかついてくるぜ。」

アレスミリアは、若い男の手をかりてようやく身を起こした。踏みつけにされた方の腕に、じんじんとした痛みが残っていた。

「ろくに働きもしないのは、おまえも同じだろう。夜毎酒場に出かけてくるようでは奥方も大変だ。

家では子供が腹をすかせ、女はうす暗い明かりの下で小銭をかせぐための縫い物にせいを出す。なのに亭主は酒場で因縁を

吹きかけては、騒ぎを起こしている。」

「なんだとてめえ！」

凶星だった、のだろう。もしくは独り身だったのか。ともかく、あまりこういうことを言うと場がややこしくなる。

曰く、火に油を注ぐというやつだ。

「貴族もお前のというような馬鹿ばかりではない。戦が始まれば、真っ先に戦場に出て死ぬのは貴族だ。お前たちが駆出されるのは、よほどの大きな戦いになってから。その年の麦の作付けを決めるのも、街道を整備するのも貴族の仕事だ。」

「このやろう、ごちゃごちゃとりくつをぬかしやがってよお。」
といて、男はアレスミリアの胸座に掴みかかろうとした。
太く節くれだった指が、ビロードに迫った。

が、
「いい加減にしないか。本当に洒落ではすまなくなるぞっ。
お若いお方もこんな店へくるのはおよしなさい。貴族に反感を持つものはこの男だけではないし、誰しも酒は心地よく飲みたいものだ。
心のたがが外れやすくもなれば、こんないざこざなんぞも珍しくない。貴族と平民がもめれば咎を受けるのは平民のほうだ。
と考えれば、やはりあなたのほうが来るべき道理ではないでしょう。」

アレスミリアは、止まり木から引き摺り下ろされ、床に転がされたことで、かなり動揺していた。殺される、と思うほどの危険に出会ったことも初めてだった。

が、次第に、筋を通した物言いで冷静にこの場を仕切り、火中の栗を拾おうとする男気もあるこの男こそ、もしや捜していた男かもしれない、と考える冷静さを徐々に取り戻していた。

「あなたの言われることは分かります。けれども私は、どうしても今日この夜、ここに来なければならなかった・・・。
そう、そしてこの騒ぎも起きねばならなかったのです。」

「その男。お前には感謝しよう。少ないが褒美も取らそう。」
と、懐から取り出した一つまみほどの砂金袋を手渡した。

男は狐につままれたような顔で、けれども抜け目なく片手で袋の重みを測って、今度は己の懐に入れていた。
明日になれば、他人の懐をふくらませているだろう。

そしてアレスミリアは、そんなことはもう目にも入らぬかのように、
「どうか名をお聞かせください。そして私の話を聞いてくれないか。」
と、もう手放さぬというように腕を掴んでいた。

これが、アレスミリアと、シルヴェスタという男との出会いであった。

まだ子供と言っているようなアレスミリアの途方もない構想は、
シルヴェスタを驚かせるのに十分であったが、それと同じくらい
彼を驚かせたのは、その計画の中心にわが身をおくことへの高揚感であった。

彼は代々の商人ではない。

彼を商人としたのは、彼自身が波乱と万丈を求め、旅と雲と空の下に
人生を切り開く決意をした結果であった。

懐旧と諧謔に満ちた平凡な日常の繰り返し、この古くぬるい黄昏の王国
の、たゆたう時の流れから漕ぎ出すことを彼の心は渴望していた。

ゆえに、アレスミリアの話が終盤に近づくころには、彼の心はすでに
北の草原を駆けていた。

そして彼は、アレスミリアの初めての同志となった。

その年、雪解けとともにシルヴェスタは北に旅立っていった。

いつもの年と同じように、綿布や絹の衣や葡萄酒、ガラス製品をキャラバンに詰め込んでの旅立ちであったが、アレスミアの書簡をたずさえることと、交渉の窓口となる人物を探すという目的があることが違っていた。

商人という肩書きは、人と会う口実として十分であったし、売り物さえあればどのような階層の人とも会うことができる。

彼はその春から秋にかけての季節に、商品の補充と持ち帰りのために、王国との六度の往還を繰り返した。

草原中のすべての民と会ったかと思われるほど手広く商いをを行い、彼は遊牧民たちの間ではちょっとした時の人となった。

商人シルヴェスタにはそれだけでも楽しかったが、片やアレスミアとの約定を中々果たせないでいることの焦りが、彼をより精力的な行動に駆り立てた。

しかし、そうしているうちに、いたずらに季節は過ぎ、草原には緑の色素を枯れ色に塗り替える風が吹き始めた。
北の地では、春と夏と秋は馬の足のように駆けていく。

シルヴェスタは目的を果たせないまま、王国への帰途に着いた。
長居をしていては、あっという間に雪と氷で帰路を閉ざされる。
一夜明ければ銀世界、など珍しくは無い土地だ。

アレスミアは、なんというだろうか。

疲労と、挫折感が彼の足取りを重いものにしていった。

彼がこの夏、交換した毛皮や羊毛や珍しい輝く石などは、冬の間に見たこともないほどの金と銀の山に変わるはずだった。

北との交易で、これ程までに儲けた商人は居るまいと思えるぐらいの商いだった。

けれども心は弾まなかった。

王国の境から始めての村、クルビスで落ち合うというアレスミリアからの使いを受け、シルヴェスタは馬上で振り子のようにぐらぐらと揺られながら進んでいった。

その村落は、街道の両側に付属する小さな家並みを中心として、谷あいにはまばらに点在する家々のさまが心地よい調子をつむぐような村であったが、彼の心はずっと沈んだままだった。

アレスミリアに合わせる顔が無い。彼の切なる思いに応えられなかった自分が、春先には、己の腕にかかれば容易いことと、自信に満ちて旅立って行った自分が呪わしかった。

村のはずれ、街道が家並みに吸い込まれるあたりに、騎乗した人影が見えた。

騎馬は軽快な蹄の音を立ててシルヴェスタに走りよってきた。手綱を引き、左回りに馬の首を巡らせて、シルヴェスタの馬と並ばせた。

「お帰りなさい、ご苦労でした。食事と酒と寝所を用意してあります。ひとまずはゆっくり身体を休めなさい。」

人生を、自らの手で切り開く男は、それ以前にいつ涙がほほをぬらしたことがあったか思い出せなかった。

アレスミリアには今回の不首尾については前もって知らせてあり、シルヴェスタの失敗は彼の大きいなる計画のつまずきであることも、彼は十分に承知していた。

けれどもアレスミリアは、国境の村まで来るばかりか、休息の手配をし、自ら迎えに出ることすらした。

「アレス様、・・・」というのを押し留めて、
「とにかく、ひとまず休まれるとよい。そのように情けない顔をしていたのでは、話が暗くなります。」
と慰めた。

シルヴェスタは、そのとき頬を伝う自らの涙の理由を知った。

もう、ただの気ままな、一人の商人では満足できなくなっていたのだ。

この年の冬は、いつもどおりの冷たく厳しいものであったが、彼らは次の年の遠征の準備に余念が無かった。

シルヴェスタは、北方からもたらした全ての荷を売りつくし、彼らの手元にひと財産となるほどの資金を積み上げた。

前は仕入れの手配から荷駄への積み込み、人足の手配など全てを彼が仕切ったが、それらは組織化されて、彼は王国内では、直接の取引に関わらなくてもよいようになった。

雪解けとともに始まる遠征では、シルヴェスタはいちいち王国への往還を行なう必要が無い。

冬は、雪解けの夢を語り合うのにとっても良い季節だ。アレスミリアンとシルヴェスタは、白く覆われた王国の夜を、ともに語り、ともに飲み、過ごした。アレスミリアンに、酒の飲み方を教えたのはシルヴェスタだった。

一方、二人がこうしてあわただしい冬を過ごしている間、北の部族の間では、シルヴェスタについての噂がいたずらな北風に乗り飛びまわっていた。

王国やその他の地域からの商人は彼だけではなかったが、かれほど長期にわたり、広範に草原を渡り歩き、大量の麦を売りさばいたものは居なかった。

一体彼は何者なのか。彼の目的は何か。

女たちは、彼がもたらした王国の、刺繍のこまかな絹服や、細工ものの美しさについてほめそやし、男たちは、彼が何らか他の目的により、例えば探索とか、この地にやってきたのではないかと、火を囲みながら勝手勝手な想像を巡らした。

冬は厳しく、屋外へ出での楽しみも少ない。パオ（移動式住居）の下で焚き火を囲んで、飲み、食い、話すしかすることが無い。噂は噂をよび、時としてただの人影が森に住む魔物となり、吹雪の中をさまよう家畜や人を襲うこともある。

それに比べると、シルヴェスタは生身の人間であった。
会ったことのある者、見たことの無い者も、雪解けと、その後の彼の到来を
心待ちにするのであった。

そしてそれは、部族の長たちにも伝染した。
彼らは、部族を束ねるものとして当然のように、そこから王国の政治的な
意図を読み取ろうとした。

とはいうものの、七部族は決して一枚岩ではない。
同じ遊牧民といえども、部族が異なればよそのものだ。
時には部族間での争いごとも有った。

ただの商人かも知れず。・・・であれば過剰な反応は、他の部族の
物笑いとなるかも知れず。

しかし、彼らにとっても王国との関係は非常に危ういもので、
かつては度重なる侵攻に業を煮やした王国が、自ら進んで徹底的な
討滅を目指した軍隊を仕向けてきたこともあったのだ。

王国の意向、王国との関係。言い換えれば、その時、王国を指導
しているものの思惑。趣味。性向。
これは部族長たちにとって、重要な課題だった。

「だまって見過ごすことはできない。これが族長たちの意思だ。」

移動式の住居、パオの下で、焚き火を枯れ枝でつつき回しながら、年嵩の男が話している。焚き火はつつかれるたびに小さく火の粉を舞い上がらせ、下の方から男の顔を赤くてらした。刻み込まれた皺の影が上へと伸びた。

「わたしの役割は・・・」

「直接会うわけには行かない、これは族長たちの戸惑いをあらわしている。」

やれやれ、もったいぶった回りくどい言い方だ。
要は、どこぞでバツタリと会って、探りを入れてみよということだろう。
年寄りの、このくどさは、病気のようなものだな。年寄り病だ。

「では、わたしが会って話をして、酒のついでに、お前は一体何者だと聞けば良いわけですね。」

「勝手な振る舞いは行かんぞ。」

「心得ています。」

(・・・いつまでも、小僧扱いか。)

「何事も族長に相談してからにせよ。」

この男だけは用心しなければいけない。と、年嵩の男は思った。
放っておけば、必ず何かの間違いを犯す。しかも、たちの悪いことにこの男はそれを間違いと認めない。いままでは、たまたま運が良かっただけだというのが、どうにも分かってはおらんようだ。

頭が鈍いわけではない。無鉄砲なわけでもない。どうにも、知恵と若さの使い方を間違えておる。
儂が若ければ、儂がこんな立場で無ければ、孫の相手をせんで済むものなら、、、。

「わたくしも、もう子供ではありません。ご心配にはおよびません。」

万が一、身の危険が迫ったときに、相手を刺していいかどうかなんか族長に相談できるわけ無いだろ。そんなこと知ったことじゃあない。
俺は俺のやり方でやるさ。

「何ヶ月も姿をくらました挙句、はては王国の娘をかつさらって来て、妻にするなどとは。許婚もおったのに・・・。」

「さらってきたのではありませんし、許婚は親父殿が勝手に決めていたこと。何度も何度も同じことをおっしゃいますな。」

年嵩の男は、しばらく腕組みをし黙っていたが、これ以上のいい争いが、いつもどおりに無意味に繰り返されることを、鬱陶しく思った。

「彼の男の名は、シルヴェスタというそうなの。」

重ねて言った。

「何事も慎重に、な。」

年寄りのくどさには辟易した。だが、久しぶりの胡散臭い匂いのする役回りに、ルークス・カルフの心は沸き立った。

オヤジの命とあれば、それなりの軍資金もでる。金さえ手に入れば、何処に行こうと何をしようとオレの勝手だ。

ゆえに形だけには頭を下げ、

「委細、承知いたしました。」と誓約した。

が、「オレだって名前ぐらいは知っている！」と、胸の内で悪態をつくことは忘れなかった。

シルヴェスタの奮闘は無駄ではなかった。

そして、アレスミリアはその夏の実りは無くても、まいた種は冬の大地で芽をだす準備をし、春の訪れとともに日差しを求めて、葉や枝を伸ばすだろうと考えていた。

アレスミリアとシルヴェスタ、あるいはルークス、やオルクサンとの違いは、彼の遠くまでおよぶ洞察と広い視点、計画性にある。

シルヴェスタは、自身の役割の重要性と目的をよく理解し、精力的に活動した。が、その結果を受けての次の段階について、すべてのプランを持っていたわけではない。

一年目の彼の活動が、冬の到来により頓挫したことは、かれに大きな挫折感を味合わせた。

ルークスは理屈よりも情動を重んじる男であったので、結果への道のりはまことに計画性の無い、いきあたりばったりのものであった。

彼は、シルヴェスタがどこに現れるか、皆目検討がつかなかった。こういうときは、人の目を張り巡らし、シルヴェスタを見かけたら快速を飛ばしてルークスに情報を集める、というのが常道であると思われるが、彼のとった行動は、はなはだそれを逸脱したものであった。

どこに現れるか分からないが、いまいるところはほぼ明らかであった。彼は王国の住人で、商いの手広さからいえば、都クラコワに居るに違いない。

王国の首都、そういえば妻と知り合ったのもそこであった。そこにいたころ幾度か耳にした事のある男の名前は、
「なんとかミリア、だったか・・・。」
今は明らかには思い出せなかったが、そういったことをふと思い出した。

「王国の若き預言者。」

そうだ、そう呼ばれていたはず。

やつがやることは、突拍子も無く誰も思いつかないようなことだが、それが実現するころには何故誰もそれを思いつかなかったかと思うような、

当たり前のこととなっている。

その鮮やかな手練に、いつか神様が予言を与えているのではないか、といわれるようになった。

— まあその神様というのは、少なくともオレたち草原の神様では無いだろうがな。

ルークスは、ただの気まぐれによって、出奔したのではなかった。部族の長の家のものとして、彼独特の見立てから、王国を知っておく必要があると考えた末の行動では有った。

ただそれが、若いころは誰もが一度は家を出たくなるという、例の衝動と何ほどの違いがあるかといえ、そうでもなかったには違いない。

さてさて、かつての出奔により、彼は王国の地理にあかるかったし、妻の縁者をたどれば宿に困ることは無いだろう。

そうだ、ついでに妻の里帰りもしておくか。

そうと決まれば雪解けになり、シルヴェスタが北に向かうよりも先に、彼との渡りをつける必要があった。

幸い、王国の住人であれば、まだまだ行程に難渋するような季節と感ずるころでも、彼ら遊牧民はいち早く往来を行なうことができた。

王国人にとっての名残の冬は、北の住人にはすでに春の到来だった。ルークスと彼の連れ合いは、馬上の人となりクラコワを目指した。

二人が残した馬の蹄の跡は、小さな窪みとなり、雪が解け地肌を表し、待ちかねた草が青い芽を吹いた。

シルヴェスタの今回の旅は、最初の旅よりもいっそう危険なものであった。

すでに北の部族は侵攻の準備をしているかもしれない。その最深部に身を投じるのである。交易を通して知己も増えたとはいえど、部族の勢いを止められるほどのものではない。そして、その危険は彼のものだけではなかった。

彼の出立からさらに三日の後には、アレスミアが麦と雑穀を満載した大規模な荷駄隊を指揮して、クラコワを出発する。

シルヴェスタの交渉結果を待っているのは、冬の訪れに間に合わないかもしれない。

落ち葉の敷き詰められた柔らかな土の道が、一夜の嵐で凍りつき、鑢のように硬くささくれ立ち、あるいは鏡のように滑りやすくなることも有る。

そうなれば、この三年間準備してきたことが全て豪雪の下に埋もれるばかりか、何年ぶりかの戦争状態に入るだろう。

そのとき、衰えつつあるこの王国は、持ちこたえられることが出来るだろうか。

一度は耐えたとしても、二度三度とくりかえせばどうなることか。一度戦いを始めれば、人の心は歯止めを失う。どちらかが崩壊するか、それとも双方が疲れ果て、これ以上立っていることができなくなるまで、この戦いは続くだろう。

アレスミアは、この計画の最後の仕上げを、自らの手と足で行なおうとしていた。

「あなたにやっていただきたいことが、二つあります。

ひとつはルークスと連絡を取り、私が麦を積んであちらに向かっていることを、各部族の方々に、速やかに伝えることです。

全ての部族に伝えることで、部族間に緊張を生みます。

どこかの部族が先走って荷駄隊を襲撃し、全てを台無しにする

ということは無くなるでしょう。

二つ目は、麦の配分についての記録です。これは施しではなく取引です。彼らの自尊心を傷つけては成りません。だから、どの部族にどれだけの麦がわたったかを記録してください。この麦の対価は、いずれ役に立つことがあると思っています。

なので、今すぐには求めません。求めても彼らには十分支払う用意が無いでしょう。」

「それは、確かに引き受けました。が、アレスミリア。いきなりこれほどの麦を持っていくのはいかがなものでしょう。交渉も駆け引きもなしに、こんなことで戦は避けられるのでしょうか。」

シルヴェスタは、些細なことを聞いておかねば成らなかった。彼は、一度アレスミリアの元をされば、全て自分の考えで行動しなければならない。であれば、彼はアレスミリアの考え方を、自分のものとしていなければならなかった。

「彼らは我々を信用していませんし、常識的に考えれば、我々が、麦を小出しにして、何らかの条件を吊り上げにかかってくると考えるでしょう。

でもそうだとすると、その交渉が、途中で頓挫してまったら？

相手は七つの部族です。それぞれ考え方や思惑が違うでしょうし、お互いの面子もあるでしょう。おそらく話がまとまるころには次の春が来ています。その間、子供たちは飢えと寒さに震えていなければなりません。

これほどの麦が届けられることを、彼らは予想だにしないでしょう。そして彼らの内の誰も、これだけの麦を集めることが、たとえ戦と略奪によってもできない事を知るでしょう。

彼らが見たこともない、手に入れようとしても出来ない物と量で圧倒することで、戦いの動機を喪失させるのです。交渉を始めるのはそれからです。」

ルークス・カルフとその父ツガル・カルフの呼びかけにより、七部族の族長会議が招集された。

彼らには、義務というような考え方はない。権利と面子が、何よりも優先される。豊かさが溢れるような生活圏ではないのだ。何事も少し足りない。そういう世界では、権利を主張することは、家族のためにとっても重要なことだ。

だからカルフ父子の呼びかけに、必ずしも全ての族長が応答しなければならないか、といえばそうでは無かった。

しかし、彼らは集まった。そして、話し合いをもった。すでに止事無き状況だった。

草原にはまだ青さが残っていたが、遥かな山の頂には、すでに白いものがうっすらとかかっていた。

シルヴェスタは、何度か顔を合わせた族長たちを前に、王国から食料が届くこと、軽はずみな行動は部族にとって何の特にもならないことを説明していた。

族長たちは、一応歓迎の意を表わしていたが、今まで前例が無いことでもあり、経験と自力を頼みとする彼らに、戸惑いと、何かの罨ではないのかという警戒心が、彼の提案を素直に受けることの障害となっていた。

「こんなことをして、王国になんの得るところがあるのだ。お前たちの申し出は魅力的だが、その代償として我々は何を支払わねばならない。どうにも納得が行かんのだ。」

また、別の族長が語った。

「お前は商人だろう。お前達にとっての利益があるはずだ。それが何か、納得できるまで説明してもらわねばおいそれと受けるわけには行かぬな。」

シルヴェスタは辛抱強く、笑みを絶やさぬようにした。

「それについては、何度も申し上げたとおり、戦を起こさないこと。

それと交易についての便宜を図ること。

そちらの産物、特に毛皮と羊毛については優先的に回していただくこと

となります。

あともう一つについては、私から申し上げるわけには行きません。私の・・・」
そこでシルヴェスタは言いよどんだが、
「わたくしの、主が直接皆様に申し上げることになるでしょう。」

彼は、アレスミリアと主従関係を結んだわけではなかったし、アレスミリアは彼を友人として処遇していたが、このとき他人が客観的に見れば、アレスミリアを彼の主と呼ぶのが適当であろうと考えた。

何事も方便である、と。

一人蒼天の下を旅していた頃の自分が、敢えて主と呼ぶのは我が身であったが、それはもう、ただの懐かしいだけの思い出でしかなかった。
その考えを飲み下そうとしたとき、初めての酒のように少し苦かった。

天幕の外から、人々のどよめきが風に乗って運ばれてきた。ほどなく天幕の併せ目が開かれ、光を背にした大柄な男の影が、荷駄隊の接近を告げた。

族長たちが、不審な面をぶら下げたまま外に出てみると、外界の明るさに目が慣れてくるにつれ細められた目が大きく見開かれ、啞然とした表情が一様に並ぶさまは、シルヴェスタにはこっけいに見えて、先ほどの会議での鬱憤が晴らされるようであった。

「笑っちゃあいけない。笑い事ではすまないことが、今起ころうとしているのだからな。」
と、一人ごちながら、彼は笑っていた。

荷駄は東の地平線に近い草原の丘を越えて、高く上り始めた日を背に受けて、彼らの移動式の住居（とはいえ族長会議に使われるものは、普通の住居よりはふた周りほども大きく、その中には七人の族長とその従者が入っても広々とした雰囲気をしたものであったが。）を目指して進んでいた。

先頭の馬や、馬上の人物の様子や表情が伺えるまでに近づいてきたにもかかわらず、それにつづく荷駄が一向に途切れる様子も無く、彼らがすでに越してきた丘の向こうまで、延々と続いているのであった。

馬が到着するやいなや、馬上の人は大地に足を下ろし、歩み寄るとシルヴェスタと短い抱擁をした。

「みなみなさま。わが主、アレスミリアです。」

芝居がかった調子でシルヴェスタが言うと、アレスミリアは内心可笑しかったが、慇懃な礼を行った。

「全ての荷駄が到着するのには今暫くかかります。その間に話を済ませてしましましょう。」

族長たちは、どちらかという長い長い荷駄隊の列がいつまで

続くものか、見ていたいという気がしていたが、子供じみた振る舞いを嘲笑されるのを恥じて、アレスミリアの申し出に従うことにした。

一同は再び天幕の下にいた。

「この度のことについては、シルヴェスタよりあらかじめお聞きのことと
思います。」

シルヴェスタはその通りというように、無言でうなずいた。

「わたくしからはもう一つ、重要な話が有ります。これはきわめて政治的な
話になりますので、私から申し上げるのが良いかと思えます。」

天窓から取り入れられた光の筋が、小さな上昇気流を起こしていた。
その上昇気流に引かれて、天幕の外からの新鮮な空気が取り入れられている。

「よく考えられている・・・」

と、アレスミリアは暫し感心し、心を奪われたが、族長達はその間、
光を見つめ何か魂がふっとその場から掻き消えたような神秘的な様子
にみとれ、話の続きを固唾を呑んで待っていた。

「七部族の皆様と、我が王国は同盟を結ぶことになります。」

「同盟？ 何のためにだ。」

意外な申し出に、ざわめきが広まった。

「この数百年、いざかいを起こしてきたのは、われと、それではないか。」
「われわれ自身の争いに備え、われわれと同盟を結ぶのか。」

アレスミアは、さざなみを制するため、少し大きい声を出さねばならなかった

「私たちは、もう二度と弓矢による争いは起こしません。話し合いにより全ての解決を図ります。またどちらかが侵略を受けた場合、共同してそれを排除します。

ただし、部族間の問題には口を挟みません。それは王国の問題は王国で解決するのと同じことです。」

彼は、一言一言が部族長の心に浸透するのを待つかのように、言葉を区切って話した。

族長たちは気がつかなかったのか、気にも留めなかったのか、或いは彼らの、天地のつながりの果てがそこまでだったのか、次のことは彼らの念頭には無かったのであろう。

彼が王国と呼ぶもの、それは古王国のことであり、新王国はこれには含まれて居なかった。

彼は、古王国の主、カラバ公の代理人としてきたまでであり、連合王国全体を代表して来たのではない。

もし、古王国と新王国の間で係争が起こった場合、盟約に従い北の七部族は、古王国の側につくことになる。

遊牧の民は古来より乗馬を巧みにこなし、王国を悩まし続けたのも彼らのその機動力であった。

動員兵力はさほどではないが、その行軍の早さにより、敵の防備が整わないままに攻撃を始めることが出来る。また、攻撃時の機動力により、相手陣形の側面や裏をたくみにつくことによって、歩兵の数倍の攻撃力を発揮することが出来る。

それはただ騎兵をそろえるということではなく、草原に生れ落ちてからというもの、大地に足をつくことよりも馬上で過ごすことのほうが

多いといわれる、彼らならではの戦いであった。

王国がこれまでその侵攻に耐えることが出来たのは、単に彼らが都市の支配というものに興味を持たなかったからといえなくも無い。

定住することのない彼らには、石造りの巨大な城壁に囲まれた、殺風景な町というものには何の意味も無かった。

「だって、パオ（移動式住居）を張るところが無いじゃないか。」

アレスミアの同盟により、古王国からは脅威が除かれ、同時に精強な一軍団を手に入れることが出来る。かれが新王国への刃として、それを構えるかどうかは別として、なのだが。

部族長たちを残し、天幕の外にでたアレスミリアは、今度は夥しい好奇の目に囲まれることになった。

この草原のどこから現れたかと思うような人々が、遠来の使者を遠巻きに取り囲んで、二人と次々に積み上げられていく麦袋の山を見比べては、なにやらくすくすと笑っている。

「どうでしょう、かれらは理解してくれるでしょうか。」

遅れて出てきたシルヴェスタに語りかけた。

「彼らにとっての利益がはっきりしないものは、難しいのではないのでしょうか。ルークス・カルフの部族を除けば、まだそれほど親しいわけでもありません。また彼らの部族は、大小に関わらず族長会議では平等に扱われることになっています。

こういう会議では、はっきりとした結論は出にくいものではないのでしょうか。」

「であれば、同盟は無理ということか。」

と、アレスミリアは声を落とした。

「そうだろうと、思います。」

「いいでしょう、さしあたっての脅威はかれら以外には無いのですから。

それが除かれることでよしとしましょう。それに・・・。」

シルヴェスタは継ぎの言葉を待った。

「同盟を拒否することで、彼らはわれわれに対して一つ借りを作ることになります。

彼らは誇り高い。ゆえに施しは受けないでしょう。要求に答えないということは、麦の対価は満たされないわけです。

そのことによって、我々は、彼らに対して優位に立つことが出来るということです。この借りは本当に必要なときに返してもらう事にして、楽しみに取っておきましょう。」

「あなたの言葉を聴いていると、上手くいかなかったことが逆によい結果を生み出すような気がしてきます。」

シルヴェスタは、いつもながらのことだが、アレスミリアの発想の柔軟さには叶わないと思った。

人々の目と頭がいっせいに動いたのを見て、会議が終わったことを知った。天幕が開かれ、次々と族長たちが出てくる場所だった。

「議は終わった。これからお伝えするでしょう。が、結論を言う前に、ひとこと言っておきたいことがある。

アレスミリア殿、我々は非常に感謝している。この冬は、本当に厳しい冬となるはずだった。ここに集まっているみなの中のいくらかは、それもあまり少なくない数の、特に年寄りと子供は、春に再び顔を見ることが無かったかもしれない。

だから、これから結論がいかなるものであろうと、早計に引き上げるということはしないで頂きたい。」

誇り高い族長は、誇り高いが故に深々と頭を下げた。

「それでは私の方からも申し上げます。たとえどのような結果に終わっても、この麦を引き上げることはいたしません。

ここにいる子供たちが、寒さと飢えに苦しむ姿を想像すると、私はこの生がおわるまで後悔と罪悪感に責められることになると思います。」

その族長は、彼の尺度で測ることの出来ない人間と出会ったことに対する戸惑いから、言葉をとぎらせたが、自らの責務に気を取り直して話を続けた。

「同盟については否。それ以外はそちらの申し出を受けるといたしたい。正直なところ、同盟というものが、よく分からないのだ。

我々七部族はこうして集まってはいるが、同盟とかの関係にあるわけではない。お互いに何の義務も負っては居ない。

我々はただ調整し、争いごとを収め、酒を喰らい笑うだけだ。

そういうことだから、我々にとってのみ、非常に虫のいい結論になってしまった。それについてには申し訳なく思う。」

「それで結構です。実務上の細かなことはシルヴェスタが決めるでしょう。我々は、こちらの習わしに従い約定を結びましょう。」

草原の真ん中で、七人の族長とアレスミリアは空と大地に杯をささげ、乳を醗酵させた酒を飲み干した。素朴で格式にとらわれない、正直で

取り繕いをしない、虚栄もなく駆け引きも無い。

「自然の中で生きるということは、こういうことなんだな。」

「はあ・・・」

と、シルヴェスタは相槌をうちながら、この人はまた何か、オレの想像の及ばないことを考えているのだな、と思いながら横顔を見ていた。

「来てよかった。これからも来よう。」

シルヴェスタ、あなたがうらやましい。クラコワやロンダルトの宮廷は陰気くさくて鬱っとうしい。私は彼らが好きになりました。」

「取引は、好きだけでは出来ません。」

ここだけは、何を気楽に、というような非難をこめて言い返した。ここまでの渡りをつけるまでに、どれほど苦労したことか、と。

「ええ。だから、それはあなたに任せました。」

やれやれ。子供なのか、それともとてつもなく大人なのか。

「よう！シル。」

人々のざわめきの中で、ひときわ通りのよい声が響いた。

「上首尾とはいかなかったようだな。」

ルークスは、からかうような口ぶりで、新来の友人になれなれしく声をかけた。

ここにいる同属の者たちの誰より、シルヴェスタと親しいということが彼に軽口を叩かせている。

「そうでもないさ。」

シルヴェスタは先ほどの会話を思い出しながら、得意げに言った。

ルークスは、その言葉に負け惜しみが無さそうなのを怪訝に思ったが、

「アレスミリア殿。遠路はるばる、よくおいでくださった。」

と、まだあまり面識のない客人をねぎらった。

「来た甲斐がありました。そして今日は王国とあなたがたにとって、特別な日となりました。」

そういうと、互いの肩を引き寄せて、親愛を示した。

「そう歴史的といってもよい日です。なぜ今まで誰もなし得なかったのか、いや、成そうとしなかったのか。そうしようと思えば、出来たような気がしますのに。」

ルークスは、そう言ってアレスミリアの見立てに同意を示した。

「壁をいちいち壊して通る人は居ません。壁を回って先へ行く、それが普通の人です。」

「壁、ですか……。」

ルークスには今ひとつぴんと来ないようだった。

「ははっ、ここには壁などというものはありませんでしたね。」

彼らの周りにはさえぎるものの無い、草原の風景が広がっていた。控えめに南中した太陽が、彼らに惜しみなく光を降り注いだ。ルークスが二人に杯を渡した。

「ルークス殿、これは？」

アレスミリアが子細を正した。

「我々には約定はありません。ただ友情の印として。」

杯には太陽が宿り、その光を三人は飲み干した。

ルークスは二十三才、シルヴェスタ二十五才、アレスミリア十七才の初冬であった。

アレスミリアの長い話は、ようやく終わりに近づいた。

「このときから、北の部族と古王国との正式な交流が始まりました。それは小さな交易から始まり、次第に春から秋を通しての大きな物の流れとなり、道は街道となりました。

人々は安全に行きかうようになり、自由な人の行きかいの結果、婚姻関係を結ぶものもいます。新たな仕事をみつけ遊牧を捨て、定住する者も現れました。

クラコワにはそうした運送業者の店がいくつも軒を並べています。おかげでこの都も以前よりは活気が出てまいりました。けれどこのことについて、私がしたことといえば、最初に麦を荷駄に積んで彼らの前に置いてきたことぐらいで、あとは民がやったことです。」

オルクサンは辛抱強く聞いていた。

彼が興味を持っていたのは、話そのものというより、このアレスミリアという男そのものにあっただからである。

人の本質は、話の中身よりもその言葉の言い回しや、仕草に表れることを彼は若いなりに良く知っていた。それは、ロンダルトという宮廷での暮らしが長い、彼が自然と身につけた処世の術でもあった。

「俺が聞きたいのは、お前がしたことではなく、何故そうしようと思ったか、なのだがな。」

意図的な、ゆっくりとした口調だった。

「臆病だから、でしょう。もし戦になれば、私はカラバさまのお供をしなくてはなりません。けれども私は剣も弓もからっきしだめなのです。

逃げるか隠れるかするのは得意なのですが、そうも参りません。カラバさまは敵を蹴散らして回られるでしょうが、そうなればその日の終わりを待たず、わたしの命は果てるでしょう。」

「そんなに、ご自分を卑下なさらなくてもよろしいではありませんか。それに剣や力を誇示するのは野蛮人のすることです。あなたの成されたことは、正しいと思います。ねえおじさま。」

「どうせ、わしは野蛮人だからな。」

カラバ公は、陽気に己をおとしめた。

「臆病者が、あの情勢で、のこのこ餌を山積にしていくとは思えんな。
が、それはいいさ。そんな表向きの言葉を聴きたいのではない。
お前は、カラバ公の威のもとで何をたくらんでいるのだ。」

アレスミリアは、オルクサンの執拗な問いかけに、忍耐強く
耐えなければならなかった。

「企みと言えはそうかもしれませんが、公がよばれる黄昏の王国の、
落日を留めたいのです。
わたくしの出自は貴族といえども、その暮らしぶりは庶民と何ら
変わることはないほど零落しておりました。
普通であれば、このような席にいることも憚られるような身分のものです。
民にとり大事なことは、今日の食事と、明日も今日と同じ平穏な一日が
続くか、ということです。私と母はそういう民に助けられて生きて参りました。
この民の願いを私は大事に思っております。」

「俺とて民のことは大切に思っている。」

「そうでありましょう。が、ロンダルトの宮廷はいかがでしょう。

アビアント王は、ウェルモンテ伯はいかがでございましょうや。」

オルクサンは、また触れられたくはない方に話が進んだことを不快に思った。

「父のことは申すなというている。あれはあれでつらい立場に
いるのだ。」

「アレス、口は慎め。儂は立場が立場だけに何を言ってもかまわんが、
おまえはそうではないぞ。」

カラバ公は、オルクサンには胸襟を開くつもりはなかった。

公は公なりに、アレスミリアに興味を抱いていた。
が、それはオルクサンとは違う観点からだった。

クラコワに呼び寄せて以来、アレスミリアの存在そのものが、
面白くて仕方が無いという感じだった。

「わたくしも、何を言っても構いませんわ。みな、私のことを、
言いたい放題のわがまま放題とおもっていますからね。それに、

父上の悪口をいうものなぞ、もはや珍しくもないでしょう。

それよりも、アレスミリア様。もっと、北の部族の話をしてください。

それとお兄様は、大切なお仕事の後でおつかれのアレスミリア様に、

しつこく絡むのはおやめください。

アレスミリア様は、ご自分の成すべきことを成されているのですから。」

イーリアスは、ただ無邪気さを装っていたが、彼女なりにアレスミリアを擁護しようと思っただけの言葉であることは間違いなかった。

年若い彼女もまた、アレスミリアが何かを隠し持っていることに気づいていた。

そして、その振る舞いの感じから、オルクサンには特に秘さねばならないこと、のようでもあると思っていた。

もしかすると、それは自分にも関わりのあることかもしれない。

例えそうだとした場合、彼女はアレスミリアの役に立ちたかった。

オルクサンは、この妹を敵に回して、これ以上の追求は無理だと悟った。

こいつの言うことは、全くまともで破綻がない。
しかし何か腑に落ちないのだ。

腑に落ちないことが、オルクサンを苛立たせる。オルクサンの、心のどこかで警戒しろとの声がささやく。

何に？いや、何よりも、アレスミリアが彼に仕えるのではなく、カラバ公の側近であることが気に入らなかったのかもしれない。

いずれオルクサンが、父の後をついで統治する南の王国は、繁栄の時代を謳歌しているように見えたがその内実は危ういものだった。

彼が継ぐはずの王位は、名ばかりのものである。

宮廷は実権を握る貴族たちの専横が甚だしく、中でも宰相 ウェルモンテ伯は、王妃の父として、また次の王の祖父として、王国の中での揺るぎない地位を固めていた。

その権勢はすでに王を凌ぎ、王国において何らかの便宜を図ってもらおうとするものは、王に願い出るのではなく、宰相かまたはその家来か、またはそのまた陪臣に付け届けを贈るのであった。

そして、彼は黒い服を好んだ。その故もあり、人は彼を「黒の宰相」と呼んだ。

権力の大きさは、権力者を頂点とした山の裾野の広がりと同比例する。この時代、ウェルモンテ伯が山脈の主峰であるとすれば、アビアント王のそれは裾野の一部に広がる丘陵にすぎなかった。

オルクサンは、やがて自分が継ぐはずの、王権を回復しなければならなかった。

彼が父同様の凡庸な人物であれば、宮殿の一室で可もなく不可もない、名ばかりの生涯を送ることで満足したかも知れない。

けれども、不幸にして(?)彼は肉体的にも精神的にも恵まれた素質を持って、この地上に登場した。

彼の剣さばきは華麗にして鋭く、肉体は疲れを知らぬかのように躍動した。

そしてその心は、彼自身も長い生涯を、退屈な王宮の中での

花いじりや遊戯に爛れるようには出来ていなかった。

王権の回復とは、今の持ち主から権力を奪い取るということである。

そのためには、王を助ける優秀な側近が必要だったが、彼の周囲にいるのはむしろ障害とでもいうべき貴族の子弟たちでしかなかった。

彼らはその親同様、王の取り巻きとして、こぼれ落ちてくる甘い菓子を拾うためだけにそこにいるに過ぎなかった。

この四人の中で、一番高貴な血筋を持ち、一番惨めな生涯を約束された男であった。

「みなさま、ご用意が整いました。」

侍従の声が、この小さな会合の打ち切りを告げにきた。

イーリアスもまた、いつか真実を知らねばならないと思っている。

それはオルクサンの居ないところでなければならない、と彼女の直感が告げていた。

アレスミリアが秘密にしている何かを。

それは彼と彼女の幼い出会いから今日までの、戯れの日々の中から彼女が拾い集めたものだった。

アレスミリアの過去の、断片のすき間がある方向を指し示していた。

秘密にしていること、それはきっとオルクサンに関係していること。

それは同じ血筋の私にも関係しているかもしれない。そのためには、彼が幾重にも張り巡らした障壁を取り除いていかねばならなかった。

ただ、そうまでして守られた秘密を明らかにすることが幸福なのかどうか、彼女自身にはいまだ判断がつかなかった。

けれども、若いイーリアスは、それを乗り越えられるだろうと思っている。

クラコワの王、カラバ公の宴席は、料理は華美なものではなかったが、重厚で長い木のテーブルの上に、手間をかけた調理された食材が盛られた皿が、所狭しと並べられていた。

また、列席者の身分も多種多様で、支城の城主をはじめとする貴族たち、シルヴェスタのような商業者の代表や農村の顔役、領主、クラコワの住民代表などが、特に身分の区別も無くテーブルを囲み、酒をあおってにぎやかに笑っていた。

こうなってくると、世上の酒場と何ほどの差があるものかと思われるが、銀の燭台や複雑な模様には織り上げられたクロスが、ここは下界では無いのだという戒めとなって出席者たちを牽制した。

このなかではオルクサンは正当な王位継承者としての敬意を払われていたし、イーリアスは若く美しい王女としての賛美を一身に受けていた。

彼らは、昔日の王権が正当に維持されていた時代は斯くのごとしであったろうと想像した。

その彼らの見立てによると、宴の事実上の主人はカラバ公ではなくアレスミリアであった。

彼の傍らには、入れ替わり立ち替わり招待客が訪れ、彼と言葉を交わしては、あるものは満足げに微笑しながら杯をからにし、あるものは急ぎ広間を出、しばらく後にやれやれといった表情で宴に戻ってきては飲み直すといった光景が繰り返された。

アレスミリアは終始上機嫌であり、微笑を浮かべ人々を応接していた。

イーリアスは待ちかねたという表情で兄に話しかけた。

「おにいさま、いったい何をお話なのでしょう。」

「さあな、なにせ隠し事の多い男だから。千里眼でもなければわからんよ。」

「もう、いつになったら私の順番が回って来るのかしら。」

どいつもこいつもアレスミリア……。

いやいや、今日は俺もその一人か。カラバの親父め、どこで手に

入れたのだ。あの馬の骨を。

「予言者という噂もあるからな、おおかたやつらの将来でも占っているのではないのか。」

それにしても、騒がしい宴会だ、と思った。

騒がしいが不快では無い。事実、今宵は飲みすぎかもしれん。ロンダルトでは、このように貴族と市民や農夫が同じ席に着く宴会など開かれることはない。宮廷暮らしばかりだと、世の中には貴族とその従僕しかいないような気がしてくる。

それ以外の世界が・・・見えていないのだ。

見えていない、ということは恐ろしいことかもしれない。あの国で本当は何が起こっているのか、いったい誰が知っているのだろう。俺の知っているあの都が、本当にロンダルトなのだろうか・・・。

オルクサンは、ざわめきの中でそんなことを考えていた。

「オルクサン様、イーリアス様、遠路よくお越しくございました。
クラコワの職人を代表して参上致しましたザイロフと申します。
ロンダルトでは私のような身分のものはとてもお目にかかることが
できませんので、本日は失礼とは存じましたが、お目通りを願
いました次第でございます。」

男は顔がはちきれんほどの笑みをたたえ、地肌の方が目立つよう
になった頭を見せながら、深々と辞儀をした。

「気楽にするがよい、わたしも、おまえ達のような国を支えてく
れているもの達と逢えて、うれしく思っている。」
オルクサンは確かに楽しんでた。

「イーリアス様。此度は未だ町中ではお見受け致しませんが、如何
されたのかと市のもの達が噂しておりました。もしやご病気では
ありませんまいかと。」

「エーと、何のことでしょう？私が市などに出歩くなどとは・・・。」

「これは申し訳ありません。他人のそら似というものでしたか。
お小さい頃からたびたびお越しと思っておったは、別人であったとは。
はっはっは！」

このおてんば娘め、とオルクサンは内心穏やかではなかったが、
それはひとまず脇に置いて、
「みな、アレスミリアが目当てか。」
と、酒盃を口に運びながら、さりげなさを装って聞いてみた。

「はい左様でございます。カラバ様はどちらかといえば剣と弓のお方、
このような宴で、言葉で客をもてなす方ではありませんので。」
「あれは、どのような話をしているのだろうか。」
「そうでございますねえ。近頃は都をあけられることが多いので、
不在の間の出来事や情勢をお尋ねになることが多いようで。」

— なんだ、無粋なことだな。楽やら劇やら、そういう話ではないのか。

「ただ、アレスミリア様は聞くまでもなくご存じでのようで。

私どもの話と合わないときは、大あわてをいたします。お陰様で、手前どもも職人社会のことに目配りが効くようになりました。商人仲間も“貴族にしておくにはもったいない”などと、さすがは“若き予言者”とみな申しております。」

「うむ、よい話を聞かしてもらった。」

「失礼を顧みず、長話をしてしまいました。」

「よい。

そうだ、今度イーリアスに似た娘を見かけたら、余り度が過ぎると兄が怒るとっておいてくれ。」

「はっはっは。承知致しました。それでは失礼いたします。」

オルクサンは、ゆっくりイーリアスに向き直って、楽しげにいった。

「これでは、おまえの順番は当分回ってこないな。」

騒々しい一夜が明けた。
青空に貼りつくように、翳雲が広がっている。

「草原から帰って暫くは、目覚めた時に目に入る天井や壁に、
今自分が何処に居るのか判らなくなることがあります。
住居といっても、木の枠を組み立て、その周りに厚い織物を
被せていくだけのものです。その外はと言えば、ほんと一に何も無い。
ずーっと草原が続き、その上に空が被さっているだけ。
空も風もつながっているはずなのに、こうして城壁の上で
感じるものとはやはり違う。」

「草原の方が好きなのですか。」
イーリアスは、ようやく、アレスミリアを独り占めする嬉しさに、
子供の面影を残した頬を輝かせた。

「そうかもしれません。けれども彼らはこういいます。
”旅することと、住むことは違うんだ。毎日毎日ひつじの尻尾を追い
かけて、馬の乳を絞って、冬は氷一色の世界になる。
俺たちはここで生まれ、ここで育った、ここよりほかにいくところ
はない。祖霊の魂もここに眠っているしな。”」

アレスミリアンは誰かの声音を使っているようだが、
それが誰だかイーリアスにはさっぱりわからなかった。

「それでもあちらが好きなのですね。」
「ええ。」
「私にもできるでしょうか、ヤギの乳搾り。」
イーリアスは両手を握って、乳を搾る様子をしてみた。

二人は一つの外套にくるまって高らかに笑った。そんなことが
実現することは、万に一つもなかった。なぜならそれは、総てを捨てる
ということだと、彼らは知っていたからだった。

ただ、すくなくともこの瞬間こそは、二人は幸福だった。

実現しそうに無い夢を、そんなことは気にとめないでただ語り合う。
一つの巣で暮らす小鳥のように、体を寄せ合い、お互いの体温で暖めあう。
金色の前髪と緑色の瞳を朝日に輝かせ、小さな口を丸くして白い息を
はいて遊ぶ。

細い指を光にすかせて、まぶしそうに細い鼻梁に皺を寄せて
しかめっ面をする。

イーリアス、十六歳。あらゆるものが目覚め始める、象徴の朝だった。

かつて行われた陰謀も、これから始まる策謀も。

「ウェルモンテ様、ロンダルトの商人どもが泣きついてきております。」

ロンダルトの宮城にある西宮の館に、ウェルモンテ伯の特別なサロンが開かれていた。

彼自身には、先祖から受け継いだ館があったが、日中のほとんどをアストアシタ宮で過ごしている。

彼の家柄と血統では王位につくことはできなかったが、アストアシタ宮で過ごすことにより、王と同じ気分を味わうことはできた。

王の一家は東宮に暮らしており、一日のうちで王が宰相の挨拶を受けることは殆ど無かったが、二人の主の存在は、壮麗な宮殿に陰鬱な影を落としている。

毎夜、夜半まで、西宮は煌々と明かりがきらめくのに比べ、東宮は早々に、所々に灯火が残るほかはひっそりと静まり返っていた。

「商人の泣き言を逐一聞いてやるほど暇ではない。どうせ税を下げるとか、売れ残りの何かを買い上げてくれとか、そういう話はお前のほうで片付けておくと、いつもいっておるだろう。」

たしなめられた男は、これ以上ないぐらい低く下げた頭を、さらに床にこすり付けんばかりにして、恐れ入ったかのように二三歩後ずさりするかのように身体を揺すった。

ただこれは、男が本当に恐れ入っているかといえばそうではなく、単なる追従としてそうしたに過ぎないことは、その場にいた誰もが知っていたし、いまさら気にも留めなかった。

ひとつの型、を演じたに過ぎない。

「仰せの通りでございます。が此度の申しようは、わたくしの手には余ることでございまして、是非にも賢明なる宰相閣下のお出ましを、願いたいと存知まして。」

「商務大臣たるお前の手に余るということは・・・、それはロンダルト

「一国のうちに納まらぬということか。」

「御意でございます。」

面倒なことを、としかめた顔のしわを一層深くして、
「仕方あるまい。手短に申せ。」と、右手をいかにも邪険に振って、
その先を督促した。

ようやく顔を上げた大臣は、
「商人たちの申しますには、ちかごろ北の部族との交易がうまく
いかず、ほとんど困り果てているとのこと。
その原因と申しますのが、クラコワの何とか申す商人が、商いを
ほぼ独占しているからであるとか。
また、南方との交易も実体は南回り航路をつかった東方貿易、
彼の地が混乱しております影響により、舶載品の輸入も細っております。
まさに泣きっ面に蜂とでも申しますか、一同、雁首そろえて
くくりかねないような状況でございます。」

ウエルモンテは、そんなことは、わしの出番ではないわいと思った。

「商人同士の争いか。」

と、このまま片付けられてしまつては、大臣としての面目がたたぬ。

「いえ、その何とかの後ろ盾が、どうやらカラバ公。」

— たわけたことを。

「カラバ公が、そんなセコイ。商売なぞに手を染めることはあるまい。」

「その側近のアレ・・・何とか申します小者が。」

「あれとかそれとか、おまえの話は一向に芯を射ぬのう。

が、カラバ公が相手では、少しばかりやっかいじゃ。

ここはあのぼんくら頭に一肌脱がせるか。」

「まことにありがたき。」

その言葉どおり、面を伏せて、にやりとした笑い顔を隠した。

「で、いくら入った。」

平伏したまま、

「何が？でございましょう。」

といいつつ、尚も、しらばっくれようとしたが。

「おまえの椅子を欲しがっておるものは、いくらでも居るぞ。」

との脅しにあわてて顔をあげ、

「いや冗談でございます。金が百ばかり。」と白状した

「ということは、倍の二百がところか。よし、半分回せ。」

「ご冗談でございましょう。半分とはまた・・・。」

「王に口をきくのはわし。王を操るのもわしの仕事。

おまえはわしに話をつないだだけ。半分でも多いな。百五十回せ。」

やれやれ、欲深な。金の百や二百など、宰相様には何ほどのこともないであろうに。

「・・・仰せの通りに、いたします。」

ただでは済むまいとは思っていたが。分かってはいるのだが、なにやら虚しい。

腹の探りあい。金の奪い合い。己もその内の一人だが、こんな時代がいつまでつづくのやら。

まったく。

「ところで、何故カラバ公が商人の後ろ盾などをする。無骨が取り柄の武人が、あろうことか宗旨替えとも思えんが。」

「はて、私も詳細は知りおよびませんが、何やら北の部族に大量の麦を送り、それがもとで商いの独占を・・・。」

一 こやつに聴いたのが愚かであったか。

愚か者は愚か者。王も大臣もこの宮廷には碌なものはおらん。そういう風に仕向けたのはわしであったが。

だからこそ、この地位も安泰。

が、相手がカラバ公で有れば、このわしも不用意に

手を出すわけには行かない。下手をすると、はした金では割りの合わぬ事に成るかも知れん。とはいえ撒き餌も必要であるからな。

「・・・まあ仕切っているのはもっぱら、そのアレなんとかというものと、もっぱらの噂でして。」

この男まだ喋っておったのか。

「もう下がって良いぞ。」

「・・・ありがたき幸せ。」

やれやれ。ウェルモンテ伯の前ではいつも冷や汗をかく。まあ三百のところ百五十が残ったのであれば、よしとするか。

あれだけの富と権力を持ちながら、たかだか五十ほどの金にこだわるとは、欲の深さでは王国に並ぶものが無いといわれるだけのことはある。

その欲深さが、長年にわたってこの宮殿の実質上の主としているのだろうか。

それにしても、バカを装うのも気苦労が多いことだ。

どうやら、あの話はまだ耳に届いてないようだ。北の部族と古王国でなされた約定。そんなことがあり得るのかと私も耳を疑ったものだ。

アレスミリアか、しょぼくれた田舎貴族の端くれと聞くと、一体何者なのだろうか。

商人どもは鼻がきく。おそらく只ならぬものを感じているのか、私がまだ知らぬような情報を持っているのだろう。

誰につくか、どちらに立つか、それは非常に重要なことだ。伯も、もういい年だからな・・・。

それと、いつまでもこんな時代が続くわけがない。伯が退いた後は、別の貴族が現れるのか。少なくともそれは私ではないな。

あの王子と、権力を巡ってあんなに気はない。そんな事が出来る歳でもない。誰かについて、それなりの暮らしが出来れば良い。

けれども、願わくば、もう少しマシな世の中で有って欲しいものだ・・・。

アストアシタ宮の長い廊下を、背中を丸めて思案気に歩く大臣の姿を、何人もの貴族が見届けた。

あるものは、彼がなにか失態をおこして失脚が近いのではないかと期待し、あるものは何か画策しているのなら、そのおこぼれに預かりたい、などと情報を集めて回った。

しかし、ウェルモンテ伯との会見の内容が知れるにしたがって、それは一時、ねずみが猫から逃げるように宮廷内に広がったのだけれど、期待が外れた軽い失望感とともに捨てられて、どこかの隅にはきあつめられて、知らないうちに王宮の暖炉にでもくべられてしまった。

これが、千年の昔にアズール・イクンが建国し、長い歴史を誇るこの国の首都の中心、そしてその住人たちが世界の中心とよぶ、アストアシタ宮の実情であった。

シルヴェスタは、クラコワの屋敷から、通いなれた登城の道をたどっていた。

彼の屋敷は、庶民の中でも裕福な者たちの住む一角にあった。

この町は、城壁の内側は、外部からの侵入者にそなえて、殆どの街路が細く曲がりくねって作られているために、乗り物での移動の便があまりよくなかった。

ために人々は、かなり裕福なものでも歩いて移動することが普通であった。とはいえ荷物を自分で待たないといけないか、付き人に持たせるかの違いぐらいは存在した。

シルヴェスタの場合、彼の仕事上の必要性から、常に二、三の付き人を連れて歩くのが普通である。

時には、彼らは書記として取引を記録したり、あるいは伝令として街中を駆け回ったりした。

今日の彼は、歩きながら憂いを感じていた。いや今日に限ったことではない。ここしばらく彼は、気がふさぐことが多かった。

内城の前庭に付き人達を残し、その憂いを伴としてひんやりとした城内に足を踏み入れた。

クラコワの城は、アストアシタ宮と比べると規模が小さい。外見は、典雅というよりは武骨な雰囲気を感じさせた。

もともとの築城がアストアシタよりはかなり古く、外壁も元は美しかったのかもしれないが、今はごつごつとした荒削りの山の岩肌を感じさせる灰色でしかない。

ただ、内部には殺伐としたものはなく、南の王国に比すると長い冬を、なんとか快適に過ごせるような温かみを持たせようと、歴代の住人の工夫が積み重ねられていた。

「シル！」

長い廊下の向こうから、呼ぶ声がした。
近頃アレスミリアは、ルークスにならってシルヴェスタを
そう呼ぶようになった。

それは、最初の頃はそう呼ぶ毎に、シルヴェスタがうかべる少し
困ったような顔を見るのが面白かったからであったが、それが
なくなった今もアレスミリアはそうよんでいた。

「お呼びですか。」

「ええ、やっかいなことになりました。」

厄介という割には、アレスミリアの表情に陰りがないの
シルヴェスタは見てとった。いや厄介といっているときの方が、
生き生きとしてさえ見える。

こういうときは、厄介なのは彼にとってではなく、私にとっての
厄介ごとになりかねない。

ほとんど厄介を背負いこむ性格に生まれついたのか、厄介事に
好かれるのか、“厄介”が“日常”に聞こえてきた。

やれやれ、、、だな。

「ロンダルトのアビアント王が勅を出された。

いわく、“何人たりとも対外貿易の独占を許さず。独占は価格の
恣意性を高め諸物価の高騰を招き、ひいては王国の安定を揺るが
すが為。”

まことにごもっともなおっしゃりようなのだけど。

裏を読めば、北の七部族との交易の一部をロンダルトの商人に
回せということです。」

「なるほど、明文にはしないで、我々を狙い撃ちしてきたという
ことですか。これでは表立って抗議も出来ませんね。」

アレスミリアは眉をひそめた。

「ロンダルトの商人達が泣きついたのでしょうが、無視をすればいずれ責めを負わされることになるでしょう。カラバ様にも迷惑がかかります。ここは一つ慎重に進めましょう。」

「我々が、苦労して築いた交易ルートを手放せと。国内取引や、南方貿易で結構な実入りがあるでしょうに、まだおねだりとは。」

シルヴェスタは、多少投げやりな調子で、
「で、いかがいたしますか。」と問いかけた。

「王の後ろで糸を引いておられるのは、ウェルモンテ伯。」
ほう、それはそれは。

「あちらが狸で、こちらは狐。」
まったく身が持たんな。

「何か言いましたか。」
「いやいや。」
危ない危ない。いや、私自身の物言いのことだがな。

「交易は今まで通りでかまいません。ただ、ロンダルトの商いは彼らにやらせましょう。彼らに品物をおろすことにします。

七部族とのつながりを持たない彼らが、いきなり交易など無理な話ですし、物資を運ぶ街道はクラコワが拠点。

ここを通さずに何かをするためには、新たに莫大な投資をして、街道や運送業者を整備する必要があります。

ましてロンダルトはクラコワのはるか南。自力で何かをするというのは、無理です。

なので、せいぜい十分な品物をおろしてやりましょう。

そうして、首尾よくことが進んだと浮かれている間に、ロンダルトの商人たちの首根っこを掴んでやるのです。

あちらの麦も捌いてやれば、入りと出、両方を押さえることになります。

さからえば取引は打ち切るぞ、とかね。こちらには願ったり適ったり。」

「やれやれ、本物の狐のほうはまだましですね。ではそのようにいたします。ロンダルトの商人が哀れに思えてきました。」

シルヴェスタは、いまさらのようにあきれた。
まったく、貴族なんかにはしておくのは勿体無い男だな。
かといって、商売人では仲間から疎まれるだろう。
勝ちっぱなし、はよくないのだ。

「シル。話はまだ終わりではありません。ロンダルトでの商いが
薄くなれば、あなたも少し暇になるでしょう。あなたに行って
頂きたいところがあります。」
「相変わらず、転んでもただでは起きないというか。」
つまずいた石を拾って、誰かに売りつけるような。

「シルヴェスタ殿。今日はなにか嫌味っぽくないですか。」
「…そうかもしれない。商いは申し分なし、よい屋敷に住み、
使用人に囲まれ、着るに飽きず、食うに困らず。
風雪に閉ざされ命を落としそうになることもない、
退屈で退屈で退屈な毎日。」

シルヴェスタは、近頃自分が憐れな、隠居して太った体を
椅子に縛り付けられている老人のように感じていた。

「そういうことですか、でも、それは今日限りで終わりにしていただきます。」

シルヴェスタは、ここしばらく続いている憂いから抜け出した
わけではないが、初めてアレスミアと出会ったころに感じた
くすぐったい感覚の目覚めを胸の中に感じた。

「それでは、今度はどこに行きましょうか。」

数週間の後、彼の影がクラコワの街路から消えた。彼の友人や
取引人たちは、ああまた北に旅立ったかと考えた。

今度の休暇は長かったな。でも、やつに安楽椅子は似合わない。
いまごろ何処の、旅の空の下に居るのやら、と。

ハイアルト卿は、カラバ公の側近として長くその地位にある。彼はアレスミリアが現れる、ずっと以前からこの城内にあり、戦場にあっては風車のように槍を回し、平時には狩りの供をし、カラバと共に年をとった。

アレスミリアがクラコワでの政治を取り仕切るようになり、カラバ公は、半ば隠退生活を送るようになった今も、表向きは彼の代理人として、様々な王国の諸問題が持ち込まれた。

これも、その中の一つだった。

「レセクルとエスクロルが、またいざこざを起こしております。その他には、雨続きでユルノ川が増水し洪水のおそれが出ておりましたが、ここ数日の好天により水嵩が下がって参りました。クラコワの職人組合が、例年通り道具供養の祭りを開きたいと申し出ております。」

「ふむ、世はこともなし。そういえば、例の、ロンダルトのあてこすりには如何対処したか、聞いておるか。」

「なにやら、ロンダルトの商人どもに、南での売りさばきを任せることにしたとか。」

「・・・して、その心は。」

「仕入れは、クラコワのシルヴェスタに頼らざるを得ません。

商いが大きくなり、彼らが潤えば潤うほど、北への依存度が大きくなり、抜き差しならぬ状況になっていく、とか申し出ておりました。二・三年もすれば、こちらの意向を無視できなくなるだろうと。」カラバ公は、ひげに埋れた顎を撫で回した。

「あの若さで、いつもながらの手練手管だな。

どう思うかな。わしなら、このカラバであれば、そんな触れの一つや二つ、無視をするか一蹴するか、いずれにせよロンダルトに黙って従うなど自尊心が許さんのだが。

あれには、それがない。」

「公とはご身分が違います故。」

「わしに泣きつきもしない。そもそも北の七部族との一件からしてそうだ。王国のものは、口には出さないまでも、彼らのことを放浪する蛮族とみなしてきた歴史がある。

戦はしたくなくても、こちらから彼らにへりくだってそういう申し出をするなど、自尊心が邪魔をして出来るはずもなかった。

なのにアレスは山のような手土産まで持参して、遙かな草原まで出かけ、彼らを手なずけてしまった。」

やってみよとは言ったが、本当に上手くいくものか、半信半疑、いや、賭け率はもっと低かった。むしろ、そんなことが実現するはずがない、と思う気持ちの方が強かった。

「しばらくは、何事かよからぬことを申すものもありませんが。」

「そうだ。けれどもいまや彼らは我々のよき隣人となっている。

何百年も前からそうであったように。

あらかじめ歴史の道がそこに引かれていて、それを掘り返して歩いているようにも見えるな。

あれには、面子や自尊心というものは、まったく意味を成さないもののようにも見える。」

「そう、自尊心など持ち合わせないか、それとも大事のまえには、塵や芥のようなものなのかもしれませぬ。」

「大事か。おそらくそうなのだろう。あれは何かとてつもないものを見ている。

あれの大事とは一体何事なのか。わたしは近頃、畏怖すら感じるのだよ。

あの小さく愛らしかったアレスミリアに。」

そして、いつからそれを胸に抱いていたのか、ということに。

ハイアルトは、そこで話を切り上げにかかった。

「ところで、職人達の祭りについては、例年通りと言う
ことでよろしいですね。」

うん、まあなというようにうなずいてから、
「今年は、仮面はつけんぞ。」と、付け足した。

「私は、お止め申しあげました。」
ハイアルトも付け加えた。

「イーリアスが、是非にというたのでな。が、どうもあれの
差し金であつたらしい。」

「仮面を付けて、身分の上下なく交わり祭りを楽しむ。アレスの
考えそうなことであります。もともとは地味な祭りでしたが、
おかげで華やかになりました。」

二人の名前が挙がったところで、カラバ公は別の用事を
思い出したように話を変えた。

「アレスとイーリアス、二人がどんなに魅かれあつても、身分の
差は如何ともできぬな。」

「ご養子になされば。」
策が無いわけではない、と。

「気安く言うでない。
それにしたところで、アレスと我が身分の差には何ともしがたい
ものがある。まずそちの養子にした上で、それからのことだな。
それに、養子になれば実家を継ぐものがなくなり、家門が断えて
しまう。たいした家柄ではないが、母御が悲しむというのじゃ。」

「左様で。と申しますか、それをそのまま信用してよいものか。」
ハイアルトは首をひねった。

「ふっふっふ。そちもそう思うか。あれは、嘘は言わない男だ。
だからみんな信用する。が、その言葉に嘘はないが、本当の意味は
もっと深いところにある。それに気づくときは、総て終わっている
ときだ。だからみな、あつけにとられる。」

「であれば、あの仮面の祭りにも裏があるのでは。」

「あろうとなかろうと、わしはもう仮面は被らんのだ。・・・仮面か。

あれの仮面の下には、どんな顔が隠れているのだろうか。」

「して、カラバ様。レセクルとエスクロルの件、いかがいたしましょう。」

ハイアルトは、横道にそれてしまった話題を、辛抱強く元に戻そうとした。

「そういう面倒なことは、あれに任せておけよ。よきようにするだろう。

まるで、あれの大事のために用意された出来事のようにな。」

「御意。」

「わしの頭を煩わせた罰じゃ。」

といいながら首の後ろをとんとん叩いた。

「それと、ロンダルトの首根っこを押さえにかかるとあればだ。

いずれはウェルモンテとぶつかることになるだろう。

気をつけねばな。あやつは、手段を選ぶような半可なことを

する男ではない。」

北との取引の件で、アビアントが妙な勅を出したということは、

裏でウェルモンテが動いたということだ。アレスミリアの名は、

ウェルモンテの耳に届いたことだろう。

出来れば関わりをもたせずにいたかったのだが、そうは行かぬの
だろうなあ。

国は二つに分かれているが、元はひとつの根だ。伸びようとする芽が
あれば、手の届かぬようになる前に刈り取ろうとする手がある。

片方は、日陰に収まりきらぬ才をもち、もう片方は日のあたらぬを
良しとしない欲望の塊だ。相入れること無く、避けては通れず、いずれ、
よからぬ何かが起きるだろう。

ハイアルトは無言ではあったが、同意のしるしとしてゆっくりと頭を下げた。

レセクル家とエスクロル家、もとは一つの貴族であった。
それも古王国八つの支城のうち、東北の一城を治める、
間違いなく名門といってよい家柄であった。

建国の父、アズール・イクンとともに戦った騎士の一人を祖とし、
その系譜は、歴代の王統譜とも並ぶ。
その一族が、相続争いから二家に分裂した。そのことも、王家と似ている。

家門を二分し、領地を二分したため、かつてはロンダルトを
含めても席次の上位は数えるほどであったが、いまや中小貴族の中に
埋没するほどの家勢しか持たなかった。
けれど、人は、かつての栄光を忘れなかった。

それに加え、面倒なことに旧領を二分したため境界線が町中を通り、
それを猫がまたいだということだけで、言いあらそいの種になるほど
二家の仲は悪かった。

お互いが領有を主張し、譲らないため、かつての居城は
長く主不在の状態がつづき、城壁の傷みは放置され、兵糧
はねずみどもの馳走に供されて以来、空になったままであった。

「さて、レセクルとエスクロルから、水の配分についての訴状が
それぞれ届いておる。言うまでもなくお互いの利益を侵害する内容だ。
水は重要。事がことだけに、早急に裁定を下さねば私闘に発展しかねん。」

ハイアルトはアレスミリアの前に、難問をつきつけた。
水はすべての命の源。特に農耕においては、水の分配ひとつで
その年の収穫が左右される。

水を分ける。そのことが地名となって残ることもあるほど、
人々の関心は高かった。

「さりとて、この問題の裁定は難しうございます。両方を満足
させる結論はありませんし、両方にとって痛みのある裁断を
下すことになります。下手をすれば、カラバ様の名に傷を付けます。」
「それは、ならんな。さて如何する。」

ハイアルトは、わしの頭を煩わせた罰、というカラバ公の言葉を思い出し、心地よかった。近頃小賢しい、と思うのである。大人げないといえ、大人げない。

アレスミリアは、一応考えたような間を持たせたがやがて、「放っておきましょう。」と、事も無げにその問題を小脇にうちやった。

「なんと。」と、ハイアルトはあきれた。あきれて、これ以上この話を維持することが、何か急に意味をもたない気分になってきた。

ハイアルト卿は、この二通の書状が来てからというもの、何とか両家の顔が立つ形での決着をつけるため、過去の水の係争に関する記録調べや事情聴取に、それなりの時間と体を裂いてきたのだった。

が、このアレスミリアとの一見無意味な会話の間に、急速に関心が失われようとすることに抵抗する気力が抜け落ちてきた。

つまり、バカらしくなったのである。

「ただ、何も見ないで傍観するわけではありません。

・・・そんなに気落ちされると何か気の毒に思えてしまいます。」
アレスミリアもさすがに悪いとは思ったのか、取りなしを試みた。

「よかろう、してそなたの考えは。」

その言い草は、いかにも面倒そうだった。

「噂を流しましょう。

一つは、カラバ様が怒っている、という噂です。理由はつけません。

ただ怒っていると。

もう一つは、領地替えをするらしい。という噂です。

これには詳しい理由をつけましょう。

”一つ、領主として領民の安寧を維持できない領主。”

”一つ、領地内の諸施設の維持管理ができない領主。”

”一つ、一族郎党の騒動を押さえられない領主。”

”これらは領地を剥奪し、代わりの領主を置くものとする。”

一つ一つは、ただのうわさ話ですが、二つが耳に入ったとき
両家のものはあわてるでしょう。

二つを併せれば、カラバ公はレセクル家とエスクロル家の騒動に
立腹している。

騒動の絶えない両家は領地を剥奪されるであろう、ということになります。

けれどもこれは単なるうわさ話にしかすぎません。

表だって抗えば、万民に恥をさらすのはご自分達です。

いずれハイアルト様に内々のご相談が来るでしょう。」

「で、その時わたしはどういう役回りをするのだ。」

ようやく、ハイアルトにこの問題に対する気力が戻ってきた。

「この問題は、元を正さねばいつまでも同じことの繰り返しです。

何かにつけ、彼らは諍い、訴をあげ、ハイアルト様を悩ませ続けるでしょう。

争いの元を根こそぎ絶つ。これしかこの問題を正すことはできません。」

「それができればとうの昔に。」

やっておるわ。

「そうです。けれどできなかった。それは両家の面子がじゃまをしたからです。

お互いの長きにわたる恩讐の果ての今日です。何人が仲介したとしても面子は立たないでしょう。

けれどそんな事を言っているのは平時のうちです。

両家の存亡の危機にたたせれば、面子云々は言うてはおれません。

彼らが助けを求めに来るときは、相当追いつめられたときです。

それまで放っておくのがよいと思われます。」

「おまえの言うことには一理ある。が、だな。」

ハイアルトにはまだ、これが最良の一手かどうか、という見極めが無かった。

「ウェルモンテ伯に倣ったまでです。まあ、感じの良いやり方ではないことは認めます。」

ウェルモンテの名が出たところで、ハイアルトにはようやく感ずるところがあった。

アレスミリアはただ思いつきでこれを言っているのではない。彼は何かしら、もう仕掛けをうっているに違いない。

「よかろう、おまえの言うとおりにしてやろう。けれども私もただ知らずにおまえの策の手駒になるほど枯れてはおらぬ……。何か裏があるだろう。」

ただそこは一筋縄ではいかない、アレスミリアのことである。

「よろしうございます。仮面の祭り、あれは我ながらよい思いつきでした。」

「若い者には楽しかろう。それがどう関係するのだ。」

カラバ公の一件を思い出しながら言った。

「古王国のどこに、こんなに若者が居たかと驚きましたが。」

「そうだな。」

「まるで、集団見合いのようでした。」

「確かにその後、婚姻の届けが急に増えたと聞いた。」

「おわかりでしょう。」

「わからんわっ！」

ハイアルトは、ついに怒った。

二つの噂は、人づてに伝わる過程で尾ひれが付いて、
時を隔てずして当事者達の耳に入ることとなった。

「困ったことになりました。」

「ふうむ・・・、如何いたしたのか。私は命が惜しいぞ。」

薄暗い一室で、二人の男が深刻な顔をつき合わせていた。

「あの訴状が、このような事態を招くとは、思いもよりま
せんでした。我々郎党も、家門断絶となれば行き場を失います。
家族を含めれば、何千もが路頭に迷うことに。」

「ひと思いに、人を集めクラコワに強訴するか。」

「それは、筋が通らぬでしょう。あちらは何も正式には
言っておらぬのです。

我々が主張することは、何の根拠もないこと。世間の笑いものにな
るばかりか、我々だけがそういった愚挙に出れば、エスクロルだけを
残し、レセクル家だけを取りつぶすかもしれません。」

身分の高い方の男は、皮の背もたれによりかかり、万策尽きた
かのように体の力を抜くと、深々といすに沈み込んでいった。

「困った、困り果てた。建国以来の家名をもつレセクル家を
わしの代で潰すなど、思いもよらなかった。」

もう一方の男も、主を力なく見やりながら言うしかなかった。

「彼の“予言者”ならやりかねますまい。何せ、ユルノ川の流れを
運河で制御し、北の七部族と結び、日が落ちかけたクラコワに、
建国の頃は斯くのごときか、と思わせるほどの隆盛を再びもたら
そうとする男です。

名門とは云え、わがレセクルの家もかつての家勢はありません。
握りつぶすことくらい、造作もないことでしょう。」

人は、悲観的な考えに囚われると、そこから抜け出せなくなる。

間が悪かった。ついていなかった。いや、もともとそういう星の下に生まれてしまったのだ。どうしようもないではないか。これは、逃れられない運命なのだ、と。

「なんとかならんのか。」

「まず、なんとしてもカラバ様のお怒りを、、、取りなしをしていただかねばならないでしょう。その上で、あのおふれが正式に出ないようにいたさねばなりません。アレが出ないうちは、我がお家も安泰です。」

で、だからどうすればいいのだ、と無言で相手の顔を探った。

「ハイアルト様に、ご相談申し上げるのがよいかと思います。」

「そうか、そうか。ハイアルト卿なら昔からのお方故、お味方していただけるに違いない。」

男の目に再び輝きに戻った。が、それも一瞬だった。

「ヤルキアルノ様にはご隠居いただきます。」

「なんと申した！」

「首を差し出すよりましでございましょう。何の手土産もなく取りなしだけをお願いしますか。

まして、ハイアルト様もカラバ様も、金品で動く方ではありません。

だからこそ臣と民の忠誠と敬意を集めておいでなのです。

それについては、彼のアレスミリアめも同じです。

故に、両君の信認を得ている。

この一件、甘く見ているとどこまで悪くなるか予想がつきません。」

と、力なく首を振った。

とりなしを、、、と言っただけは見たものの、それで解決できるとの確信が有るわけではない。藁にもすがる気持ちで、というぐらいの苦肉の策でしかない。

それが分からぬようでは、やはり身を引かせるしかないか、と思った。

身分の高い男は、しばらく沈思していたが、最後には、

「おまえの言うとおりにする。」と、力なく言った。

ヤルキアルノには一人息子が居た。名をキリアンデルという。

ヤルキアルノの隠退に伴い、キリアンデルが当主となった。当然のことながら、ヤルキアルノではなく、キリアンデルがハイアルトとの折衝に当たることとなる。

とはいえ、キリアンデルはハイアルトとは一面識もないので、レセクル家の家宰がハイアルトの家僕に話を通し、それからキリアンデルはハイアルトとの交渉に移ることになる。

いささか面倒な手順を踏んで、ようやく今日の会見にたどりついた。

「よろしいですか。キリアンデル様、お家の大事でございます。

心中からの訴えをいたさねばなりませんぞ。」

「承知している。」

いかにも育ちのよさそうな若い男は、朗らかに言った。

家宰は、ここをしっかりと押さえるのが我が役目とでも言わんばかりに、
「いかようなご裁可が下されたとしても、家門の断絶だけはさけねばなりません。レセクル家に繋がる一族郎党の命運がかかっております。」
と念を押すのを忘れなかった。

キリアンデルのことは幼少の頃から知っている。故に、家宰の目からは、何時まで経っても幼少の産毛が消えぬようにしか見えなかった。
跡継ぎからすれば、煙たいお目付け役である。

「家名に甘え、貴族としての役目を忘れ、誇りを失っては民に笑われる。」

「真に、その通りでございます。」と家宰は同意した。

さすがはお世継ぎ。何も申さずともおわかりである。
これであれば、過剰な心配はせずともよかろう、と少し安心した。
しかし次の言葉は、家宰の虚をついた。

「と、アレスミリア殿は申しておられた。」

「今、なんと・・・？」

いつのまに。

「アレスミリア殿は憂慮されていた。このままでは、この国の
中核足るべき貴族階級は、庶民の富裕層に取って代わられると。

彼らは力をつけてきている。それが歴史の流れであれば仕方がないが、
それは未だ個の力であって公の力ではない。

今彼らに此の国の行く末を任せるわけにはいかない。

なれども貴族がこれでは、此の国は早晚崩壊するであろう。かといって、
ウェルモンテ伯のようなやり方はわが望むところではない、とな。」

ただ育ちの良いだけの若者の顔は、ここには無かった。

「ど、どこでそのようなお話を。」

家宰の予期せぬ男がここにいた。

「昨年の仮面の祭り、あのときお近づきを得た。宮廷には
同年代の方がおられぬとかで、我らを、貴族の若者を集め
られたのだ。

おまえは領地にいるので知らなかったろうが。その集まりで
知り合った者も多い。」

「・・・。」

「みな仮面を付けているので、誰が誰だか判らなかったが、
皆好き放題、親たちの悪口をしゃべっていた。

それ以来、アレスミリア殿には何度かお会いしている。
このたびのことも、アレスミリア殿に取りなしを頼んでみよう。
ハイアルト卿の覚えもめでたいかの方であれば、
悪いようにされまい。」

「それは・・・。あやつめがこの度の騒動の仕掛け人ですぞ。

そのようなやつに頭を下げるなどと。」

家宰は、クラコワの城中であやつと口走ったことには、
はっとしたが腹立たしきは収まらなかった。

此の一件で、当主を引退させるなど世間の物笑いの種になり、
気苦労を重ね、おらずとも良い骨を折ってようやくのこと、
ここまでの段取りをつけたのだ。

なのに。

「それは真か。・・・であればかえって話は早いではないか。」

「お気は確かか、キリアンデル様！」

これまでの苦勞が水泡に歸する。

「アレスミリア殿に“あやつ”などと失礼な呼ばわりは、許さんぞ。」

若者は、老いた世代を柔らかく睨んだ。

「おまえも、親父殿と一緒に隠居だな。間違っても今騒ぎを起こす
でないぞ。なにもかも水の泡になりかねないからな。」

いったい、このお膳立ては誰がした。私ではなかったのか。

ここまで来るのにどれだけの苦勞をしたことか、と家宰は納まらなかった。

キリアンデルは、家宰を控えの間に残し、会見に臨んだ。旧知の間柄とはいえ、事が事だけにキリアンデルも緊張している。水をもう一杯、口に含んで置けば良かった、と思った。

「キリアンデル様。よくいらっしゃいました。」

ほどなく、開け放たれた方の入り口から、見知った顔が現れた。いかにも、知らせを受けて取り急ぎ来たというような、踵が地につかないような足運びだ。

アレスミリアは、いつもと変わらず嬉しそうだった。彼と会うものはみな、まずその笑顔につられる。いかにも会うのがうれしい。そういう笑顔だ。

「要件は、いわずとも。」

と、キリアンデルはことさら真面目な顔で言った。

「お厳しい。」

「当家を、本気で取りつぶすおつもりですか。」

「対応によってはそうなったかもしれませんが、それは最悪の筋立てです。私にとってもずいぶんと見立て違いをしたもので、痛手となったでしょう。」

見立て違いとは、いったい？ まあよいか。

「それを聞いて安堵いたしました。」

父と家宰は、これを期に隠居致します。家の者にはエスクロル家との融和を申しつけます。

これまでのいきさつから、困難なこととは思いますが・・・。」

家宰が用意し、キリアンデルに持たせた手土産はそこまでだった。が、アレスミリアは意外な申し出をした。もしここに家宰がいれば、なにがなにやらと、二の句が告げずにパクパクとしていたかもしれない。

「キリアンデル様、嫁を取りませんか。」

「えっ・・・。 いや・・・いずれそうなるとは思いますが、
なぜ今このときに。」

そう家が取り潰されるかどうか、必死の思いで来たのだ。
そこに嫁取りの話なぞ。

「相手は、エスクロル家のご息女です。彼女は一人娘です。」
「それは・・・まさか・・・そのようなことは。」

確かに、そのような人のことは噂に聞いたことがある。
が、よりによってエスクロルの娘など、思いもよらぬこと・・・。
いや、話の筋立てによっては、あり得ないことではないかもしれない。
が、しかし。

「レセクル家の当主が隠退するのなら、エスクロル家の当主も
隠居するのが当然かと。けれどもエスクロルには世継ぎの男子が
おりません。このままでは、エスクロルは断絶です。」
「エスクロルの息女が婿を取ればよいではないですか。」

キリアンデルは抵抗した。彼には抵抗せねばならない理由があった。
「あなたです。」
「それは、・・・できません。」
キリアンデルは、さらに拒んだが、アレスミリアに譲る気配は
無かった。彼は、挑むように次の言葉を言った。

「両家の断絶の歴史に、終止符を打っていただきます。
いにしえの名門、レム・プラント家の復活です。
これぐらいの大儀がなければ、此の騒動を忘れた頃には、
また元通りいがみ合いが始まるでしょう。
そのときは、本当に潰さなくてはならないかもしれません。」

キリアンデルはついに弱気の虫に取り付かれた。
今は家門を質に取られている。新しい当主としては、一門郎党のことを
まず考えねばならない。立場が弱かった。

「なるほど、仰ることは判ります。けれども結婚は、こればかりは・・・。」
「それは困りましたね。」

キリアンデルは、後は情に訴えるしかなかった。それが、
例えその場しのぎの取り繕いであっても。

ついにキリアンデル白状した。

「心に決めた方が、居るのです。」

「それはどちらの方ですか。」

さすがに、目を見て話すことは出来なかった。

「判りません。ただ出会ったときのことは、今でも心に残っています。

あの仮面の祭りの時、あなたのサロンでお会いしたのです。

あなたのお連れ様の供をされていました。

話をしていると思ったのです。何故だか、この方とは理解しあえる。

そしてお互いを助け合うことが出来ると。

もし今年も逢えれば、結婚を申し込むつもりでした。

もう一度会えば、たとえ仮面を付けておられたとしても、その雰囲気ですぐに判るはずです。あの場に居られたのであれば、家柄も申し分の

ない方でしょう。」

「ああ……、そうでしたか。」

ここで踏ん張れば押し返せるかも知れない。いや、そうせねばならない。

それほどの、強い思いがあった。

「元はといえば、あなたにも責任が。」

あるのではありませんか、と。

「そうですね、これは弱りました。でも、一度エスクロルの

ご息女にお会いになっては如何ですか、心変わりは無理でも、

両家の融和を図るのであれば、当主同士顔を合わせることは

無駄ではないでしょう。」

たしかに、会わねばならぬ道理はあるし、立場上、それを断ることは出来なかった。

「それに、恋などひとときの気の迷いと言うではありませんか。」

あの日以来、アレスミリアとは友人として付き合い、

教えられることも多く、信頼しあっていたつもりであったが、

やはり政ごとと、それは別のことなのだと、キリアンデルは

寂しさを覚えた。

この恋は、一度も日の目を見ることも無く終わってしまうかもしれない。当主と言う身分は、不自由でつらい境遇のものだ。が、郎党とその家族は守らねばならない。恋とそれを比べて、恋がそれに勝るはずは無かった。

「確かに・・・。これからは幾度となく話す必要があるようです。

その方が、婿をとられるまでは。」

「まあまあ。実はすでに隣室にてお待ちです。とはいえ、

婚姻の話はまだしておりません。」

「さすが、手回しがよいですね。」

おもわず皮肉が口をついてでたが、それをしまったと思うことも無いほど、意気は消沈していた。

「まあまあ。まあ、そう仰られずに。まずは、こちらにお通しすることにしましょう。」

壁の向こう側から、扉が両側に開かれた。

正面に黒い縞子のドレスに盛装した若い淑女が、白地に薄緑の小花模様を散らした壁の前に、毅然と立っていた。

例えそれが、強風にあおられる遥か山の頂に立つ岩の先端の上であらうとも、微塵も動揺しない意志の強さと落ち着きを備えた相貌は、光に満ちた部屋の壁飾りをかすませるかのような、美しい輪郭を際立たせていた。

「リディア様。お越しいただき恐縮です。こちらが、レセクル家の次のご当主、キリアンデル様でいらっしゃいます。」

キリアンデルは呆然として、たっていた。

そう、ただ案山子のように突っ立っていた。動けば、軽率に叫び声をあげてしまいそうだった。彼の名誉のために付け加えておくと、一目見て心変わりしたというわけではない

「もう、結構でございます。面をお取りください。

大変失礼なことをお願いしました。」

アレスミリアンが、歩み寄りながらリディアにわびた。

「そう、何事をさせるのかと。わたくしをおもちゃにしておられるのかと、いささか立腹致しておりましたが、イーリアス様からのお申し付け故、何か理由があるのだろうと思っておりました。」

そういいながら、目から上を覆っていた面をはずした。

「けれども今判りました。この方とは、わたくしお会いしたことがありますね。」

キリアンデルはようやく正気を取り戻そうとしていた。

この一年間、思い続けた仮面の女性が、そこに立っていた。

「アレスミリアン殿、先ほどの話。」

と、ようやく言葉を発したとき、アレスミリアは、吹き出しそうだった。腹の皮が引きつるくらい、笑ってしまいそうだったが、我慢していた。

「申し訳ございません。今となっては、総てが私の軽率なたくらみ。どうぞ総てお忘れください。」

「アレスミリア殿。なぜそんな意地悪をなされる。」
キリアンデルに泣きが入ってきた。

「意地悪などと、とんでもない。」
と云いつつアレスミリアは、なおも楽しそうに微苦笑していた。

「あなたは、楽しんでおられるのだろうか、・・・。」
キリアンデルは、この意地の悪い友人のことを、また好きになりそうだという気持ちを、複雑な気分で持て余し、危うく喉につめるところだった。

「いったい何事でしょうか。」
と、不審そうに、いままで話の蚊帳の外に置かれていたリディアが口を挟んだ。

「わたくしはしばらく退席します。戻ってよくなればお呼びください。一番楽しいのはあなたのはずですよ。キリアンデル殿。」

さて、二人を置き去りにして、二人は話している。

「お二人はお会いになられましたか。」

「ええ、すぐに気づかれたようです。」

「本当なら間違っても出会うことのないお二人が、巡り会って、恋に落ちて、一年後に奇跡的に再会する。 両家の命運を背負って……。ずいぶんと、ロマンチックですね。はあ……。わたくしたちはどうなるのでしょうか。」

「……。どうといわれましても。」

「わたくし、兄上の良いようにはなりません。早くわたくしをもらって下さいませ。」

この国でイーリアスに命令できるものは、数えても片手ですらあました。

「いや、身分が違いすぎます。」

と諫めるような言い方をしたものの、アレスミリアは苦笑いしていた。

「あなたが、身分を重んじて事に当たっているとはとても思えません。どこかによい方もいらっしゃるのですか。」

イーリアスは、いずれアレスミリアが自分をさらいに来るのは、当然のことと置いていたし、彼が身分に重きを置かないのは、事実であった。

「いえ、そうではなく。」

「わたくしのどこがお気に召しませんか。子供っぽいから？」

イーリアスもそんなことは本気で思っていない。こうやって二人は遊んでいる。

「姫。いまわたくしが、あなたをもらい受けると言うことは、此の国の未来を捨てよ、ということになります。わたくしがお望みであれば、暫し待って頂かなくてはなりません。」

イーリアスには、アレスミリアが何を言っているのか分からなかった。

自分の結婚がそんなに大きな意味を持つとはどうにも信じがたかった。
彼女はただの王女で、イーリアスはただアレスミリアンのもとに
嫁ぎただけだった。

王位は兄が継ぐだろうし、いまのところ、その兄は、精神的にも
身体的にも何の問題もない。イーリアスが王族から離脱したとしても、
なんの問題もない。

「あなたは、お望みではないのですか。」

「私がここにいるのは、此の国の民を安んじるためです。

わたくしの望みは一番後回しでよいのです。」

否定はしない。

「わたくしと添い遂げることが、此の国の安寧にそれほど
差し障りがあるのでしょうか。」

イーリアスには全く合点がいかなかった。

「あなたは新王国の姫でおられる。そしてロンダルトには、
私の行いを疎ましく思われる方が居る。

その方と私は、火と水のように相容れることはない。

そしてあなたとその方には、血のつながりがある。

私があなただを娶れば、その方は激怒するでしょう。

それに対抗する力は、わたくしにはまだありません。」

「それは兄上のこと？でも、兄はあなたを認めています。それとも・・・。」

イーリアスの推測は的をはずしていた。けれども敢えてそれを
訂正するつもりは無かった。

そんなことは、何の意味も持たないことだったから。

「わたくしと居る限り、あなたとのことは一番後回しです。」

「けれど、おばあさんになるまで待つのは、いやです。だって、
老婆に花嫁衣装なんて。

あなたは、あなたの成すべきことをなさいませ。けれども、

わたくしを、決して置き去りにしないと、誓ってくださいな。」

イーリアスは小指を立てた。

貴族は普通こんな真似をしない。

年かきの侍女も「姫様、何とはしたない。」と怒る。

が、イーリアスは、クラコワの市で教えられたこの契約が好きだった。

「あなたは、私の力の源です。わたくしが十四の年にこの城にきて以来、あなたに見合う男になることが、わたくしの生きる証でした。」

アレスミリアはその指を絡める、ただ一人の男だった。

そして、この言葉にだけは、濁りも嘘偽りもなかった。

「アレスミリア殿。ここから先、我らはどうすればよいのでしょうか。
リディア殿もわたくしも同じ意見なのです。
何かお考えがあるだろうから、まずそれに従うべきであろうと。」

侍従に呼び戻されたアレスミリアは、キリアンデルの幸福そうな顔を見るとまた吹き出しそうになった。
恋とは、それほどまでに楽しいものなのだろうか、

「お二人にはこのまま、ハイアルト様にお目通りされるのが
よいと思います。
直接、継承の件と婚姻の件をご奏上されるのがよいと存じます。
ハイアルト様のびっくりする顔がみられますよ。
これは滅多にはみられないものですから、かならず顔をあげて
ご奏上なさいませう。リディア様もよろしいですね。
急なことで驚かれたこととは思いますが。」

「それでは私もご同行してよろしいかしら。だって年中渋顔で
灰色頭のびっくり顔など、これほどの見物はありませんから。」

キリアンデルとリディアは、ことの重大さを、恩讐を超え、
両家を再び一つにすることへの障害を思った。
それを乗り越えぬ限り、二人の未来もないことの苦しさを、
暗く沈んだ夜の川淵を、小さな船で漕ぎわたるように思っていた。
が、アレスミリアとイーリアスの軽口が、夜の明ける光を運んで
きたような気がした。

「この一件、カラバ様はすでにご存じです。レム・プラント家の
復活についても、お慶びでございました。

お二人にも準備があるでしょうが、早々にご婚儀をいたさねば
なりません。その後、家内が落ち着くまでは、クラコワにお屋敷を
用意致しますのでそちらでお過ごしください。」

「それはなぜですか。」

「レセクル家とエスクロル家の合併については、今この世界で五人のみ
知る事。ご両家のみなさまの反発はいかばかりかと存じます。」

そうした最中に国元で暮らせば、お二人がどういう状況に置かれるかは火を見るより明らか。」

語るアレスマリアの顔は、さとすように静穏だった。

「わたくしたちも、ほんの先ほどまで夢にも思わないことでしたので。いや・・・、けれども、アレスマリア様とイーリアス様は一年前からご存じだったのですね。

でなければ、わたくしをわざわざイーリアス様の供になどおつけにならなかったでしょう。

あのとき、二人で手を取り合って踊らなければ・・・。」

「あの仮面の集まりは、もしや今日のための・・・お二人とも人がお悪い。

でもいったい何のために、ここまでする必要があったのでしょうか。」

「いや、こうでもしないとハイアルト卿のびっくり顔は、拝めないでしょう。」

四人は、若者らしく笑った。

けれども、それぞれは、思い思いの事を考えていた。

キリアンデルは、為政者が何かということをし少し学んだ気がした。

それは今まで、世継ぎとして真綿にくるまれた世界では
味わうことのなかった、少しざらざらとした感触の薬のようであった。
そのざらざらを飲みこまねばならなかった。

アレスミリアの真の意図は、いずれ判るだろう。

彼が一年先の今日を見越してあの宴を催したのであれば、今はこの先の
いつかのことを思っているに違いない。

しかし、それを知ることよりも、自分に課せられた仕事をやり遂げる
ことが、彼の期待に応えることになるはずであった。

リディアは、自分の思いとは別のもの、“運命”とでもよぶのだろうか。
それに翻弄される生涯を思った。

この時代、貴族の娘として生まれた女にはごく当たり前のことだったが、
これほど突然娘の時代が終わるとは思っていなかった。

ただ、政略結婚とはいえ、自分の夫となる男に望まれて嫁ぐので
あれば、それは良いことかも知れぬと思った。
私なら、この試練も乗り切れるだろうと。

そしてこの先の困難を想像し、それに潰されそうになりながらも、
髪の結い方も、着物のあわせ方もすべて変わってしまう、そんなことを
気にする自分が少しおかしかった。

イーリアスは、小さな灯火の中に身を寄せる二人を見守る、
母のような気持ちを抱いていた。

この二人の絆をたぐり寄せたのは私。私は王女。いつか国の母になりたい。
慈しみを持って民を見守りたい。

けれどもアレスミリアは王の血筋ではない。新王国の次の王はオルクサン。
古王国の、カラバ公には世継ぎはなく、このままでは公家は絶えてしまう。
アレスミリアこそ次の王にふさわしい。クラコワのだれもがそう思っているはず。

ただロンダルトのウェルモンテ伯を除いては。

アレスミリアがはぐらかしたそのことは、イーリアスの耳にも入っていた。
お祖父さま……。あなたの望みは罪深いのです。

アレスミリアはこの年二十歳、イーリアスは十九歳。
キリアンデルとリディアは二十二と十九歳であった。

ハイアルトは、イーリアスがその場にいることにとまどいを感じた。

いやしくも、連合王国の王女である。それが何ゆえ、このような政治くさい場にいるのかと。

その心の動揺がいけなかった。キリアンデルとリディアの婚姻と、それに伴うレム・プラント家の復活という思いもよらぬ申し出に、驚きを隠し得なかったのである。

キリアンデルとリディアはその驚愕に希望を見た。
彼の予見は正しい。若き予言者は、きっと我々を導くだろう。

ハイアルト卿は、その困難を思い、暫し沈黙で応えたが、
若者達の笑顔に、これが結論であってよいかもしれないと思い直した。

親が諍えば、子も諍う。子が諍えばその孫も、そのまた子の代も
不幸な歴史は続く。

誰かが変えなければならなかった。それをこの四人はやろうとしている。

私を入れて五人。カラバ公をいれて六人か。

いや、そもそもこんなことが続いていいと思っていた人間など
居たのだろうか。誰かそれがよいと思っているものが居るとすれば、
それはとんでもない愚か者に違いない。

その愚か者のために、両家のもの達はいがみ合いを続けてきたことになる。

「根こそぎ絶つというのは、こういうことであつたのだな。」

「仰せの通り。」

アレスミリアは殊更に強く答えた。

よかろう。誰がなんと言おうと、私の槍にかけてもこれはなさねば成らぬ。

何故槍かは釈然としないが、ハイアルト卿は、冷静な容貌とは裏腹に、
義に燃える騎士の中の騎士であつた。

ところで、「イーリアス様は、なに故ここにおわします。」

「見物に参りました。」

「はあ？」

若いものの考えることは、わからん。

「片棒を担いでいただきました、なかなかの役者ぶりでした。」

「この男に関わり合くと、ろくなことがございませぬぞ。」

「そのようですね。でも、滅多にみれないものがみれますから。」

「滅多に、ご覧になれないもの？でございますか。」

なんのことか、見当もつかぬ。

「ええ。」

イーリアスは、今日一番の上機嫌だった。

そしてアレスミリアが、今日一番ひやひやした言葉だった。

キリアンデルとリディアの婚約の発表から婚儀までは、濁流を小船で下るような慌ただしさだった。

領地とクラコワの間を何回も早馬が往復し、刻々と変わりゆく情勢を両家の一族と郎党に伝えたが、その日差は、いかにしても埋めようがなかった。

婚儀はもとより両家の統合に反対する者は多く、というよりほとんどの者が反対したが、協議の上、反対の使者を立てようとする頃には、クラコワから婚儀に必要な金銀の催促があり、それではせめて引き延ばしをし、有耶無耶にしようと画策する頃には、婚姻の席の出席者に使者が差向けられていたり、何もかもが後手後手に回るうちに、領地では反対派の膨らませた気運がしばみ始めた。

疲れ果て、もうどうにも、止められないのではないのか、と。

そして婚姻の日取りが近づくにつれ、領地には、かつての名門の地位の回復に対する期待感も高まりつつあった。

そんなある朝、それは突然起こった。

辻の角や、通りの家々の軒下に、かつてのレム・プラント家の紋章を染め抜いた小旗が下げられた。

人々が目を覚ます時には、町中がその小旗で埋まっていたのである。

それは伝え聞く、祖先の栄光の物語を思い出させ、それとはほど遠い、諍いやののしりに明け暮れた日常を辱めた。

反対するもの達はその小旗をむしり、焼き捨てようとしたが、それをみた住民達は、そのもの達がいかに恥ずべき、暴力的で野蛮な人種であるか。

この者達に煽動された自分たちの行いが、いかに非文明的なものであったかを思い知り、ついにはその者達を退けることを成し遂げた。

それは、単に暴力的な人々を排除したということのみではなく、己自身の中から、毒を洗い流す作業でもあった。

「プラタニス様は、どうだった。」
アレスミリアは、傍らに控えるニールリングに話しかけた。

彼は、アレスミリアよりはよほど格の高い貴族の出身であったが、アレスミリアの手足として彼の事業を助けていた。

まだ少年といってもいいような艶やかさを横顔にのこし、素直な金髪は襟足のところで軽く巻き癖を作っていた。

その髪をなびかせ駆け回る灰色がかった青い瞳は、城中の女たちを思わず振り向かせずにはおらなかった。

このころ、アレスミリアの側近くにはこうした若者が何人か居り、クラコワとその属州間を手や足、目と耳として駆け回っていた。

「民心は落ち着いて参りました。小旗は劇的でしたね。」
ニールリングは愉快そうだった。

「何かをなそうとするときは、小出しにはいけない。
圧倒的な、人々に今までに見たこともない体験をさせる
ことによって、心を一瞬にして塗り替えなければならない。
だからといって、何もないものをすり込むことはできない。
今回で言えば、人々の心に残る、昔はよかった、人々が
心の絆で結ばれ、争いもなく平和であった頃のことを
思い出させることが、そうだったな。」

「次は、どういう策を打たれるのですか。」

「いや、もう何もしない。余り手を出すといつかばれてしまう。
自分達の体験や行動が、何か他の力に左右されているものだと
知れると、人はあまりいい気はしないものだからね。」

「私たちはきっかけと、方向を指し示すだけにとどめた方が
いいのだよ。その道が間違いでなければ、後は勝手に、誰の手を
借りることもなく有るべき方に向かうものさ。」

「それでは、私は、如何いたしましょう。」

「しばらく休むがいい。此度のことで、クラコワとプランタニス
の間を、何度も往復してもらったからな。」

「アレスミリア様こそ、一度お休みになられては如何ですか。」

私の知る限り、クラコワの都で一番多忙でおられるのはあなたです。」

「婚儀が終わればそうするつもりだよ。ありがとう、ニールリング。」

この数週間だけで、人の心が総て変わったわけではない。

悪しき行いに溺れたものが、よき人に生まれ変わることはなく、
よき人の心の中が総て清浄な光で満たされるわけでもない。

けれども、婚礼の日。参列した人々の心は、若い二人の幸福を祈り、
復興した旧い名を持つ家柄の前途を祝福した。

空は冴えわたり、クラコワは日の光に包まれた。旧いプランタニスの
居城は修復が始まっていた。

レム・プラントの象徴であり威信でもある居城の修復は、領民達の絆を修復する事業でもあった。

例え領国の中とはいえ、王子というものは、気軽に移動するということが出来ないようにしている。警護の騎馬隊が伴走し、身の回りの世話をする従者も付いてくる。

例外といえば、例の”お忍び”ということになるのだが、今回は正客としての招待だった。

「オルクサン様、遠路ご苦労様です。」

「全くだ、おまえがレム・プラントの復興などを画策するから、俺が代理人としてこんなところまでこなければならん。」

まったく、何ゆえ俺がお前に使われねばならんのだ、といたげな様子で、片足を組んだまま椅子に深くそっくり返った。アレスミリアンはその前に立ったまま、

「そういえば、しばらくお越しにはなりませんでした。」といった。
「イーリアスのように、気ままな身の上ではないのでな。」
暫し間があった。

「アビアント王に何か。」

「察しがいいな……。お前だから言うが、公務にでる気力を無くしているのだ。」

王たる資質を持たず。己もそれを知りながら、飾り物としてのみ君臨する。世継ぎを得てからは、誰からも特段の必要とはされず、在位することすら疎まれる始末。

ただの凡庸なありふれた男なのだ。

ありふれた貴族でもあれば、それでもよかったのかも知れぬ。

彼の兄が健在で、王位を継いでいれば、そういう人生が用意されたのだ。彼の死によって、総てが狂ってしまった。」

彼の兄が健在であれば、……。その言葉はアレスミリアの耳をしばらく煩わせた。

「けれども、それによってあなたは次の王となられる。」

「俺は、あのような凡庸な王にはならない。俺は、統治し支配し君臨する。俺は、連合王国の真の王となる。」

そのとき、おまえは俺を支えてくれるか。おまえが継ぐの
だろう古王国は。であれば、イーリアスを呉れてやってもよいぞ。」
「わたしには、公王を継承する格がありません。」

こいつ、しらばっくれおって。いい加減やめろ。

「そんなもの、どうにでもしてくれる。」

「それに、ウェルモンテ伯。」

「・・・そうだな。だが、“じじい”だぞ。」

「お元気なんでしょう？」

「国王よりよっぽどな。ああ、（鬱陶しい）。

めでたい日だからな。今日はここまでにしようか。

イーリアスにはあったのか。」

「いえ、まだでございます。お会いしましたら、オルクサン様が
わたくしに“くれてやってもよい”と申されたとお伝えします。」
やれやれ、抜け目の無い奴だ、こいつは。

「俺に、忠誠を誓え。」

「イーリアス様になら。」

「こやつ。」

俺だけが知らなかったのだ。いや、知っていたけれど認めたく
なかったのか。一人だけの妹だからな。
父親の居ない没落貴族の小倅などに、誰が王女をあてがうものかと。

だが、いつしか認めざるを得なくなった。この古王国に、やつ
以上の存在は今は無い。
イーリアスは俺などより、よほど人を見る目が有ったと見える。
だが、ウェルモンテ伯は此の国をねらっている。

新王国ばかりか、古王国までも思いのままにしようとしている。
奴にはアレスミリアは邪魔だろう。
ウェルモンテ伯なら押さえられるかも知れない。

けれど、その子や孫にはどうか。彼の実力は彼一代のもの。
アレスミリアは、彼より四十年は長く生きるだろう。その間に

ウェルモンテの名のつくものは全て覆される。

ただ生きながらえるだけで、ウェルモンテ伯の負けだ。

祖父（じじい）よ。お前はどすするのだ。

「クラコワの小僧がまたなにかやりおったようだな。」

宰相は、あさっての方角を眺めながらつぶやいた。

このところ、奴の動きから目を離せなくなってきた。煩い蠅のようだ。

「レム・プラントの件でございますね。」

「気に食わんな。」

自分の答えが、宰相の意に沿うたことにほっとした。

ついでにこのことも耳に入れておこう。

「ここ数年、クラコワにむけての金銀の流出が増えております。」

「変わったことといえば、北方の交易ぐらいか。ロンダルトのものがやっておるのではなかったのか。であれば、クラコワに、ということは無かろう。」

「確かに、ロンダルトでの商いは、彼らの手に帰しておるのですが、その仕入先が、実はクラコワになっております。」

「なぜ、だ。」

宰相の中の、警戒心がむくむくと起き上がってきた。

もう、明後日の方角ではなく、話している大臣を見据えている。

「クラコワからそういう申し出があったということで、新たな交易ルートを開き、街道を整備し、運送業者を育成して独自にやるよりも、品物はこちらから下すので、商いのみやるほうが楽だろうと。クラコワの商人はロンダルトからは手をひく。彼らは商ない優先ですから、利にさとく、一も二もなくその話になびいたということです。」

「お前は、それを黙って見過ごしておったのか。」

宰相の目が、黒く光った。

「いえ、決してそういうことでは、ございません。」

わたくしめは、あの勅が出たことまでは知っておりますが、

表向きはどこの誰をさしてということではございませんで

したので、以後は商人どもから特段の訴えもございませんので、

気にも留めずにおりました。

商人どもは、ロンダルトからクラコワが手を引いたことで大いに気をよくしております、商いも大いににぎわっております。ですから、黙ってみていたのではありません。何も知らなかったのです。」

「何も知らなかった、だと。」

どいつもこいつも、よくもそんなことを抜けぬけと、全く、恥知らずなことができるものだし、云えたものだ。クラコワの小僧にいいようにやられておるではないか。」

「そうでしょうか、これまでろくに取引のできなかったロンダルトの商人が、これから北に向かっていっても、物事はそう都合よくいくわけではありません。クラコワの言うことは正しかったのです。折角出された勅が、時を経ずして反古になるようですと、笑われるのはアビアント王の無知であります。こちらは助けられたのです。」

「だが、ロンダルトの商人は、クラコワのひも付きになってしもうたではないか。仕掛けたつもりが、気が付けば我々が檻に入っておった。」

してやられた。わしとしたことが足元を救われた。これはクラコワのことではない。

わしのロンダルト、わが足の下にあるロンダルトで起こった失態だ。

「レム・プラントの件もやっかいなことだ。あれは、ウェルモンテよりも古くから続く由緒ある家柄だ。とくの昔に消え失せたものを、黄泉の国から生き返らせおった。

わしは王権を抑え、貴族の勢力を伸ばし、血統によって選ばれる無能な王ではなく、その才によってのみ統治する世を作ろうとしたのだ。

だがレム・プラントは、古より王家と供にあったことにより称えられる家柄。有力な貴族であるが、王家を支える側に居る。」

このまま、いつまでも見過ごすわけには行かん。棘は早めに抜いておかねばならぬ。そうやって、この地位を守ってきたのじゃ。

「わたくしは、別な会合がございますので、これにて失礼を。」

なんだまだ、うろうろしていたのかこの男。お前なんぞに用は無い。
元はといえば、お前が持ち込んだ一件ではないか。

「ふん、どこへなと行くがよいわ。」

この宮廷を端から端へ渡るのに、二本の足は要らない。
処世術さえあればよい。
処世術とは、長い物には巻かれよの術である。

「やれやれ、ウェルモンテ伯も今度ばかりは旗色が悪いようだ。
わたしも次の身の振り方を考えねばな。
商人どもには例の件で貸しがある。ちと相談してみるか。
今のうちに、クラコワによしみを通じておくのも悪くはあるまい。」

世俗の人間は、常にその時代の寵児を求める。

並の人間の、並みの日常では決して実現できないことを、
軽業のように実現してみせる。それはまた、若き容貌としなやかな肉体と、
透明な心を備えていなくてはならない。

世俗の人間は、その者について語ることにより、人生の
足りない部分の埋め合わせを行なう。

ウェルモンテにも若いころがあったが、彼の手は、金と陰謀と、
時には暗剣に汚れていたため、その容貌は暗い影を宿し、人の壁に
守られた肉体が素にさらされることはなく、その心は猜疑心に満ち、
陰湿にゆがんでいた。

ウェルモンテが新王国を掌握して以来、彼の存在を脅かすものは
常に排除されてきた。

新王国は、華やかな都と、盛んな商取引、長い外敵の不在から
繁栄の時代にあったが、その反面権謀術数が渦巻く陰惨な社会を
内包し、人々は言いようのない閉塞感の中にあった。

「パリッシュ、居るな。」

呼ばれた男が、物陰から姿を現した。

「ここに、控えております。」

「例の小僧の件、調べは付いたか。」

「あらかたは。」

「はなしてみよ。」

「アレスミア・スークリアは、クルビス村のあたりの小貴族の息子です。貴族というよりは、田舎の領主と言ってよいかも知れません。

いまその家屋敷には女が独りで住んでおり、それがアレスミア・スークリアの母です。父親は早くから居りません。アレスミアがまだ幼少の頃に、死亡したと言うことです。」

「いくさか。」

「そうではないようです。もともと裕福な家柄ではないようですが、母親の父が早世したころから家が傾き、彼の幼年時代は相当ひどい暮らしぶりだったようです。」

「カラバ公とあったのはそのころか。子細は判って居るか。」

「それが、どうにも、当人達以外に詳しい事情を知るものが居ないようで。」

「カラバ公もお節介なことだ。光に導かれて来たのだ、生まれた時に虹が立ったのだ、出まかせも多いが巷で聞いたものと余り相違は無いようだな。」

其処まで言って一息ついた。

「が、この裏には隠れた何かがある。あのような才が、突然降ってわくような事があるものか。」

パリッシュと呼ばれた男の本領は、ここからだった。

今までの話は、前口上のようなものだ。

「それについてですが、一つ気になることがございます。

事が事だけに、慎重を要するのですが・・・。

クルビス村の出生記録に妙な記載が有りまして。

母親の名は間違いないのですが、父親の名がどうにも此の国のものと思えぬ名でして revadnoln keruzaなどと。

まともに読める名前ではありません。」

ウェルモンテは顔をしかめ、しばし眺めていたが。

「確かに読めんな・・・。しかし、北のはずれの村であれば、

そういうこともあるだろう。もともと字が怪しいとか、

単なる当て字か、流れものか、なにか・・・。」

「わたくしもそう思っておりました。そう思い、そのことは忘れかけた、ある日。何気に名を眺めておりましたときに、読めてしまったのです。

あろうことか、綴りは少し異なりますが、逆さにするとアズレクン・ロンダベルと読めるのです。」

「アズレク・・・、何だと！あり得んことだ！いや有ってはならん。

こんな・・・。まさか。

いや、まてよ。そうであれば、今まで見えなかった景色の細部が、霧の中に隠れていたものどもがはっきりとしてくる。」

宰相の想像は、ほとんど確信に近いものだった。

天才はまず直感し、証明する。

そしてパリッシュにも、それは間違えようのない事実に思えた。

アズレクン。その名前は、彼にとって忘れようとしても忘れることの出来ない、特別な名前だった。だからこそ、そう読み取ることが出来たのだ。

「よいか、けして他言してはならんぞ。やつが果たして

どこまで知っているかは知らんが、もし明るみになれば我が身の破滅。

何か手立てを考えておかねば。」

もちろん、パリッシュがこの事を余人に漏らすわけではない。

ウェルモンテのために、こうした面には出せない、秘密の仕事をずっと続けて来た男だ。

そして、そう言ったウェルモンテが、次の決断を下すまでに、然程の期間は要しなかった。

アレスミリアは旅の帰途にあった。

キリアンデルとリディアの婚儀が終わり、彼が数年にわたって密やかに育ててきた様々なことどもが、ようやく結実しつつあった。

が、彼には未だ一つ、ロンダルトとの関係、特にウェルモンテ伯との軋轢にどう対処するかを考える必要があった。

自ら事を仕掛けるつもりは無い。それはアレスミリアらしからぬやり方であったからだ。

周りから見ればどんなに極端で過激な方法であっても、彼は窮地の中からやむなくそうしたという態度をとり続けた。

そうすることにより、彼の行いはおのれの欲望を満たすためのものではなく、生死の限界からやむなくなされたものという印象を余人にあたえ、無私な人としての声望を集めるのに役立ったからである。

事実、彼はそういう人間であったのだが、人の評判というのは毀誉褒貶が甚だしい。彼の基盤は“生まれ”でも“経済力”でもなく、人心の支持にあったため、何事も慎重にならざるを得なかった。

今は、主に北の七部族の慰撫を担当していたシルヴェスタを欠いているため、その間の事どもは彼自身が行なっていた。

その途中、生家のあるクルビスの側を幾度か通り過ぎたが、私的な旅行と混同されないように生家を訪れることはなかった。

ようやくクラコワに到着した頃には、あたりはすでに薄暗くなり、物陰はすでに暗い闇の領域と成っている。

その闇のいくつかで、息を潜めてアレスミリアの帰りを待つものがいた。

それを知らない馬上の人は、既にクラコワの城門をくぐり、そのまま内城を目指した。

日が暮れた街路に人通りはなく、馬の行く手をふさぐような人の姿を気にする必要もあまり無かった。

家々の窓から漏れる灯火と、空に向かってゆっくりと上がっていく炊煙が、革袋に葡萄酒を注ぐときの豊穡の匂いを嗅ぐ時のように、言いようのない幸福感で胸のうちを満たした。

あの灯火の一つ一つの下に、家族の祈りがある。
炊煙の上がる竈には、家族の幸せがある。
アレスミアは、心からそれを楽しんでいた。
我が家に、帰ってきたのだ。

石畳を叩く馬のひづめの音が近づくにつれ、待つ男は弓に弦を張り、矢柄から二本の矢を引き抜いて、やじりにかぶせられた袋を慎重に取り去った。

一本を口にくわえ、もう一本を弓につがえて引き絞った。
一本目は目測のための矢、当たればそれでよし、はずれれば二本目を修正して放つ。

馬が前を過ぎる間、それが目的の人であることを十分に確認して、右手を開くとすぐに口にくわえた一本を放った。

ひゅっという風切り音を耳にしたかと思うと、次の瞬間、右肩の後ろに鋭い衝撃を受け、馬から転げ落ちそうになったところをすんでの所で持ちこたえた。

が、痛みの次には体全体にしびれが広がりはじめ、騎乗に集中することが困難になってきた。

射られたか！

この薄暗さで馬上にあてるとは相当の腕だな。しかもこの痺れは毒のせいかな。
馬から滑り落ち、石畳に叩きつけられるのは時間の問題だった。

「アレスミア様！」

伴走していたニールリングが、闇を爪で引き裂くような叫びを

あげながら、馬を寄せるがいなやアレスミリアの馬に飛び移り、
彼を背後から抱きかかえた。

「毒・・・」アレスミリアの口からうめきに似た声が漏れた。

ニールリングの左手は手綱を持ち、アレスミリアの身体を
支えながら、渾身の力を込めた右手で矢を引き抜くという
荒業をやったのけた。

ニールリングには内城までの道のりが、永遠に続くかと思
われるほど長く感じた。

狂ったように走る二頭の馬のひづめの音が、街路の壁に
雷鳴のように反響している。置き去りにされ遠く離れていく
家々の窓が、まるで風にあおられたかのように次々と開き、
その穴の中から人々の顔が突き出して、雷鳴の行方を追っていた。

騎手を失った馬が、なおも追いつがってくる。

それが、なにか死を運ぶ馬のような気がして、ニールリングは
恐怖した。その馬に追いつかれたとき、アレスミリアがかろうじて
引っかかっている死の淵から奈落の底に落ちていくような気がして、
それから逃れるように馬をせきたてた。

「誰か！ 手当てのできるものはいないか！ 医師を呼べ！ 誰か！」

内城の門をくぐり、馬を下りたとき、馬は崩れ落ちるようにひざ
からおちた。

ニールリングは再び、

「医師をよべ！ アレスミリア様が傷を負われた！ 急げ！」
と絶叫しながら、アレスミリアを横抱きに城内に運び込んだ。

寝台に横たえられたアレスミリアの容態は思わしくなく、
今にも魂がその肉体から消えうせていこうとしているようにも見える。

呼吸が荒く、ときおり体に震えが走る。

「外傷はそれほどでもありません。縫合しておきましたので
出血もそのうちに収まるでしょう。が、このご容態はこの傷とは
別の何物か、おそらくは矢毒によるものと推測します。」

「毒。」

その場に居合わせたものの顔に、どす黒い恐怖がまき散らかされた。

「この矢が刺さっておりました。これが何か役に立つでしょうか。」
医師はその鋭い先を見たが、
「わたしには、この切っ先に塗られているものが何かは判別できません。」
と、否定した。

「毒消しはないのか。」

「傷は消毒しましたので膿むことは無いとは思いますが、
矢に塗られた毒が何か分からない以上、毒消しといっても。
この様子ですと、すでに体内に広がっているようですので、
仮に今から毒消しを飲ませても、果たして効くものかどうか。」

「助からないのか。」

「毒におかされた場合は、長くても半日もつかどうか。
もちろん本人の体力しだいですが。」

「くそっ！ どうして、誰がっ！」

「すでに犯人を捜させております。みつかれば毒の種類を
聞きだすことが出来るかもしれません。」

「他に何か出来ることはないのか。」

「アレスミリアの母に使いを出せ。間に合わぬかもしれんがな。
それとイーリアスもだ。こちらはきわめて密かに動かねばならん。」

カラバ公はハイアルト卿を呼び寄せ、声を潜めて言った。
「あと一つは、北の部族のルークス・カルフであったか、
ロンダルトの出方によってはこちらを受けて立つ備えを
しなければならない。助力を頼むことになるかもしれん。」
「ロンダルト！」

「この王国中に、アレスに直接の害意を持つものは、
今はおそらく一人しかいない。実行者が誰であれ、
裏で糸を引いているのは、あの男だ。」

カラバ公の顔が、深刻にゆがんだ。
あの男が、ここまで満足するのか、それともその先に
踏み込もうとしているのか。
今は、定かに分からなかった。

月が冷たくクラコワの城市を照らしていた。
夜は、足踏みをすることもなくふけていく。

常ならば、穏やかな寝息と静けさの中にある町が、
街角が、人の声と駆け足の音に揺すられている。
アレスミリア受傷の噂は、水盤にたらししたインクのように
巷間に広まった。

その夜は、だれの身にも長かった。そして禍々しい夜が明け、
朝の光が城壁を照らす頃になっても、状況は変わらなかった。

アレスミリアが射られた場所の近くで、もう一本の矢が発見
されたこと以外は、犯人に関する知らせは何も入ってこなかった。

アレスミリアは高熱に体と魂を焼かれていたが、まだ生きていた。

ニールリングは片時も側を離れず、濡れた手ぬぐいをあてがい、
少しの変化も見逃すまいと看病を続けた。

彼の衣服は、アレスミリアの流した血を吸い込んで、あちら
こちらが黒く変色していた。

「少し休むがよい、下がって着替えもすませよ。そのなりは
あまりといえはあまりだ。」

「しかし、わたくしは。」

「アレスの身を案じているのは、おまえだけではない。

城のものも、昨夜のうちにみな出仕して居る。みなアレスの
回復を祈り、そのために何か手助けすることはないかと
集まってきているのだ。」

ニールリングは肩を落としながら、

「もっと警護をつけるべきでした。アレスミリア様は
警護をあつくするのはよくない、民との距離を作っては
いけないと仰り、いつも二・三の供しかおつけになり
ませんでした。しかし、こんな事になるのであれば。」

「ニールリングよ、あのときおまえが側近くにいたからよけいにそう思うのだろうが、あれを防ぐのは至難の事であつたろうと思われるのだ。

賊は一の矢で目測のずれを修正し、すぐさま二の矢を放って命中させている。

騎乗した動く標的に、あの暗がりや矢を当てることなど、相当の腕前でなければできまい。」

事前にわかっているならまだしも、不意打ちをされて、それを防ぐなど不可能だったと。

「よく落馬を防ぎ、走りながら矢を抜き、ここまでつれてきたものよ。」

ニールリングはなおも立ち去りがたい面持ちであつたが、ハイアルト卿の厳しい表情には抗しきれず、一旦は引き下がることにした。

引き下がるには引き下がったが、内心は、今この瞬間にも容態が急変しないかと気が気ではなかつた。

ただ、急変したところで彼自身は何もできないことを思い、無力感を感じると共に、急速に睡魔が彼の意識を覆い始めた。

体の冷たさに、眠り込んだことに気が付き、はっと目覚めたときはあたりは夕闇に近かつた。

普通ではない眠りに落ち込んだときに、人がよく感じるように、何もかもが夢のようであつた。

アレスミリアが襲われたことすら夢のようであつたが、意識がはっきりするにつれ、眠り込んでしまった自己嫌悪にさいなまれた。

が、今の今まで誰も呼びに来なかつたことは、アレスミリアがまだ生きている証と思え、鈍い頭でそこまで考え至って、ようやく安堵に胸をなで下ろした。

ニールリングは、いま彼の居るべき場所に戻った。

「まだ、生きておいでですか。」

「医師も不思議がっている。毒矢に刺されて一日ももつ者はいない。見立て違いかとウサギに試したが、やはり毒の症状で、今はもう冷たくなってしまっている。よほど体が強いのか、といぶかって居った。」

「では、助かるのですね。」

「毒が直接の原因で死ぬ確率は低くなったが、この発熱が続くようではやはり危ういということだ。」

このようなことは、ハイアルトにも経験がなかった。

レム・プラント家のキリアンデルは城に詰めっきりで、混乱しがちな城内外の指揮系統を制御していた。

雑多に数えあげても、賊の探索から情報の収集、ロンダルトに対する密かな備えとして、騎士団の招集を行い、城外に向けての広報の役目までを負っていた。

リディアは城の奥にかまえ、非常時の給仕やこの事態の長期化に備え、城内に集まった人々を一旦体制を組み直すなどの采配を行っていた。

「ハイアルト卿、市民や同業組合の代表が集まっております。

今日一日、様々な噂が飛び交い、それもこれもみながアレスミリア殿の容態を案じてのことと。」

と、城の男が奏上した。

「ふむ、カラバ様如何いたしましょう。」

「何事か、伝えてやらずばなるまい。これからまた夜に向かい、流言飛語のたぐいが思わぬ事件を巻き起こすかも知れん。」

キリアンデルが、この事情を引き受けた。彼はアレスミリアの危機とそれに連なる混乱に対して、一步も退くことなく立ち向かう決意をしていた。

「ひとまず容態は持ち直し、意識が戻りつつあると言っておきましょう。これなら嘘を言っていることにはなりません。暗い気持ちのまま夜を過ごさせても、民にはなんの得るところは無いでしょう。」

「アレスミリアならきっとそういうだろう。よろしく頼む。」

キリアンデルは広間に集った一同を前にして、さらに一言だけ付け加えた。

「せめて夕食と就寝の前に、アレスミリア殿のために祈ってくれ。」

代表者達は、それぞれの心に小さな明かりをともし、それをまた、

みなと分け合うために帰途についていった。

それぞれの心の中に、謎と、少しばかり取り戻した落ち着きと、大切なものを失ってしまうとき、心に大穴のあくあの感覚を残したまま、二日目の日が沈んだ。

翌朝、日が十分に高くなった頃、六人の警士に守られた二頭立ての馬車が、クラコワの城門をくぐった。

その馬車は古くくすんだ、いたって質素なものであったが、だからといって耳障りな軋み音を立てることもなく、車輪はからからと軽快な回転を続けた。

馬を御するものは、御者というよりはどちらかといえば“なりを整えた農夫”とも言う外見をし、店先の張り出しや街路の複雑さに、明らかに緊張している様子が伺えた。

道行く人々は、警士の多さと質素な馬車の奇妙な取り合わせに、賓客の正体が誰だろうと興味をそそられたが、鎧窓の内部をうかがい知ることは出来なかった。

が、こうした状況のもとなので、アレスミリアの縁者に違いないと噂しあった。

一団は、内城の門をくぐり、宮城の馬寄に長旅の終着を見た。

警士たちは我先に馬を下りると、あるものは周囲に目を配り、万が一のときは身を挺してそれを防ぐ体勢をとった。

この先何が起こるか分からぬ。そういう緊張感が、城内には満ち満ちていた。

衛士が馬車に駆け寄り、踏み台を据えて扉を開けると、侍女に寄り添うように身体を支えられながら、一人の貴婦人が慎重に馬車の踏み台に足を下した。

「ありがとう、大丈夫です、エルシー。」

彼女は御車台の方を向くと、

「ハペル、ご苦労様でした。いつもながら上手になりましたね。」と声をかけた。

「いや、そんなことは無いです。」

と謙遜しながらも、ハペルと声をかけられた男は誇らしげであった。

ただ、いつもなら彼自身が下しているはずの荷物やなにやかやが、城の下僕たちの手で勝手に運ばれていくのには機嫌が悪かった。

「長旅ご苦労様でしたが、急ぎ奥へお進みください。わたくしはリディアと申します。ご滞在中のお世話をさせていただきます。何なりとお申し付けくださいませ。」

リディア自らが、馬寄に迎え出た。そうせねばならぬと、思った。

「レム・プラントの奥様でいらっしゃいますね。なにとぞよろしくお願ひします。」

「他ならぬ、アレスミリア様のお母上でいらっしゃいます。

何事によらずご希望のことをお申し付けください。」

「では、参りましょうか。」

“他ならぬ。”この言葉は、世辞でもなんでもないリディアの本心であった。

あれ以来、アレスミリアには感謝とわだかまりの共存する、奇妙な感情を抱いて対してきたが、この時、そういう私心の無いところで、初めて彼の存在の重さを感じ取った。

その貴婦人は、華麗さよりは品のよさを、あからさまよりはその内からにじみ出る、人としての美しさを身に纏っていた。

その左には、エルシーと呼ばれた若い娘が、緊張した面持ちで彼女を支えていた。

農夫の娘であるエルシーの身分では、本来宮城に足を踏み入れることは出来なかったが、エルシーは彼女の目の代わりであり、またその役目を天来のものとして誰にも譲ろうとしなかった。

なれない道のりで、彼女がつまずくことが無いように、小声で耳元にささやきながら進む姿は、見るものに舞台劇の一場面を見るかのような印象を与えた。

彼女がアレスミリアの寝台の傍近くに至るまで、それがエルシーのささやきの妨げにならないように、誰もが物音一つ立てず、遠慮して声をかけない。

けれどこの遠来の貴婦人に注目しており、不自由な目で死の池の淵に横たわるアレスミリアに伸ばした手を見ていると、年若いアレスミリアの従者たちは泣いてしまいそうになる。

やがて、その手が肩に触れ、頬を伝い、髪に触れ、もう一度頬を伝い口元に触れると、その上に屈み込み、静かな声で「アレス・・・アレスミアン。」と呼びかけた。

静かな時間が流れた。鳥の声すら聞こえない。

「アレスミアン・・・。」再び、声がある。

彼の臉がかすかに動き、長く閉じられたままであった目がわずかに開く。

しばらくの間、そこにいるのが誰だか判ら無かったが、乾いてひからびた唇を動かして、声を出そうにも声がない。

ようやく、吐息とも声ともつかぬ音で「ははうえ。」と言った。
かたわらから、エルシーが水を含んだ綿を差し出すと、その水滴を
しぼりながら唇をしめらし、僅かにのどに至らしめた。

「ははうえ、どうしてここへ。」

「カラバ様がお使いをくださいました。あなたの一大事ゆえ、
いそぎ参るようにと。」
一つの問い、一つの応えがゆっくりと進む。

「ははうえ、わたくしはちちうえにあいました。」
手のひらが、なお一層包み込むように、頬に添えられた。

「わたしは、くらやみの中にいました。
そこはくさはらのようでもあり、水のなかのようでもあり、
ちゅうにうかんでいるようであり、なにも知らない、わからず、
ただ、ただよっているこどもでした。
きがつけば、ひかりのほうこうからちかよる人がいて、
わたしにはそれが父上だとすぐにわかりました。」

そこで一息つき、
「父上は、わたしにひかりのほうをさししめし、わたしの背を
おされたのです。
わたしは父上にいっしょにいこうといましたが、くびを
ふって行こうとはなさいません。
なおも父上の袖口をひっぱると、父上はみみもとにかがみこんで
こういわれました。
『私はいつもお前と共にいる。ただ光の方に歩いていくがよい。』
わたしは涙が出て仕方有りませんでした、光に向かって歩む
ことにしたのです。」
いくつかの涙が、アレスミリアのほほに落ちた。

「誰かが私に、どくを使ったようです。
けれど、いまわたしはそのものに感謝しています。
ひさしぶりに母上に会うことができましたし、もう何も覚えて
いなかった父上と、お会いすることができました。」

ただ一つざんねんなのは、光を背にした父上のお顔が、よくわからなかったことです。」

母は、彼の顔をなぞりながら言った。

「大丈夫です。鏡を見ればいつでもお会いすることができますから。」

最後に「それはよかった。」といい、また眠りについた。

アレスミリアン、そして何か懐かしい感じのする相貌。

そうであったか。それでこそ総ての事実になんがいく。
カラバ公は、驚愕の思いで立っていた。

もう何十年も生きてきて、この年に至っては驚くことなど
然程もあるまいと思っていたのは、誤りだった。

が、しかし謎はまだ残る。死に至ると言われた毒を受けて、
今なお命長らえるこの現実の答えは何か。

「長旅の後で申し訳ないのだが、そなたに一つ聞きたいことがある。」

「そのお声はカラバ様でしょうか。もう何年もお会いしておりませんが、
このような身の上ですので、聞こえるお声が頼りでございます。」

「使いの者が伝えているだろうが、アレスミリアの受けた矢には
毒が塗ってあった。

医師は一日と持つまいと言っておったのに、今日で三日目。

最前は、まさに奇跡を見る思いであった。いかなる次第によって
このようなことが起こりえるのか、不思議でならない。」

リードヴェルトは答えねば成らなかった。

けれどもその答えが、アレスミリアンの妨げになりはしないか、
と案じた。

「アレスミリアンには、幼少の頃より解毒の薬を服用させております。

私どもの住んでおります北の地方では、家畜を荒らすオオカミ
どもの退治に、時折毒矢を用います。

毒を使えば、時には過ちから、それを人が摂取してしまうことも
ありますので、解毒の薬も用いております。それが効いているので
しょう。」

「とはいえ、それは誰もが常用するものではあるまい。」

ハイアルトが疑念を呈した。

リードヴェルトは、なおも少し思案していたが、

「カラバ様、みなさま、アレスミリアンの方は、もうご心配頂く時期を脱したように思います。大変お疲れのこととしますので、一度お引取り願ひ、お休みいただてはいかがでしょうか。」
と言った。

カラバ公はその意図をすくいあげ、
「そうだな、ハイアルト以外のものは一度下がるがよい。みな、ごくろうであったな。」
と、言い渡した。

下がれといわれたものたちは、みな、それはあまりのことと不満に思ったが、重篤な病人と、それを見守る聖人の様な母の姿を前にしては、表立った不平を言うことは出来なかった。

人払いが済んだ部屋は、静かだった。
ハイアルト卿が、待ちきれず軽く咳払いをした。

「アレスミリアンの父は、毒矢により生命を絶たれました。
この子がまだ、本の幼子であったことです。
この子が、同じ災禍にあって命を落とすことがないように、
解毒薬の服用を習慣といたしました。
けして、よい味のものではありませんから、つらかったろうと
思いますが、子供なりに理由を察するところがあったのでしょうか。」

「あなたが、毒矢を用いられることがあるやもと思ったことには、
何か二人に共通した理由があるということだね。」

「はい。」

「それは、彼の名と、面立ちに関係のあることだね。」
リードヴェルトはなおも慎重だったが、公王が要点を知ったことは
明らかであった。

「はい。」

「もう、十数年になるのか。毒矢で王国の未来が左右される
などと言うことは、あってはならないことなのだ。
そんなことを許せば、この国は暗殺や、復讐で溢れてしまう。」
「だからといって、証拠もなしに人を罪に問うこともできません。
それが横行すれば、密告や偽証がはびこることでしょう。」
ハイアルトがそれに応じた。

「もっと気を配るべきであったな。アレスミリアを見ていると、
我々はもう隠退してもよいような心持ちになっていた。
やつが同じ手だてを使ってきたと言うことは、ウェルモンテは
知ったと言うことだな。」

「なにがしか、調べはしたのでしょう。その上で、やつの猜疑心と
執着心が、十数年前と今を結びつけたのでは有りますまいか。
ひとは一度うまくいくと、得てして同じ手だてを使いたがる

ものです。」

「このことは今しばらく、内密にした方がよいようだな。
アレス自身が秘密にしているのには、何かの理由があるのだから。」

カラバ公とハイアルト卿は二人して部屋を後にした。
後には、世界でただ二人だけの親子と、影のようにつきそう妖精が
残された。

翌日は、二人の来客があった。

ルークス・カルフは、アレスミリアをちらっと見舞ったが、彼がまだ眠っているのを見て、長居は無用とハイアルト卿との面会に臨んだ。

「ここに七部族の族長の署名がある。

まず、アレスミリア殿の逢難に対して、心底よりお見舞いを申し上げる。

それと、このたびのことで、新王国に対して事あるときには、かねてよりの友誼により、七部族一致して古王国にお味方するとの約定がなった。

これはすごいことになったぞ。七部族がここまでの結束を固めるなど、ばあさんの昔話にも聞いたことがない。

自分で言っていながら鳥肌が立つ。」

ルークスは、興奮を隠すこと無く話した。

「わたしも、そのようなものは相手にしたくはないな。

が、こういう状況故、ありがたい申し出。感謝する。」

ルークスは、武人としてのハイアルトの率直な対応が気に入った。

ハイアルトは、ルークスの並外れた周旋術に感心し、そしてそれが、アレスミリアンへの友誼から出ていることに感動した。

「危ないのか？」

年の差を気にしないのは、教養というよりルークスの気風だった。

「ん？アレスか、南か」

「主に南だな、アレスミリア殿は大丈夫だろう。

『彼は天に必要とされている。必要とされているうちは、間違っても死ぬことなど無い。』

草原ではよくそういうのだよ。あそこでは、命はもろいものだから。天のせいにでもしないと、やっておれないのだ。」

うまい言い方だ。

「あちらがどこまでのことを考えているかは判らんのだが、
いま一時的にクラコワの力は弱くなっている。
暗殺が失敗に終わったことを知れば、次は何を仕掛けてくるか。」

ハイアルトの憂慮に対して、ルークスは強気だった。
「いずれにせよ、これだけの戦力であれば、南を一気に落とす
こともできるぞ。」

しかし、
「アレスに黙ってそんなことをしてみるつもりか。」

ハイアルトは片眉をあげ、ルークスを牽制した。

確かに、ルークスの言うとおりに、此の戦力であればロンダルトの
脅威を取り除くことは可能だろう。しかも、大義も名分も立つ。

しかし、そのあとロンダルトの支配をどうするか、算段は何もなかった。
ただ勢いに任せてるだけの、戦略も何も有りはしない。

「ああそうさ、そんなことをしたら、もう二度と声はかからない
だろう。いや、うちの親父に縄をかけられ、一生草原の杭に
つながれることになるかもな。」

「それはそれで、見物だな。」

二人の男は豪快に笑った。この事件があって以来初めての笑い
だった。

ルークス・カルフは、古王国からの伝令をうけてからというもの、
殆ど不眠不休で今回の合意を取り付けた。

賛意を取り付けることは、以前の同盟の件への負い目もあり
抵抗はなかったが、広大な草原を走り続けることは、彼の若さを
持ってしても過酷なことだった。

「さて、改めて何うが、アレスミリア殿の容態は。」

「昨日、ご母堂が参られ、そのときに一度目をさました。
熱も下がり始めている。」

「そうか、アレスミリア殿の母上か、どのような方かな。」

「そうだな、並大抵の女ではない・・・。」

「ああ、そうだろうさ。アレスミリア殿の母上だからな。」

それを通じる。

「ハイアルト殿、アレスミリア殿が目を覚まされたら、
一度ご挨拶を申し上げ、すぐ北に帰るよ。こちらには、
若い者を残していく故、伝令にお使いだされ。事あるときには、
三日以内に騎兵を差し向けられるよう準備を整えておく。」

「それは心強い。して、奥方はお元気か。」

「すっかり草原暮らしに慣れ、もう都のような狭苦しいところは
こりごりだそうだ。

ハイアルト殿も一度ゆるりと来られるがよい。」

「うれしい申し出だが、まだ早いな。

我が槍にかかったものの縁者も、多いことだろうからな。

こういうものは、なかなか割り切れるものではない。

ようやくここまでよい関係で来たのだが、これは壊れ物。

大事にせねばな。」

「それはおたがいさま、なのだがね。」

午後も遅くなってから、もう一人の賓客が到着した。
今は“敵”国の、姫君であった。

秘かに宮殿と城門を抜けるため、彼女はただ一人の信頼
できる侍女に言い残し、男装の出で立ちでみずから手綱を引き、
ロンダルトからクラコワを駆け抜けて来た。

供はクラコワからの使者一人であった。

イテカレスはクラコワからロンダルト、折り返しロンダルトから
クラコワという道のりを強行し、この一件で一躍名を馳せることと
なるのだが、このときはただ疲れ果て、朽ち木が倒れるように城内の
廊下に倒れ込んで、イーリアスがかけていくのをただ目だけで追っ
ながら、にっこり笑って気を失った。

部屋に駆け込んだイーリアスは、いまは眠り続けるアレスミリアの
やつれ、消耗した姿を見、恐れのあまり顔をゆがめ、膝をふるわせ
ながら寝台にすがりつき、「アレスミリア！」とその名を呼んだ。

皆、その砂と土ほこりにまみれ、髪を乱した男装の姫に驚いたが、
その声に目を開いたアレスミリアには一層、あきれた。

「まったく、現金なものだな、本当に必要なときしか目を開かない
とは。どれ、我々男どもは退散するでしょう。」

イーリアスは状況を飲み込めず、、、というのは、使者から
アレスミリアはおそらく助からないだろうと聞かされていたため
だが、周囲の人々を見回した。

「イーリアス様でいらっしゃいますね。アレスミリアンは
ご心配ありません。」

ゆっくりと、落ち着いた声のする方を向いた。

「生きておいでですね。」
イーリアスの手に、力の入らない手が重ねられた。

「あやうく、べつの世界にいてしまうところでしたが、ひきかえしてきました。」

「本当に、あなたという人はいつも心配ばかりさせておいて、何事もなかったように平然としておられます。ひどい方。」

もし涙が、皮袋にためられているものならば、それが破れたのに違いない。

「私はいつも待つばかり。北にゆかれるときも、属州を回られるときも、いつもいつもろくな警護もつけずに行ってしまわれる。」

姫がこんなに泣かれるのは、子供の頃にこの城の庭で、巣から落ちて死んだ小鳥を見たとき以来だ。あれは確か、私がかけた巣台から落ちたのだった。

「それでも、いつかまた、行ってしまうのですね。」

エルシーが音もなく寄り添い、ささやくように「失礼致します。」と声をかけ、イーリアスの涙と砂埃で惨めになった顔をぬぐった。

「まあ、こんな顔で・・・」
と、赤面してリードヴェルトの方を向いたが、
「大丈夫ですよ、私は目が余りよく見えませんので、どのようなお姿かは。」
「イーリアスでございます。お母さま。」

生きている。そして死の淵にあるのではない。
その事実を知って、イーリアスは自分を取り戻しつつあった。
高貴であるが、不自由な律のもとに心を置かねばならない。
泣いたり、すがったり、叫んだり、そういうことの出来ない身分だった。

落ち着いた足取りで寝台を回り込み、腰かけているリードヴェルトの正面に立った。

「アレスミリアンからの手紙には、いつもイーリアス様のことが

書いてあります。イーリアス様が来られた、イーリアス様と馬に乗った、イーリアス様が笑った、と。ねえエルシー。」
エルシーは返事をするかわりに、こくりと首肯した。

「母上、なにもこんなときに言うことはないではありませんか。
わたしは逃げも隠れもできないのに。」

イーリアスは寝台に向き直り、
「そう、わたくしが看病して差し上げます。一日中。ずっとずっと。」
そういいながら、両手をついて見下ろした。

エルシーがかたわらから、またささやくような声で言った。
「お召し物をお換えになりませんと。姫様。」

彼女が、自分の祖父がその事件の黒幕と知るのは、もっと後のこととなる。

そう、ずっと。しかし、永遠ほどは遠くない未来だった。

二週間が過ぎた。

アレスミリアの回復とは裏腹に、イーリアスの表情はさえないかった。
「今日から政務に戻ります。」

カラバ公は、相当閉口していた。

「そうしてくれ。人に会うのも、いい加減うんざりだ。
来るもの来るもの皆、アレスミリア様は如何ですかと聞いてくる。
そのたびにお前の様子を話してやらねばならん。
儂はお前の代理人ではないのだからな。お前が表に出れば、
それで終わりだ。元気かどうかは、顔を見れば判るだろう。」

「ニールリング。」

「ここに。」

壁際に待機していたニールリングが、一步、歩みでた。

「お客様が見えたら、しばらく臥せっていたので体はなまっ
ているが、すこぶる気分はよいと説明申し上げておいてくれ。」
「私ですか。」

「私を生きながらえさせたのはお前だ、ついでにそこまで面倒を
見てくれてもよかるう。」
「おっしゃる意味がわかりませんが、承知致しました。」
「あらためて、礼を言うよ。」

ニールリングは、部屋を後にしたとたん、繕っていた渋面を
脱ぎ捨て、ニコニコしながら歩いていった。

「私もそろそろおいとましませんと。」

アレスミリアンの回復は、一時の集いの終わりを意味していた。

リードヴェルトがそういうと、
「それは、もったいない。もっとゆるりとなさればよいではないか。」
と、ハイアルトが引き止めたが、

「わたくしは、田舎ものゆえ、田舎暮らしが性に合っております。

そのうえ、このたびにはエルシーには随分と難儀をさせましたから、少し休ませてやりたくもあります。」

「それはいかにも残念。」

アレスミアンの母には敵わなかった。

「エルシー、都を見物して帰りなさい。私の財布を空っぽにして構わないから、村のものに土産物を持って帰るといい。

母上のことは・・・。」

「わたくしがお世話させていただきます。何事も至りませんがよろしく願います。」

「まあ、なんと言うことを、姫様に身の回りの世話などしていただくわけには・・・。」

と、さすがのリードヴェルトもこれは辞退しようと思ったが、

「やりたいこと、すべき事もできない“姫”などもう結構です。

ロンダルトに帰っても、何もなすことはなく、何も期待されることもありません。

ただ、傅かれ、きれいな衣をまとい、微笑んでいるだけ。

父のように。」

というように、姫は本気だった。

そして、本気の姫を止められるものは、この世界に数えるほどしかいなかった。

「お帰りにならなければいい。」

アレスミリアが突然、突拍子もないことを口にした。

「このまま、この城にお留まりになればいい。」

「でも、どうしてその様なことが出来ますか。」

「カラバ公の、ご養女となられればよいではありませんか。」

一同あっけにとられていたが、平然としてアレスミリアは続けた。

「カラバ公にはお世継ぎが居られません。公家を絶やさぬためにも、どなたかが継承される必要があります。

他の貴族より養子を迎えるより、元は王家から分かれた枝の一つゆえ、王家の血筋の方がよろしいでしょう。

イーリアス様には、王室からは降下され、一般の貴族よりは格式を重んじられますが、貴族は貴族。身分の上では、形式上はわたくしと同じになってしまいます。

が、ご異存無ければ。」

「この……。この“おや……”。わたくしのお義父さまですか。」

「公家の当主は儂だぞ。儂をないがしろにして、こんな重要なことをあっさり。」

当事者が一番戸惑った。

口には出さないものの、あるいは当て推量程度のうわさ話として、古王国はアレスミリアンが継ぐのではないかと、この国の上から下までがそう思っていた。

主に、貴族としての格の差が障害となるだろう。しかし、それは越えられぬ障害ではなさそうだ。そう、人々は噂していた。

しかし、

「何か、問題がありますでしょうか。」

アレスミリアンは、白々しく言い切った。

体力が戻るに従い、気力もまた充実し始めていた。

「そんなことはないだろう……。いやそうではなく、今度はいつからそのつもりで居ったのだ！」
「かれこれ五年ほどにも、なりましょう。」

なおも悪びれず言った。だが、これは彼にしては珍しく状況を見誤ったといえる。

「なっ！なんですって！五年。わたくしの気持ちを知っていながら、五年も隠していらっしやったのね。
信じられない！」

女性にこういうことはしないほうが良い。

「いや、他にもいろいろと有りましたので。」
さらにこの言葉は、言い訳としては最悪だった。

「いやです。」
イーリアスはここで反撃に出た。

「えっ！」
「あなたの言うとおりにはありません。あなただけが総てを知っていて、周りのものがおろおろするのを楽しんでいらっしやるのだわ。
こんなひどい人とは思いませんでした。金輪際、あなたの思惑に振り回されるのは真っ平です。」

姫、そのような御言葉遣いは、と侍女なら言いそうである。

アレスミリアンは慌てた。回復したとはいえ、イーリアスとまともにやりあう体力はまだ無かったし、周りに人がいる中では、收拾する自信は無かった。

アレスミリアンといるときの、イーリアスの我儘っぷりは、半端なものでは無かった。

「いや、短気を起こさないで。」
「どうせわたくしは、気むずかし屋のわがまま姫ですから。」

「イーリアス。この機会を逃せば、もう二度とここで暮らすことは出来ないかも知れない。よく、考えて。」

アレスミリアンは、自ら作り出した最悪の状況に、今のところは打つ手が無かった。

「アレスミリアン。」

母が口を開いた。

「はい。」

「あなたは昔からそうでしたね。」

「いえ、そんなことは。」

「そうやって、よく母を困らせました。」

アレスミリアンの弱点は、女性だった。彼は身近にいる女性には、その冴えを見せることが出来ない。

「しかし、私は。」

「あの十四才の秋もそう。何もかも自分で考えて、そのとおりに実現するのは立派です。けれどそれだけではいけないのですよ。」

アレスミリアンには言葉が無かった。それはその通りだった。

目の不自由な母を残してクラコワに出ることは、彼の最大の不安だった。

「イーリアス様。」

「はい。」

「アレスミリアンをお願いしてもよろしいでしょうか。」

本来は身分違いである。けれども、リードヴェルトには、それを言うことが出来るという確信があった。

「今は、正しい道を進んでいるかも知れ無いけれど、この子はいつか、誤ることがあるかも知れません。けれども、イーリアス様なら正しく導いて頂けるでしょう。」

先ほどまでの感情の嵐は、紅潮した頬にその痕跡を残していたが、彼女も既に子供ではなかった。

嵐の後、まだ灰色の雲が空の半分を覆っているような時、緊張から解放されてその空を見上げるときのような、興奮と穏やかさがマールに入り混じったような落ち着きだった。

「わたくしは、こんな日がくることを待ち望んでいたのです、多分。でも待ちわびて、まちくたびれて、もう来ないかと思っていました。もうあそこには、戻れないのですね。みなに、さようならを言っただけで済んだ。」

「すべて片づけば、そのときは戻れるでしょう。」

アレスミリアンはようやく安堵した。

「総て？ その総てとは何？」

「わたしが、アレスミリアンに戻る事。」

けれども、謎解きはまだ続いている。

「そう、やはり、まだ何ってはいけないことは残っているのですね。」しかし、先ほどのような反駁はなかった。

「でも、もう大丈夫。あなたはもう、私の手の内にある。」

「さて、この後の進め方だが。」

夜になり、カラバ公は、ようやく自分の出番が、、、王としての役割が回ってきたことにほっとした。

「オルクサン様には、一度お越しいただく必要が有るでしょう。
誘拐したとか言われては困りますから。」

アレスミリアンは、徐々に表の仕事に出仕して、夜には疲れ果てていたが、この一件を片づけぬまま今日を終わることは出来なかった。

「イーリアスが帰らないのはまずくないか。」

「ご病気とでも。」

— やれやれ、誰も信じない。

「オルクサンは来るかな。」

「参られるでしょう。妹君が公国の後継者となられるのですよ。
おめでたいことではありませんか。まあ、一言もお断りしていないので、へそは曲げるかも知れませんが。」

「昼間の件がだいぶ堪えたようだな。」

アレスミリアンは苦笑した。

「王と后様には、オルクサン様からお伝え願いましょう。」

「一人忘れて居った。ウェルモンテはどう思うか。」

忘れた訳ではない。出来れば口に出したくもない。

カラバ公は忘れたといったが、むしろ一番重要な課題だった。

「複雑でしょうね。私の暗殺には失敗したことには、
狼狽しているでしょう。」

暗殺者からは、私を仕留めたことは伝わっているはずですし、
それが原因で、死の床にあったことも知っているはずですよ。
なのにいまも私は生きている。

奥の手を使って失敗したわけですから。今ごろは、こちらの出方を穴のなかに潜ったアナグマのように、警戒しているはずです。」

彼の顔は、彼の思考がめまぐるしく動いているときの表情になっていた。

それは、仮説とそれに基づく推論が、つむじ風のようにまいている器の外側の、一件穏やかな表情だった。

「そこに、イーリアス様の公家継承の話では、混乱に拍車をかけることになるでしょう。

手に入れようとして中々手に入らなかったものが、ようやく手に入る。

連合王国の王と公が、彼の血筋の者となるわけですから。

彼の地位はゆるぎないものとなります。

けれど、彼の策略は失敗しているのです。

いままでは成功によって手に入れていたものが、失敗によって手に入る。世界が、自分の手からこぼれていくように感じているかもしれませんね。」

そう言う目は、遠いロンダルトのことを思っていた。

「これが我が身のためによいことかどうか、此度は判断が付きかねる。」

さすがのウェルモンテも、ここでの会話を余人に聞かせることは出来なかった。

それは普段、ウェルモンテと、彼の腹心のものしか入れない部屋の中で行われた。

「とはいえ、これに乗らない話は無い。これしか手はないのだ。

　　ロンダルトの者たちの中には、いろいろなつながりを利用して、すでにやつとよしみを結んでいる者もいると聞く。
　　恩知らずめ。いままで引き立ててきてやったのに。」

「侍女の中に、こちらの息のかかったものをもぐりこませましょう。」

「女王つきのものから、一人二人回すとよいぞ。儀礼などをよく心得ておるので、重宝されるだろう。さすれば、いろいろな話を耳にする機会も多くなるだろうて。」

ここまでは、いつものごとく巡らす策略に、生き生きとするウェルモンテそのものだった。

「それにしても、何故奴は生きておるのだ。」

「毒は効かぬということでありましょうか。」

信じられぬ、というように首を振って、

「正面から切るしかないのか、あるいはなんらかの冤罪を
　　でっち上げるか、謀反の疑い有りとか。」

それでも、いくらでも手はあると言いたげであった。

「クラコワと対決されるおつもりなら。」

それもよろしいでしょうが、ということ、男は言外に含めた。

「兵力は、こちらの方が多し。」

ウェルモンテは強気だった。そもそも弱気だった試しがない。しかし、

「北の、七部族がついております。」

「・・・どうい、ことだ。」

こんどこそ信じられぬ、と驚きに目を大きく見開き、前に乗り出した。

「一旦ことあるときは、騎兵千五百が、三日以内にはせ参じるとの
約定を取り付けたとか。」

よく調べた、というよりは、牽制のために意図的に漏らされた
情報だった。

宰相は一度大きく身体を反らし、

「くそっ！くそっ！くそ！忌々しいやつめ。どこまでわしを
コケにしおる！」

はき捨てる声に合わせて、肘掛をどんと叩いた。

「では、イーリアスが頼りか・・・」

「いえ、それはどうかと。イーリアス様の思い人をご存じないのですか。」

「何、まさか！そんなことをアビアントが許すはずがない。

それ以前に、奴から見れば仇の娘だぞ。

人質のつもりか。そんな事をさせてたまるか！

やはりイーリアスは、クラコワにはやれん。」

何を言っているのだ。どれもこれも、何故こんな重要な
ことがわしの耳に入ってこないのだ！
この栄光の都で、臣下に傳かれ、この国を治めているのはわしだぞ。

「しかし、ご本人がクラコワに居られる今となっては、連れ戻す
手だてがございません。」

「なぜだ。なぜ、こんなことに・・・。

我が権力はいまや王を凌ぎ、富は並ぶものもない。

娘は王妃、孫は次の王。そしてもう一人の孫は、公家の世継ぎ。

これほどの一族の長として、栄華の絶頂のはずなのに。

なのになぜあの男だけは、我が意のままにならないのだ。

わしの見る栄光はただの幻か。

今振り向けば、底知れぬ闇が大きく口を開けて待ち受けて
いるような気がする。なぜじゃ。なぜこんな事に。」

さすがに、権謀術数の権化は、己の置かれた立場の変わりように敏感だった。むしろ過敏といってよいかもしれない。

気がおかしくなられたか。こんなふうに、追いつめられたこの方を見るのは初めてだ。

「ウェルモンテ様。あなた様の権力に王国で並ぶものは有りません。それは万民の知るところです。もうそれでよいではありませんか。これ以上策を弄されますと、かえって身の危険を招くような気がしてなりません。

彼奴は、身に降りかかる総てを、たとえ其れがよいことであろうと悪いことであろうと、総てを利用し尽くしてしまいます。

たとえその体に剣を向けたとしても、気がつけばその切っ先はわが腹を貫いているのです。

そして奴は何事もなかったかのように、我々の体から宝石や金をはぎ取り、取り巻きのものにばらまいてしまうのです。

彼奴は何も手にしないのに、いつの間にか誰よりも何かを手に入れている。」

時代の潮目が変わったのだ、と男は言いたかった。

「何を言う。わしは、わしは、わしは、王を超えたのだ。

わしの前では百官の長、百武の長が跪くのだ。

あの男、なんとしてもひれ伏させねば、気がすまんのじゃ。」

男はなおもウェルモンテを諫めようとした。

それが最後の奉公であると思い定めて。

「あれは、ひれ伏せと言え、ひれ伏すでしょう。けれども次に気がついたときには、あなた様は床にころがり、彼奴に見下ろされているに違い有りません。

私は恐ろしい。この度の件が明るみに出たとき、私がいったいどんな惨めなことになるか。

あ奴が何をしなくても、誰かがわたくしの首を取りに来るような気がしてなりません。

所詮は偽りの王でしかなかったのです。

我々が奉戴していたのは、偽りの冠。」

この男、「怖気づいたか！」と、ウェルモンテが一喝した。

「そうかもしれません。が、これまで受けた恩義を

「忘れたわけではありません。何卒ここは自重なさいませう。」

「いずれ決着はつけてやる。わしこそが真の王に相応しいのじゃ。
六十年かけて営々と築いてきたこの王国を、みすみす渡して
なるものか……。」

「そうだ、あんな若造にこの国を奪われて成るものか。
この国は、わしとわしの血を引くものが治めるのだ。
ウェルモンテの王朝が始まるのだ。
誰が、あんな若造に……。」

男は、パリッシュは、静々と後ずさりして、ウェルモンテの前
を辞した。

— 闇に、飲み込まれたか、と思った。
その闇を抜け出した後は、深々と一礼したが、二度と
振り向くことは無かった。

ウェルモンテへの忠誠の心を、なくしたわけではなかったが、
それはかつて、わき目も振らずひたすら階段を上り続けた、
ウェルモンテに捧げられたものであった。

出自や血筋ではなく真に力を持つものが、この国を支配する。
その思想に、若かったころの自分は惹かれたのだ。だからこそ
どんな汚い仕事も引き受けたし、その手が血に染まることも一度や
二度ではなかった。

今、老人は、自分が築き上げたものを守るためだけに、
力のある、若い有能な才の芽を摘み取ることに勤しんでいる。

クラコワを変えたアレスミアンは、ロンダルトも変える力を
持つだろう。むしろ、奴の力こそこの国に必要なのだと思える。
金と欲望に乱れたこの国の宮廷を、変えることができるのは奴だ。
調べれば調べるほど、そう思えてくる。
それを取り除くことが、この国にとって正しいことなのか。

この人の時代は終わったのだ。

わたしの人生も終わったのだ。

夜が明ける前に全てを処分して出奔しなければ。わたしが
投げ出したことを知れば、恨みを持つものたちの刺客が
襲ってくるだろう。

思えば、長い夜だった。いつの間にか、夜の闇だけを渡り歩き、
生きてきたのだ。

この国に光が来なかったから、それに気が付かなかったのだ。

この後、パリッシュの名も姿も、永遠にこの国から消え去った。

「病気という割には元気そうだな。」

背後から声をかけられ振り向くと、大またに歩み寄る
オルクサンの姿が目に入った。

イーリアスは悪びれるふうも無く、細い顎をつんと上げて
「仮病ですから。」と答えを返した。

オルクサンは両腕を羽のように広げ、妹を抱き寄せた。

「父や母を心配させおって。」

「あら、お兄様は心配ではなかったのですか。」

「お前のやることを、いちいち気にかけてられるものか。」

「まあひどい。」といいざま、胸を突き放す。

「ひどいのはお前のほうだろう、誰も気が付かぬまに城を
抜け出したと思ったら、カラバ公の養女になるなどと言う
使いを寄越してくる。

おかげでお前付きの侍女たちは、卒倒していたぞ。」

イーリアスも、そればかりは、さすがに済まないと思ったのか

「ええ・・・、何もかも突然のことで。」と、短い弁解をした。
確かに、今回のことは彼女の謀ではなかった。

「後戻りは出来ないぞ。」

「考えたことも有りません。わたしにとっては、うつろな
暮らしでしたから。」

オルクサンは、一番身近な妹のことすら、オルクサンの意思とは
異なる思料に動かされ、思惑の流れの中で決まってしまうことに、
またもおのれの無力を思っていた。

それはイーリアスも同じ境遇であったが、彼女はいま、
そこから抜け出そうとしている。

俺だけが取り残されるのか、と思った。

が、それも遠からず終わりにしてしまえるかもしれない。

ウェルモンテ伯の取り巻きが、次々と行方をくらましたり、
王宮への来訪者も目に見えて減っているらしい。

ただそれも、アレスミアの影響によるものだ、ということは自覚し、
強いて否定はしなかった。

そのころ、当のアレスミリアは別な男の来訪を受けていた。

異国風の衣装を纏った姿は、すれ違う人の好奇心を誘わずにはおこななかったが、門番にも衛士にも止められることなく城中に入れたのは、その来訪が、あらかじめ告げられていたためであった。

「もう帰ってこないかと思いましたよ。」

「あまり居心地が良かったので、そのつもりだったのですが、あなたが殺されたとの使いが来たもので、あわてて帰って来ました。私を謀（たばか）ったね。」

「はは、死の淵までいきましたからね。あながち、嘘ではありません。

商売のほうは上手くいっていますか。」

もちろん、とでもいうように両手を広げた。異国風の身振りだった。

「宝石やら香料やら、ロンダルトで取り扱っていたものは見覚えがありますが、いまだこの国には入ってきていないものもあります。」

「友好的に、付き合えるでしょうか。」

「・・・。今度ばかりは、あなたの機略も役に立ちそうにはない。相手は英雄気取り成り上がりの王です。和よりも武をこのみ、支配者として君臨することを欲しています。

欲望はさらなる欲望を生み、足るを知らず、また枯れることのない泉のようです。

民の暮らしぶりなどには無関心。征服された諸族は、税と兵役で道ばたの草のように踏みつけにされています。なにより彼の偶像は、驚く無かれ“アズール・イクン・ロンダベル”。」

わが祖、アズールか。

彼はもともと東から来て、この地を征したということを聞いたことがある。

「つまり、東が片付けば、西へやってくるということですね。」

「昨年、アタリスの戦役での動員兵力が十万と言うから。」

「こちらは、せいぜい二万というところ。おまけにしばらく戦をしていないので、戦いなれていない。会戦をすれば必ず負けるでしょう。」

アレスミリアンは、大げさにため息をついた。

「やはり、帰ってこなければ良かったかな。」

あまり、友好的とはいいかねる冗談だ。

「いいえ、まだ時間はあります。それに、こちらには、アズールが築いたクラコワと八つの支城が有る。

会戦に出れば負けるでしょうが、わたしはあいにく英雄ではないので、そんな戦い方に気取りや面子は持ち合わせません。」

と言われて、安心する者はいない。むしろ心配するだろう。

「うーん……。あちらで暮らしていると、あの王が敗れることなど、ありえないという気がしてくるのですよ。

でもね、わたしは勝ち馬に乗るより、分の悪い駒に賭けるほうが性にはあっているんだ。」

商売人としては、リスクを取りに行く方の部類なのだろう。

「勝ちもしなくても、負けもしないでしょう。そうでなくては、あの姫をこちらに移した意味が無くなる。」

「そして、また何かとんでもないことを企んでいるのだね。」

「よろしく、シルヴェスタ殿。今から復帰してください。」

アレスミリアは旧友の帰還を得て、上機嫌だった。

二人は、今後に向けての打ち合わせをし、ペルジアの侵攻が、おそらく翌々年あたりであるだろうとの一致を見た。

それは、現在彼らと王国の間には、まだ服従していない諸民族の
一帯があり、来年の侵攻はそこまで進み、そこから後は、何の
障害もなく王国の東端に到達することが出来る、という状況から
推測したものであった。

故に、侵攻の時期については確実なものではなかったが、
この場合、来年はまだ来る状態ではない、ということの確からしさが
大切なことだった。

シルヴェスタの第一の仕事は、東国から王国までの間の
伝達網を作ることであった。

侵攻が始まったときに、いかにそれを早く伝えることが
出来るかが、防御側にとっての最重要事項である。

「折角開いた店をたたむのは、いかにも惜しいなあ。」

「何もたたむことはないでしょう。誰かに預けておけば
よいではありませんか。」

「そうやってクラコワの店も・・・、次はいったい。」

「それはまだ、気が早すぎますよ。おっ、お見えになられた。」

イーリアスとの面会を終えたオルクサンが、近づいてくるのが目に入った。

「いつまでたっても来ないので見に来たら、何者だ。」
シルヴェスタの、東国ふうの成りに少し驚いた様子であった。

南に海港都市をもつロンダルトとはいえ、東国の商人達が王宮に入り込むほどの交易は無い。こういう風体の人種を、オルクサンが目にするのは皆無だった。

「シルヴェスタといいます。北の部族との渡りをつけたのは彼です。
ロンダルトの皆様にも、北の産物を売りまいたのも彼。
今は、東の国の宝石商とでも言うところでしょうか。
役に立つ男ゆえ、是非お目通りを。」
「東に行っていたのか。・・・イズマイルという男はどうなのだ。」

オルクサンも、かねてからの懸念が現実のものとなって迫ってきていることを、肌がぴりぴりするほどに感じていた。

「宮殿の建設に手間取ったときに、彼が夕日に向かって沈むな
といえば、沈みかけた日がしばらくそこに留まったという話を
聞いたことがあります。」
「ほう。絶対王権を持っていると言うところか。ロンダルトも
クラコワも、王は貴族階級という舟に乗っているようなものだから、
何をするにもいちいち彼等の合意を取り付けねばならない。
まったくもって、厄介な事だ。
それで、その王さまは、我々に対して何か危害を加えてきそうな
兆しは有るのか。」

オルクサンは、もったいをつけ尊大ぶって相手を萎縮させたり、
時を無駄にするようなことはしない。役に立つ相手と見れば自分
から歩み寄って、必要な情報を得て行く。

「それは未だ判りません。が、可能性という意味では言下に否定も
出来ぬかと。」

「ふむ、そんなところだろうな。ところで、アレスミリアとは何者だ。」

「これは、ははっ。良くは存じませんがとんだ食わせ物かと。

彼の口車に乗ったばかりに、未だに一つ所に落ち着くことが出来ません。

あまりお近づきになられぬが上策と。」

「遅い。妹をさらわれてしまったわ。」

「それはそれは、心中ご推察し申し上げます。」

「はっはっは、さてアレスミリア、身体の方はどうだ。」

「さらわれ姫さまの、おかげを持ちまして。」

アレスミリアは、うやうやしく辞儀をした。

シルヴェスタは、この場での自分の役柄が終わったことを悟って、静かに部屋を辞していった。

現れて、一瞬にしてこの場の中心となる。

シルヴェスタは、オルクサンの資質と人の大きさを感じ、王族というのはこういうものかと感心した。

そして、その傍らにいる友人を思い、この二人が並び立つことの難しさを考えた。

いま、この混沌とした情勢の中では、直接の利害が衝突することは無いだろう。けれども、この混沌が収まり、新しい体制が形になり始めた時、お互いがどういう役柄に位置するのか。それに満足できるか。

おそらくは、どちらかが割を食う事になるだろう。

そんな時が来なければいいとは思いますが、そうはならないのだろうな。

オルクサンは、まことに世継ぎにふさわしい。

もし私がアレスミリアとではなくオルクサンと出会っていたとしても、彼に仕えていたかも知れない。

いや、この場合はまさしく仕えるという関係になっていただろう。アレスミリアのような気安さは彼には無いのだ。

アレスミリアと離れて、北の草原を馬で走り回っているとき、東の海を舟で行くとき、ふと隣にアレスミリアがいるかも知れないと思うことがある。その表現は正確ではないが、そんな感覚をするときがある。

もしその時が来たら、二人してもっと広い世界に、商いに出るのも悪くない。

王国なんぞ、小さなものだぞ、アレスミリア。

「お前が命を狙われるとはな。目星は付いているのか。」

「はい。」

オルクサンは全くの冗談で聞いたのだが、そのはっきりとした答えに不安を覚えた。

「そうか。誰だ。」

意識せず、声を落とした。

「お耳に入れぬほうが、よろしいと思います。」

その、次の言葉まで、少し間があった。

「ああ、そうか。そういうことだったのか。ふむ、困ったな。」

確かに、その答えしかあるまいと思った。

襲われた側からすれば、簡単な消去法なのだ。アレスミリアに死んで欲しいと思っている者。そしてそういう手筈を手配できる者。そんな男は、此の国に二人は居ない。

「証拠はございません。イーリアス様にはくれぐれも内密に。」

「図式で書けば、俺もイーリアスもお前にとっては敵方になる。」

「その図式の中に、わたくしとつながりのあるものが既に幾人もおります。」

敵とか味方とか、それは時に応じ、利害に応じ変化するもの。そういう色分けは、なされないほうが良いのではないのでしょうか。もっとも、この場合は、塗りつぶせない色もございましょうが。」

「塗りつぶせぬのは黒い一点。黒の宰相、か。どうするつもりだ。」

聞いて、どうするのだと思った。何も出来ぬではないかと。

しかし、聞かずには居れなかった。

「何も。どうすることも出来ません。いまだ新王国の宰相であり、王の義父、そして次の王、次の古王国の継承者の祖父でおられます。わたくしの力の及ぶところでは有りません。」

「報復はしないのか。」

「そんなことをすれば、この国は暗黒の時代となります。それに、あなたがそれを許しても、イーリアス様が許されますまい。」

「何故おれが許すと。」

この男、腹黒い。口に出して言うところがまったく、腹黒い。

「あなた様と私とは、その一点については利害が一致しています。
あなた様の手が汚れることなしに、事が終わってから、
謀反の門でわたくしを誅罰することもできます。故に、
わたくしをお止めにはならないでしょう。けれどあの方には
利害というものがありません。清いお方ですから。」

オルクサンは、しかめていた眉間を緩めた。

「食えんな。まったく食えない奴だ、お前は。
そこまでずけずけと言われると、怒る気も失せる。全てお前の
手の内か、カラバ、イーリアス、オルクサン、ウェルモンテ。」

その言葉通り、何故か腹は立たなかった。むしろ、どこまで計算しているのか、聞いてみたいと思った。

「『手の内』……。まさか、わたしは逃げないだけです。だから
そのように見えるのかも知れません。何が起こってもわたしは逃げない。
唯一それだけが、生き延びる方法ですから。」
「生き延びるとは。よく、分からんな。」

「オルクサン様には、王として歩む道があります。わたくしは、
あのままクルビスにとどまっていれば今頃、畑でも耕すしかなかった。
逃げれば、この城から放り出されるだけです。」

「それだけ？……。それだけか？もう誰も、お前のことを、
ただの田舎貴族あがりの小僧などとは思っていないぞ。
もし、ウェルモンテが狙ったとしてだ。ただ利害がぶつかるから
という理由だけでは、暗殺してまでお前を消そうとはしないだろう。
あのじじい。くそ忌々しいが、そこまでの愚か者ではない。
人を殺めるということは、余程のこととしておかねばならない。
でなければ、自分が闇討ちに合う。」

「他に、どんな理由がございましょうや。」
「それが分からないのだ。くそっ。」

だが教えてくれと言うのも、口惜しい。

「そろそろ参りましょうか。カラバ様がお待ちかねでしょう。」

イーリアスの養子縁組は、きわめて簡素に行われた。

イーリアスはカラバ公の前に跪き、その頭に華奢な冠をいただいた。それを、連合王国の代理人としてオルクサンと、クラコワの主立った貴族が立ち会うことで承認するといったものだった。

そのあと、カラバ公とイーリアスはともに王宮のバルコニーに立ち、人々の歓呼を受けた。

民衆は、長き後継者の不在と古王国の衰退を重ね合わせ、いつか自分たちがよってたつ大河の中州が、次第に川の流れによって削り取られ、失われてしまうかのような不安を抱いていた。

アレスミリアの諸策により王国の復興が続くなか、ただ一つの残された不安の種が、後継者の問題であったが、それもこの縁組みによって解決される運びとなった。

民衆の中には、アレスミリアが継ぎ人となるのではと想像するむきがあったが、血の正当性からいうと其れはないというのが大方の意見であった。

よって人々はこの縁組みを歓迎した。

そして人々の関心は、イーリアスの夫が誰になるかということに移ったが、これはアレスミリアに違いあるまいということで一致していたため、酒場のかけの対象にもならなかった。

連合王国の王女ではなく、諸侯の地位に下りた今となれば身分としても問題はなく、それがいつになるかというのが、しばらくの間は口さがないもの達の格好の話題であった。

儀式の終わりと共に、オルクサンはとっとと帰ってしまった。
ロンダルトを空けることが、どうにも不安だったからである。
それほどに、彼の父、アビアントの状態は芳しく無かった。

アレスミリア暗殺未遂の報が、耳に入っていたのかもしれない。
それにより、己自身の危険を感じたのか、いずれにせよ、
鬱とっていいような状態であった。

オルクサンにとって、今すぐの譲位という事態は、あまり
好ましいものではなかった。ウェルモンテに実権を握られた
ままの状態、王の椅子の主だけが変わる。

それは、彼の望む姿とは程遠かった。

「城の張り出しから、民に向けて手を振ったのは初めてではない
けれど、今日は今までとは違いました。
今までは、おとうさまや兄上の添え物でしか有りませんでした
けれど、今日はわたくし自身のために集まってくれた民を前にして、
この民は、わたしの民となる。わたしはよき国の母となる。
そう誓ったのです。
ようやく、私の夢が一つ叶いました。」

イーリアスはいまだ頬を薄い桜色に上気させていた。
アレスミリアは少し茶化したくなり、
「ますます、草原が遠くなりますね。」と返した。

「あなたはいつまでそうやって、気ままな身分でいらっしゃるの
ですか。」
「気ままとはまた、あまりの仰せよう。でも、出来ることなら、
一生このままがいい。」
「まあ、あきれた。」
と、冗談ぽくそっぽを向いた。

城の窓から、城壁を越して、その向こうに広がる麦畑と緑の丘。

更に向こうの方から始まる深い緑の森、山裾。白い雲をまとった山々。
これが私の王国。私の全て。私のアレスミリア。

「わたくし、あなたにご命令差し上げられる立場になりました。」

「何なりと、お姫様。」

と、芝居がかって恭しく物腰をかがめて、言葉が降りてくるのを待った。

「ずっとわたくしの側において、わたくしを援けてください。わたくしの進む道を誤らぬように。わたくしを導いてください。」

アレスミリアは、イーリアスの体を引き寄せながら

「おおせのままに。」と、耳元に誓いを立てた。

この年、王国内は平穩に過ぎた。

天候は順調で、農作物の収穫は申し分なかった。北の部族とは血の交わりが増え、王国の北縁の地方も、そうした家族の定住でにぎやかになった。

アレスミリアの襲撃以降も、ウェルモンテ伯はロンダルト宮廷の支配者として君臨していたが、その信奉者のサロンには、どこことなく秋風が吹いているように見えた。

何か良い話はないか、何かの官職が転がっては居ないかと、相変わらず人は集まってきては居たが、夏の緑（あお）い葉のなかに、黄色い縁取りが混じるような、分け入る隙もなかった群れ草の中を、風の通り道が出来ているような、そんな衰えが感じられた。

そして、人の口にかけてた門など、まことに信用のならないもので、たかだか針金を曲げただけの合鍵でも開いてしまうもの。

事件のあらままと、それが失敗に終わったことが、うわさ話として流れはじめていた。

それはいつか、口さがない侍女たちから、イーリアスの耳にも入ることになったのであるが、アレスミリアが言下に「それは噂に過ぎない。」と否定して見せたため、それ以上の詮索をすることはしなかった。

イーリアスには、考えようにも考えられない。あまりにも恐ろしいことだったからだ。

ウェルモンテ伯は、アレスミリアを排除する意志を捨てたわけではなかったが、その具体的な手段が今のところ見つからなかった。

それよりも、個人的な権力の戦いではなく、王国の宰相としての彼を悩ませていることがあった。それは王国内での出来事ではなく、王国の外で吹き始めた嵐の兆候であった。

アレスミリアがシルヴェスタを耳にして、東の諸国の動静を集めていたのと同様に、南回り航路による交易を行なっている商人たちから、彼も幾ばくかの情報を得る事が出来た。

東の覇者イズマイルは、ついに古王国との中間地帯の民族を服従させ、その間には、ほぼ無人の丘陵と、それを前庭とした森林地帯が広がるのみであった。

彼らがいよいよ西方の制覇に乗り出してくるのはというのが大方の見方であり、それはその後、現実となって証明されることとなる。

ウェルモンテ伯は、並ならぬ才覚と実力をもっていたが、専ら宮廷の人であったので、こうした戦乱に対しては対抗するすべを知らなかった。

彼は密かに、この嵐から逃れることを画策したが、おおっぴらにそれを行なうことは、避けねばならないことであった。

彼が逃げると言い出せば、ロンダルトの宮廷はおそらく空になってしまう。それは戦う以前に王国の敗北を意味し、新たな王とその家来たちへの服従を意味することだからだ。

全てではないにせよ、彼の領地は取り上げられ、外来の貴族たちの末席ぐらいに並ぶことは出来たとしても、そこからまた長い坂を上り行くには、彼の人生は残り少なかった。

そうなれば、彼がいままで生涯をかけて築き上げたものが、全て水泡に帰することになってしまう。

王国が敗北してはいけませんが、彼自身は戦乱に巻き込まれ、命を落とすことはあってはならない。彼は命を懸けないが、誰かがこの国を守らなければならない。

このような身勝手な目論見が、老いたウェルモンテの結論であった。結局、老人は宰相としての権限を生かして、アビアント王に一つの献策を行った。

「東の王国の侵攻に備え、オルクサンに防衛の全権を付与する。」

アビアント王からこの勅を受けたとき、オルクサンは小鳥のように体を震わせた。

オルクサンには、これが、彼が王国の全権を掌握するための第一歩と見えた。

妹のイーリアスはすでに王室を去り、自分の道を歩み始めた。

彼が、終生意識してやまなかったアレスミリアは、すでに一国の実質上の統治者として人々の信頼を得ている。

オルクサンのみが、一番権力に近い踏み台の側に立ちながら、そこに足をかけることが出来なかった。
この機会を見送る、という選択はあり得なかった。

権力を欲するものは、一瞬たりともそれを手放しては成らない。

例え己は表舞台から去ろうとも、別の誰かに継承されねば、それは永遠にその手から失われる。

ウェルモンテは、血の継承により、オルクサンに一時その執行権を委譲しただけのつもりであった。

そのまま王の首を挿げ替えるもよし、と。

しかしそれは、この世にその系統が継続してのことである。

オルクサンは、ウェルモンテのサロンとは別に、彼自身が持たされた権力を行使し貴族会議を招集した。

会議には主立った貴族達が招集された。

が、オルクサンは、彼ら宮廷貴族達に何かを期待しているのではない。彼らは戦闘よりも享楽になじんでいた。

彼らがたゆたう新王国は、北の部族と断続的な争いのあった古王国とは違う。クラコワを緩衝材として、長く続く平和の中に安穏とたわむれる船遊びのようであった。

彼らの耳には絶えず心地よい典雅な調べが流れ、彼らの衣は花の香りの風にそよいでいた。

そうした宮廷貴族を何人寄せたところで、やがて襲い来る激流を、遮る杭にはなりそうもなかった。

会議では、いかにも場違いな席に呼ばれたことに、居心地の悪そうな首を並べた木偶人形が、きらびやかな衣装のままに勢揃いし、オルクサンは気分が悪くなるほどであった。

しかし、彼は宣言しなければならなかった。

今、彼は救国のため、王の代理人として全権を握っている。
其れについては宰相も承知の上である。

従って皆は、彼の言葉は、王と宰相の言葉として服従しなければならない。
拒否すれば、それ相応の処罰を下し、その償いをすることになるだろう。

貴族達は、長年にわたり黒の宰相によってその牙を抜かれ、反対する言葉をその頭脳上で黒く塗りつぶされていたため、一様に機械を仕掛けられた人形のようにうなづくことしかしなかった。

とはいうものの、特徴のない、白く塗り込められた仮面の下では、未曾有の危機に対してどうやって身を守るかという難解な問題に対して、全身全霊を動員して、彼らなりの回答を得ようとはしていたのである。

閉じられていた重い扉が侍従により左右に開かれると、不機嫌な牛の群れが麗々しい衣装の下を汗まみれにして、首を左右にゆらしながら現れた。

彼らは、石で固められた牧場を、先ほどの話を消化しきれず、もそもそと反芻しては思い思いの方向に歩いていった。

オルクサンは、表面を歳月に磨き込まれ、側面に草木の細やかな浮き彫りが施された、あつく長方形の木卓、これがこの後、数ヶ月の彼の指揮盤となったのだが、の上座に一人腰掛け、無人になった空間に向かって宣言した。

この場から、はるかに離れた地にいる男に向かって。

「儀式はこれまでにしよう。」

アレス、お前はどのようにしている。

「アレス様」

「姫、“様”はおやめください。」

「この方が呼びやすいのです。それともアレスミリアンが
よろしかったかしら。

わたくし本当に知りませんでした。あなたの名前がミリアンだった
なんて。

しかも皆さんにも隠していたなんて。これでは若き予言者というより、
意地の悪いペテン師です。」

「何かご用があったのでは……。」

回廊で呼び止められ、振り向いたアレスミリアンは、辛らつな言葉とは
裏腹な、イーリアスの笑顔に苦笑を誘われた。

両手に地図や書物を抱えたニールリングとその朋輩達は、二人を
残して彼らの作戦本部に向かった。

彼らは、今や比類無き彼らの主人と、其れをやりこめることの
出来る唯一の人とのほほえましいやりとりを聞くのが好きだった。

しかし、それを立ち聞きしているのが知れると、その後思い出すのも
いやになるような困難な課題を、笑顔で言い渡されるのをおそれて、
そそくさとその場を去っていくのであった。

「この難局に、私が何をすればよいのか教えてください。よくよく
考えてみたのですが、思いつかないのです。」

アレスミリアは少し思案するような素振りであったが、

「イーリアス様は、悠然と構えてられるのがよろしいかと。」
と応えた。

「それは、わたくしに何もするなと言うことですか！」

イーリアスは眉間にしわを寄せ、怒った声で反問した。

「そうではなくて、民の前に姿を現し、王宮が平静であることを、
民に知らしめて頂きたいのです。」

おそらく、このクラコワの城壁と周辺が、最後の戦場になることは間違いありません。いま民が動揺しては、その備えも出来ませんし、中には逃げ出すものも出てくるでしょう。

敵をくじくには民の力が必要です。民の力を引き出すには、強い結束がなければなりません。

一人一人は弱くても、皆の力を合わせれば、そう易々と敵に後れをとることはありません。しかし民というものは、理屈を論しても生死の境となれば易々とそれを忘れてしまいます。

彼等に必要なのは、心の中に思い浮かべることが出来る象徴なのです。

それは、カラバ公ではありません。あのひげ面の親父を思い浮かべても楽しくも何とも在りませんからね。

本当に、窮地に陥ったとき、誰かの助けが必要なとき、そして誰かを助けねばならないとき、あなたが彼等の心に火をともしてあげなさい。

この戦は、貴族と、商人と、職人と、農夫達が心を合わせて立ち向かわねばなりません。そのためには、今は心の平静さが重要です。」

イーリアスの顔は笑顔に戻っていた。

「判りました。その様につとめましょう。・・・アレス、私たちは、負けませんよね。」

「決して。」

そう言うと、彼は彼の戦場に向かった。

彼の戦いはすでに始まっていた。

作戦本部には、王国とその東側の地図が広げられていた、

地図とはいっても、山や川や森の位置が大まかに記されているようなものだったが、それでも実際の軍団の動きを想定し、それに対抗する手段を構想し、みなと共有するには十分だった。

それ以外には、それぞれの時代衣装をまとった文書、ただ紙を重ねて紐で綴じただけのものもあれば、紙ですらないものに書かれたものまで、が所狭しと置かれ、それには所々附箋が挟まれていた。

「どうかな。侵攻路は想定できそうかな。」

「いえ、特定するのは無理です。過去に何度か同様のことが有ったようですが、その都度、街道を通ったり山越えできたりとまちまちで、あるいは両方から来る可能性もありますので、事前にそれを特定してしまうことは危険だと思います。」

ニールリングは地図を見つめながら、首を振った。

「かといって、兵の少ない我々が、全線に展開するのは愚かだからな。何がしかの前提は置かねばならないだろう。」

歴史に頼れないとなれば、現実から類推するしか無いのだが、、、イズマイルという男は、たいそうな英雄気取りらしい。

これまでの戦歴に曇りはないが、相手にしたのが雑多な小国ばかりだったのが、どうにも気に入らないらしくてね。

此の国を制覇することによって、歴史に名をとどめる大王になりたいらしい。」

ニールリングは、細い顎に親指と人差し指を添えた。

「英雄は英雄らしく、正面玄関から、ということですか。」

十万もの軍勢が、山越えで来るとは思っていないのですが・・・、彼らは我々の裏をかく必要はないのです。我々の兵力も知っている想定して良いでしょう。正面から来て押しつぶせばよい・・・。

街道を通ってくるものと考えてよいかもしれません。その方が好都合だ。」

アレスミリアンは、試験管に少しの試薬を入れてみることにした。

「では、街道の、山の狭隘なところで待ち伏せして襲撃でもするか。」
ニールリングは、地図から目を離さないでこたえた。

「あまり効果はないでしょう。細い場所では、前面に出せる戦力が限られるので、兵数の差は無くなりますが、一度に叩ける数も知れたものです。そのうちに回り込まれてしまいこちらが包囲され、全滅する可能性もあります。」

アレスミリアは、ニールリングの成長ぶりに秘かに目を細めた。

ニールリングもまた、貴族の子弟の出自であった。アレスミリアは、こうした若者達を野山を巡って採集し、王宮の庭に植え、育てた。

その草木は主種雑多なもので、成長の早い木もあれば、日陰で穏やかに咲く花もあり、とげを持つ低木や、未だに何物に育つのか判らないものも有った。

ハイアルト卿は、年配者の常としてこうした若者達の集団に眉をひそめながら、一方では何かとちょっかいを出しては一人で悦に入るといふ、複雑な行動をとっては若者達のひんしゆくを買い、イーリアスの笑いの種となった。

その中でも、ニールリングは常にアレスミリアの側にあり、彼の考え方、彼の行動を吸収するとともに、彼の信奉者として一際抜きんてた存在となりつつあった。

アレスミリア遭難の際もその側近くにおり、ルークス・カルフも認めた馬上の荒技により命を救ったのも彼であった。

「よし、街道から攻め込んで来るといふ想定で、机上戦をやろう。相手の攻め手を予測して、その対策を準備するのだ。だが、私は戦の素人だからね。敵将はハイアルト卿にやって頂こう。」

それから数日間、作戦本部には若者達のうめき声と、ハイアルト卿の高笑いが響き渡った。ついに、敗軍の将を代表して、ニールリングがアレスミアに会見を申し入れた、

「だめです、この圧倒的な兵力の差では、どんな戦い方をしても勝てません。背後を突こうが、側面をたたこうが、一定の時間は効果がありますがそれまでです。我々の負けです。」

「それで良い。」

「はあ！」

ニールリングは少しむっとして、語尾を上げた。

この数日間、さんざんな思いでハイアルト卿の高笑いに耐え戦ったというのに、よかったとは何を言い出すか、と思ったのである。

「いや、失礼した。十万対二万では会戦をすれば負ける。

それは素人のわたしも承知している。けれどもハイアルト様やカラバ様は歴戦の勇士で有らせられる。

敵わぬまでも、一当てしたいと考えられるやも知れない。

そうすれば、ほかにも同調される方が出てくるだろう。

それはよい悪いの問題を超えて、人はそういうものだと言うことなのだ。

そこから物語や伝説が生まれてくるのだから。

アズールやイズマイルもその一人だろう。わかるね。」

ニールリングは、はいというように頷いた。

「けれど、私はもう少し現実的な人間だからね、出来るだけこちらの損傷を少なくしたい。もちろん伝説になどなりたくもない。

伝説には滅びの物語が多いからね。

今回の戦いは、破れることなど許されないのだ。我々と彼らの兵力の差を埋め、勝てないまでも負けない戦をする。」

「籠城するのですね。」

「そう。ハイアルト卿も、今なら会戦の無駄を承知しておられるだろう。

その目的は達せられたと思うよ。」

ニールリングは少し考え込んだ。
「もう一つ、気づいたことがあります。」

アレスミリアは、この国難の際に、我ながら不謹慎だなと思ったが、ニールリングとこういう語り合いをすることが楽しかった。

「敵軍の反応が鈍いのです。正面からの攻撃をあきらめ、我々は奇襲を多用しました。が、すぐには敵軍が反応してこないのです。」

ハイアルト卿が手加減されているのかと伺ったところ、敵は諸民族を飲み込んで大きくなった水ぶくれの集団だ。

戦術的な運用を訓練したわけでもないし、言葉もうまく通じない。せいぜい前に進むか、後ろに退くか、だ。

忠誠心から戦っているのではないから、いつ裏切るかも知れ無い。用心の為、主力の本体は最後尾で容易に飛び出してもこれない。

だから数を頼むのだ。相手が戦意喪失するような多数で圧倒し、多少の犠牲が出てもただ押しつぶす。これが唯一の戦法だ。戦場での細かな指示はかえって混乱を招き、思いもかけぬ敗戦を喫するだろう、と」

「さすがだな。これでますます我に有利というわけだ。」

さてニールリング、籠城戦の定石は。」

「城にこもって援軍を待つ。」

「残念だが、ロンダルトからの援軍はありません。」

「長期戦に持ち込み、敵の飢えを待つ。補給路を攻撃しましょう。」

幸い敵は十万もの大軍です。携行する食料だけでは、ひと月は持たないでしょう。濠をさらえ城壁の上にさらに防壁を築き、敵の侵入を阻止します。」

ニールリングの目が、キラキラと輝いて、これ以外に方法は無いのだと主張していた。

「いや、一月は長すぎるのだ。籠城は一週間で終わらせます。」

「えっ！」

「我々には、ロンダルトのことがあります。放って置くわけにはいきません。」

ロンダルトを取られると言うことは、身体の中に病の種を蒔くということと

同じ事なのだ。」

信じがたい言葉だった。けれども、成算無くして大法螺を吹くような男ではない。

ニールリングはこのとき、もし籠城中に矢が飛んできたら、今度は体を張ってでも止めるのだと思い定めた。

開戦まであと十ヶ月。今はまだ、東の街道もただ雪深く、静けさの中にあった。

その頃、オルクサンもまた、長い木の卓上の虚空をにらみ続けていた。

その長卓の両側には、荒ぶる魂をいまにも溢れさせそうな男達が顔をそろえている。オルクサンが頼みとしたのは、中小貴族階級の騎士達であった。

ウェルモンテの治世の下で、こうした地方の田舎くさい貴族たちは、ひたすら冷や飯を食わされていた。彼らには、宮廷での世渡りの才覚は無い。

彼らの生活基盤である地方の所領は、時折襲われる凶作によりかさんだ借財のかたとして、耕地が取り上げられ、農民が浮浪化し、耕地が荒れ、それを原因にまた農民が土地を捨てるというような悪循環を繰り返し、緩やかに崩壊の坂を下り続けていた。

しかし、商品経済が発達した首都ロンダルトでは、その基盤が地方の農耕にあることを忘れ、手っ取り早く金を稼ぐことにみな踊り狂っていたのである。

ウェルモンテが権力を追いかけ、その道具として金と陰謀を使い、その取り巻きがみなそれに習ったツケであった。華やかな都に富が集中する一方で、地方は疲弊し、衰退しつつあったのである。ロンダルトのみが、栄華の夢に浸っていた。

彼らにとっては、この戦で手柄を上げることで中央への発言力を強め、オルクサンを奉戴することによって、己の不遇な立場を改善したいという思いがある。

だからこの戦いは、ただの防衛戦ではなく、支配権の交代を目論んだクーデターでもあった。

オルクサンと、彼らの利害は一致していた。

「なんとか、四万は揃えられそうです。」

オルクサンの席にほど近い男が報告した。さしずめ、彼の補佐役とでも言ったところだろうか。

「半分にも満たないか。だが、敵が二分してくれば五万だな。」

「こちらには城壁がありますので、その分の優位はございましょう。」

「とすれば、気は進まんが、クラコワにも半分は引き受けてもらわねばならん。」

アレスミリアンと違い、オルクサンはただ命令を下せばよい立場であった。

オルクサンは、またその父王のふがいなさを目にして育ったこともあり、王の中の王を目指して今日までを過ごしてきた。

力には力を。彼は武術にも秀でていたため、余計にその思いが強かった。そして、一度手にしたこの大権を、二度と手放すつもりはなかった。

ロンダルトも四方を城壁に囲まれていたが、クラコワのような三重の城壁に囲まれた堅固なものではなく、外周の濠も空堀であった。

しかもクラコワの優に四倍を超える外周を持つため、そこにこもって戦い、守りきるというような性格のものではなかった。

ただ兵力が拮抗すれば、遮蔽物を持つ自軍が有利というのが彼らの判断であった。

その判断は、彼らの熱情によって正確さを欠いてはいなかっただろうか。

人は都合の良い想像に酔うことがある。一度酔ってしまえば、それはなかなか醒めることが出来無い。

人はもっと気持ちよくなってしまおうために、さらにその夢を重ね、深酔いしてしまうからだ。

酔いからさめたとき、ただ宿酔いの頭痛で済むのであれば良いが、

覚めることなく、永遠に眠ってしまうかもしれない。

「一度、あいつと話す必要があるな。」

その場の一同には、"あいつ"が誰か、正確には分からなかった。

古王国では、その年の作付けは例年より早く行われた。

それは、収穫を早め、敵に食料をとられないようにするための対策であった。

もし作付け後に、季節が戻るようなことが有れば、その年の収穫は大きな打撃を受けることになる。が、非常時故、仕方がなかった。

幸い天候に大きな崩れはなく、穀物の葉は順調に育っていたが、それはまた開戦の時期が近づくことを人々の目にも知らしめていることでもあり、喜びと不安の相半ばする稔りの風景であった。

イーリアスはアレスミリアの言葉をよく守り、クラコワの市内や属州に出かけては民衆を慰撫して回った。
イーリアスは各州都、通過する村々、畑のあぜ道で大歓迎を受けた。

州都では志願兵が殺到し、イーリアスを大いに驚かしたが、そのほとんどは、いつの時代のものかわからないような甲冑と、つい昨日まで竈で火にかかっていた鍋のような兜を被ったような出で立ちだった。

しかし、国中から働き手を奪うことは、アレスミリアの本意ではなかったので、イーリアスはその都度群衆に向かって、今は兵力に不安がないこと、けれども万が一敵が押し寄せるようなことが有れば、一致団結してそれに対抗し、撃退してほしいと演説しなければならなかった。

「けれど、わしらは家に帰っても、かかぁに『何しに帰ってきやがった、このろくでなし！』とどなられ尻を蹴られますんで、なんとか加えてもらうわけにはいかんでしょうか。」

イーリアスはそれを聞いて、まさか本当に奥方が夫のおしりを蹴ることはあるまいと、目を丸くして驚いたが。

「こおら、お姫様に向かって、なんて失礼なことを云いやがる。」
「だから、おれはケツって云わずに尻って云ったんだ。」

「こおの、ぬけ作。貴族様はケツや尻の話なんぞしねえもんだ。
おいどっていえおいど。全く、無学なもんでしょうがねえな。」
「がくって何だ、がくって。おめえんちのガキなんざあ、昨日も
鼻あたらして棒きれ振り回してやがったじゃねえか。」
「こどもはかんけいねえだろ。この野郎。」

という騒ぎを耳にして、アレスミリアがなぜ民衆にこだわるのかが、
わかるような気がした。

古王国の大地が、一面金色に染まった頃、アレスミリアの周辺がにわかに泡立ち始めた。
まずシルヴェスタが、最後の情報を持って帰還した。

城外はすっかり闇に沈み、窓の外にはどこまで続いているかわからない、闇が在った。

「やはり今年のような。せっかちなことだ。あちらの市中でも、こっちのうわさ話をよく聞く。有ること無いことごちゃ混ぜだが、上の方はそれなりに、こちらの事情を知っていると考えていいでしょう。」

「どこから来ると予想します。」

「街道ですね。兵糧を運ぶ荷駄が多いから、山越えは不可能だろう。一応、攻城兵器なども運んでくるらしい。」

「それは、どのような。」

「なぁに、よくある櫓と槌、それと投石機です。」

「兵力は十万と見ていますが。」

「それはまだわからない。だが、それより少なくはないでしょう。あの国はもうぼろぼろだ。毎年毎年兵を出しているから。

征服された地域は重税を課せられ、兵糧で巻き上げられるから食うにも困る始末だ。全く見るに忍びない。

人も、ものも、土地も、総て王のもの。家臣は許しを得、初めてそれにふれることが許される。人の命も同じだ。総て王のものであり、一人の人間としては、生きていることを許されているに過ぎない。」

「ひどいことだ・・・。」

「全くだ。」

「シル。今でもあちらが勝つとお思いか。」

彼は東国の、商人ふうにのぼしたあごひげをつまみながら、
「私は商人だから。戦のことはわかりません。だがね、本国があんな調子では、それがいつまでも続けられるとは思えないんだ。」

何かのきっかけがあれば、あの国は、いろんなところから火の手が上がるのではないかと思えるんですよ。」

いつになく真剣な横顔で、アレスミアンが言った。

「私は負けない。でなければイーリアスをここに呼び寄せた意味がない。」

「ということは・・・、ロンダルトは危ういと云うことか。」

彼は以前もそう言った。アレスミアの読みが告げた事柄に、シルヴェスタはめまいがしそうだった。

「あなたには関係ないことだが、私はロンダルトの商人達とはつきあいがある。友人もいる。

彼らは、別に国のために何をしたということはないが、それが普通の商人の生き方だ。彼らは今頃どうしているのだろうか。」

シルヴェスタは、彼らの顔を一人一人思い出していた。いい男もいれば、そうでない男もいるが、みな何がしか繋がって生きてきた。

彼らはもうどこかに逃げたのだろうか。それとも、逃げたくとも逃げる場所がなく、ロンダルトに留まっているのだろうか。

「オルクサン殿の性格では、私のように、男らしくない、負けない戦いなど選ぶはずがない。彼は王になるには王の証明が必要だと思っている。

それには、彼の父の、アビアント王の事跡が影を落としているのだが、今度の戦が、その機会だと考えておられる。

もちろん勝つための算段はしておられようが、それも総て計画通りに行けばのことだ。

ロンダルトは必ず救います。けれども、オルクサン殿のことまでは責任が持てない。」

アレスミアは、この話の中で、もっとも憂鬱そうな顔をして、次の言葉を続けた。

「わたくしがここに存在すること自体が、彼にとっての不幸なのだから。」

シルヴェスタは、少し黙ったまま考え込んでいたが、

「私はあなたに一つ聞きたいことがある。」

といった。

その顔は、ろうそくの炎に揺れ、少し寂しそうだった。

「いつも得心がいかなかった。でも何度想像を巡らしても、

それがまともな答えだとは思えない。

そしてその答えを知ったとき、私はあなたの友人で居られるの
だろうかと不安になる。

あなたは、いったい誰なのです。」

アレスミリアは、しばしの間、静かに微笑んでいた。

「ニールリング、・・・、ニールリング！」

「お呼びですか。」

シルヴェスタはその、若い顔に疲労と苦悩が深く刻み込まれた、
けれども目だけはきらめく力を宿した様子におどろいた。

「杯を用意してくれないか。わたくしとシルヴェスタに。」

「承知しました。」

シルヴェスタは、立ち去る後ろ姿が消えるのを見届けてから、

「小僧と思っていたのに、一人前の面構えになってきたもんだ。」

と評した。

「フフ、頼もしい若者です。」

「さて、先ほどの答えですが、一つは正しく、今ひとつは間違っています。」

「二つ？」

「あなたの想像していることは、おそらく正しい。子細はいずれ
明らかになるでしょうが、今しばらく伏せておきたいのです。」

そのときニールリングが杯をもたらし、去っていった。

「この杯を覚えていますか。」

「ああ、こんなもの。ちっぽけな、ぼろっちい。ぼろすぎて
忘れようとしても忘れられない。こんなものを、今も持っていたのか。」
指で杯をもてあそびながら、その横顔は楽しげだった。

— それにしてもあの小僧、あの言葉だけで、この杯を察したのか。

「私達もちっぽけだった。ちっぽけで惨めでした。そして、そのころの
私にはこの杯が総てだった。あなたと、ルークスとの友情だけが、
蒼天と大地の間で唯一の財産だった。
私がこの杯を捨てる時は、わたくしがこの地上で必要とされなく
なったときでしょう。」

シルヴェスタは世界を知っている。

彼はアレスミアが知るよりももっと北の大地、もっと東の河に到達し、
その向こうにもまだ世界が広がっていることを知っている。

その彼の右目から見て、今の王国は風前の灯火に等しかった。けれども
彼の左目には、風が強ければ強いほど一段と明るく輝く灯火が見えていた。

この矛盾した光景に、彼は説明を付けることをあきらめた。その代わり、
灯火の芯の一つになり、燃え尽きるまで燃えつくそうと思うのだった。

その翌日、オルクサンからの使いが到着した。

「ニールリング。五日間ほど城を開けるが、よろしく頼むよ。」

「お気をつけて、行ってらっしゃいませ。くれぐれも。」

あの男には。

「大丈夫さ、この戦が終わるまでは、私には手を出さないよ。

私には利用価値があるからね。」

「兄上、父上、母上にくれぐれもよろしくと」

「ええ、お伝えしましょう。」

「カラバ様。」

「うむ、ゆくがよい。」

「では。」

アレスミリアは最外郭の城門をぬけるまでは並足で進み、そこから先は馬に疾走を命じた。彼自身このような早さで駆けていくのは、あの夕闇以来のことだった。

「アレスミリアさまあ！」

後ろから、イテカレスが追いつがって叫んでいた。
アレスミリアと馬は、歩調をゆるめて並足に戻った。

「あまり激しくされては、お体に触ります。」

「忠告ありがとう。でも北の人たちはもっと早いんだよ。これぐらいで音を上げていては、草原の端っこに置いてきぼりだ。」

そう言い放つと、再び早足に戻った。

頬を切るような風と、人馬一体となり駆け抜けていく風景が、
ひととき戦雲を忘れさせた。

作業の農夫達は、しばし一陣の風となった集団を眺め、見送った後、

何もなかったかのようにまた落ち穂を拾い集めた。

彼らは二度、駅で馬を乗り換えた後、三日目の早朝にロンダルトに入城した。

「大きいですね、ロンダルトは。」

クラコワから来て見ると、あらためてこの都の大きさに驚かされる。彼らがこれから、さしかかろうとしている大通りの幅の広さなど、クラコワ最大の広場より大きく見える。

「ああ。」

「城壁の上に、防護柵が。でもまだ完全では無いようです。

ところどころ切れている。」

城門に近づくにつれ、イテカレスの目はあちこちに向けられていた。

「クラコワの防壁を見慣れていると、こちらはぺらぺらの戸板にしか見えませんね。」

「そうだな、思っていたより深刻なようだな。」

「防衛線が長すぎるのですよ。こんなに広くてはどこからか進入を許してしまうでしょう。」

「そなた、ものいいがニールリングに似てきたな。」

「ニールに似ているというのなら、それはあなた様に似ているということでしょう。みなそう噂しています。」

「何、うーん。これからは気をつけるとしよう。」

あなたが気をつけても仕方が無いでしょう、といいかけたがそれはやめにした。

この方は、何か常識はずれなところがある。それを正した所でなんの意味もない。

城門をくぐると、そこから宮城の先端が見霽かせた。

ここからの距離がまた、遠い。徒歩だと半日はかかるかもしれない。

「民衆の目に落ち着きがないですね。これはとんでもないことになっているかも知れません。」

イテカレスの観察は続いていた。

「逃げる手だてと財産を持つものは、もうあらかじめ逃げてしまったのではないのでしょうか。逃げる手段を持たない者達だけが、

取り残されて居るような気がします。

一様におどおどして落ち着きがない、特に我々のような騎乗の人間に、びくびくしているような気がします。」

「オルクサン殿はこのことをご存じなのだろうか。」

彼の視線は庶民の高さには無い。

平民をあてに、と考えることもしなかった。ゆえにそれを知るはずも無かった。

従者の一人が先乗りして、アレスミリア到来を告げていた。

アレスミリアはクラコワのそれよりは随分長く広い廊下を、数々の好奇の目にさらされながら歩いた。

彼らの中には、すでにアレスミリアとよしみを通じているものもいたし、これからそうなりたいと思っているものもいた。

また別のものは、毒をも退ける不死身の男が、想像していたような熊のような大男ではなく、ごく当たり前の貴族然として立ち居振る舞うのを意外に思っていたし、ウェルモンテを裸にするぐらいの策士ならば、目がつり上がり、唇端はかぎ爪のように曲がっている顔を想像したのに、並の人間どころかどこか見覚えのあるような、肖像画にでも出てきそうな雰囲気にも包まれていることに、早くも術中に落ちてしまったかと、戸惑いもした。

けれどもそれはほんの小手調べに過ぎず、オルクサンの司令室に集まった、騎士達から浴びせられる視線は、ぶしつけさからいっても、それが到底味方から発せられているものとは信じがたいものであった。

「お久しぶりです。オルクサン殿。」

「いいあいさつだ、指揮官殿。」

お互い、目を見合わせてにやっと笑った。

オルクサンは長卓のはじめに、ゆったりと構えて座っていた。

いかにも、この騎士団の長とした風格だった。アレスミリアには、その反対のはじめに座るように進め、イテカレスはその斜め後ろに立った。

「聞かせてくれないか、そちらの心づもりを。」

「こちらの兵数は二万です。」

それを聞いて、オルクサンの騎士団は優越感を持った。

「まず、イズマイルの軍は、東の街道を歩いてクラコワに侵攻

してくるでしょう。その数、推定十万。補給隊も入れれば三十万ぐらいが動員されるでしょう。」

「二万対十万か。勝算は、ははっ、有るのか。」
聞くまでも無い、というのがその場の雰囲気だった。

「二万対十万なら籠城戦で冬の到来を待ちます。
二万対六万なら、一週間で撃破します。」

騎士達はどっと笑い、右手で調子を合わせて卓を叩いた。
持久戦ならまだしも、一週間で打ち破るとは、これだから素人は
駄目なのだ・・・とでもいうような笑いだった。

誰かが、

「さすがは戦上手、二万で六万を打ち破るなど、並の人間では
出来るまい。魔法使いでも雇ったのか。」
と揶揄した

それを聞いて、また騎士達は体を揺すって笑った。
が、オルクサンは笑っていなかった。
アレスミアもオルクサンだけに集中していた。
イテカレスだけが、立腹していまにもはじけそうだった。

「おそらく敵は、軍団を二つに分けて攻めてくるでしょう。
クラコワに集中するにせよ、ロンダルトに集中するにせよ、
そうすれば、後背地をがら空きにすることになりますから。」
「ということは、ロンダルトにもしもの事が有れば、兵を出すと
云うことだな。」
「いかにも。」

「時期を誤れば、火だるまになるぞ。」
騎士の一人が、また余計な口を挟んだ。

「魔法使いがついているのなら、大地の一つや二つ割って
見せてくれよう。もっとも卵ならわしの剣でもまっぷたつ
だがな。」

アレスミリアは、その言葉が聞こえなかったかのように続けた。

「軍団の指揮はハイアルト卿がとられます。戦術においても、用兵においても、わたくしの及ぶところではありません。」

ああ、あの親父さんならやるだろうよ。まあそういうことだな。

騎士達もこれには同意した。

想像はしていたが、この程度の騎士しか集まらなかったのだ、とアレスミリアンは気落ちした。それが表情には出ないように自制をしたが、悪い方の筋書きが、徐々に現実化していくことの失望感が、胸のうちに広がってきた。

「クラコワが窮地に落ちても、こちらは助けに行かんぞ。それでもいいのか。」

「はい。」

「そうか、それでは軍議はこれで終わりだ。あとは世間話でもするか。イーリアスのことも聞かせてくれ。」

騎士達は、思い思いに席を離れ、後にはアレスミリアとオルクサンだけが残った。

「やっどこさ人払いだ。いやな席に呼んでしまって悪かったな。」

アレスミリアンは気にもしていないという風に、事実そうだったが、

「イーリアス様がくれぐれもよろしくと。」

答えた。

「そうか。先ほどの件、いやに自信ありげだったが、大丈夫なのか。」

「クラコワを、生かすことは出来るかも知れませんが、そのようにしよう
と思っています。」

「では、イーリアスは大丈夫なのだな。」

そのために留めたのだ、とは言わなかった。

もし万が一のとき、

「今の地のクラコワは消え去るかもしれませんが、その時は、

北の地に逃れていただきます。わたくしの命に代えても。

さすれば、どちらかが倒れても、王家の血は守られるでしょう。」

「どちらかとは、一方は、ロンダルトのことを言っているのだな。」

オルクサンの口調は穏やかだったが、話題は、もっとも口に出しにくい
領域に入ってきた。

「それは最悪の筋書きのことです。もし敵が軍を割って、同時に

攻撃を開始したら、われわれはロンダルトの救援には行けません。」

「だから、イーリアスをクラコワに呼んだという事か。」

「……。」

沈黙で応えるしか無かった。オルクサンは、負けると思ってこの都で
戦おうとしているのではないのだ。が、自分なら此処では戦わない。
勝つ方法が見つからない。それを口にする事になる。

「俺がロンダルトを守るのでは、不服か。」

「あなたは勝とうとしておられる。我々は負けない戦い方をします。

確率の問題です。」

もちろん、クラコワとて安泰ではないのだ。

「今の騎士達を見てどう思う。」

「いささか分別には欠けると思われますが。」

「ああ、実際に戦うものはそれぐらいの方がいい。分別くさい奴は、敵を切る前に説教をはじめかねないからな。」

「それは、私への皮肉ですね。」

「はっ、あいかわらず、おこらないのだなあ。」

この部屋に入って、初めて二人とも笑った。

「オルクサン殿は、いま危うい橋を渡ろうとされている。」

「それぐらいの危険は承知の上だ。このまま王にもなれず、何者にもなれないまま一生を終えるくらいなら、ここで果つるのも同じ事だ。」

「いずれ王位は継がれるでしょう。ウェルモンテ伯もそう長くはない。

なぜ、今、ここでなければならぬのでしょうか。」

オルクサンは、いままで背もたれに任せていた身体を起こし、長卓に肘をついた。

それは、

「おまえがいるからさ、アレスミリアン。」

オルクサンが、この名前で彼を呼んだのは、初めてだった。

「おまえが居る限り、おれが仮にこのまま王位を継いだとしても、それは借り物の王位だ。頂く王冠が本物で、本当の玉座に座ったとしても、皆が指さして云うだろう。あの王は偽の王だと。」

「いつ、その名を。」

「イーリアスの侍女の中に、ウェルモンテ伯の息のかかったものがある。そいつが言ってよこしたのだ。本当の名は、アレスミリアン。その女は、何気ない気持ちで送ってきたのだろう。それまでの名は通称で、本名は違うと。」

それが宮廷内を回りまわって、俺の耳に入ったということだ。

たかが一文字のことなのだが、通じるものには通じるのだ。

われら、アズル・イクンの血を継ぎ王位を継ぐものは、同時にその名の法則も継ぐのだ。

Aから始まってNで終わる。

Aolksan、そしてAllesmilian。

だが父の名はHabianto。

彼の苦しみは継ぐものの名を持たぬのに、王位を継いでしまったということだ。だからこそ、俺は名前に気がついた。

お前と最初に合ったとき、初めてという気がしなかった。

それもそのはず、この宮殿のそこかしこに掲げられている肖像の面影がお前にもある。が、こんなものは並べてみないとわからないものだ。

たしか、親父には兄がいたと聞いたことがある。」

「アズレクン・ロンダベル。」

オルクサンの顔がほころんだ。

「とうとう白状したな。おかしいな、俺にとっては都合が悪いはずなのに、何かうれしいぞ。はっはっは。」

オルクサンは一人、愉快そうにしばらく笑っていたが。

「そうか。これが最後になるかも知れんのだな。少なくとも、お前はそう思うのだな。」

死者への手土産というわけか、アレスミリアン。

「オルクサン殿。まだ引き返せる。ロンダルトを捨ててください。

この都は守りきれない。あなたの思うような戦いはできない。」

しばしの沈黙の後、オルクサンは言った。それは最後の告白に近い言葉だった。

「俺は正統ではない。だから、みなに認めさせねばならないのだ。

今ならお前の気持ちがわかるぞ。お前がなぜ、名乗りを上げなかったのか。なぜ名を伏せて、カラバ公の下へとやってきたのか。

ただ名乗りを上げるだけでは、誰も認めてくれないからだ。

お前が何者かを。

だが今のお前は違う。お前がただの貴族ということよりも、お前がアズールの血を引くものだということのほうが、何かが納得いくのだ。

だが、俺も引くつもりはない。俺は俺として、王になる。

そうでなければ、これまでの人生が何もなかったことになる。」

王子として、ではなく、一人の苦悩を持った人としての言葉だった。

いま、彼の背には何もなかった。生きる意味を、名ばかりではなく実のある王位を、手にいれることを追い求めた、一人の男の影だけがそこにあった。

「私は、ロンダルトはいりません。なにも思い入れがないのです。

私の故郷はアズールの作った古王国、あなたはロンダルトを治めればよいではないですか。」

この言葉に、はたして何の意味があるか。

アレスミアンには分かっていたが、それでも言わざるを得なかったのは、むしろ彼自身の贖罪から来ているのかもしれない。

己の存在がオルクサンを追い立てる。それが分かった時には、もう引き返せない所に来てしまっていた。

オルクサンはゆっくり席を立つと、日の光と影の中を現れては消え、消えては現れし、長いテーブルを回り歩み寄って

きた。

その口調は、なおも穏やかだった。

「そういう生き方も有るかも知れない。けれども俺の生き方ではないのだ。

俺は何もかも与えられて生きてきた。家も衣服も食べ物も、官位も位も何もかも用意されて、何かを得るために、何かをするということもなく、何もかもが手に入った。

子供の頃はそれに何の疑いも抱かなかった。大人になれば、親父のように此の国で一番偉い人間になるんだと思っていたのさ。

けれども子供の時代が終わったら、何となくわかってきたのだ。此の国で一番偉いと思っていた親父が、実は一番惨めな生涯を送っていることにな。俺は、そんな人生はごめんだ。

そう思い始めた頃に、おまえが現れた。財産も身分も何も持たないおまえが、人の思いよらないことを次々と実現して、古王国を手に入れるばかりか、いまやイーリアスまで奪っていく。」

オルクサンは、まぶしい目で差し込んでくる日の光を見ている。

「このまま王になっても。ウェルモンテが早晚居なくなっても。
おまえが居る限り、俺は真の王として振る舞うことが出来ないのだ。
俺は王に足る業績をあげなければならない。」

「わかっています。私がいるから、あなたは留まって戦おうと
される。

でも私が退けば、あのイズマイルを止めるものは誰もいなくなる。
戦いが終わり、私が不要になったとしても、おそらく、あなたは
もうこの地上に居られないだろう。」

オルクサンは、日差しから目をそらし、アレスミリアに向き直った。

「なんだ、そんなに悲観するな。まだ負けると決まったわけ
ではないさ。俺には俺の戦い方がある。」

オルクサンは、アレスミリアンの肩に手を置き、彼が思っ
ていたより華奢なことを意外に思った。

「お前の父について、もうひとつ耳にしたことがある。
お前は病死といったが、本当はお前と同じやり方で殺された
そうだな。
となれば、俺はお前の仇の孫ということになる。俺に遺恨は
ないのか。」

「私は、母からいつもいわれました。人を恨んではいけない、
人を羨んではいけない、人の裏を見てはいけない。時には守れない
こともあります。あなたに遺恨を持ったことはありません。
あなたは、たまたまあの方の血縁に居られるだけですから。」

「ウェルモンテは。」といった後、ひと呼吸置いてオルクサンは
続けた。

そのひと呼吸には、彼が子供の時代が終わってから、といった、
時の長さの重みがあった。

「あのじじいがあんな事をしなければ、俺の親父は不相応な王になどならず済んだかも知れない。

平凡な王族の一人でしかなかったろうが、それはそれで俺に蔑まれることもなく、幸せに生きれたのではないかと思うよ。

そうであれば、俺も王になどならず、イーリアスがおまえと結ばれれば、お前の義兄として随分気ままに暮らしていただろう。

何もかも、二十年前の事で狂ってしまった。」

アレスミリアンは、もう何を言っても無駄であることを悟った。

「イーリアス様は、わたくしがお守りします。かならず。例えクラコワが落ちてても、北の大地があります。」

「養女とは、手の込んだことをしたものだ。お前らしいがな。

俺はお前が嫌いではない。お前は、下々の者が思っているほどまっすぐな人間ではないし、むしろ矛盾だらけの混沌とした人間だ。

俺と同じでな。

お前は、俺が危ない橋を渡っているというが、お前こそ、人のためなら、ためらい無く自分の命を差し出すのだろう。

お前は王ではないし、アズールの血統を手に入れた今であっても、ただのアレスミリアとして死んでいけるとでも思っているんだろう。

俺たちは、違うようでどこか似ているんだ。

まあいいさ。この戦が終わったらまた合おう。

この同じ場所で、参りましたと云わせるのが楽しみだな。

お前も多忙だろう、呼び出し、引き留めてわるかったな。

また合おう。アレスミリアン・ロンダベルト。」

その一言が、アレスミリアンが直接聞いたオルクサンの最後の言葉になった。

「イテカレス。」

アストアシタ宮をあとに、再び馬上の人となったアレスミリアは、しばらく何かを体内に抱え込んだように、うつむき加減に馬をすすめていたが、ようやく口を開いた。

「私は卑怯だろうか。」

イテカレスは、それまで斜め後ろに付き従っていたが、馬を前に進め、足並みを揃えた。

「なにか、お気に触ることもありましたか。私はカンカンになりましたが。」

「私は、クラコワのことばかり考えている。この都にもやがて敵が押し寄せてくるというのに。この市井の人たちを見捨て、去っていかうとしている。

そういう意味では、すでに逃げ出した宮廷貴族や富貴者たちと同じだ。」

そう何度も来たことが有るわけではない。けれども、記憶の中のいつよりも、今のロンダルトは荒んでいるように見えた。市民には、とても都を守るというような熱意は見られなかった。

その日その日を必死に生きている者たちが、此処しか居場所がないから残っている。この都が滅びる時が、自分たちも滅びる時だ。

そんなふうには、諦めるための時間だけが流れているように見えた。

「あなた様は、いまやクラコワの実質上の第一人者でいられる。まず、クラコワに対する責任を負わねばならないと思います。同じように、この都はこの都の第一人者に預けられているのではないのでしょうか。」
理にかなった言葉だと思った。

「そうだな、君はいいことを言うな。オルクサン殿のそばにも、お前達のようなよい者がいればよいのにな。」

「オルクサン様は、お困りなのではないでしょうか。」

「いや、あの方は秀でたお方だから、お困りにはならないだろうが。けれども、有事には一人ではどうしようもないことが必ず起こるものだよ。

クラコワで、例え私が倒れても、お前たちの誰かが私の代わりにしてくれるだろう。けれども戦場のすべてにオルクサン様が立つわけにはいかないんだ。

戦力がほぼ互角であれば、個々の当たりの強さが最後の勝ち負けに効いてくる。

けれどもこの都は、戦いが始まる前に、ここを守るべき人たちが次々となくなってしまった。そんな都のために誰が踏みとどまって戦うだろうか。どこか一箇所が崩れると、総崩れになるだろう。

騎士たちもこの戦で名をあげ、一旗上げるために集まってきたのであって、自分の命をかけてこの都を救いにきているわけでは、ないのだから。」

イテカレスは、その言葉を十分に心にしまい込んでから、

「アレスミリア様、第一に、あなたが倒れ、私たちが代わりにするということはありません。あなたが倒れるのは、私たちのすべてが倒れたときです。

第二に、クラコワには四重の城壁があります。そのうち三は石の壁。

最後のひとつは人の壁。この壁がやぶられるときは、地上から跡形も無くクラコワが消えてなくなるときです。

クラコワの民にとってはクラコワこそ総て、あの町を捨てて他に行くところなど有りません。」

いい言葉だ。勇気づけられる。

「君の云うとおりだな。」

「半分は、ニールリングの受け売りですが。」

「そうか。」

とって、アレスミリアは高らかに笑った。

まるで、城内ですった毒をはき出すかのような笑いだった。

「いざ、帰ろう。我がクラコワへ。」

往路と同じ二日間を走り抜いて、一行はクラコワに帰着した。

市の賑わいや、人通りに目立った変化はなかったが、城壁を補強するための工事人夫や、武装した騎士の姿が常よりは多かった。

アレスミアは、都の様子を肌で感じようと思い、馬を従者にあずけ先に内城へと走らせた。

アレスミアンとイテカレスは、徒歩で石畳の道をたどった。

「アレス様、アレス様。」

見知らぬ男が声をかけてきた。アレスミアンは度々、いや、相当頻繁に市中に出かけていたが、その男を見たのは初めてだった。

もう初老と言っていいほど、念入りに顔にはしわが刻み込まれ、髪が薄くなった前頭にはうっすらと汗が浮かんでいる。

馬を見、それを追い、駆けてきたのだろう。

「アレス様、今度攻めてくるのはどのような敵でございましょう。」

いつの間にやら、二人の周囲は、その声を聞きつけたらしい人垣にぐるりと取り囲まれていた。

「なにやら東の方から来るのだそうだよ。新しい国の王様らしい。」

アレスミアンは、少しはぐらかして言った。殊更不安をあおる必要は無い。

「左様でございますか。戦になりますと、この都にもやってくるのでしょうなあ。」

「あまり歓迎したくない客だが、押しかけてくるのだからしょうがない。」

「私の息子は靴職人でございますが、お城を守るのだと云って、にわかには剣など振り回しております。」

「ほお、それは頼もしい限り。」

男は手ぬぐいで、額と首筋を拭きながら、深刻そうな顔で訴えた。

「けれども、靴職人が剣など振り回しても、お役に立つものではない

とって居るのですが、どうにも聞き分けがありません。
もともっと靴作りに励んで、お役に立つようにとって居る
のですが。」

それは若気の至りというものだ。仕方がない。

「親父さんの言うことももともとだ。けれども剣を知っておく
というのも無駄ではない。いざという時、剣がどういうふう
に使われるかを知っておけば、うろたえることも少なくなるだろう。」
「そういうものでございますか。はあ、やはり、城内まで敵は
来るのでございますか。」

親父は不安そうだった。

「そんな心配はいらない。この三重の城壁はそうたやすく破れる
ものではないし、我が方にはカラバ様、ハイアルト様という
歴戦の強者（つわもの）が居られる。」
「そうでございますか。そうでございますね。それは少し安心で
ございます。」

言葉の力は大きいものだ。使い方次第で如何様にも響く。
為政者にとって最も大事な能力の一つだろう。寡黙な皇帝など、
聞いたこともない。

「とはいえ、皆もいざ戦となれば、城壁の補修や弓の補給、
けが人の手当やら炊き出しやら、なにかと手伝いをして
もらわねばならない。よろしく頼みたいのだが、ええと・・・。」

「コルビンでございます。靴職人の頭（かしら）をしております。」
「ではコルビン、明日このイテカレスを訪ねて城にくるように。」
「お城に、でございますか。」
一急なことですな全く、驚きました。

「そうだ、半日ほど仕事を休むことになり済まないが、頼みたい
ことがある。」
「承知いたしました。ですが、あのお・・・。」
「なにか不都合でも、あるのかな。」

「いや、お城はいったいどんな格好でいけばよろしいので。」
言っても、そんな服装が出来るとも思えない。

「はは、そのまま結構。職人らしい立派な身なりではないか。
なによりもその、ものを生み出す手と実直そうな顔が
すばらしい。
それだけで、百疋の絹にも匹敵する。」
「ようございます！かならず伺います。」
「うん、頼んだぞ。」

そういつて振り返ったアレスミリアに、その下知を待つかのように
取り囲む、群衆の顔々が目にうつった。

「みなも頼んだぞ。」

喚声が彼の体を包み、石の壁に跳ね返り、ウサギのように石畳を
飛び跳ねた。
イテカレスはそれが自分のことのようにうれしかった。

いや彼の主人のことだから、もっとうれしかったのかもしれない。
幼いころに父をなくし、苦心の連続でここまでの地位にのぼって
きたことを、時には命を狙われながらも、決して後戻りしなかった
ことを、彼の朋輩たちはみな知っていた。

いつの間にか、泣きそうな顔で喚声を上げているイテカレスを、
離れたところから迎えに出てきたニールリングが見守っていた。

城に帰着後、ニールリングはみなにこの話をいいふらし、
イテカレスをからかった。

だが、本当はみなその場に居て喚声を上げたかったのだ。

キリアンデル。古王国の最も古い家名のひとつを継いだ者、
は、その長い家門分裂の後を受け、一族郎党の融和に心を砕いて
いた。

レム・プラントの名に復してからというもの、宮廷での席次も
代わり、となれば付き人や馬止めの溜まりも、よりよい一角が
与えられ、クラコワの屋敷仕事に従事するもの達は、その変化を
実感することが出来たのだが、所領のなかで下々の暮らしをする
ものの中には、かつての因縁をなかなか忘れ得ぬものもいた。

時には酒場の口論が、刃傷沙汰に発展することもあり、両家の
復縁を快く思わなかったものを調子づかせたりもした。

キリアンデルはそうした領内に平穏が訪れるのは二・三世代が
過ぎ、かつての分裂の記憶が薄れてからになるのではないかと
思っていた。

そうした毎日の中で、彼はとある疑問を、ほかならぬ
アレスミリアに抱いていた。

「なぜ、レセクルとエスクロルは再びレム・プラントにならなければ
ならなかったのか。」

この問いを、キリアンデルは幾度か心に思い、かつての仇敵の娘、
そして今は妻のリディアに向けて語りかけた。

二人の新婚生活のために用意されたクラコワの館を、二人は愛した。

所領の城や館ほどの広さはなく、そうと知らねば通り過ぎて
しまうような門構えしかなかったが、再会から始まった嵐の
ような日々を、この館で乗り越えてきたという思いが、二人を
引きつけてやまなかった。

「確かに両家は、長き確執の応酬にあったが、それはいって
みれば当事者同士のこと。それが王国の基盤を揺るがすような
ことかといえ、そうとも言えず。
なぜアレスミリア殿は両家を一つにしたのだろう。」

「深いお心は分かりませんが、こうして二人向かい合っているのはそのお陰。きっと私たちを結ぶために両家を一つになさったのですよ。」

「お前のように、素直に楽しめればいいのだがな。でも私はこのごろ、この戦雲と関係があったのではないかと思い始めているのだよ。」

「まあ、あなた様は。今頃お気づきですか。」

リディアの美しい眉がつりあがった。

「東国の騒乱のうわさは、まだエスクロルの家におりましたころから聞いておりました。万が一、なにかあれば、王国の東に位置する、われわれの所領がまずその脅威にさらされるでしょう。」

エスクロール一つでいったい何ができるものかと私は思案しておりました。

それからいくばくかして、かの騒動の始末のためにお城に呼ばれたとき、私の運命を大きく変える出来事がそこで行われるような気がしてなりませんでした。

もっとも、お相手があなた様で、縁を結べとのご指示にはとても驚きましたけれど、あなたが今まで気がつかなかったのにはもっとあきれました。」

キリアンデルは、言葉通りに半ばあきれ顔になった妻に、苦笑しながら伝えた。

「わが妻殿。アレスミリア様からお召しがかかっている。

明日は二人して登城せよとのことだ。」

例年ならば、収穫はもう少し秋めいた頃に行われるが、今はまだ夏と云ってもいいような陽気だった。

そうして収穫された麦や芋を運ぶ荷車で、クラコワの往来はごった返していた。

民衆も含め、十万近い人々が籠城戦を戦うために、少しでも多くの食料を貯蔵しておかなければならなかった。また、攻撃軍には一粒の麦を渡すわけには行かなかった。

日中のクラコワは、喧噪と緊迫感の高まりにより一種の沸騰状態にあったが、その騒ぎも城内の奥まった部屋には聞こえてこない。

アレスミリアと、キリアンデル、リディアはそうした部屋のひとつで対座していた。

「キリアンデル殿、リディア殿。お二人にお願いがあります。」
二人は次の言葉を待った。

「ご両名ともクラコワを一時引き払い、領地の城に一族郎党を集結させて頂きたいのです。」

我が意を得たり、というようにキリアンデルが言葉を返した。

「いずれそのことはなさねばならぬと思っておりました、東の外敵には、我が東の一族が当たるのが古よりの習わし。私どもに依存はございません。」

「敵軍、その数およそ十万が、ブルターク城を包囲することになりましょう。」
「十万とは、どのような軍勢か想像が付きかねますが、お引き受け致しましょう。」
その言葉ほど、軽々しいことではない。

「ブルターク城は、東の街道の入り口を押さえる城です。ここを抜かねば、敵にとっては補給路の脇腹を白々と晒しているようなもの。到底放置できるものではありません。」

逆に我々としても、敵軍に自由な補給を許してしまつては、敵の消耗を待つよりも我々が飢えてしまいます。」

「では、敵の補給をも絶つのですね。」

「完全に、というのは不可能と思います。」

「ええ、不可能です。」

キリアンデルは、無意味な虚勢をはるような領主ではなかった。

「ブルターク城は落ちなければよい。落ちない限り、敵は補給の心配をしなればなりません。そのうち冬もやってくる。

敵は攻めを急ぎ、力押ししてくるでしょう。そこがねらい目です。」

「そういうものですか。」

「敵にはブルターク城を三日間攻めさせます。

その間、敵の攻撃に耐えてください。三日目に背後から我々の攻撃が始まります。

そして我々は、敵の本体を引きずりながら、クラコワに後退することになるでしょう。それでも五千ぐらいの兵は残ると思います。

そこからおよそ一週間で、けりをつけるつもりでいます。

五千の敵兵は、補給路を確保するため、城外への進出を防ぐための押さえですから、無理には攻めてこないでしょう。」

「では、二三百ほどの兵を分け、補給隊を襲わせましょう。

あのあたりは我々の庭ですから。街道とはいえ両側は深い森、一旦潜めば容易に知れるものではありません。

完璧とは行かないまでも、安全が保証されないことに敵は動揺するでしょう。それに、守るだけでは郎党の士気が上がりませんから。」

「それは、キリアンデル様にお任せ致します。リディア様は、出来ることならクラコワに残られた方がよいのですが。」

アレスミリアンは、無駄と思いつつも言った。この方の、眉間に浮かぶ強い意志は、とても変えられそうに無いと。

「もとエスクロルのもの達は、私の云うことには何事であろうと従うでしょう。

籠城は皆の心を一つにせねば、思いもかけぬほころびより崩壊の道を歩むやも知れません。

キリアンデルの側につき、心一つに戦います。」

アレスミリアはリディアの慧眼に感謝した。

「けして無理な戦はなさいませぬ。」

「もとより心得ております。」

三人の間に、悲壮感は無かった。来るべきときが来、為すべきことを為す。
その高鳴りだけがあった。

「ところで、アレスミリア殿。一つ伺ってもよろしいか。」
まるで世間話でもするかのように、キリアンデルが話を切り出した。

「何なりと。」
アレスミリアは笑顔で受けた。

「わたくしが、まだレセクルで、リディアがエスクロルであった頃。
クラコワで、仮面の祭りに呼ばれたことがありました。
私はあなたの側におり、リディアはイーリアス様のお供をしておりました。それが見合いであったとは後日気づかされたのですが。
あれは、このことに繋がっているのでしょうか。」

そう、その話はしておかねばならない。心残りになるかもしれないから。

「そうです。あの祭り自体が、このことに繋がっていました。
東の情勢を聞くにつれ、此の国を守るための備えをしなければ
ならないという気持ちは、日に日に強くなりました。」

けれども王国の入り口の鼎であるレム・プラント家は無く、
ブルターク城には人影はなく、ただカラスの王の住む城と
成り果てていました。

レム・プラントを復活させるか。それとも所領替えをするか。
レム・プラントの復活は難しい。けれども所領替えは、一つの
領地に収まりません。

移すもの、移されるもの、旧領の住人と新しい領主の関係も
一から作り上げていく必要があります。
なにより、私の権限では、それは不可能です。
そこで、私はお二人にかけてみることにしたのです。」

「あの祭り自体がそういう仕掛けだったとは。・・・あなたの考えは
底が知れない。でもなぜあのような回りくどいことを。」

「仇敵同士の跡取りをいきなり引き合わせても、うまくいかないだろう

事ぐらい、当時のわたくしでもわかります。

しかも、それと知られぬように事を運ばねばなりません。

ならば、おおっぴらにやる。謀を隠すにはこれが一番です。

もし水争いが無ければ、何か別の方法で、お二人を引き合わせたでしょう。」

それは、何となく理解できた。

が、次の言葉を切り出す前に、キリアンデルは暫し逡巡した。このことはまだリディアにも語ってはいないことだった。

おそらくそれは、アレスミリアが心の奥底に隠している物に、手を伸ばすことになるだろう。それが許されることかどうか、キリアンデルには確信が無かった。

「アレスミリア殿。あなたがクルビス村近郊の、地方貴族の出身だと云うことはよく知られた話だ。

けれども私には、ただそれだけのこととはどうしても思えない。

ただ身の栄達の欲望のために、ことを為されたのであれば、私はあなたについて来なかつたらう。

私だけではない、あなたの身の回りを走り回っている若者たちは、若者らしい理想に目を輝かせている。カラバ様、ハイアルト様、ルークス殿、シルヴェスタ……。みなあなたを中心につながっている。このクラコワと八つの支城のように。」

キリアンデルの次の言葉は、何事にも楽天的な彼がはじめて見せた苦悩の色があった。

「私は今、あなたの前に片膝をつき、この肩に剣を受けたいという想いに懸命に抗おうとしている。

なぜなら、私はカラバ公とイーリアス様に忠誠を誓っているからです。同時に二君を頂くことは出来ない。私はどうすべきなのだろう。」

アレスミリアは、キリアンデルと、そして次にリディアにゆっくりと視線を合わせた。

隙間風が灯心をふるわせた。

それにつれて、アレスミリアンの影が揺れているのが二人にも見えた。

ただそれだけの間があった。

そしておのれの剣を抜き、切っ先を天に向けると肩の高さに掲げた。
二人は、意を決して片膝をついた。その二人の肩に、ゆっくりと剣が下ろされた。

「我が名はアレスミアン。祖王アズール・イクンの名を継ぐもの。
我と共に行き、また帰らん。」

アレスミリアンを含め、多くの人々の運命を変える、大きな歴史の波が迫っていた。

その大波は、おのが望んだものではなく、なんの関わりもない外の世界から襲来しようとしている。

のちに彼らは問うだろう。何故こんなことになってしまったのかと。

その答えはない。けれども、彼らの国こそが、千年の昔にアズール・イクンが起こした大波によって作られたということも、歴史の中の一章である。

ゆえに、その国も同じ波に洗われる、歴史は繰り返すから、というのだろうか。

いや本当は、人が繰り返すのだ。

おろかな歴史を人は繰り返す。彼らは人知を尽くし、その大波を防ぐ広大な防波堤を築いた。

けれども波は寄せるばかりではなく、それが引くときにも多くのものを奪い去り、はるか手の届かぬ沖合いの深い水底に沈めてしまう。

ただこの夜はまだ、静寂が彼らの眠りを包み込んでいた。

この季節になると、朝靄が城外の平原に低くたなびくようになる。

朝靄は一刻もしないうちに日に暖められて、そこには見晴るかす草原や、森や丘陵のうねりとその間を縫うように流れるユルノ川の流れが出現するのだった。

「もうすぐ、冬が来るのですね。」
息を白くさせながら、イーリアスがささやいた。

「クラコワの冬は初めてです、雪が降るといいのに。」
「雪など、もうたくさんと言うぐらい降りますよ。」
「ロンダルトでは見たことがないのです。雪遊びをしたことはありますか。」
「子供の頃には。でもあれは、遊びなどといえるかどうか。
ずぶぬれになって帰ってきては、よく母にしかられました。」
「まあ、あのお母さまが。」

「雪は楽しくもあるが、怖いものでもあります。ロンダルトでは、凍え死ぬようなことは無いでしょうが、此の国では時折そういうことが起こるのです。
特に作物が不作で、山々の実りの少ないときには、弱いものから倒れていきます。」
「厳しい土地なのですね。」
「そう、だからこそ余計に人が優しくもある。」

地上低く、大きな鳥が羽ばたきながら飛んでいった。

「昨夜、リディア様が挨拶に来られました。今日お発ちになるそうです。
大変なお役目なのですね。ご無事であれば良いのですが。」

「あの城は、猛獣に打ち込む最初の槍です。それ自身が致命傷は与えられないが、相手の動きをくじくことができます。
彼らはあの城を落としかかるでしょうし、それは兵站の意味からもとても重要なことなのです。
つまり、あの城が健在だと、彼らは糧食を思うように運べない

というわけです。」

これまで、このような形で、このような気持ちで人を見送ったことがあったろうか。励まし、情を語り、希望で最後を締めくくる。今生の別れを後悔せぬように、言葉を選んで語り合う。そんなことを、誰に教わるでもなく行なっている自分が不思議に思えた。

「戦争って、私はもっと違うものだと思っていました。勇者が剣を振るって、こう、えいっ、と並み居る敵をなぎ倒していくような、そんな感じだと思っていたのです。」

「確かに戦場のどこかでは、そんなこともあるでしょう。けれどもどこで、いつ、どのような戦い方をするかで勝敗は決まってしまうのです。

彼らの有利は兵数で圧倒している上に、戦いを繰り返しているので経験をつんでいることです。平原でまともに向き合えば、一時と持たずに、我々は敗れるでしょう。

我らの強みはこの城、そして人の心です。敵が城壁に取り付く間には、ユルノ川を引き込んだ掘りがあり、石の城壁は上ることも壊すことも困難です。その間、われわれは城壁とやぐらの上から矢を雨のように射掛けます。」

「では、敵はどうやって攻めてくるのですか。」
「まず堀を埋めるでしょう。それから城壁にはしごをかけます。」
「それまでに、多くの犠牲が出るでしょうに。」

「彼らの最前線にいるのは、征服された民族の男たちです。そのものたちが城壁の前で討たれても、イズマイルには痛くも痒くもないのです。」

「なんてひどい・・・」
「けれどもそこが付け目でもある。頭さえ落としてしまえば、あとは戦う理由のない烏合の衆になります。そこがわれわれと違うところ。たとえ私が倒れても、誰かが私の旗を掲げ、そのものが倒れてもまた誰かが、私の旗をより高々と掲げてくれるでしょう。」

「絶対に、勝ってくださいね。」

イーリアスは、毛布の中でアレスミアンの腕を握った。
その手をアレスミアンの手が包んだ。

シルヴェスタが、急ぎの使者を送り出していたのは、
調度そのころかも知れない。

「イズマイル発つ。」

この短い文を持ち、使者は山を越えた。この方が、軍団と同じく
街道を通り、大きく迂回していくより七日は早く着くはずである。

十万の大軍は、空前の大仕立てで、先鋒隊が都アルシャーファを
出発し、最後尾の補給隊の発進が終わるまでには、丸一日を要した。

混成部隊のちょうど中盤に、イズマイルとそれを取り囲むように
直衛部隊が行軍している。

イズマイルは騎乗し、霸王にふさわしい風格を周囲に振りまき、
非常に上機嫌であったという。

また、城攻めを意識してか、おびただしい数の木材や組縄の類が
運搬された。

その他移動式の野営テントなども含めると、総勢三十万近い人々が
動員されたものと思われる。

その人足もまた被征服地域の住民であった。

征服地の働き手を動員することは、その国を疲弊させ反乱の芽を
摘み取る効果があった。そういう意味では、この遠征はイズマイル自身の
欲望と、征服地支配の両方の要素を満たしていたことになる。

が、それも遠征が成功裏に終わったときのことであり、失敗すれば
イズマイル自身の霸王としての栄光は、逃避行の荷車からも転げ落ち、
轍の下で泥まみれになるばかりか、各地での反乱ののろしが上がる
ことを意味していた。

けれども、坂を上る人間は、その坂を転げ落ちることを考えて
上っているのではない。

シルヴェスタは敵軍の全容を確認してから、みずから最後の伝令
として山越えに向かった。

「イズマイル発つ」の知らせはクラコワの鐘をたたき、その鐘は、次々と波紋のように古王国全体にひろがった。伝令が次々と城門から発し、街道に飛び出して行った。

街道沿いに住む人々は、その姿をみていよいよ時が来たことを知り、領主たちは戦の準備をあわただしくした。

翌日は、朝からクラコワ近郊の兵たちが、思い思いの一団となって入城を始めた。

兵と言っても、普段は農夫であり、運送屋であり、鍛冶屋であり、その他もろもろの職業の者に過ぎない。

なので、その格好もまちまちで、兜を持つものを持たぬもの、さびの浮いた鎧でもあるほうがまだましで、その鎧ですら、なれぬ重さに打ち捨ててしまおうかと思う始末であった。

もちろん、中には騎士としての体裁を整え、従者も引き連れた一群もあったが、兵の多くはそのようなものの集まりであった。

クラコワの城内は一度に流入した人々で、平時は人通りの少ない裏道さえも人があふれていたが、コルピンを始め各街区ごとに兵隊の世話割りが定められ、兵士たちもそれに従うかぎり夜露をしのぎ食事にありつけることが出来たので、家族と別れ別れになる寂しさはあったが、待遇への不満で騒ぎが起こるということはなかった。

クラコワの城市は、金物同士がガチャガチャとぶつかり合い、不機嫌にぶつぶつあたりちらす音で終日騒々しかったが、夜半にかかる頃には、酒によい、気分よくなった主達の傍らで眠りつぶれていた。

翌日は、いま少し遠い地区の兵たちが、クラコワ城外に集結し始めた。

彼らは、各地の領主に組織され引き連れられた軍団で、クラコワまでの行軍を終えると、思い思いの場所に野営の天幕をはった。

その様子を、城内から眺める二つの人影があった。

慌ただしく行き交う人々の中で、その周りだけ何か別の時間の流れの中にいるようにも見えた。

カラバ公とハイアルト卿である。

「続々と、集まりつつありますな。」

「これほどの軍勢を揃えるのは、しばらく無かったことだ。」

「しかし、軍とは名ばかり。少し訓練致さねば、この度の戦には使えませんなあ。」

いまはまだ、同じ速度で歩くことすらままならない、烏合の衆だ。ハイアルトが嘆くのも致し方ない。

しかし、

「その様なことをしている暇はないぞ。二日後には出陣だ。」

「そちは、何か舞い上がっておるのではないか。」

と、カラバ公は揶揄した。

「行軍の道々でも、それなりのことは出来ます。それに、高揚しているのはカラバ様の方では。」

「なんじゃ。」

「なにやら新しい甲冑などを仕立てられたとか、耳に入っておりますが。」

「ほう、年を取ってもそういうことは良く聞こえるらしいな。」

「わたくしは、まだ背も曲がっておりませんし、目もかすんではおりません。カラバ様こそ間違っても一騎駆けなどなさいませぬよう。」

「わしが何時そんなことをした。」

昔は良くした。が、それはいつとき棚に上げ、

「頭に血が上ると周りが見えなくなるのは、お前の方だろう。

風車のようにくるくると槍をば振り回しおって。

危なくて、敵どころか味方も近寄れんわ。」

と言り返した。

一歩間違えば、子供の口喧嘩になってきた。

「ともあれ、此度の戦は討っては引き、引いては討つのが戦術。

いささか面倒ではございますが、ニールリングらの練りに練った

秘策故、致し方有りますまい。戦場での機敏な兵の進退。

彼らでは兵が言うことを聞かぬだろうと泣きついて参りました。」

ハイアルトが得意そうに言うのを横目で見ながら、

「甲冑を逃えろといったのはなあ、アレスだ。」と種明かしを

してみせた。

「これはまた、何故か。驚きましたな。」

「わしは敵を釣るための餌故、せいぜい晴れやかで目立つ格好で

出陣しろと。」

「それは、それは、アレスらしい気遣いでございますな。」

と言った後、ふざけた調子を収めた。

「好きに死なせてもくれぬようで。」

「我ら二人の時代は、そろそろ終わりに近づいている。この大戦が
最後の花道でも良いと思っておったが、見透かされていたようだな。」

「アレスは我々が拾ってきたようなもの故、それを途中で投げ出す
わけにも行きません。」

「あるいは、わしらは拾わされた。」

「まこと、えらく高くついた拾い者でしたな。」

「この後、どうするつもりか、見届けたくもある。おいそれと
命を捨てるわけにも行かぬか。」

「でも有りますので、練兵が肝要かと。」

「もう良い、すきにしろ。」

カラバ公は、いつものことだが、最後は根負けした。

城下に兵が集まる一方で、クラコワを一時の間、離れる人々がいた。

歩ける老人は子供の手を引き、歩けぬ病人は荷馬車に揺られ、
小さな子供は兄や姉が背に負い、西の方を目指して向かう隊列が、
クラコワの城門から、ながく長く続いた。

籠城につきものの食料の蓄えを考えると、戦えぬもの達まで城内に
抱え込むことは難しかった。

イーリアスはそれを街道の端に立って励まし、見送り続けた。

戦が収まるまでの一時的な避難であったが、この中の幾人かは、
クラコワに残った家族と、再び会うことはないかも知れない。
それを思うイーリアスの胸は苦しかった。

傾く陽を受けて、丘の稜線を越えていく人々の長い列のしっぽが
見えなくなるまで、イーリアスは見送り続けた。

男たちが自ら望んだ、あるいはそうでなかったとしても、
戦いの熱に犯されその中に自分の存在を見つけていく一方で、
力なくただその嵐が過ぎ去るのを待つしかない、弱いものたちがいる。

今は、冬近い、弱い陽光が彼らを慰めていた。

その日が沈みかける頃、シルヴェスタは城門をくぐった。

雑貨屋を何軒もひっくり返したような城市の様子に、舌打ちをくれながらようやく内城にたどり着くと、案内も請わずに廊下を渡り歩き、階段を上り、あまりの風体に壁に身を寄せ道をあける者共に、じろりと睨みを効かせ、そんなにひどいかと筒袖の匂いを嗅いでみたが、この程度なら大丈夫と踏んで、アレスミアンとの再会に望んだ。

「やぁシル。よくぞご無事で。食事か酒か。」

「食事も、酒も。」

「なんだ、ご機嫌があまりよろしくないようですね。」

「二日も山で野宿すれば、機嫌も悪くなるさ。夜はオオカミの鳴き声が聞こえるし、危ないから木の上に体を縛り付けて眠ったぞ。」

「それは、惜しいことをした。是非この目で見たかったものだ。」

出来ればその木下で、焚き火でもしそうな表情だ。

「冗談じゃない。クラコワにもアルシャーファにも屋敷を構える商館の主が、オオカミにおびえて木の上で寝泊まりするなど、どうにかしている。ついでにふかふかの寝台も用意して於いてくれ。」

「今頃、イーリアスが枕を膨らませていますよ。」

「おい、まさか。姫にそんなことをさせているのか。」

「いったいこの城はどうなっているのだ。私の首は明日の朝までくっついているのだろうか。」

シルヴェスタは仰天した。

「いや、冗談冗談。いくら私でもそこまではしない。それより、聞かせてもらえますか。英雄殿の様子を。見てきたままを。」

まあそうせかすなと言うように手を振って、召使が運んできたパンを一口と酒を少し飲み干して、寝起きの赤子のように、ひとのびすると、

「兵力はおおよそ十万と見た。それに補給部隊が二十万ばかりだな。」

もっとも一人ずつ数えたのではないから、まあ北の部族が、自分たちの家畜の数を数えるよりは、不正確だと思ってくれ。」

まずは想定範囲だ。

「山越えはないですよ。」

「私が何とか越えてこれたのは、秘密の印が道をおしえてくれるからだ。あの人数が山を越えてみろ、迷子のひげ親父で山は真っ黒。次の年はぶくぶく太った狼がいっぱい罾に掛かるだろう。」
アレスミアンは、その知らせで満足した。

「で、どう戦うつもりなのだ、司令官殿。」

「我々にもっとも有利な場所で、有利な状況で仕掛けます。向こうの都合にあわせる義理はない。」

シルヴェスタは、ここで居住まいを正した。

「アレス。君には悪いが、あのイズマイルにあなたが勝てるとはどうしても思えないのですよ。

向こうで暮らしていると、あの男のうわさはいろいろ耳に入ってくる。残念ながら、想像していたようなただの暴君ではないし、頭もいい。もともと小さな部族の出身にもかかわらず、あれだけの国を支配しているのだからな。ただ暴力だけでは、人を服従させることは出来ないものだよ。

その裏には、国を支配するための狡猾な仕組みと寛容さが張り巡らされている。それに、奴の軍隊はここ十年近く戦い続けているから戦闘にも慣れている。それに引き換え、こちらはしばらく戦らしい戦をしていない。もし賭けをするなら。」

「どっちに賭けますか。」

シルヴェスタは、にやりと笑って言った。

「全財産を・・・、アレス、あなたに賭けよう。そのために山を越えたのだから。」

「それは、うれしい知らせです。あなたにはまだ重要なお願いがある。ここで逃げられては困ります。」

「あの日、あの酒場でめぐり合ってから、二人でこの国を立て直してきたのだから。

私が望んでいた人生とは、まったく違ったものになってしまったが、いまさらこのクラコワを見捨てることなど出来ないさ。

勝てるんだろうな。」

「勝てません。負けただけです。」

シルヴェスタは、次第に顔が緩んできた。

なにせ、長年かの地で情報をあつめ、それをクラコワに送り届け、今は自ら伝令となって、危険な山越えをしてきた身の上である。

「うん。それはいいな。なにか現実的な気がしてきた。」

「敵が、全軍でクラコワを包囲したら籠城戦です。そのときはブルタークが敵の補給路を断ちます。」

この場合、敵軍の多さがこちらの有利になります。十万もの兵を養う糧食は大変な量になるでしょう。およそ一月も持たせれば向こうは引かざるを得ないでしょう。

六万なら城壁を挟んでの激しい攻防になるでしょう。ロンダルトのことがありますので、こちらとしては早く決着をつけたいのです。

四万でも同じ事ですが、ただし英雄殿がロンダルトに向かわれては、少々困ったことになります。」

「ロンダルトはどうなるのだろう。あそこには取引を通した友人も居る。」

「オルクサン殿が頑張っておられるが、どれぐらい抵抗できるかどうか。

ロンダルトは広く、城壁も間に合わせ程度のものしかない。

あの都を守りたいなら、城壁をあまり当てにしないで勝てる方法を探さねばならない。」

「では、オルクサン殿は危ないというわけだな。」

「そうです。」

「このことを・・・、聞いたものかどうしようかと迷ってはいたのだが。もうあまり先延ばし出来ないような時期に来たような気がする。

ロンダルトの王の一族が、亡き後のことになるのだけれど、残されたのは姫ただ一人。

けれども連合王国を背負うには、姫には悪いが、いささか肩の荷が重かろう。ただし、それは王位継承者が姫しか居られない場合のことで、他の誰かが継ぐことになれば、話は変わってくる。

そう、ここにアレスミリア・スークリアという男がいたとしよう。

若い人望もある、この国の建て直しに力を尽くしてきたことは、みなが認めている。ただ、出自が低いために、王国の世継ぎに、公の養子には成れない、と周りの者は思っている。

ところがこの男は、とんだくわせ者で、世継ぎに入った姫を籠絡したばかりか、実はアレスミリアという名さえ真実ではない。まことの名はアレスミアン。」

常より鋭い目付きが、もう言い逃れは許さないよと言っていた。

「それを知ったのはいつごろですか。」

ついにそこまで到達したのか、と。

そして、人が、違う境遇、異なる場所にいる人が、同じ時に同じ答えにいたることの不思議を感じた。

「それほど前ではない。私がアルシャーファに戻る前のこと。

はぐらかしたことがあるでしょう。あのあと、調べてみたのですよ。

なに、それほど難しいことではない。私は長く、あなたの目や耳、はるか北の大地まで届く手の役割をやってきた。

この国の中の何事かを知らべることなど、造作も無いことなのです。

人を使ってね。聞けばそれを調べにきたものが以前にもいたそうさ。」

「ああ、それで。私は襲われたのですね。」

「事実を知り、何が真実かを理解するには、それほど手間取らなかつた。疑っていたのでね。それを証明する裏書が欲しかつただけなのですよ。」

そこで一息入れ、

「ロンダルトが落ちれば、あなたが王位を継ぐのか。アレスミリアン殿。」
と、糺した。

アレスミリアンは、しばらく思案していた。シルヴェスタも、
応えを急がなかった。灯芯から浮き立つ炎の揺れが、アレスミリアンの
顔の上で影を揺らした。

「何度も考えてはいるのです。果たして私は王となるのだろうか。
私が愛しているのは、このクラコワの古王国。ロンダルトや
連合王国には正直興味が無い。これはオルクサンにも告げてある。」

「では、王位につくため、ロンダルトを見捨てるのではないのだね。」
一言一言を、ことさらにゆっくりと。

「それも分からない。もしかしたらそんなことを、心のどこかで
考えているのかもしれない。ただ、想像しないようにしているだけ
かも知れない。卑怯でしょうか、こんな答えは。」

アレスミリアンの顔は、彼の本心を告げているときの顔。
微笑んでいるような、泣いているような、寂しそうな表情だった。

「いや。そんなことは無い。あなたらしい答えで良かったと思うよ。
私は商人だから、損得抜きで、ただ善意だけで物事を取り行う
という人間は、信用しない事にしている。

なぜなら、善意は揺れ動くからね。そいつが次に何をやるか、
想像がつかない事があるんだよ。善意のために、自分の命を
投げ出すものもいる。

でも損得が基準なら、自分の不利益になることは、少なくとも
しないだろうと思うんだ。」

そこでもう一口酒を含んで、飲み込んだ。

「あなたが姫をクラコワにさらってきたのは、あなた自身のた
めでもある。オルクサン殿がそれを認めたのは、今後の彼の、
クラコワへの影響力を考えたからだ。

お互いの利害が一致したからこそ、こんな養子縁組が出来た

ので、決して、古王国の系図を絶やさぬためだけに行われた
わけじゃない。

もしあなたが、そんな答えをしたら、私はあなたから遠ざかる時が
来たと悟るだろう。」

シルヴェスタの問いには一応答えたのだが、もうひとつ言うておく
必要があるかと思って、自ら付け加えることにした。

「私は、決してロンダルトを見捨てたわけではない。必ず取り戻します。
けれどそれは取り戻すのであって、ペルジア人の手に触れさせない、
という事ではありません。」

ロンダルトには友人がいる。シルヴェスタのその言葉が、
ずっと気にかかっていた。

シルヴェスタは、個人的な疑問についてはもうこれでいいだろうと思った。

「クラコワの守りについては、ニールリング達が進めているようだが、ロンダルトについては誰にも話していないようだね。」
「今は、クラコワのことに集中させたいのです。これがだめなら次はありませんから。」

確かに言うとおりで。

アレスミリアは、その全容をシルヴェスタに語った。それは、シルヴェスタがそれを理解し、同意することが必要であったからだ。シルヴェスタはアレスミリアンの家来でも兵士でもない。

一兵卒であれば、ただ命令に従わせるだけでよいが、あれこれと指示を与えなければならない。

シルヴェスタは常に自立して、アレスミリアンの見えざる長い手として動いている。彼はアレスミリアンの意図を代わりに実行するために、彼の構想を理解することが必要だった。

それもこれも、シルヴェスタがアレスミリアンの考えに納得することが前提であった。

それにしても・・・

「無謀だな。」

思案気につぶやいた。

「そうでしょうか。」

気にも留めない風を装った。嘘つきの時の顔だった。

「ニールリング達には、話せないわけだ。」

「もし、私の身を案じていわれるのなら、例えしくじったとしてもクルビス村のアレスミリアという男がこの世からいなくなるだけのこと。」

「王としてではなく、か。」

「そう、王としてではなく。」

野心も、野望もない。なんて、寂しい生き方なんだ、アレスミリアン。

「そいつは、困ったな。実は、王様お抱えの御用商人として
大もうけを企んでいたのに、ご破算に成ってしまうじゃないか。」
「そうならないためにも、北へ行ってルークス殿と合流を。
あの人を抑えられるのはあなただけです。あのときの貸しを、
きっちり返していただきますよう。」

あの時の貸しか。あれから、もう一体何年になる。

「やれやれ、あなたからは紐一本借りないほうがよさそうだ。
北の者たちも、今になってこんなことに使われるとは思っても
いなかったらう。」

「これが私の切り札です。やりすぎてはいけないし、足らなくても
いけない。」

シルヴェスタは、疲れが出てきたのか、大きく伸びをした。

「せっかく狼のねぐらから抜け出たと思ったら、今度はヤギの尻を
追っかけないといけないとは。東に行ってからは、碌に馬に乗って
いないし。振り落とされて恥をかかないようにしないと。」
「シル。歳のせいか、あなた愚痴っぽくなっていませんか。」

「愚痴っぽくもなるさ。ただの行商人に終わったかもしれないが、
私は身の丈に合った自由な商人になりたかった。

それが今はこんな不自由な身分で、やっかいごとに体ごと
どっぷりつかっている。あの時あなたに出会わなければ、お節介を
焼かなければこんな事にはならなかったものを。
なにせ、あなたと来た日には、自分の身のことからはからっきしだからな。」

アレスミリアンは、まだ酒の飲み方もろくに知らない子供だった。

シルヴェスタは、酒場で人生のゴミを払い落とす年代ではなかったし、まだ自分が何者かは知らないが、何者かにはなれるだろうと思っていた。

あの、酒と食べ物と、何かが腐ったような、それは壁か床板かも知れないのだけれど、酒場にて、二人を結びつけたのは偶然の出来事だったが、居合わせたことはたまたまでも、その中で引き合ったのは二人が持つ魂の響き合いであったかと思われる。

「シルがいなければ、今日の私は無かったかも知れない。

それはおあいこでしょう。」

アレスミリアンは、そういつていたずらっぽく笑った。

「やれやれ、あなたは性格の悪さに磨きがかかったのではないか。

だけどアレス、その悪さであればうまくいくかも知れない。」

ついにあくびまで出てきた。

「さて私はもう寝るとしよう。今夜だけは、柔らかな寝台で眠らせておくれ。」

シルヴェスタは本当に眠そうだった。

翌朝早く、まだ街も兵士も朝靄の中で夢を見ている頃、シルヴェスタは誰にも告げずに城を後にした。

馬は白い息を吐きながら、北を目指した。右手の方から上ってくる朝日は、地平線のあたりを少しあかね色に染めながら、やがて自らを白く輝く一つの原点としてあまねく大地を暖め、草原から水蒸気を沸き立たせるのであった。

アレスミリアンは塔の上からそれを見送っていた。

友とか、家族とか、そういうものではない。まして主従の関係を結んだこともない。

そういうつながりを何と呼べばよいものか。日の光を浴びながら、

遙か北の地に駆けていく人馬を目で追い、そんなことを思っていた。

「また、お休みにならなかったのですか。」

背後の声に振り向くと、すっかりと身繕いを整えたイーリアスが、水平に近い日差しにまぶしそうな目をして近づいた。

アレスミリアンはこうしてイーリアスを眺めることが好きだった。微笑みながら近づいて来るのを見るのが楽しかった。

「シルが来ていたので、ずっと話し込んでしまいました。」

「もうどこかへ、発たれたのですね。」

「今日はみな、出発の日です。あなたの義父上も、今日出立の予定です。今は眠っている兵の半分も、今日東に向かいます。」

「いよいよ、始まるのですね。」

「そう、いよいよ、です。」

古王国と東の国々を結ぶ街道は、深い森の中を地形に沿って蛇行する細い間道で、荷車同士が行き違うだけの幅も無い。

あまり使われ無くなって久しいため、崩れた道や倒木がそのままになっているところも数多くあった。

周囲の森は、太古から人の手が加わらない原生林で、道を外れて迷い込めば二度とは元の街道には戻れない。

ただその森を生活の糧とする者にとっては、自分達だけが知るけもの道があり、木や山の形が目印となり、それで足りなければ秘密の印が、森の中に隠された回廊を教えてくれる。

そうした深い森を巡る街道の途中に、ぽっかりと視界が開け、旅人に日の光の恵みを与えてくれる平野（ひらの）がある。

街道は一度森を出て、その平野の中ほどをゆったりと横断し、また森の中へと吸い込まれて行く。その有様を見守るような小高い山の中腹に、岩壁を削り、あるいは岩盤そのものを利用して立てられたのが、ブルターク城である。

歴史を紐解くと、まだ新王国が成立する以前、そして東方との交易路として南回り航路が開発される前に、この東の回廊がその任についていたころ、交易路の安全と、時には東方からの侵略に対する備えとして設置された砦がこの城の起源となる。

ブルタークとは、「鳥の巣」とでもいうような意味である。

それが、平時は人も少なく、多くの鳥が巣をかけていたからそういうのか、あるいは平野から見上げる城が、頂にある鳥の巣のように見えるところから、そういう名前になったのかは知らない。

城壁は一重でしかなかったが、そこにたどり着くまでには滑りやすい山肌を登らなければなかった。

城門への上り口は、岩肌を削った上り坂が一本、後背は峻険な山に守られ、背後からの大規模な攻撃は不可能であった。

今その前景の山肌は、樹木が刈り取られて丸裸にされた拳句、落とし穴や、穂先を上に向けて埋められた槍、目立たぬように張り巡らされた荒縄、その他、人の思いつく限りの罟、が、仕掛けられた。

城門へ続く上り坂には、油が流され滑りやすくなっている。

もともと、城門の裏側は、城壁同様の石組みが積み上げられ、ただの飾りといっても差し支えないほどのものに、今は落ちぶれている。城内から打って出るつもりはなく、堅守を専らとした備えであった。

城内は、雨のように降ってくると思われる、矢を避けるための板と、麦わらの束をひいた屋根が葺かれた通路が張り巡らされた。

その下にいる限り、雨に濡れることも、矢に刺さることもなかった。

その様子を、ひときわ高い塔の上から、キリアンデルとリディアが見下ろしていた。

「思えば、大変な役回りになってしまったな。まかり間違えば、一族郎党討ち死にだ。よりによってこんな時に当主となろうとは。」
「あなた様は、あまり争いごとがお好きではありませんものね。」

「郎党から死人が出れば、残された家族は悲しむだろう。生き残るためには敵を討たねばならない。そのものにも家族がいるだろう。戦から生まれるものは悲しみだけだ。これは子供の喧嘩とは違うのだから。」

昔、まだ何も知らない子供だった頃、プランタニスのはずれの森に良く出かけたものさ。仲間達と隊列を組んでね。棒きれや縄を張っただけの弓何ぞを、かって勝手に持ち寄って、今日こそエスクロルのもの達を、こてんぱんにのしてやると息巻いて。

最初は互いに口汚くののしり有って、だんだん気分が盛り上がってきた頃に、どちらからともなく突撃して、あとはつかみ合いやら何がなんだか判らない大混戦さ。

みんな擦り傷だらけで、服も破れるし、まあひどいものだったが……。」

「存じています。もしわたくしが男だったら、一番に駆けて行ってレセクルのもの達を叩きのめしていましたわ。」

キリアンデルは、リディアが女で良かったと、このときは本気で思ったが、それは、心の内だけにしておき、
「それでも、誰も死にはしなかったし。その時の仲間が、今はあの城壁の後ろにへばり付いている。敵も味方も。みな生き延びて、プランタニスに戻りたいものだ。」

それは、かつてのリディアの家のものも同じだった。

「もう、かなり近くまで来ているとか。」
森の住人たちが、逐一その動静を伝えてきていた。

「明日には姿を見せるのではないかな。が、あの細い街道を来る

のでは、全軍がこの平野に姿を現すのにも手間を取るだろう。」

「街道の出口で、待ち受けて叩くのではいけないのでしょうか。」

「確かに、何十人かあるいは何百人かを倒すことは出来るかも知れない。けれども、十万のうちの何百人を倒したところで、どれほどの効果があるものか。後から後から押し寄せる軍勢に、いずれ押しつぶされるだろう。

我々は、百人失っただけでも大打撃だ。そんな危険は犯せないな。」

「あなたのような慎重な性格は、籠城戦に向いているのかも知れませんね。」

「それは、褒めてくれているのかな。それとも皮肉のつもりかい？」

ふふっと笑い、リディアは奥へと引き込んだ。

ペルジア軍の進度は、城外の別働隊が知らせを送っていた。

ブルターク城の表向きの門は、平野からの道を引き込む、今は浮き彫りになってしまった城門であるが、長期の籠城を想定して作られた、それははるか昔の誰かが考え実行したことに違いないが、抜け道を通して外部との連絡が保たれるようになっていた。

もちろんその抜け道は一族のものしか知らないし、また一族以外のものが知ったとしても、その深い森の中の入り口がどこかを知ることが困難だった。

ペルジア軍が、アルシャーファを発ってから、およそ七日が経っていた。

「もう一度確認しよう。城門は。」

「ふさぎました。」

「城壁の補修と矢避けの渡り廊下。」

「整ってございます。」

「木材、石、矢、油。」

「いつでも敵の頭の上に落とすことができます。」

「兵糧。」

「補給なしでも一月は持ちましょう。」

「水」

「山から引いております水道、場内の三本の井戸も問題ありません。」

「ふう。何度確かめても気になるな。」

「相手の数が数だけに、何日戦わねば成らぬか分かりませぬから。」

「どうしようもなくなったら、城に火をかけて裏手から逃げるさ。」

「まあそんなことにはならないだろうが。」

「それにしても」

うん？

「あのアレスミリアとかいう若造。小憎らしいが、認めねばなりません
まいな。奴がおらねばここまでの備えは出来ませなんだ。

「いったい、この城の改修にいくらかかったことか。」

“奴”か、随分とまだ、あの件でのしこりがあるようだな。

「北の部族との交易で、クラコワはかなり潤っていたようだからな。

そちらはシルヴェスタというものが仕切っておったので、

私はよくは知らないのだが、当家だけの支出では難しかったろう。」

キリアンデルは、とんとんと肩を叩いた。

「とんでもないこと。籠城しても兵糧は無く、城壁は虫に食われた
板の如し。三日で降参せねばならないところです。

レム・プラントの再興といい、ご当主とリディア様の婚姻といい、
なにやらここ数年というものの奴にいいように振り回され、そのたびに
私は右往左往しておりましたので、どうにもあの男は気に入らなかった
のでございますよ。

ご当主の御前で、こんなことを申すべきではないのかもしれませんが。」

「よいよい。お前は父の代からよく仕えてくれている。父に引導を渡した
のもお前だ。お前は家宰としてよくやってくれている。」

キリアンデルの懐柔が、まるで耳に入らぬように続けた。

「それもこれも、みなこの一事のためとであったとは。」

「私は、あの方をよく知っている。だから私にとってはとても頼もしい
お方だ。だが、敵対する立場であればどうだろう。

考えたくもないが、魔王のような存在に思えるかも知れないな。

今起こりつつある世の出来事が、ことごとくあの方の手が加えられた
ものだと知ったとき、並のものなら恐ろしさにふるえるかも知れない。

ペルジアのもの達も、これから自分たちが相手にしようとしている
人間が、その様なものだと知ったら、どうしただろう。」

「先代が言うて居られました。このような形で家督を継がせることになる、

とは思わなかった。けれどもよくよく考えてみれば、家系分裂の歴史が先代で終わると言うことは、子々孫々にとっては、真に目出度いことだ。

小さな領地の中で争っていると、それが当たり前のような気がして、何の疑いも持ちはしなかったが、レム・プラントとして大きな世界に出てみると、それがどれほど愚かなことであったか、いかに鈍感なわしでもわかってしまうものだ、と。」

「北の部族との和解もそうだ。誰もそんなことは考えもしなかったが、今となってはそれが自然の成り行きのような気がしている。

この度の戦も、我々は明日一日を生き延びることに必死だが、あの方はきっとその先のことを考えておられるのだろう。」

「いつか、会うてみとうございますな。」

老人は、にっ、と笑った。

「そうだな、少し難しいがこの戦いを全うすれば、そなたも功臣の一人。逢って直接声をかけて頂けるかも知れない。あの方は、王位を継ぐ方でいらっしゃるからな。」

家宰のダルマールには、その真の意味は伝わらなかったが、此の国の未来がそう定まっていることについては、是非もないと思った。

大軍団は、まだ森の中で眠っている。眠りながら故郷を思っている。

陽光のさす、あかるい平原を遠く離れ、いつ終わるとも知れない森の中の道を、ひたすら歩んでいる。

歩いているときはまだ体は温かかったが、立ち止まり、横たわっていると、森の湿気と冷気が体と心を侵し始める。

彼らは、いろいろな被征服部族からの寄せ集めであったから、それぞれの部族で身を寄せ合い、暖をとった。

そんなとき話すことは、故郷での暮らしのこと以外には無かった。妻や子供、年老いた父母、畑仕事のこと。彼らはひたすら故郷に帰りたいかった、けれども逃げ道は無かった。

故郷そのものが人質だったからである。

再び故郷に帰るために、彼らは故郷から遠ざかる道をたどり続けた。

このところ、秋にはありがちな快晴が続き、夜は水が凍りはじめる気温近くまでさがった。

明け方の平野(ひらの)の草原は、すでに砂色の絨毯に色を変え、吹く風には乾いた音が応えていた。

やがて城に籠った兵士の耳に、森の方角から、太鼓の音が時折聞こえてくるようになった。

その音は次第に大きくなり、耳を澄まさなくてもはっきりとした、単調な響きが城の奥にも届くほどになる。

さらに日が、尖塔の影を人の身丈ほども動かした頃、ペルジアの軍隊は、森から染み出した水のように草原を侵し始め、次第にそれは平野を大きく覆い始めた。

「えらいことになったもんだ。」

「こんな軍隊見たこたねえな。」

「プランタニスのがキやらじじいやら、全部寄せ集めたのより多いかもしんねえ。」

「こんなのと、本気でいくさをおっぱじめるのか。」

「キリアンの当主様は、そういうてたわいな。」

「けんど、見ると聞くとは大違い。こんな軍勢相手にいくさするなんぞ、正気の沙汰とはおもえねえ。」

「でもよ、おめえ、この城壁のあっち側からこの山に登ってくるのと、こっちに居るのとどっちがいい。頭の上から矢が飛んできたり、丸太やら岩が降ってくるのと、どっちがいい。」

「そりゃあ、おめ……。」

「ここで戦わずに降参するってことはよ、一生壁の向こう側で暮らさなきゃなんねえ、てことさ。」

「でも、まけたらどうなる？」

「そのときゃとっくに墓の中か、すたこら逃げ出してどっかの山の中で鳥でも射って暮らすさ。一生太鼓に合わせて死ぬ思いばっかするより、何ぼかましだ。」

「それにしても、陰気くせえ太鼓の音だな。どーん、どーん、どんどーん。
シネエ・シネエ・シンジマエ・・・」

東方では、この太鼓の音が聞こえてきたら、その部族のものは
みな明日を諦めたものだが、そんなことはこの王国には伝わってなかった。

ただ、いつやむとも知れなかった太鼓の音も、ようやくその日の
夕暮れ近くには収まり、最後尾の本隊が平野に姿を現した時には、
この戦いの厳しさを城の誰もが心の底から呪った。

ペルジアとの遭遇、その一日目はただ彼らが森を抜け、野営の陣を
はるために費やされた。

ブルタークの城内は、初めて目にする敵軍の姿に、かつて無い
ほどの緊張に包まれていたが、山の影が平野を覆い、夜の闇が
近づくにつれ、今日はこれ以上のことは起こるまいという雰囲気、
その緊張を解きほぐして行った。

夕闇の中で、一つ、また一つと焚き火がともり始め、それは何千という揺れる光となり、まるで空の星を地上に写したような光景が広がっていった。

「このようなときに言うようなことではないのでしょうけど、きれいですわね。」
「確かに。ここが戦場でなければ、これほどのものを目にしたことは、果報としなければならないだろうね。」

敵を目にしたとはいえ、まだ戦は始まっていない。
もし、開戦後であったら、こんなことは言えなかつたらう。

「いままで想像のものでしかなかったペルジアの軍団も、いざ目にしてみるとやはり違うものですね。私たちだけで相手をするには多すぎますわ。」

「早々にお引取り願いたいところだが、これは向こうの勝手に押しかけてきたものだから、そうはいかないだろう。我々は、クラコワの救援を待つしかない。」

「三日間。」

「そう。幸運なことに、一日目はお披露目だけで終わってしまった。それでも、城内はだいぶ動揺しているようだけどね。」

「あの太鼓の音がいけないのです。奥の方でも女たちがこぼしていました。」
「まったくだ、私もあんな無粋なものは、今まで聞いたことがなかったよ。だが、明日からはもっとうるさくなるだろう。だから、貴女も明日からは奥に詰めていなさい。」

「あら、私は平気ですわ。矢でも槍でも怖くはありません。」

「もちろんだとも。」

キリアンデルは、苦笑いせずには居られなかった。

「もちろん、お前がそんなものを恐れないのは知っている。
私が気にしているのは、そういうことではないのだ。
明日からの戦いは、槍や剣の戦いではないんだ。この城に取り付こうとするものを、いかに効率よく排除するかの戦いになる。

一人一人を切っていたのでは間に合わないから、まとめて潰しにかかる。

そのために丸太や岩や油が大量に用意されている。

十万もの敵兵を相手にするのだから、例え三日間といえども、人であることを忘れないと出来ない戦いなのだよ。

お前はやがて子を産み、育てなければ成らない。そのようなものが、こんなことを経験してはいけない。だから、貴女は奥に居るべきだと、私は思うのだ。」

キリアンデルは、どちらかという、育ちのよさが容姿や身振りに現れるほうで、おっとりした印象を人に与える。

リディアは、そうした彼の見かけを当初は軽んじたものだったが、その暮らしが長くなるにつれ、彼が実は相当に頑固で、信念を曲げない人間であることを知るようになった。

以前、彼は危なくなれば逃げればいいと軽口を叩いていたが、それはその他の郎党たちのことであって、彼自身は最後まで踏みとどまって、退路を死守するつもりであることは、リディアもうすうす感じていた。

「あなたの仰るとおりにいたします。」

平時であればともかく、このようなときに妻が意固地になるのは良くないと思いなおし、彼女は引き下がることにした。

何故素直に従うことが出来ないのか。我が事ながら、時折いらいら
することがある。

リディアが、ただエスクロルの娘としていたとき、彼女は自分が
女であることを、時折もどかしく思っていた。みな私が婿を取り、
その婿がエスクロル家を担っていくと思っている。

— 良き婿を取り、良き子を産み。良き妻として母として……。

何故私がエスクロルを担ってはいけないのだ。私は男に負けたりはしない。

— 良き婿を取り、良き子を産み。良き妻として母として……。

誰が私からエスクロルを奪うのか。

それはある日、思いもしないところから突然やってきた。

王女の付き添いを命じられたとき、それは単なる姫君の気まぐれ
としか思えなかった。王国の若者がつどう。そんなものに興味はない。
ただ命じられるから行ったに過ぎない。

もちろん家の者は乗り気だった。王家とのつながりが出来る上に、
首尾良く結婚相手でも見つければよい。そんなところだろう……。

私はそんな存在でしかないのか。

イーリアス様は気まぐれな王女。

そう思っていた。いや、そう思いこんで反発しようとしていた。
あのころ私は、周りの総てが敵に見えた。

イーリアス様は愛らしかった。一目見て、その愛らしさに心の門を
少しゆるめてしまった。でも、それは誤解だった。あの方はこういわれた。

「連合王国は、このままでは早晚滅びてしまいます。古王国にかつての
力なく、新王国は私欲に乱れ、だれも民を顧みない。」

衝撃だった・・・。

私も結局、他のもの達と同じだったのだ。姫の外見だけを見て、ああ可愛い王女だと。一日ぐらいこの人のきまぐれの供をするのもよかろうと、思っていただけだった。

「でも、これは或る方の受け売りなのです。或る方？教えません。だって、リディア様のような美しい方を取られては困りますから。」

強さと、美しさと、しなやかな心。

男になど負けない。そんなふうにはばかり考えていた、自分がばかりしかなかった。少女にすら私は及ばなかった。

キリアンデルに恋をしたわけではない。私の中の何かがささやいたのだ。これは運命なのだ。

多分、私は男に恋はしないだろう。私は自分に恋をする。その自分がささやいた。これは運命なのだ、と。

こんな時代に、お互いの家にただ一人の世継ぎとして生まれて、目に見えぬ時代のうねりの中で、或る強い意志の元に出会うことになった。これが私の宿命だと。

そして、キリアンデルが初めて私の唇に触れたとき、その言葉すらいいわけに過ぎなかったことを知った。

「・・・あなたの心がどんなにかたくなでも、それも含めてあなたを愛します。」

「ダルマールじいさん。」

キリアンデルは部屋の外に向かって呼びかけた。

この一門の家宰が、そうそう都合良く外をうろついているわけは無く、キリアンデルの呼び声をとらえた若い者が、方々の部屋に顔をつっこんで彼を捜し出し、その呼びかけを包み隠さずダルマールに伝えた。

「およびでしょうか。」

ダルマールは、落ち着いた足取りで、姿をあらわすと「それと、“じいさん”はおやめください。」と注文をつけた。

「じいさんはだめか。まあよい。明日は、早朝から、ひどい一日になりそうだな。」

キリアンデルは、窓辺から外の灯りを眺めながら言った。

「ペルジアの軍は、まだ攻城の用意が十分には整って居らぬようです。あの細い街道を伝って運搬をしております故、櫓も投石機もなかなか運ぶのに難儀して居ることでしょう。」

「とはいえ、たかだか二千の兵がこもる城。」

「敵の大將も、森の中の行軍から解放されて気がはやっておりましょう。王国の入り口に立つ、象徴的な城ですからな。長々と放っては置きますまい。」

ダルマールの推測は、キリアンデルのそれと大きな乖離はなかった。

「やりたくないのは山々だが、都合のいいことを夢想するより、悪い方に備えておくべきだろう。」

「それでは、みなに伝えておきます。」

「もう一度念を押しておくのだ。”逸るな焦るな、敵の動きをよく見よ、ブルターク無くして王国はない。”」

野に移された星の輝きも、次第に数を減らし、数えるほどの篝火も、

弱い光が闇に負けそうになっていた。

その闇のなかにいるペルジアの兵士を思うと、哀れな気持ちがしてならなかった。

夜露を避けるものもろくない野原では、この夜の冷え込みは耐え難いものだろう。自ら望んできたわけでもない兵士達のいくらかは、明日ここで命を落とすのだ。

キリアンデルは、アレスミリアンの心の底がわかった気がした。

ペルジアの兵が幾ら十万といえど、この深い森の中で死力を尽くして戦えば、クラコワの兵力だけで彼らを撃退することが出来たかも知れない。

圧倒的に数では劣る。ロンダルトはここまで兵を出さないだろうから、おそらく味方の損害も相当なものにはなるだろうし、敗れる可能性もないではない。

けれども、“もし”、“たら”は、いずれの場合にもついてくること。

であれば、この戦い方を選んだのには、何か理由があってしかるべきなのだ。

極力衝突を避け、敵軍を懐に引き込んで補給を絶つ。

人は何より飢えに弱い。そして大軍を動かすことの弱みもそこにある。

食い扶持が多ければ多いほど、糧食を早くに食い尽くす。補給路は、長く細ければ細いほどその機能を果たすことが難しくなる。王国内の食料は総て倉に収められている。食べねば飢え死にするか、降伏するか、撤退するかなのだ。

アレスミリアンは、おそらく被征服民たる敵兵を憐れんでいるのにちがいない。

この戦いが彼の思惑通りに進めば、味方の損害は少なく、敵兵の血で大地が染まるというようなこともないだろう。

「けど、明日には、そんなことを考える余裕もなくなるだろうがな。」

そして明日は、朝日とともにやってくる。

頂を朱に染めた光は、徐々に朝の青い影をおいはらい、ブルターク城を一塊の彫刻のように照らし出した。

ふもとからは、はるかに見上げる城の内部の様子を、うかがうことは出来なかった。

そこに果たして人がいるのか、その構えがただのこけおどしなのか、兵士たちには分からなかったが、彼らはこの後、そこへ歓迎されざる客として向かわねばならなかった。

イズマイルとしては、このような小城に手間をかけるつもりは無かった。

彼は何より大平原での会戦を望んでいたし、それは戦略上の理由よりも、彼自身の英雄願望によるものだった。それが適わないにしても、このような山間の小城に、彼自身が煩わされることなどは、まったく考えに無かった。

よって、この戦いについて、イズマイル自身は何の指示もしないし、いつ仕掛けるか、あるいは攻略するのかどうかとも言わなかった。

この戦いは、イズマイルにとっては、配下の将が行う局地的な戦闘の一つで、行軍の途中でたまたま立ち寄った、野営に好都合な平地での出来事に過ぎない。

とはいえ将にとっては、イズマイルの目前で華々しい戦果を上げるまたとない機会であったので、攻城の準備が十分に整わなかったにしても、早々に戦端を開かねばならなかった。

ぼんやりしては、本隊は先に進んでしまうかもしれなかったためである。

結局、この城攻めにやる気満々で望んだのは、攻城の司令となった1将官のみであった。

最初の太鼓が鳴り響くとともに、弓兵が城の前面に展開した。その数ですら、すでに守備兵を上回っていた。

次の太鼓で歩兵が前進を開始した。

と、同時に弓兵の援護射撃が開始された。

「弓が来るぞ！」

ダルマールの声が響いた。

それと間をおかず、幾百の風きり音と、勢いを失わなかった何分の一かの矢が落下した。

ふもととの高低差が矢の勢いを殺し、到達する矢は何分の一かに減ってはいたが、それでも母数があまりにも多いため、不用意に防壁の影から身を乗り出すことは出来なかった。

その間に、歩兵達は山裾にたどり着き、さらに登坂を開始しようというところまで接近していた。

「ようし、一発お見舞いするぞ。距離を違えるな。・・・用意はいいかあ。」
木材と、縄のきしむ音はその場の空気を緊張させていた。

「放て！」

ぶおんという、風を大きな熊手でひっかいたような音を残し、五機の投石機が第一投を投じた。

それはまるで空中の矢をなぎ倒すかのように飛翔し、最前列の弓隊の頭上から落下した。

その混乱により一時弓の攻撃が止まり、何人かの兵士はうまく逃れることが出来ず、無秩序にころがる岩石に巻き込まれて戦場から退場していった。

「いまだ、弓を放て。」

まさに登坂を開始し始めた歩兵に向かって、弓が引き絞られ、矢が放たれた。

未だ距離があるため、直撃は難しかったが、あわてた兵士が転落したり、あるいは埋没されたやりに刺さったり、罨に足を引っ掛けたりと、前線には相応の混乱が生じた。

投石機の第一投の後、態勢を立て直し、復活した弓隊が波状攻撃を始めると、城側はまた身を潜め、歩兵は登坂を開始した。

第二投が同様に岩を宙に浮かべ、放物線を描いて、見上げる射手の只中へと落下した。

その間ペルジアからの射撃は弱まり、代わってブルタークの弓が弦を振るわせた。

こうした応酬が何度か繰り返されるうちに、前線の兵士たちは徐々にではあるが山肌を登り、中腹へと達しようとしていた。

その一方で、城門につながる坂道を、大型の木槌を持った一群が、油に足を滑らせながらも接近を試みていた。

「討っても討っても上って来やがる。」

「空からは、俺たちの何倍も矢が落ちてくるし。」

「あさからひるまで弓を引きっぱなしで、腕の筋がいかれそうだぜ。」

「まとめて十本くらい射っても減らないんじゃないか。」

「ユビが足りねえよ。三本ぐらいにしとけ。」

城壁の内側に張り付いて、ペルジア側からの矢を避けながら、情けないのやらふざける余裕があるのか、分からない会話をする兵士。いまは鎧なども来てはいるが、普段は半農の雑兵だ。

「おーい、交代だ下がっていいぞー！」

「ありがてえ、ちょっくら休ませてもらおうぜ。」

「けれども、このまんまじゃあ、城に取り付かれるのもそう遠くはねえ。」

「そこんところは、うちの大將もご存じだろうぜ。」

「がきのころから、駆け引きはうまかったからな。」

いいながら、二人は塔の上に立つキリアンデルを見上げた。

日はすでに中天にさしかかり、人が活動するには程良いほどまで、気温は上昇していた。

ブルターク側の守備兵はよく戦い、一人一人は成果を上げていたが、圧倒的な兵力の差は埋めがたく、敵の前線の接近を押し戻すことが出来なかった。

ペルジア側の本営では、この戦況を見て日没までの攻略も可能かと、楽観する雰囲気は漂っていた。

塔の上のキリアンデルは状況を見ていたが、今までの攻撃はこのあたりが限界かと感じ、城壁のダルマールのほうを見やった。

山裾には、第二陣が登坂のための集結を終えていた。

手には何本ものはしごや、鍵のついた投げ縄がもたれていた。第一陣が城の直下から攻撃を加えている間に、第二陣が城壁を越えて突入し、城門を開く手はずである。

その頭上を、何頭かの朱に燃え、黒く長い尾を引いた火の玉が越えていった。彼らが啞然と見送るその先で火の玉は着地し、大地を跳ね回っては膝丈ほどもある枯れ草に、火をつけて回った。

晴天が続き、乾燥しきった草原には火が走り、煙が辺り一面に立ち込めた。

続いて第二の火竜が空中に飛び上がり、燃え残った草原を目指しておちていった。

周りには消火のための水はなく、火は新たな薪(たきぎ)がなくなるまで、燃え尽きるのを待つしかすべが無かった。

ペルジアの中軍は大混乱に陥り、多くの兵が逃げ惑い、煙を吸い込んだり火に囲まれてやけどを負ったりした。

背後の自軍の惨状に目を奪われていると、次は城壁のうえから、黒い固まりが斜面にへばり付いている者達の頭上に落下した。

人の手が回らぬほどの太い丸木は、ついこのあいだまではその斜面に屹立し、葉を茂らせていた大木であった。

それは、斜面にあやうい姿勢で立つ兵士達を容赦なくなぎ倒し、その日半日の苦勞をご破算にしてしまった。

運良く惨事を免れて、恐怖に混乱した前線の兵士達は、我先に一時ふもとまで後退するしかなかった。それを追い立てようにも、後衛は草原の火災で混乱の中におり、ペルジア軍は、一時期完全に統制を失っていた。

一方、城門を目指す一隊には火矢が放たれ、その火は上り坂にまかれた油に燃え移り、兵士の衣服と体を焦がした。

彼らもまた、そこに踏みとどまることは出来なかった。

燃え上がる草原と、その向こうの戦場で起こった惨劇に、ペルジアの本営は一時総立ちとなった。おびただしい煙は、実際の被害よりも損害を大きく見せた。

幕僚達はイズマイルの怒りに巻き込まれることをおそれ、次々と事態の收拾に向けて走り出した。

攻城の司令官は、不名誉な斬首より、自ら一兵卒となって切り込む道を選んだ。彼は、夕刻になってもそのまま戻らなかった。

平原の火事が、黒々としたまだら模様を残して収まったときには、早くも冬の陽光が山の長い影を戦場に落とし始めていた。

前線と城壁の間では、あまり派手ではない矢の交換が続いていたが、高低差の不利な分だけペルジア軍のほうが確実に消耗していった。

ペルジアは、これから再び登坂を開始したとしても、到達する頃には夜になり、今日中の攻略は不可能と判断し、退却の太鼓を打ち鳴らした。

潮が引くように兵達が退却を始めた後には、動かない貝殻や流木がぽつりぽつりと残された。

日はすでに裏山の影へと退場しようとしている。

遠く潮の引いた海から、何人かの海人が、辺りをうかがいながらおそるおそる現れ、貝殻を拾い集めては海に戻っていった。

彼らは、わずかな遺髪を残してこの平原に埋葬され、道を覚えていれば、みなより先に魂だけは故国へ帰れたかも知れない。

またその遺髪を持ったものも、この先の戦いから生還できるかどうかは、知るよしもなかった。

今日一日の戦いで、彼らは国を出るときに想像していたよりも、遙かに厳しい戦いを強いられることを知った。

「我々の被害は。」

「矢傷を負った者が十数名。」

「敵の損害は・・・、判らないな。」

「直接の戦闘で討ち果たした者は、数百といったところでしょうか。」

「数だけを見れば、十万の内数百では、大勢には影響がないと

いうところか。こちらも手の内は見せてしまったし。痛み分けに近いな。」

「とはいえ、敵は引きましたからな。城内の士気は上がっておりますぞ。」

そういうダルマールが、一番興奮して見えた。

「確かに、塔の上から敵が引くところを見ていると、胸のすく想いがしたな。

あとから下に降りて、積み上げられた敵の矢の数を見てぞっとしたが。」

窓の外には、昨夜と同じような、星の海が広がっていた。

「明日はいよいよ、三日目でございます。」

「何とか、持ちこたえねば。」

だがその三日目が本当に明日かどうかは、明日になってみなければ

判らない。朝のうちか、午後になるのか、ひよっとすると、

ペルジアは一日早く着きすぎたのかも知れないし。」

「明日は攻め手を変えてくるかも知れません。バカの一つ覚えのように、

今日と同じ寄せ手を繰り出してくるとは思えません。」

「おそらく、じいさんの言うとおりでろう。」

「やれやれ、考えれば考えるほど気が滅入るな。」

「ですから、そのじいさんはおやめくたされ。」

お互い頑固だ。

「さてさて、一眠りするか。歩哨は出ているな。」

「今の段階では、夜襲も無かろうと思いますが、警戒を怠ってはおりません。」

「じいさんも早く寝ることだ、夜更かしは、年寄りには毒だぞ。」

「だから、そのじいさんはおやめくたされ。全く！」

ダルマールはぶつぶつ言いながら、キリアンデルの元を辞去した。

「だから、そのぶつくさ言うところが爺さんなのだよ。」

キリアンデルは、独り言を言いながら小さく笑った。

翌日の攻撃は、昨日と同様、おびただしい数の矢が宙に舞い上がる場所から始まった。

が、前線の様子は少し違い、斜面に杭を打ち、その前に板を渡して城内からの矢と丸太落としを防ぎつつ、陣地を城壁に近づけていくという、手間はかかるが着実と思われる土木作業が進められている。

これに気づいた守備軍は、試みに丸太落としを試みたが、木材と板がぶつかり合う大音響で辺りを振動させただけで、寄せ手が作ったあらたな攻城壁は崩れなかった。

それを見て、昨日の醜態に、戦況をやきもきして観望していたペルジアの本営は、一先ず安堵の吐息を漏らした。

もし今日も同じ失態を演じれば、昨日と同じように、自ら剣を振りかざして、矢の中に突進して行かねばならない。そのため、進んで攻城の指揮を執ろうと言うものがいなかった。

このいやな役回りを押し付けられた将は、従ってこの軍団での地位は高くない。

昨日の勇ましさに比べると、まことに消極的な戦いと言える攻略法で、必然的に日暮れまでに陥落させるなど望むべくも無かったが、守備側がこの地形、地勢を、有効に活用する手はずを十分に用意していることが、昨日の戦いで明らかであったため、それはやむをえないことであった。

「じいさんの言うとおりの、あちらも考えたものだ。ただこちらにすれば、時間稼ぎに手を貸してもらっているようなもの。

とはいえあれを討ち破らねば、こちらの、のど元に刃をつきたてられる。戦というのは、まったく忙しいものだ。ころころと状況が変わる。さてじいさんどうするかな。」

キリアンデルは、今日も塔の上に立っていた。城内のどこからも、その姿を見ることが出来た。もちろん敵からも。

そしてここからは、この平野の隅々が見通すことが出来た。

彼は日差しを浴びながら、ひたすら立ち続けた。西の森の出口を、時折見やりながら。

城壁の内と外との消極的な攻防が続いていたが、現状は寄せでの思惑通りに推移していることは明白だった。そうした状況から、ペルジアの本営からは、このブルタークの攻防に関する興味が薄れつつあった。

それよりも、ここ数日の寒さが、思いのほか冬の到来が早いのではないか、という想像を、憂慮に変えつつあった。

確かにこの山間の地帯は、クラコワよりも高地にあり冬の到来は早く、そうなれば道は雪に覆われ失われる。

戦闘が長引けば、本国からの補給が途絶えるし、そのころには行軍すら不可能となるだろう。

最悪の場合、雪が消える来年の春まで補給を受けずに、クラコワでの攻防を続けねば成らない。

王国の都を落とせば食料も暖かな寝床も手に入るという、この場合何の保証もない、勇猛ではあるが知恵の足りない発言もあったが、夜間の冷え込みの厳しさや、そもそもこの森の中の小城の攻略に足止めされることを嫌ったことから、早々に出立するということで本営の意思は固まりつつあった。

日が中天にかかるころには、じりじりと攻めあがっていた攻城壁も、その斜面の中腹にたどり着きつつあった。

不用意に、壁から身体を乗り出したところを、城からの弓で狙われ、山裾まで転げ落ちていく者もいたが、昨日よりは圧倒的に、被害が少なかった。必然的に、攻城側の兵士の士気は高まり、守備側は、いらいらが募った。

その頃、西の森を見やるキリアンデルの目に、何かきらきらと光るものが入った。

「やれやれ、少しは運が向いてきたようだな。」

キリアンデルは伝令を呼び寄せ、
「ダルマールに、何か派手な動きをして、敵の注意をブルタークに向けさせるように、と伝えろ。」
といった。

しばらくのち、城壁に数十人の甲冑姿の騎士が姿を現した。
その姿は陽光に輝き、遠いペルジアの本営からも遠望することが出来、あれは何事かとみな色めきたったが、すぐさま的を射落とすものに褒美を与えるという下知が下された。

弓兵は我勝ちに弓を放ち、そのうちのいくらかは騎士に当たりよろめかせたが、騎士もなかなか倒れはしなかった。

城壁の内外がこの駆け引きに興奮するあいだに、西の森では木立を楯にしたクラコワの弓兵が、攻撃の準備に余念が無かった。

その動きが、しばし、停止した後、ペルジアの背後から、アレスミリアンが約束し、キリアンデルが待ち望んだ攻撃が始まった。

思いもよらない新たな敵の出現と、背後を突かれたことにより、ペルジアの左翼は総崩れとなり、攻撃の反対方向へと逃げ出すものと、状況が分からずただ混乱するものが錯綜した。異民族同士の彼らの間では、うまく言葉が通じなかったのだ。

そのような混乱の中でも十万の軍勢にとっては、一部がそうした状態にあるにしか過ぎず、ペルジアの本隊からなる中軍が、新しい敵が現れた平野に向かって陣形を整え始めると、左翼の混乱も次第にその中に吸収されていった。

イズマイルは、開戦以来、連日の失態に不機嫌であったが、今までの城攻めとは違い、彼の嗜好にあう会戦が始まったことに気を取り直し、ブルターク城の攻略にも目処が立ったということで、一部の兵を残しての進軍を決断した。

クラコワの軍勢からは、途切れない弓矢による攻撃が続いていた。その前面には騎乗して甲冑姿のカラバ公とハイアルト卿、それに付き従う騎士たちが、襲来した異民族に対する銀色の障壁として立ちふさがっていた。

ペルジア軍は楯によって矢の攻撃を防ぎつつ左翼を建て直し、その左翼は太鼓の連打に合わせて銀の一群に向かっての突進を開始した。

カラバ公をはじめその一団は、雲霞のような敵の接近をみると馬首を翻し、街道をもと来た森の中へと引いた。

寡兵をさらに分割した今の兵力では、戦線を維持することが出来ないのは明らかだった。森の中の弓兵もそれに合わせて退却を開始した。

これが、クラコワまでの三日間の退却戦の始まりである。

クラコワ軍の撤退をみて、ペルジアの左翼軍はさらに追撃を開始した。背後から矢を打ち込まれ、少なからぬ損害を受けた上に、本隊に追い立てられるように隊列を再構築させられたことへの腹立ちと羞恥で、頭に血が上っていたのだろう。

その突撃は、まさに死をも恐れぬとでも言うべきものだった。

クラコワの騎士団は退いては止まり、また退いては止まりして一定の距離を取りながら街道をクラコワに戻っていった。

その間にも街道の両側の森からは、伏兵により矢が射掛けられたが、その矢の方向に踏み込んでもそこはすでにもぬけの殻となっており、傷口をふさぐ間もなく彷徨う獣のように、追撃戦による兵の消耗は止まらなかった。

しかし、後続の数万を数える軍団は留まることを知らず、前の部隊は押し出されるように、ひたすら前方に楯を構え進軍を続けるのみであった。

クラコワ軍は、ペルジアの圧力に押されて後退するしかなかった。
周到な待ち伏せ作戦により、都度その圧力を受け流していたが、
「何だあのものたちは。」

騎馬の足を生かし、距離をとっては待ち受ける馬上で、カラバ公が、
隣に待るハイアルト卿に言った。

「尋常の戦い方ではありませんな。打っても討っても、後から後から
湧き出るかのございます。」

「人間を相手にしている気がしなくなってきたぞ。まるで蟻か蝗のようだな。」

「こういうやからは、厄介でございますな。」

「これだけ痛い目にあっても、ただひたすら後を追ってくるとは。」

「これが、この細い街道ゆえ一度に対する相手も知れておりますが、
平原で当たりますと……。」

「一気に周りを囲まれて、それで終わりだな。」

街道の奥に、小鬼のようにうごめく兵士の塊がみてとれた。

「来る。」

「我々は馬だからまだいいようなものの。」

人の群れは次第に大きさを増したが、

「倒れた。」

「オージーンの一隊ですな。」

森林での待ち伏せが、またペルジアの足を止めた。

「うむ。」

ハイアルト卿は一団に向かって言った。

「前へ！」

騎兵たちは敵との距離を詰めた。

「放て！」

襲撃の混乱から立ち直りつつ、反撃をしようとする構えの敵の集団に、
再び矢が襲い掛かった。この間に、オージーンの伏兵たちは山中深くに
逃走を開始した。

「引きましょう。」

「うむ。」

騎兵たちは再び馬首をかえし、並足で街道を戻り始めた。

カラバ公は、陰鬱になってきた。

危険を分かっているながら、ただひたすら前に進み倒れる兵士と、それを倒木でも乗り越えるような調子で踏み越えて迫り来る軍団。

無意味な死が繰り返されることをただ傍観しているだけの、
戦闘と言うことすら憚られる無感動な悲劇の繰り返しに、
腹立たしくまた、陰惨な気持ちに染まりつつあった。

一方、塔の上では、キリアンデルが洪水の引いた後のような平原を眺めていた。

「嵐は去った、か。あの大軍団に比べれば、居残りの部隊などたいしたことはないのだが、じいさん算段はついたかな。」

数は減ったと言えども、それでも守備兵の三倍近くは残された。攻撃側と城壁の距離が縮まってきている状態にも変わらない。

今しも城壁からは、役割を終えた案山子たちが下ろされ、傷だらけに成った鎧を脱いで身軽な木の棒にもどったところだった。

「さあさあおまえたちよくやったぞ。こんどはこいつらの番だ。」

ダルマールは、案山子達にねぎらいの言葉をかけ、次はもっと大型の、おそらく昨日までは投石機として活躍していた木製の滑り台を壁際に寄せた。

「ようし、狙え。・・・いいか。・・・放てっ！」

先を尖らせ巨人の杭となった大木が、投石機の腕を滑走し、城壁の上をかすめてペルジアが築いた攻城壁めがけて落ちていった。

巨木の重量と、落下の勢いを先端に集中させた杭は、雷鳴がとどろくように攻城壁を串刺しに吹き飛ばした。

その破壊に巻き込まれた敵兵が数人、わが身に何が起きたのかも分からぬうちに山裾に転落して果てた。

「もう一丁いくぞ。」

大掛かりな仕掛けのため、連射できないのが難点であったが、その大音響と破壊の派手さは受ける側を戦慄させるに十分だった。

一方、ダルマールは、その威力に年甲斐も無くはしゃいでは、周りのものをあきれさせた。

数度の攻撃の後、兵は壁を放棄し、今はめっきり人気の無くなった平地に退却した。

イズマイルは、既にここを去っていた。闇雲に、兵を前線に追い立てる司令官もいない。

これ以降ブルターク城の攻防は、包囲によって城内の食料の枯渇を待つ消極的な戦いとなった。

ペルジア軍は、ブルタークに別の入り口があることを知らない。そして、今までは何事も起こらなかった、森の中の補給路が襲撃されていることも知らない。

冬の訪れよりも早く、飢えが襲ってくることも知らない。

キリアンデルにとっての戦いは、もう終わったも同様だった。

物語は、ここで数日前のクラコワに戻る。

出陣を前に、カラバ公は主だった貴族、家臣達を謁見の間に集めた。

カラバ公の隣には養女となったイーリアスが立ち、ハイアルト卿は家臣団の前列に、アレスミアンは家臣と貴族の交じり合う中ほどにたち、ニールリングたちは、呼ばれもしないのに次の間で、興味津々の表情で耳をそばだてていた。

「みなご苦労だな。明日の出立を前に、みなに申し伝えておかねば成らんことがある。」

カラバ公は、そこで一息ついた。

「明日よりクラコワは、このイーリアスが主となる。これは、わしが無事帰還する、あるいは戻らないようなことがあろうと、その結果には関係無い。明日からこの国の王はイーリアス、ということだ。みなは、わしに捧げてくれた忠誠をイーリアスにも与えて欲しい。意義はないな。」

そこでまた一息ついて、衆を見回した。

イーリアスを養女に迎えたときから、これは既定の事であったので、一同に異議は無かった。しかし、それはもっと先の話であろうと予想していたので、この戦とカラバ公の出陣が無ければそうであったかもしれないが、この継承に対する不安といえはイーリアスの経験の無さであった。

「ただ、イーリアス一人にこの国を背負わすのは、肩の荷が重かろうと思う。そこで、アレスミアンが摂政としてイーリアスの治世を助けるように。よいな。」

今度は、アレスミアンに向かって言った。

「アレスミアンについては、異存のあるやもしれないが、この戦が終わるころにはそれも消えていよう、と期待している。」

アレスミアンがカラバ公の側近として働くことについては、アレスミアンへの批判はそれを重用するカラバ公への批判となる。

ために、重臣・貴族たちもそれははばかりだったが、カラバ公が引退してしまった後では、その後ろ盾は弱くなる。

さりとして、イーリアスが治世の上で頼ることが出来るのは、個人的な感情の上でも、資質に置いても、この国でアレスミリアンをおいてはない。

ただこの場合、困ったことに男女の問題が絡むため、あらぬ詮索や疑いにより、ことがうまく運ばないことも懸念される。

つまり、イーリアスが私的な愛人を重用する、あるいはアレスミリアンがそれを利用して権力を濫用するといったような中傷を、例え根も葉もない噂であっても故意に流すものが現れる可能性もある。

過去の歴史の中にも、そうした関係を持ち、国を腐らせた支配者は枚挙に暇が無い。また、そうした関係が良い方向に働いたことも限りなくあるだろうが、それは歴史に残らない。

カラバ公がこの時宜を選んだのには、もちろん己の身に降りかかった災厄により、クラコワへの帰還を阻まれたときのことを考えてのことだった。

けれども、この危機管理において、すでにアレスミリアンでしかこれを終息させることが不可能と思い、あるいは懸念を持ちながらも、従わざるを得ないとみなが思っているこのときであれば、全員が賛同したという既成事実を作ることが、容易であろうと考えたからでもあった。

王とは、天から与えられるものではない。王は作るものだ。能力なくしては、王たり得ない。王の資質なきものは、早晚家臣や貴族から見放され、その地位から転げ落ちる。

その王の資質とは、優れた洞察でも統治能力でもない。武力とか胆力かといえはそうでもない。

王権を支持するもの達に、どれだけの利益が与えられるかに有る。

その手段は、平時ならば統治能力、有事ならば武力であるかも知れないが、それが負の方向に働くのであれば、王は支持されない。無知で、蒙昧で、自身は無能であったとしても、家臣や貴族に取りそれが都合良ければ、その王はよい王と呼ばれるだろう。

此の国の行く末が、後継者イーリアスではなく、アレスミリアに事実上は委ねられることを宣言して、この日の会合は終わった。

「さて、明日の出立は早朝になる。移動できるのは日のあるうちだからな。出来るだけ距離を稼がねばならない。」

「くれぐれも、無茶はなさいませんように。」
カラバ公はまたかというように、アレスミリアンを見やった。

「無茶とはなんだ、無茶とは。仮にも先王に向かって言う言葉では無いだろう。それに、わしはもう王は隠退するのだから、多少は好きに振る舞っても構わんだろう。」

「いえ、困ります。もし命でも落とされては、この戦に汚点が残ります。それに、・・・。」

「なんだ・・・それにとは。」

「戴冠式が済んでおりません。」
「そのために死ぬなと言うのか。」
この男、よくもまあぬけぬけと。

「そうです、他に何かありませんや。」

「あきれた奴だな、わしの身を案じているのではないのか。」

「ですから、御身を案じております。」

「戴冠式のためにか。」

「他に何か。」

「もう良いわ。」

「アレスミリア。それくらいになさいます。」

イーリアスが笑いながら、間に入った。

「お義父さま、ご無事に帰っていらしてください。民はみな、お義父さまが無事凱旋してこられるのを心待ちにしております。」

そこでまたアレスミリアンは余計なことを口に出した。

「カラバ様。クラコワ中から集まった兵を、無事に家族の元に返す責務が我々にはあります。

貴族や騎士が戦場で倒れることは名誉です。ですから、彼らがどれだけ倒れても気にはいたしません。

けれども民が倒れれば、その家族は頼るべき男を失い、悲しみに暮れるでしょう。カラバ様は、民を連れ帰らねばなりません。」

カラバ公は、改めてアレスミリアンを見つめ、言った。

「お前のそういうところは、父親譲りだな。お前が物心着いたときには、もう父は居なかったそうだから、父親の心を母が受け継ぎ、お前の心に注ぎ込んだのだろう。

真心は受け継ぐたびに、どんどん濁り無く純粹になっていくから、お前が民のことをそこまで心に掛けるのは、そのせいもあるかも知れない。

お前の父も民のことを思っていたし、そのために己の利益しか顧みないロンダルトの貴族を嫌ってもいた。そこに悲劇が生まれたのだろう。」

「カラバ様はアレスミリアの父上をご存じなのですか。」

イーリアスは、カラバ公がすでに知っていると言うことは知らなかった。

それ以上に、誰かが既に知っていると言うことを知らずにいた。だから少し悔しかった。

「知っていた。気づくのは遅かったがな。本当に遅かった。

わしはこういう事は得手ではない。

剣の扱いにはたけていても、人の扱いには慣れない。

だからこういう事には、なかなか気がつかなかったのだ。

もちろんクラコワとの距離のこともあるが、アレスミリアンの父にも何もしてやれなかった。」

「いったいどのような方でしたのでしょうか。」

イーリアスは心臓が早く高鳴るのを感じた。

「こいつの父親はな、・・・。」

といいながら、己の口から語るべきかどうかを思案して、アレスミリアンを見た。

「私の父の名は、アズレクン。家門の名は、あなたのロンダルトの父上と同じだよ。」

イーリアスは、あまりのことに足元が揺らいでいるような不安な感覚になった。

家門が同じ。それはただ、王家に連なるということと言わんとしているのか、それとも、もっと近い何かの血のつながりを意味するのか。

耳の奥ががんがん鳴っているような気がする。

「イーリアス。そなたの父には兄がいた。そなたが生まれた

ときには、もうこの世にはおらなだったので、知らないのは当然だが、生きていればそのアズレクンが王となっていたはずだ。

そなたとアレスミリアンは従兄妹の関係になる。」

従兄妹か、従兄であれば・・・。

イーリアスはすこし安堵した。それでは、私たちは似ているのかしら。子供のころから見慣れているのでよくわからない。

けれども、

「その、悲劇とはどのような。」

「一部の貴族と、どうしても折り合いがつかなかった。それが元で、心労のため病に倒れたのだよ。母と私を残して。」

そうか、あくまでもそう言うのだな、アレスミリアン。でもいずれ知れることだぞ。

「どうして今までそれを隠していたのです。カラバ様でさえご存知ということは、他にも知っておられる方がいるのでしょうか。

いつもいつも私をのけものして。」

「わしでさえとは、どういうことだ、わしでさえとは。」

「まあ、まあ。それは、その話はまたにしましょう。

イーリアス。

私の父と母は「正式に」結婚したわけではないのだよ。この

「正式に」というのは、世継ぎにふさわしい手順を踏んだわけではない、というような意味だけれど。

父の立場は非常に危うかったし、母をそれに巻き込むことをしたくなかったのだと思う。だから私は、「正式に」は貴女との血のつながりはないんだ。今もそれを証明するものは何も無い。

私が今こんなことをしているのは、王家の血筋に連なることを証明するためではなくて、この沈み行く陽の中の王国を救いたかったからだ。

それは、華やかな都には分からないことなのだけど、田舎の農夫たちは、食べていくのが精一杯なのに、都では、貴族が贅沢な暮らしにおぼれている。

その暮らしが何に支えられているのか、何世代にもわたってそういう暮らしをしてきたものには分からないだろうが、その支えがいつ崩れ去ってもおかしくは無い。

私が育ったクルビス村は、ここよりももっと北にあって、それはそれは美しい、森と湖が点在するよいところなのだけれど、耕す畑は少なく冬も長い。

だからみんな、質素でつましい暮らしをしている。平和なときが続けばね。けれどもそれはいつ崩れるか分からない。

十歳のとき、誰かが何とかしないといけないと思った。そして、十二歳とき、その「時」が、ひげをはやしてやってきた。」

「あのときお前は十二だったか。わしとハイアルトがお前を拾い上げたのは。

まさか、こんなひねくれものだとは思わなかったな。手元に置けば、

何か役に立つこともあるだろうと思って連れ帰ったが、奇縁とはこのことよ。
はっはっ。」

カラバ公は一時、昔を懐かしむような顔をした。

「私の名は、アレスミアではなく、アレスミアンというのだよ。

AではじまりNで終わる。父が残してくれた、血筋の証明はこれしかない。」

「あなたがだれであろうと、私にはかわりありません。ただ、兄妹とでも
言われたら、どうしようかと思いましたがけれど・・・。

あなたが何者か、これでようやく分かりました。でも、何故今まで内緒
にしていたの。」

「私が、今も嘘をついているとは思わないのかい。私の父が、あなたの
伯父だと言うことに。」

「はい。」

「何の証拠も無いのに。」

「ええ、あなた自身が、まさに・・・。ああ、そういうことでしたのね。」

「回りくどい道を、選んだものだな。アレスミアン。」

「私には、アズールの血など、どうでもいいことなのです。王になり
たいわけでもない。

でも、アズールの名と、王の名に利用する価値があるのなら
そうしましょう。ただ、今はこの国を救わねばなりません。」

「わかった、わかった。もういわずともよい。お前の言うとおりに
しよう。

お前を拾ってきたのはわしだからな。お前の成すところを
見届ける義務がある。どおれ、ひとつペルジアの悪党の頭を
一叩きしてくるか。」

翌朝、カラバ公は兵を半分に分け、その一軍に向け演説をおこなった。

「兵士たちよ！クラコワの旗に集いし兵士たちよ！
ときが来た。

この戦いに勝たねば、お前も、お前たちの家族も、この国にも
未来は無い。

東の蛮族に征服され、虐げられ、重い税に苦しみ、孫やその
孫の代までが終わりなき戦いに駆り出される ことだろう。

この、平和と安住の国を奴らの手に渡してはならない。

敵はわれらの数倍。
まともに遣り合ってはわが方に不利はあきらか。
この戦はかつて無い困難な闘いになるだろう。

しかし、われらには地の利、知恵の利がある。
勇敢なる兵たちよ。
お前たちの一人一人が、一人の兵、一人のクラコワとなることが、
この戦いを勝利へと導くのだ。

命を惜しめ。名を捨てよ。生き抜くために戦え。
アズールの剣とともに、行くぞ兵士たちよ！」

「出陣！」

ハイアルトの声が響くと同時に角笛が鳴いた。城壁に反響し、
長い詠嘆の詩を歌い上げるかのような響きだった。

兵士たちは、城壁に立ち、見送る新たな主のその胸に焼き付けた。

それは峻険な岩肌に咲いた、一輪のゆりのような光景だった。
再び、かならず生き抜いて、このゆりを見るのだ。

軍団は一路東の地を目指した。ブルタークまでは約四日。

その頃はまだ、ペルジア軍はまだ深い森の中にいた。

ペルジア軍の出血は止まらなかった。だが進軍も止まらなかった。

ペルジアは、王自らが出陣し、なおかつ退却に継ぐ退却と、消極的な待ち伏せしか攻撃の手札を持たないクラコワを兵力により圧倒し、森林地帯の小競り合いでは勝利し続けていると考えた。

事実、彼らは順調に首都への道のりを、敵を追いかける勢いで、通常よりも早く消化していた。

イズマイルへの報告も、敵の抵抗は空しく、ペルジアの進軍を妨げるものではない、クラコワの軍は何ほどのものではなく、首都攻略も何ほどのことも無いだろう、というものであった。

兵士たちは、己の武器と短期の糧食を携えて行軍を続ける。しかし、身軽な彼らに比べて、後方部隊は、補給の糧食や攻城に使用する木材等を、より少ない人数で荷駄に載せて運搬するため、行軍速度は遅くなる。

しかもこの東の回廊は、交易に使用されなくなって久しいため、荷物の運搬には向いていない。

その結果、先鋒の部隊から後方の補給部隊までの距離は、鉛の塊をしっぽに飲み込んだ蛇のような具合に、不恰好に長々としたものとなっていった。

また、このころには、ブルターク城からの攻撃隊が、山猫のごとく補給部隊に襲い掛かっていた。本隊の思惑とは裏腹に、既に長期にわたって戦線を維持することが、実は困難に成りつつあった。

けれども、常に十分な食事や酒が供される、イズマイルの耳にはこのようなことは入れられていなかった。

側近の誰もがそんなことをいって、補給の不始末を咎められることを恐れたからである。

この分だと首都攻略も短期で終わるだろう。そうなれば、兵糧が多少滞ったとしても然程の問題ではなくなる。

イズマイルへに食事が供せ無くなることで、彼自身が否応なくそれを察知するまで、だれの口からもこのことについては告げら

れることはなかった。

二日間の追跡行ののち、深い森は風とともに飛び去り、目の前には低くうねりながら重なり合う緑の丘陵と、その間を街道がいく乾いた大地がひろがった。

薄暗く、冷たく、湿気が多い森が終わったことに兵士たちは少し安堵したが、はるか丘の上の一団が、銀色の輝きで、これまでとかわらず彼らを誘っているのを見て、再び陰鬱な気持ちに引き戻された。兵士たちは、そこに何が待ち構えていようと進むしかない。

丘の稜線の陰、一群の樹林の中からは、矢が飛んでくることもあったし、飛んでこないこともあった。恐れと不安で、全てのものが、彼らを狙っているように見えた。

夕暮れの中に立つ低木が、敵兵に見えることもあったし、夜は遠くから響く角笛の音に、何度も目を覚まされた。

夜空の流星を見ては、明日は燃え尽きるわが身のことと不吉に思い。いずこかでないている梟に、冥界からの先触れが来たと震える若者もいた。

ペルジア軍はあいかわらず兵の数では圧倒していたが、彼らの士気の低下は、止どめようが無い状態に悪化しようとしていた。

その翌日、彼らの前にもうあの銀の一団はいなかった。

執拗に彼らを襲った待ち伏せもなかった。彼らの前には一人の人も現れなかったし、一頭の馬のいななきもなかった。

地上の人の営みには無関心な鳥が、時たま彼らの頭上をとび越えたり旋回したりするほかは、通り過ぎる村にも生き物の影は無い。

もちろん食料になるものも、鋤も鍬も荷車も、わら束さえも残っていなかった。まるで凍りついた死者の国を行軍するようなものだった。

日が天道をのぼり、傾くことが時間だけはながれていることを教えていた。

彼らが祖国を出て、早くも十日が過ぎていた。

いや、兵士たちは、今日が何日目であるかなどということはすでに忘れていた。

暗い森を何日も歩き、野宿を繰り返し、草原では煙に追われ、再びの森の中では突然襲ってくる矢におびえた。

もう何人やられたのかも、定かには分からなくなっていた。

彼らはもう、何のため前に進むのかも意識しなくなっていた。ただ前が進むから、ついていく。後ろに押されるから前に進む。逃げ出したくても逃げられない。逃亡すれば、故郷の村が焼かれる。

どこに行こうとしても、今は彼らが帰れる場所は無かった。敵がいなく、襲われる心配が薄れるにつれ、彼らの頭にはペルジアへの恨みが大きくなった。

しかし、その夕刻、先行する偵察から、悪魔の呪文に縁取られた吉報がもたらされた。

この道の先、程近いところにクラコワの城市が見えた、と。

「ご無事でなにより。」

「約束は守ったぞ。こちらの損害はほとんど無いはずだ。」

クラコワの城内で、アレスミアンとカラバ公が再会していた。中庭を取り巻く回廊を、二人を先頭に、そのあとをそれぞれの取り巻きが続いた。

「お疲れでしょう。しばらくお休みになられては。」

「なにをいうか。お前とは鍛え方が違うからな。なぁに、東の果てまで遠乗りしただけのことだ。あしたからは存分に槍働きを……。」

「明日の開戦はありません。ペルジア軍が陣をはり、それまでです。ここまでまともな補給を受けずに来ているでしょうし、追撃戦で兵も疲弊しているでしょう。攻城兵器は、まだはるか森のかなたです。向こうは態勢が整うまで、攻撃を見合わせるでしょう。」

カラバ公はアレスミアンをにらみつけながら言った。

「お前は、本当に面白くないやからだな。」

カラバ公の鎧の下で、鎖帷子の音がちゃりちゃりと鳴り続けた。

「おそれいます。」

「まあよい。ではどうするのだ。せっかくここまで引っ張ってきたのに。」

「餌が良いので、うまく釣れてくれました。次は薪に火をつけましょう。のんびり構えられては元も子もなくなりますからね。」

「何だ、その火をつけるというのは。」

「それはまあ、お楽しみにというところです。」

なにが楽しいものか、という渋面でカラバ公は早々にこの会見を終わりにすることにした。

「イーリアス、帰ったぞ。」

と、大声で呼ばわりながら、カラバ公とその従者たちは奥へ引き込んで行った。

「少し、からかいすぎたかな。」

アレスミリアンはその場に立ち止まって、誰と無く語りかけた。

「まるで父子のようですね。」

「父子？そんなものかな、父子って。」

「息子は年をとると、まともな話をするのが、照れ臭くなってくるものです。特に父親とは。」

「カラバ様が私の父か……。では、私はとんでもない親不孝者だな。」

「そうですね、親を餌に敵にわなを仕掛ける息子など聞いたことがありません。」

「ははっ……。」

笑いながら、王を餌にする家臣というのも、とんだ不忠者だなと思ったが、あえてそれは言わないことにした。

ただ、カラバ公が帰還したことで、この戦いが不確実ではあるが、彼らの意図した筋立ての下で、動いていることを実感した。

クラコワには何も分からない、という焦燥感が、この戦いの始まりから、彼の心をいらだたせている。このいらだちが、後におこった戦いでは、槍働きには全く自信が無いというアレスミリアンを、自ら戦場に立たせることになる。

ペルジアの斥候がクラコワの城市を認めたように、クラコワもペルジアの大蛇を見つめていた。長く伸びきっていた体は縮められ、とぐろを巻いて丘と丘の間に横たわり、長旅の休息をとっていた。

獲物へは、その体をもうひと伸ばしするだけの距離であった。

クラコワの城門は夕暮れの訪れと同時に閉められ、ペルジア軍との間には、今はまだ空虚な平野だけが残った。

風が吹いていた。風は旗を揺らせた。この風が城から吹けば、矢は遠くまで飛び、向かい風なら勢いを失う。

塔に立ち、見張りに立つものには、それを人の営みの歴史に残る大事の先触れに感じようと、風はいつもと同じ風であった。

日が沈み、また昇った。

ペルジアは、早朝から軍を二手に分け、一手はさらに遠くロンダルトを目指した。

クラコワには、王自らが六万を率いて進軍を開始した。

アレスミリアンが、シルヴェスタを通してペルジアの動向を探っていたのと同じように、イズマイルもクラコワやロンダルトの情報を集め、分析し、堅固な城壁をもち、人心を集めて守りを固めるクラコワこそが難敵であり、開放的で、欲望と金銭に墮落した貴族の住処となったロンダルト攻略には、然程重きを置いていなかった。

クラコワの動員兵力が二万、ロンダルトが四万。

本格的な城砦攻略となるクラコワにはその動員兵力の三倍をあてることは、戦略上の理由からであったが、イズマイルが親征にこだわったのは、ここがアズールの定めた都であったことによる。

クラコワとロンダルト、この連合王国を征服するということは、古代の英雄アズールが建設した都を征することである。

というのは、イズマイル独特の英雄観によるものだった。

彼は古から続く王家を世襲したのではなく、ペルジアは彼一代が

築きあげた王国である。

家臣団は、彼が一部族の長であったころからのものは少数で、大半は、王国建設の途上で吸収し肥大化したものである。

したがって、彼らには父祖から受け継いだ忠誠心は無く、ただ時代の趨勢によりこの船に乗り合わせているだけにすぎない。

彼らの日常は、政権の中での権力争いに明け暮れた。

イズマイルの側室に取り入り、それぞれが後継者を擁立し、次の世代での栄華はおろか、その時代のおとずれを早める謀略すらしかねないものたちであった。

一方、被征服民は、今は力によりひざまづくことを強制されているに過ぎない。戦って敗れた直後は反抗する力が無かったとしても、いつまでも服従を続けることはなく、いずれ反乱の芽は吹くだろう。

イズマイルはただの英雄気取りではなかった。

家臣団を統合し、被征服民の反抗心を削ぐために、彼は己の位を絶対のものとしようとしていたのである。

一地方国家の征服者ではなく、世界国家の覇者となることで、臣下の想像を超えた存在になろうとした。

それは家臣に対する生殺与奪を含めた絶対的な権力を誇示することであり、征服民へは圧倒的な存在への無力感を植えつけることになるだろうと想像した。

ただの気まぐれから、このクラコワ-ロンダルトの連合王国攻略に着手したわけではなかったのである。

動員兵力十万。その他の補助兵力三十万。兵糧、攻城兵器、いずれをとってもいまだかつてこの地上に出現したことの無い規模の大軍団であった。

彼の思考の中では、この兵力に対抗できる国家は存在しなかったし、それはクラコワでも同じだった。

アレスミリアンを含め、誰一人として、十万の軍勢に勝てると

思っているものはいなかった。したがって、この時期の城内は、これから始まるであろう激しい攻防戦に対する不安が、夜の霧のように充満し、冴え渡る月の光さえ、死の国の扉の隙間からもれているように感じられた。

しかし、その夜も、朝の光にだんだんと溶けていった。

その日、数日前に、ブルタークの人々が耳にした陰気な太鼓の音が、クラコワの街にも聞こえてきた。

「きましたね。」

「ついに、な。」

「なぜ、笑っておいでです。」

「笑っていたかな。いや、長々と待たされたからね。ようやく答えを教えてもらえるというか・・・、少しうれしくなったのかもしれない。」

「五年、六年・・・。」

「そんなところだろう。それにしても、六万の軍勢がこれほどのものとは。実際に目にしてみないとわからないものだな。」

ブルタークでそうしたように、クラコワでもひととき高い塔の上から、アレスマリアとニールリングが、敵陣を遠望していた。

丘一つを埋め尽くし、軍勢を誇示するかのようにはみえた。我に逆らう愚か者め、と。

「布陣というほどのものではありませんね。あのまま野営に入るのでしょうか。」

「おそらくそうだろう。あの距離からでは矢も届かないし、走ってくるだけでも、城壁に取り付く前に疲れつかれはてしてしまうさ。」

「あの天幕で囲まれた、派手なあたりが本営でしょう。」

「まさに自信たっぷりだな。こちらが攻め込むことなど、露にも恐れていないという風情じゃないか。」

「たしかに、六万もの人の壁を突き破って、本営に到達するのは至難のことでしょう。」

「残りの四万は今頃、ロンダルトへの途上だな。」

「ロンダルトへは早馬を送りました。今のところ、それ以外に打つ手はありませんね。」

「そうだ、こちらの戦闘を早く片付けないことにはな。」

軽口のような雰囲気はここまでだった。

「城内の雰囲気は、あまり芳しくはありません。」

「それはそうさ、誰が見てもこの軍勢の差では、勝てない戦だ。

いまから降伏して、開城するか。」

「ご冗談でもそのようなことは、あまり・・・。」

「うん・・・。そうだな。城内のものはみな命がけでここに集まって

くれているんだから。私が言うべきことではなかったな。それにしても、ニール。」

「はい。」

「小うるさくなつたな。」

「あなたが、年を取って獯く成られただけです。」

ニールリングも負けてはいなかった。

「さて、まだ日は高い。一つ餌をぶら下げに行くか。」

「本当に、行かれるのですか。」

「ひとつ、あちらに準備万端整えられたのでは、こちらの分が

いっそう悪くなる。まだ櫓も立っていないし、これといった攻城兵器が

用意されていない今、開戦したいのだよ。

二つ目、遅くなればなるほど、ロンダルトを救うことが難しくなる。

できればロンダルトの戦端が開かれる前に救援に向かいたいが、

それは困難だろうな。

それに、一度見てみたくは無いが、英雄とやらの顔を。

こんなことは、この数百年の間には無かったことだ。めったに

見られるものではないぞ。」

ニールリングは、この人の本音はどちらであろうか、という考えを
頭の中で一周させたが、おそらくどちらもそうなのだろう。

なにせ、一つのことを、一つのためにはしない方だから、と考えた。

私は、英雄の顔など毎日傍で見ているから、いまさら珍しくも無いと
思いつつも、

「異国の王様の顔とは、どのようなものでしょうか。」

「シルから聞いたが、鼻が異様に高く唇は薄いそうだ。眉は

飛び立つ鷹のように反り返り、目は奥深く洞穴の中に住む

トラのようだとか。」

「トラですか。」

「トラだ。」

「それはケモノのようなものですか。」

「・・・どうやら大きな猫のようなものらしい。」

「英雄というのは、どうやら複雑な顔をしているようですね。」

「まあ見てくるさ。仕度は出来ているな。」

「既に。」

「よし、いくぞ。」

「イーリアス様には。」

「・・・会うと未練が残る。明日に先送りしたくなる。だから会わずに行く！」

アレスミリアンは城館を出た。

前庭に白馬の手綱を抑え、旗を立てたイテカレスが待っていた。

「お供します。」

「この馬、どこで手に入れた。」

「サグリアのウイルダール様から頂戴しました。」

「ほう、気前がいいな。いい馬だ。」

馬の首筋から肩をなでながら、厚い皮の下に発達した筋肉を手に感じて、馬への信頼を高めていった。

「名は。」

「マクシミア。」

「マクシミアか・・・頼むぞマクシミア、いざというときは疾風のように駆けてくれ。
・・・ということで、供は不要だ。」

「しかし、お一人では危険です。」

おいおい、

「一人でも二人でも同じだろう。それに、途中で気が変わっても、お前がいたら格好悪くて引き返せないじゃないか。」

「いや、しかし！」

「心配は要らない。ちょっと見物に行くだけだ。」

心配は要らないとはいったものの、それは単に推測に基づくものでしかなく、推測は、往々にして当事者の思惑に沿うように捏ね上げられ、結論付けられる。

このときアレスミリアンは、イズマイルの英雄嗜好から、これから始まる会談が、イズマイルが残すであろう一代記の一章を、彩るにふさわしい挿話と成ると考えるであろうと推測していた。

イズマイルは東方の諸部族を平定し、王となったが、それはこの広い大陸の中にあるほんの一部の地方を統合したに過ぎない。

彼の英雄としての本当の歴史は、伝説の王、アズール・イクンの建国したクラコワ・ロンダルト連合王国への遠征から始まっているのだ。

アズールの血を引くアレスミリアンとの会見は、千年の歴史を越えた邂逅とでも言うべき、

一 少なくともお抱えの書記官は、それぐらいの脚色はすべきであろうし、
そうでなくては後の読み手は納得しまい 一

その冒頭を飾るのにふさわしく、それを卑怯な罫に掛け、血で塗るような姑息で無粋な振る舞いはしまい、というのが結論である。

それに、イズマイルにとっては、負けるはずのない戦いだ、との油断もある。

アレスミリアンは、マクシミアの首をポンポンと叩くと、その背にまたがりイテカレスから旗を受け取った。

その旗には、王冠を頂いた金色の獅子が、赤い背景のなかで左向きに立っていた。古より伝わるクラコワの象徴の形であった。

「よしっ。」

アレスミリアンが、足で馬に合図を呉れてやると、マクシミアは新しい主人の器量を試すように、ゆっくりと歩みだした。

前庭から第一の内城門をくぐるころには、馬も主人もお互いの調子にも慣れ、市街を悠然と巡りながら第二城門を目指した。

「アレスミリア様、だぞ。何をしておられるのか。」

「見回りかこのう、御自ら見回りとはご苦労な事じゃ。」

「それにしても、見事な馬だ。雪のように白く、速そうだ。」

「ああ、旗の色が良く映える。」

市外にたむろする民衆は、何が始まるのかといぶかって見ていたが、それが徐々に行く先が城門に向いていることがはっきりしてくるにつれ、これから何が起ころうとしているのかは、はっきりとしないものの、まさかとは思いながら、その後続くものが次第に数を増してきた。

これは予想外だな。

馬上では、アレスミリアンが、思いもかけずにできた行列を、できるだけ視界に入れないようにしながら、無言の行進を続けていた。

下手に声をかけて追い払おうとすれば、よけいに騒ぎが広がるかもしれない、さりとて、いつまでもついてこられても困るのだがと、内心の動揺を隠して、必要以上にひたすら前を向き、ことさら無表情を装う自身が、我ながら滑稽であった。

そうこうしているうちに、第二の城門もくぐりぬけると、平時であれば放牧の馬や牛がいるだけの外壁までの間に、今は代わりに、各地から集まった武装した男たちがその辺りに満ち満ちている中を、アレスミリアンを先頭としたおかしな一行が、外城門にむけた行進を続けていた。

兵士たちは、誰とはなしに、今なすべきこと、あるいは今からなそうとすることの手をやすめ、その成り行きを見届けようと棒杭のようにたって、目と首だけを動かしていた。

外城門の手前に来て、いよいよここらあたりが潮時かと振り向いたアレスミリアンは、あまりの人だかりに唖然とし、すぐには声も出せなかった。

およそ城のこちら側、三分の一ほどの市民が、黒山のような人だかりとなって詰めかけたようであった。

いまやその人だかりは、振り向いたアレスミリアンのいうことを聞き漏らすまいと、呼吸の音さえはばかれるように、静まり返っている。

数万の目が、こちらを凝視している。

やれやれ、まさかこんなことになるとは。

「これより私は、ペルジアの王と会見してくる。皆はここまでだ。」

われながら、なんとつまらぬ言葉だと心持ち赤面しながら再び城門を向くと、一人の人間と一頭の馬は、巨大な門扉が、

巨人の歯ぎしりのような大きなきしみとともに開かれた世界へと歩みだした。

人影の絶えた平原の中に、アレスミアンとマクシミアが進んでいく孤影は、異世界への旅立ちを見送るようでもあった。

クラコワの城門が開かれた様子は、丘の上のペルジアの陣営の興味を引かずにはおれない。

間をおかず現れた、騎士らしき姿のことと共に、軍議の間となっていた本営の陣幕の中へと伝えられ、それまでの議事はそっちのけにして、この闖入者についての詮索が始まった。

あるものは、

「降伏の使者に違いない。城外に押し寄せた、わが軍勢に恐れをなしたものと見られる。」といい、

またあるものは、

「交渉と見せかけて、何かの時間稼ぎをしに来たのではないか。」

あるいは、

「いずれにせよ、降伏などありえない。ここまで来ておいて一戦も交えずに引けば、わが軍が引き上げた後、間をおかず反乱を起こすであろう。徹底的に叩きのめすべきだ。」

という威勢の良い強硬な意見、もちろん、本人の意思というより、イズマイルへの受けを意識したものであるが、には多くの同調者が賛意を唱えたが、結局は会って見ないと分からないという、至極まともな終局を見たのは、アレスミリアンにとっては幸運だった。

この間、イズマイルは例のごとく一言も話さず、幕僚たちの議論に耳を傾けていたが、内心はどうしてこうも無能な人間ばかり集まってくるのだろうか、いささかうんざりしていた。

イズマイルには英雄志向があるとはいえ、単なる暴君ではない。

彼自身は、非常に現実的思考を優先する型の人間で、であるからこそ、混沌の東方諸部族を統合できたのである。

それが力による征服という形を取ったがゆえに、武を好む霸王としての印象が強く喧伝されていたが、彼が武力を用いるのは、小部族が乱立する世界では、話し合いによるよりも、手早く合理的

— 征服される側には合理的でもなんでもない非道に過ぎないが —

だという選択をしたからである。

鬼か悪魔のような噂も、派手な宝石をちりばめた悪趣味な衣装も、それが敵や味方に与える劇場的な効果を考えての振る舞いであった。

しかしながら、悪趣味な人間には、よい嗜好の人間は近寄りたがらない。汚れた水を好むのは、汚れた水を好む魚だけである。

彼の幕僚にひとかどの人物がないのは、イズマイルの本質が何であれ、周囲から見れば彼は悪趣味な人間
— ある意味、黒の宰相と通じるものがある —
であったからだ。

彼の身体からは、熟れて腐りかけた果実の、甘く狂おしい香りが漂うようであった。彼の幕僚たちは、そのにおいに引かれて集まってきた虫けらだった。

けれども、彼らには常に圧倒的な兵力があったので、その程度の本営でも、これまで敵に敗れることはなかった。

その間も、アレスミアンは淡々と馬をすすめていた。

もちろん、ペルジアの陣営の動向には細心の注意を払っていた。
もし、兵が激しく動くようであれば、すぐさま取って返すつもりであった。

そうでなければ、その場ですぐ殺されることもないだろうと、
またそれをより確実にするために、相手を焦らすほどの微妙な速度で
近づくことを心がけていた。

やがて、ちょうど中程まで進んだところで、マクシミアは足を止めた。

アレスミアンがペルジア人たちを眺めるのとは逆に、数万に
倍する眼が、じっとアレスミアンを見ていた。

この、無言の対面がいつまで続くのかと思われた頃、ペルジアから
一騎の騎兵が、土ぼこりを盛んにあげて、丘の傾きにそって弧を描きながら
走り出してきた。

その騎兵が、近くにくるまでの間、アレスミアンは思わず
逃げ出したい誘惑に駆られ、尻の下がやけにむずがゆかったが、
マクシミアの落ち着き払った背中に支えられ、なんとかそれを
しのいでいた。

「お前は、よっぽど度胸が据わっているように見える。」

マクシミアは、その言葉がわかったかのように、二度ほど首を
上下してみせた。

騎兵はアレスミアンの鼻先で馬を止めると、
「何者だ。何用でここにいる。」と問うた。

彼は緊張しているようだったが、特に殺気立つようすではなく、
何より言葉が通じることがアレスミアンをほっとさせた。

アレスミアンは、ペルジアの言葉を習ってはいたが、直接

ペルジア人たちと会話したことはなく、シルヴェスタからは、部族間の方言の違いも激しいときいていたので、言葉が通じるかどうか自信が持てないでいた。

「私はアレスミアン。クラコワの総司令にして、アズールの血を引くものだ。ペルジアの大王にお取り次ぎ願いたい。」

騎士は何かいい忘れていないのかと、問うような顔をしていたが、自分から

「で、用向きは何事か。」

と再び問いかけた。

「特にない。ただ面会に来ただけだ。物見遊山とでもお伝え願おうか。」

「それだけか。」

「そうだ。」

この男は、阿呆か、気が触れたのか、とでも思ったのか、それとも折角いい役をもらってここまで出てきたのに、気の利いた台詞の一つももらえなくて気落ちのした役者のように、来たときとはまるで別人のような勢いのなさで、舞台の袖へと戻っていった。

アレスミリアンは、

「ここでこうして待つのも落ち着かない。ちょっと行ってみるか。」
とマクシミアに話しかけ、いまやすっかり無二の親友のような
気持ちになっていた馬の腹を蹴った。

マクシミアは、のんびりと日差しを楽しむかのようにペルジアの
陣に向かって歩みだした。

伝令の騎士の言葉は、天幕の外から内の取り次ぎに伝えられ、
取り次ぎからイズマイルに伝えられたときに、その言葉を聞いた
取り巻きたちは、身体と装飾の剣や羽をを揺らしながら、
嘲るような失笑を漏らした。

「アレスミリアンか、聞いたことはあるな。この国の呪術師といったか。
いや・・・違うな。
まあよい、アズール・イクンの血を引くものだとは驚きだな。」

イズマイルは、アレスミリアンがこの国でどういう立場に
あるものかを、ほぼ正確に知っていた。イズマイルが知っている
ということは、それだけ彼が重要人物である、ということの証明に
他ならない。

この天幕の中にいる幕僚たちでも、末席の者は名すら覚えて
もらえない。イズマイルが名を覚えるということは、それだけで
政争に巻き込まれることを意味していた。

イズマイルが彼の異名をあやふやにしたのは、彼の記憶が不確か
だったからではなく、彼がアレスミリアンに興味を持っていることを
気取られたくなかったからである。

アレスミリアンが、シルヴェスタを使ってペルジアを調べたのと
同様に、イズマイルも連合王国を探った。

ただそれは、この天幕の下にいる蠅ではなく、彼が本国に残し、
留守中のおさえとした腹心を動かして得た情報である。

英雄は大胆でなければならない。細心は、時に臆病と誤解され、侮られる。

会わねばなるまいよ。

まさに今、己が凌駕しようとしている古代の英雄の末裔がお出ましなのだ。

「待たせておけ。」

という言葉が、何か目に見える手形を渡されるように、先ほどの騎士に伝えられると、騎士はその手形を懐に押し抱き、再び馬上の人となった。

「確かに地上にあらわれた最大の軍団だが、最強の軍ではなさそうだな。」

マクシミアは、うんうんとうなづくように首を振っている。

「そうか、お前もそう思うかい。賢い馬だな。」

マクシミアは、満足そうに首を振っている。

「みてごらん、兵士たちが、肩を寄せ合うように小さな塊を作って、思い思いに野営しているだろう。あれはきっと、出身部族ごとに固まっているに違いない。

あの軍隊には絆が無いんだ。どこかが窮地に落ちても、それはそれだけのこととして、勝手に戦うことしかしない。」

アレスミリアは、既にペルジアの野営地の外縁に到達していた。ペルジア軍は小高い丘を本営に当て、クラコワ側に扇形の裾野を広げたような、まるで二枚貝の殻を伏せたような形に野営地を定めていた。

この形であれば、接近するものが有れば斜面のどこからでも見下ろすことが出来る。今やアレスミリアンは、劇場の舞台に姿を現した役者のようであった。

ペルジア軍の兵士たちは、ただ傍観を決め込んでいた。

彼らは、イズマイルかその代理人の命令が無ければ、決して動かなかった。

無用の戦いも、無用の出血も好まなかった。それは彼らに出来る最低の、ペルジアへの抵抗であったのだ。

伝令の騎士は、アレスミリアンがまさかここまで来ているとは思わず、「待たせる」という命令がこれでは無効になりはしないかと、なかば恐慌をきたしながら、アレスミリアンに向かって、

「そこで待つのだ。イズマイル様がお会いに成る。それ以上、一歩も動くではないぞ。」
と一喝した。

が、アレスミリアンはそれにはかまわず、かわらぬゆったりとした歩調で、マクシミアを先へとすすめる。

「止まれというに！なぜ従わぬ。」

「馬は、お前の命令など聞かない。」

「なんだと！」

「お前の主人は、おそらく待たせておけ、とでも言ったのだろう。

どこで待たせろとか、足止めをしろとか、そんなことまで言ってはいない。

違うか。」

騎士は憎々しげに顔をしかめた。

「・・・確かにそうだが。」

「であれば、止まれというのはお前が勝手に命令をしたことになる。

私は、クラコワの総司令官だ。降伏したのでもないし、命乞いに来たのでもない。お前のようなものに命令される所以はない。」

このとき騎士のはらわたは、煮えくり返っていたに違いない。

その熱を帯びて顔は朱に染まり、鎧の隙間からは蒸気が吹き出していた。しかも自軍の、外人部隊の衆目の中である。

羞恥と怒りとで、危うく剣を抜き、アレスミリアンに切り掛かる、という怒りをかろうじて押さえたのは、イズマイルが「会おう」と言っているものを殺してしまっただけは、自分の首と胴体が、明日の朝までつながっているはずがなかったからである。

アレスミリアンは、もちろんこの辺りの事情を意識して行動しているのではあるが、それ以上に、周囲の被征服民部隊への印象を考慮しての振る舞いでもあった。

アレスミリアンは、服従しない。

そういう印象を植え付けること。それが彼の今後の計画に、役立つはずであった。

あの男の言いなりに、動いているようではいけない。多少の危険はあっても、主導権を渡してはならない。

十代から宮廷暮らしをつづけ、その中での上がり、魔性のものとも言うべきロンダルとの宰相と渡り合ってきたアレスミリアンの直観が、そう命令するのだった。

「まあ、お前の咎にはならないだろうよ。」
と、言い捨てると、もうその騎士などは砂埃に巻かれて消えてしまったかのように、一瞥すらせずに前を通り過ぎた。

そしてその視線は、本営のある天幕が開かれ、現れた一人の男に注がれていた。

男は、黄金に輝く小刀を腰に差し、数人の侍従を付き従え、人が両手を伸ばしたよりも大きな日傘を差し掛けられて、堂々とした体躯を左右に揺すりながら、アレスミリアンに視線を注ぎつつ歩んできた。

やがて、双方が数十歩の距離に近づくと、侍従の一人が走り出て、「御前である、馬を下りられよ。それから武器は預からせていただく。」と丁重な調子は崩さないが、有無を言わせぬというように呼びかけた。

アレスミリアンはしばし眺めていたが。

「御前というのは、その男の前ということをいっているのか。

それとも、我が国の言葉を使い慣れぬが故の過ちか。

この男の前で下馬するのであれば、お前の主人には拝跪せねば

なるまいが、それは私の立場上出来ぬことだ。

私はお前の主人の家来ではないし、降伏するつもりもない。

それに、私は武器などもってはいない。この旗竿だけだ。剣の様に人を害することは出来ないが、この旗竿の先に翻るは、わが国の象徴。

おろかにも人命よりも重いという者もいるが、私はそんなことは思わない。さりとても、敵の手に渡すことはもちろん出来ない。

ゆえに、これもお前に預けるわけにはいかない。」

やれやれ、イズマイルに会うのに、あと何人の道化を相手にせねばならぬのだ。ペルジアも案外つまらない国だな。

その侍従は、アレスミアンがささやかな計略に引っかからなかったことよりも、武器を持たずに来たことに少なからず驚いた。

それは、堂々とした体躯の男に伝染し、さらに、天幕の陰で成り行きを見守っていたイズマイルにも軽く飛び火した。

「噂にたがわず面白いやつだな。どれ、出向いてやるとするか。」と、イズマイルが出ようとする。

「いや、それは危険ではございませんか。なにも陛下が直接お会いにならずとも。」

と、取り巻きの一人が、腰をかがめ、頭を垂れて懇懇に申し出た。

イズマイルは振り向きもせず、

「お前は、丸腰の男に予がおじけづいたと後世に語らせたいのか。」という

「いや、そのような・・・、滅相もございません。」

と、取り巻きが返すのを最後まで聞きもせず、

「馬を引け。」と取次ぎに申し渡した。

天幕の外には、きらびやかな刺繍・縫い取りが施された飾り布と、象嵌と彫刻が美しい鞍がすえられた黒馬が用意された。

「ほう、どうやらお出ましのようだな。」

道化たちは、アレスミアンの前で進退が窮まっていた。わきの下は、季節外れの生ぬるい汗にまみれ、アレスミアンににらまれた顔は、かえるのように引きつっていた。

そのアレスミアンの一言に、男と侍従も、それに気づいてほっと胸をなでおろしたようであった。

「出迎えご苦労だったな。お前たちの主人も人が悪い。お前では、私の聞いているイズマイル殿とは似ても似つかないし、ましてここまで歩いてくるなど・・・。ほんの戯れというところか。前触れもなく押し掛けてきた引け目もあるからな、許してやろう。」

イズマイルは身軽に馬にまたがると、丘を下り始めた。
供はつけなかった。

遠目に眺めても、イズマイルは、王としての威厳をあたりに
放射している。

これまでの登場人物には、鼻白んでいた兵士達も、イズマイルが
近づくと緊張が高まるのが、アレスミリアンの肌に、ぴりぴりと
伝わってきた。

「マクシミア。気圧されてはいけないよ。」

互いに騎乗のまま、アレスミリアンとイズマイルは興味深げに
お互いの面を見合った。
英雄とはこういう者か。体から自信があふれ出ているようだな。
こういう者の下にはつけないな。私の嗜好に合わない。

「お前が、アズール・イクンの末裔か。」

「いかにも。」

「名は。」

「アレスミリアン・スークリア。」

確かそんな名前であったか。どのような事情かは知らぬが、

「ロンダベルでは無いのか。」

「訳あって、母の家名を名乗っている。」

「アズールの名を出せば、予が乗ってくると思ったのか。」

「私が、貴公を見たいと思うたように、貴公もアズールを
みたいと思うのではないかと。」

「なるほど。面白い読みだな。だがな、それだけで来たのでは
ないぞ……。」

イズマイルの顔が、いたずらっぽく笑ったように見えた。

「お前もなかなか面白い。敵を探っていたのは、お前だけではない。」

判るな。」

「はは、ご存じであったとは。」

が、私にどんな興味を持ったというのだろう。それをまず聴いてみたい気がする。私がアズールの末裔であることは、まだ数人が知るのみだ。オルクサンならともかく、他国の王が興味を持つほどの男では無い気がするが。

アレスミリアは、僅かな時間の中に、イズマイルに抱いていた先入観がどんどん変わっていくのに驚いた。

外見は確かに英雄豪傑然としているのだが、内心は細心さに満ちているのではないか、という印象を徐々に強くした。

「あれだけ堂々とやられると、小気味いいものだな。あの男。

なかなか度胸がいい。」

「なぜ放っておかれた。」

「痛くもかゆくもない。」

「確かにそうだろう。」

「それに、予の後宮にも巔頂にしておる者がいる。予は見ないが、珍しい毛皮や細工物をそろえているらしい。気前よく賄賂も差し出す。よくした男だ。

ところでお前は似ているのか、アズール・イクンに。」

「そういわれる方も居られる。」

「いい標的が出来たな。この顔を見つけたものに、褒美をあたえましょう。この次城内で会うときは、ちゃんと跪くのだぞ。

そうすれば、この度の無礼は許してやろう。」

よく言う。言われっぱなしは気分がわるい。

ええい、何か言い返してやれ。

「いや、直接言葉を交わすのは、これが最後だろう。」

「ほう、それはあきらめか。それとも自信か。」

「いかようにでも取られるがよい。いや、あまり我らを侮られぬ方が
良いだろう。すでにあなた方の裏方は、青息吐息のはずだ。」

「何のこと、かな。」

イズマイルの返答が、ほんの少しだけ遅れたように感じた。

ふふ、良い気持ちだ。

「ご存じないか……。ならご自身で確かめられればよい。」
イズマイルが次の言葉を継ぐまでに、さらに少しの間があった。

「補給のことを言っておるのなら、それは期待はずれだな。
果実は熟れきってもう目の前に、手を伸ばせば届くところにある。
案じるにはおよばぬことだ。」

イズマイルというのは、想っていたよりも常識的な男なのだ。
もちろん並みの男ではないのだろうが、人の噂が言うような、怪物や
悪鬼ではない。

補給が滞っていることは、知らなかったのだろう。孤高な英雄かもしれぬ。

「剣は持たないのか。」
「敵地へ単身乗り込むのに、剣などなんの役にも立たない。」
「予をそれで刺す。」
「それでは、よほど目立たぬところに隠さねばならない。たとえば
この旗ざおの芯などをくりぬいて、仕込むとか。」
といいながら意味ありげに旗に目をやった。

イズマイルは、アレスミアンとの距離がいつの間にか近づきすぎた
ことに気づき、その動揺がかすかに手綱を持つ手と肩の動きに現れたが、

「そのつもりであれば、口には出さないな。」
「先ほどの、ご家来衆の悪ふざけへのお返しとでも。」

そのまた返礼のつもりであったのだろうか。

「お前は総大将だろう。総大将を失ったら、お前の国はどうする。」
といって、冷ややかな笑いを浮かべた。確かにいま一声号令を掛ければ、
命はない。

「私を殺しても、この戦には影響はない。私は特別勇猛な兵士では
ないし、剣を持って戦ったことすらない。この戦の行く末はもう
決まっているのだ。」

私が死んだら、幾人かは悲しんでくれるものがあるだろうが、
それだけのことだ。未来は変わらない。」

ほう、思いがけないことを言うものだ、というように目を見開いて、

「この戦の行く末は、もう決まっている……。

『預言者』だったかな、お前のあだ名は。余はあいにく占いや卦は信じないのだ。」

「私も、占いや神がかりなどは信じない。あなだが、人の噂を否定しないのと同じように、私もあえて否定しないだけのこと。そのほうが世の人々には受けがいい。

あえて公言し、それが実現するように人やものを動かす。それを予言というのなら、そう呼べばいい。」

「ではこのたびの予言はどうなのだ。お前たちが勝つとでも言うのか。」
アレスミリアンは、いたづらを仕掛ける子供のような笑みで返した。
「それを言っては、明日の楽しみがなくなるだろう。」

「明日だと。」

イズマイルは、ひょっとしたらこの戦の筋書きは、己がいま手にしているものとは違うのではないか、という疑念に不機嫌な表情になった。

「そう、明日、戦場で会おう。」

アレスミリアンは、退散するときが来たことを悟った。

これ以上ここには、本当に危うくなりそうな気配が、イズマイルからしたからであった。

マクシミアは首を巡らすと、退屈に飽き飽きしていたのか、はねるような並足で来た道に戻り始めた。

一度後ろを見せてしまえば、二度と振り向くことは出来ない。

アレスミリアンは、今にも何者かが大刀を振り上げて、襲いかかってくるような気がして、直ぐにも全速力で駆け戻りたいのをこらえながら、クラコワへの長い長い道に戻っていった。

そんなことをすれば、今までの振る舞いが総て水の泡となる。

普通、道は来たときよりも、戻るときの方が早く感じるものである。けれどもこのときのアレスミリアンには、マクシミアの足が空回りしているのではないか、と思うぐらいの長さを感じていた。

ようやく、ペルジア陣地との中間あたりに達した頃、思い切って振り返ってみたが、ペルジアには動きはなく、イズマイルらしき人影もそこにはすでに無かった。

「帰ろうマクシミア。」

ホッとして声を掛けた。気が付けば冬というのに、背中汗で濡れていた。こんなにやせ我慢をしたのは、生まれて初めてだった。

馬は心持ち速度を上げたようだ。

クラコワの城壁が、次第に近づき大きくなる中で、アレスミリアンはそこに人々が鈴なりになり、身を乗り出すようにこちらを注視しているのに気がついた。

「なんて事だ、みな、ずっと見ていたのか。」

庶民の顔があり、兵士の顔があり、貴族の顔があり、大人の顔があり、若者の顔があり、男の顔があり女の顔があった。

笑っているような顔もあれば、泣き顔もあるような気がする。

イーリアスは、あの中にいるのだろうか。少なくともイテカレスはどこかに紛れているだろう。

ニールリングは、城のどこかで声だけを聞いているはずだ。万が一にも私に、顔を見られたくは無いだろうからな。

アレスミリアンはふと思立って、そのまま城門へ続く道をそれ、城壁の北端にマクシミアを向かわせた。

道を大きくそれたアレスミリアンに、次は何事が起きるのかと見守る人々の前で、つと、馬首を返し、今度は城壁の南端をめがけ、大きく旗を掲げてマクシミアを全速で走らせた。

城壁の上で身を乗り出す人々の前を、白馬に真紅と金の紋章の旗を掲げたアレスミリアンが、矢のように駆け抜けていった。

それと呼応して、人々は腕を振り回し、槍の柄尻で足元を砕き、剣を突き上げ、スカーフを振り、地鳴りのような歓声を上げ、再び城門をくぐる頃には、アレスミリアンの名を呼ぶ歓声が響き渡った。

人々の歓呼に手を振って応えながら、オルクサン殿の望みはこれだったのかもしれない、と、心のなかで解けない氷を抱いた自分はそう想っていた。

それは生きている限り続くであろう孤独感を、心の中に住ませたものにしか理解できない共感覚だった。

アレスミリアンとオルクサン、そして・・・彼はもう一度だけペルジアの方角を振り返った。

イズマイルは、天幕に入る前にその様子を遠望し、クラコワからの歓声が、風に乗って聞こえてくるのを聞いた。

「やはり、殺しておくべきだったかな。」
誰に言うとも無く、そう一人つぶやくと、幕僚たちに宣言した。

「明日、日が沈むまでに落とせ。」
みな、あまりのことにわが耳を疑い、息を呑んだ。
いま、何を言ったかと反問したいのは山々だが、それはここでは許されない。
ただ一同が、一様に動揺していることが、自分が聞いたと想ったことの正しさを証明しているようだった。

しばらくは、沈黙の中で灯心だけが明々と燃えていた。
ようやく、この座の筆頭を自認する男が、お恐れながらというように声を出した。

「いまだ攻城の兵器も届かず、国境いの城攻めのことにもありますように、いたずらに攻め立てるのは上策とは思えませぬ。」

それは、意外とでも言うように、
「何故、兵器は届かぬのだ。」と返すと。
「行軍の速度が当初より速く、運搬部隊が追いついておりません……。」

— なんだと。

「つまりそれはこういうことか。敵を追い詰めて主城に追い込んだという、お前たちの言い分は虚言で、我々はいたずらに誘いだされて、ここまで来てしまったということか。」
「いや、けしてそのような事ではありません。やつらは抵抗するすべ無く撤退したのです。」

「では、補給に懸念は無いのだな。」
「はい、当面は問題ございません。」

「……その当面というのは半月か、一月か。」

「はい、そのう・・・五日ぐらいかと・・・聞いております。」

この男は、次第に身を守ることを優先し始めた。

「なんだと。」

今度は声に出た。

イズマイルには、先ほどのアレスミリアンの姿が、鬱陶しくて仕方が無かった。

甲冑もつけず、剣すら帯びず、生きて帰ることが当たり前とでも言うようにふらりと来訪し・・・。

「いや、五日とはいささか短こうございますが、そのうち糧食も届きますれば・・・。」

「来るのだな、まちがいなく。」

「はい、そのように申しておりました。」

言いたいことだけ言って、帰ってしまいおったわ、あの小僧！

「こなければ、飢え死にか・・・。なぜ補給が滞る。」

「国境いにございました城。あれが街道に妨害を。」

「まだ落としていなかったのか！」

「いささか手間取っておりますて、奴らめの一隊と想われる集団が、深い森を楯に、わが補給部隊を襲っているとか。

いやしかし、いまや警護も手厚くしておりますので、必ずや補給は、まもなく、いましばらく！」

「警護を手厚くするという事は、それだけ人足が減る。それでは寄せ手が足りぬわ！」

”あまり、我らを侮られぬ方が良いでしょう・・・。”

アレスミリアンの言葉が、雲の切れ間の日差しのように、ざらりと脳裏に蘇った。

あの若造に、してやられたということなのか。敵を誘い込むのに、国の心臓までさらすようなことを誰が想像しよう。

今までそんな戦い方をした部族はなかった。

この冬瓜頭どもとは、すこし役者が違いすぎたか。

このまま長引けば、食料は確実に不足する。そして、わが軍は忠誠心で結びついているのではない。食料が足らなくなれば、脱走者が出るだろう。生き残るにはそれしかないのだからな。

敵地の真ん中でそういう事態に陥ると・・・。

この屈辱をすすぐには、一刻も早く攻め落とし、奴の思惑が外れたことを思い知らせるしかない。

「明日、日暮れまでに攻め落とすのだ。さもなくば全員飢え死にだ。」

この後、男は幕僚としての特権を奪われ、本営への出入りを禁じられ、前線の司令官とされた。

それでも補給の責任者よりはましであり、その男はただの兵卒として、壁に向かって走らなければならなかった。

「ニール！」

その少し前、城門からペルジアまでの無人の野とは対照的に、外城門から内城までの道のりは、群集に埋め尽くされていた。

アレスミリアンは、人々の歓呼と差し出される手に応えながら、内城までの道のりを、いつたどり着くとも知れない行程を、急がなければ成らなかった。

アレスミリアンが、人々に悟られないように馬の耳元で、
「マクシミア、何とかならないか。」
と嘆くと、馬は大きく前足を振り上げ後ろ足立ちになり、それに驚いて群集は後ずさりした。

マクシミアはそれを何度か繰り返し、ぽっかりと明いた空間に向かって、徐々に速度を上げて駆けだした。

人々が、馬の勢いを恐れ、行く手を避けて道の両側に下がると、石畳が光る帯のようになり、道があらわれた。
人と馬は、一体の矢となって駆け抜けていった。

それはさながら、先ほどの城壁の前の疾走の再現のようであった。
人々は興奮した面持ちで、時ならぬ騒動に沸き立ち、街路の賑わいはしばらく収まらなかった。それまでたまりにたまった鬱屈が、爆発した様でもあった。

「ニールリング！」

再び城の奥に向かって叫ぶと、ばたばたという足音とともにニールリングが登場した。

「一体、何の騒ぎですか。城下は。」

「明日、開戦だ。」

「承知しました。」

主従は、いや師弟というべきか、は、それ以上の言葉を
交わす代わりに、お互いの目を見合った。

「各地区、各隊への伝達はおわりました。」

アレスミリアンに遅れて城内に戻ったイテカレスが、その間に
割り込んだ。

「集合はいつだ。」

「一刻もかかりません。」

「よし。」

というなりアレスミリアンはその場を離れようとして、

「お前は城壁にはいなかったのか。」

とふりむくと、いたずらっぽく笑うイテカレスをそのままにして、
奥へと向かった。

「どちらへ。」

と声を上げたのはイテカレスであった。

「いとしい人に来て来る。お前たちも今のうちだぞ。」

と振り向かないで答えた。

その後ろ姿をしばし見送った後、

「ああもう、勝手にしてくださいって感じだな、
ニールリング。」

と、アレスミリアンとの付き合いの長さ、その信頼においては
少し格上の朋輩に声をかけた。

ニールリングはその言葉に直接は答えず、

「おまえ、王族の結婚儀礼を知っているか。」

と、此の状況下では突拍子もないことを問いかけた。

「俺がそんな年寄りくさいことを、知るわけが無いだろう。

何だ急に……。おい、まさか。」

「そうさ、間違いない。あの人が、はっきりと口に出して
いったことが今まであったか。」

「おい、やめてくれよ、この危急存亡の時に、もう一つ
お荷物を背負う気か。」

「明日開戦となれば、後は計画通りことを進めるだけだ。

それは我々の役目というよりは、ハイアルト様の領分だろう。」

「ああ。お前も俺も、城壁の上に立つわけじゃあないからな。」

「あの人の中では、もう終わっているんだよ。明日、イズマイルを
戦場に引き出すことで、クラコワの攻防は先の見通しが立ったんだ。」

イテカレスは、それはいくらなんでも大胆な推測に過ぎるだろうと思った。

「ロンダルトは？」

「私達の出る幕ではないのだろう。おそらく……。」

「想像もつかないが、な。じゃあ我々は、明日からの攻防のさなかに、
結婚式の準備をするのか。」

「まさか、そこまではしないよ。けれども、心積もりはしておいてくれ。」

「冗談だろ、ニールー。」

どうやって、花嫁の衣装を揃えるっていうんだ。

「いい話じゃないか。ここ何ヶ月か、開戦準備と籠城で、人々は
家族と離ればなれになり、疲れ、すさみ、時には明日への希望を

失いそうになっている。この縁組みは、此の国の未来に向かって
明るい光となるだろう。」

イテカレスは、やれやれというように、

「お前もアレスミリアン様も、もう少し普通にやれないものかな。
結婚ぐらい。」

といって肩をすくめ、

「とりあえず、表を見てくる。そろそろ各地区の代表達が集まって
くる頃だろうから。」

というと、もと来た道に戻っていった。

その口調には、まだ、いい加減にしてくれよ、とでも言いたげな
抑揚が残っていた。

この城の奥の、限られたものしか出入りを許されない区域を、アレスマリアンは足早に進んでいた。

すれ違う侍従、侍女達は、手にものを捧げ持ったまま壁際に後ずさりし、通り過ぎるまでを目線を伏せてやり過ごした。

その壁には、いつの時代からあるかわからぬような古い肖像がかかり、いまその前を通り過ぎる、幾世代か後の血族を見下ろしていた。

「イーリアス様。」

部屋の入り口に立ち止まり、名前を呼んだ。がしばらくしても返事がない。

「イーリアス様。」

「誰ですか。」

声色から察するに、これは相当ご機嫌がよろしくないようだ。アレスマリアンであれば、足音だけでも判るはずなのに、イーリアスは気づかぬふりをしている。

「アレスマリアン、にございます。」

「知りません。」

知らぬと言われては、次の句が継げない。いったいどうしたものか。

「失礼致しました、それではこれにて。」

「待ちなさい！」

しまった。本当に怒らせてしまったようだ。大事なときに何時も言葉でしくじる。

が、ともかく会わねばならない。アレスマリアンは、伏し目がちにして、イーリアスの前に進んだ。

「いつも、いつも。わたくしには何も知らせず危ないことばかりして。」

「はっ。」

「侍女達が騒いでいるので、何事かと糺してみたら、ひとりで敵陣に乗り込んでいった、と言うではありませんか。」

「いえ、乗り込んだなどと、そんな勇ましいものではありません。」

「では何をしてきたのです。」

「敵の大將に、少し挨拶を。」

「・・・わたくしがその間、どのような気持ちでいたか、判りますか。」
イーリアスの声が、一段と低くなった。

怒りで震えているような、こんな声を聞いたのは初めてだった。

「大事なときには、なにも仰ってはくださらない。わたくしが、
こんなに心配しているのに、胸がどうにかなってしまいそうに
震えているのに。」

そうして、イーリアスの眼からは、今にも涙がこぼれそうであった。

「あなたは、危険なことには自分ひとりの命をかければいい、
と思っている。あなたはそれでいいかもしれないけれど、
周りのものはどうなるのですか。」

今、あなたを失っていいと思うものなど、誰もいないのに。
残された者はどうすればいいのです。後を追うことすら出来ない
というのに。」

「イーリアス。」

アレスミリアンは、二人きりのときでいるときの呼び名で
女王の名を呼んだ。

「済まない、あなたの言うとおりに。」

腰掛けるイーリアスの前に進み、片膝をついて、イーリアスの青ざめ、
震える手を包んだ。

「けれども、これ以上の方法はないんだ。私が、・・・」

「いわなくても、判っています！

けれどもどうしようもないの。あなたが危険に近づいても、私は
女王として止めることが出来ない。だから、私が苦しまないように、

あなたは何も言わずに行ってしまう。

あなたは何も言ってくれない。生まれの秘密にかかわることも、私がこの国を継ぐことになることも。あなたは何も打ち明けてくれなかった。私の運命は、あなたが操る隠し事の一つになってしまった。

私は自分で絵を描きたかった。あなたと一緒に機を織りたかったのに・・・。」

イーリアスのすすり泣く声が、戦いの前の興奮と、静寂が入り混じる古城の小さな一隅を、人が生きるための灯りのともされるところであると告げていた。

小さな喜び、悲しみ、人の暖かさ、孤独の寂しさ。そうしたものが、胸のうちに秘められ、語られ、感じ合う場所であると。

城内のとある部屋では、ニールリングが難しい顔で腕組みながら、城の地図を見つめていたし、イテカレスは、地区の代表者たちと話しこんでいた。

ハイアルト卿は、剣に映りこむ灯りを眺め、カラバ公は、市街を動き回る松明を見ながら杯を重ねていた。

はるか遠くのブルタークでは、キリアンデルと“爺さん”ダルマールが、雪のちらつき始めた城内で、長期化する籠城をどう乗り切るかを話し合っていた。

そしてさらに遠くの北の地に、シルヴェスタとルークス・カルフが居た。

イーリアスが心を乱したのには、いろいろな理由があったのだろう。

迫り来る戦争、初めて分かった血の重み、国の母としての責務、無力感。

それは、気に入らぬ衣服のように脱ぎ捨てることも出来なければ、皮膚についた泥のように、洗い流すことも出来ないものだ。

アレスミリアンやオルクサンは、このような、自分の影法師の深い闇の中に潜み、気を抜くと取り付いてがんじがらめになってしまう、恐ろしいものと戦って生きてきたのだ。

そういうことを、ようやく知った。

「ごめんなさい。なにか御用があって来られたのですね。」
涙をぬぐいながら、イーリアスは普段の自分を取り戻そうと努力した。

「明日、ペルジア軍は総攻撃をかけてくる。だから、いま城内に、この戦いの主立った役割のものたちを集めているんだ。」

「そう。ついに始まるのですね。それとあなたが今日向かわれたことは、関係しているのですね。」

アレスミリアンはただ頷いた。

「わかりました。少し身づくろいをしてまいります。

こんなひどい様子で、出て行くわけにはいきませんものね。

それくらいの時間はいただけますのでしょうか。わがまま王子様。」

やられた。という風に顔をしかめて、

「もう一つ。その席で、私は、私についての事実を、みなに明らかにしようと想う。」

イーリアスは、改めて背筋を伸ばした。

「では・・・。」

その頬に輝きが戻り始めた。

「うん、私がアズレクンの血を引いていることを、告げようと
想うのだ。アズールの剣の下に戦おう、と。
それが何より、彼等の心の支えとなるだろう。
そして、この戦いが終わったら、私と君は、此の国の共同統治者となる。」

イーリアスは、その意味を理解するのに時間をかけていたが、
「つまり、それは、私に、結婚を申し込んでいるのですか。」
と、おそるおそる聞いてみた。

「そういうふうに聞こえたなら、そういうことだ。」
アレスミリアンは赤面したことを隠そうと、横を向いた。

イーリアスは、若い一人の娘となった。
「あーあ、あきれた……。結婚の申し込みぐらい、もっとロマンティック
なものかと思っていたのに。こんな時に、こんなに回りくどい言い方で。
きっと、私でなければ聞き流していましたわ。
子供のころは、お庭の花を摘んでくれたり、星の名前を教えてくださいたり、
本当にお優しくかったのに。」

「すまない……。」
アレスミリアンは、もう羞恥で首筋まで赤くなりそうだった。

「でも。仕方がありませんわね。あなたのお母さまにお願い
されましたもの。“アレスミリアンをよろしく”、と。」
「それでは。」
「さあ、参りましょう。みなさまお待ちかねでしょうから。
私も後からすぐに参ります。」

どこかに控えていた侍女たちが、足音も無く現れた。
アレスミリアンはそれを潮時に、部屋を辞した。

「この戦いが終われば、共同統治者に……。確かに回りくどい
言い方だし、詩的な雰囲気もかけらも無い。が、それが私の精一杯だよ。」

アレスミリアンは再び顔を上げ、自分の戦場へと向かっていった。

広間には人々が詰めかけていた。

クラコワの区々の代表がいれば、兵達を統率するものもいる。
それらが思い思いの場所に混ざり合っ立っていた。

その雑多な人種の中にいたイテカレスが、アレスミリアンの登場を見て取り、

「遅かったですね、何か有りましたか。」
と笑みをちりばめて近寄ってきた。

どうやら、先ほどまで話し込んでいた男たちとの余韻が残っているようだ。

住民たちは、危機的な状況にはあったが、不思議と悲壮感はなかった。
どちらかという、非日常的な高揚感に包まれているように、
よく喋り、笑い、飲んだ。

その一言がアレスミリアンに、まだ生々しく苦い記憶を蘇らせた。

「ああ。あったさ。」
・・・しまった、私の口の軽さときたらアヒル並だ。

「み、みなさま、すでにお揃いです。」
イテカレスは急いで話題を変えようとした。
「そうか、ごくろうだったな。」

・・・だめだ、怒っておいでだ。そんなつもりではなかったのに。
ニールだったらこんなことを、口を滑らせたりはしないんだろうな。
ええいくそ！

「お集まりのみなさま！・・・みなさま！・・・アレスミリア様が
参られました。
イーリアス様も、もうまもなくお見えです。」

・・・こらこら、みんなこっち向いてくれよ。ああどこか、壁掛けの
布の裏にでも隠れてしまいたい。

「みなさま！」
・・・そのとき、イテカレスの肩を叩くものがいた。

「もういいよ。からかって悪かったな。」

「えっ、ええ、はあ・・・。」

・・・助かったあ。けど本当は怒っておいでなのだろうな。

でも、お二人の間で何かあったのは確かだな。

あとであの娘に聞いてみよっと。ジュディスといったっけ。

うん、これはいい口実かも。

「懲りない奴だな。」

吐息が吹きかかるほど、間近な背後から声をかけられて、

たてがみがあれば全部逆立ってしまうほどに驚いた。

恐る恐る振り返ると、ニールリングがニヤニヤしながらたっている。

「なんだよお、いきなり。おどろかすなよ。」

「おまえ、侍女の誰かに、探りを入れようとでも思ってるん

じゃないのか。この差し迫ったときに、そんなことを考えられるなんて、

お前は大物だよ。」

・・・こいつ、人の心まで読めるのか。

「お前の目がピカピカしているときは、女の子と噂話に要注意だ。」

「そんなんじゃないよ。」

「嘘をつくと、口がとんがるぞ。」

「えっ、俺ってそんな癖あったっけ。」といいながら、急いで

口の端を広げた。

「嘘だよ。」

・・・やられた。

「まあ、そんなにしょげるなって。それから侍女に手を出すのは、

今回はやめておけ。

あの方にも知られたくないことがあるのだし、あの方が抱えている

秘密は、我々の小さな人生とは比べ物にならないんだよ、きっと。」

「そんなことは言われなくても。でもなあ・・・。」

「いずれわかるさ。この城内で起こっていることで、俺の耳に

入らないのは、ねずみの穴の出入りと雨漏りの音ぐらいだろう。」

「たいした自信だなあ。」

「それから、あの娘の名前はジュディスじゃないぞ。お前、担がれたんだよ。」

無然とするイテカレスを残し、ニールリングはアレスミアンの側に去っていった。

「遣り残したことはないな。」

ここ数日、顔を合わせるたびに同じ事を仰る。そのことは、ご自分が一番ご承知のことだろうに。この方でも不安に思われるのだな。

「もう、これ以上は、レース編みでもしてみますか。」
ニールにしては、珍しい冗談だな。

「そうだな、みな良くやってくれたよ。これだけの人々を、クラコワを守るために集め、組織したのだから。」

「勝てるでしょうか。」

「勝てはしないさ。今度の戦は、勝ち負けという単純なものを基準にしてはいけない。

ロンダルトがある限り、イズマイルの生死が鍵と成る。イズマイルを生かしつつ、ペルジア軍を無効化する。

もし、ロンダルトが無ければ、全軍がクラコワを襲うだろう。

そのときは、我々も終わりだったかもしれない。けれどもこの王国には都が二つある。それを最大限に生かしながら、負けないこと。それを生死の境界にする。イズマイルの悔りとね。」

イズマイルを生かしつつ、ペルジア軍を無効化する。

勝つのではなく、負けない……。それがどういう結果を生むのか、これからの戦いにつながっていくのか、ニールリングには良く分からなかった。

「お見えになりましたね。」

侍女の捧げ持つ灯りが、通路の奥のほうから徐々に入り口へと、燈色に照らし始めると、最後に盛装したイーリアスが現れた。

「うん。いい顔だ、あの笑顔がクラコワの横糸であり、絆の象徴になる。」

「姫を救われただけではないのですね。」
ニールリングは、改めてその横顔を見た。

「そうなってしまったな。」

後悔ともとれる言葉とは裏腹に、その表情は満足そうだった。

「何かあったのですか。」

「彼女には、つらい思いをさせてばかりいる。」

「それはあなたが、ただの守り人ではなく、イーリアス様を、
同じ志を持つ“同志”だと思っているからでしょう。」

アレスミリアが振り向いた。

「なかなか、言うようになったな。ニール。」

「あなたならそういうと思っただけです。」

そしてまた、イーリアスに顔を向けた。

「だが、面と向かってはいえないのだよ。そういうことは。」

ニールリングは、イーリアスの顔をあらためて見て、何かいつもと違う印象を受けた。最初それは、此の開戦前夜の集いに挑むための緊張かと思ったが、どうもそれだけでは無いらしい。

この時ばかりは、自分の生きた時間の短さを恨めしく思った。若者には、人の表情の変わり様を見ただけで、何かの精密な心の遷移までを見取ることは出来なかった。

この危急存亡の夜に、あの幸福そうな微笑は何だろう。見ていると、明日への恐れを忘れてしまうような、温かな光。

イーリアスが玉座の前に立つと、一堂は直立の姿勢をとり、黙礼をささげた。

「楽に。」
イーリアスの声が、静まった天井に反響した。

侍従が、古びてはいるが手入れの行き届いた剣を、幾重にも折たたんだ布の上に捧げ持ち、イーリアスの前に進み出た。

イーリアスは、長きに渡り伝承されたアズールの剣を両手に取ると、代わりに進み出たアレスミリアンに授けた。

この儀式で、アレスミリアンに戦いの指揮権が下された。

アレスミリアンは、一同に向かって語り始めた。

「まず、ここに集いし皆に対して礼を言う。」

同意の印として、イーリアスが少しだけ頭を動かした。

「そして、私がこれからいうことを、皆の配下の者にも伝えて欲しい。」
アレスミリアンは、一度目を閉じて、大きく静かに息を吸い込んだ。

「敵は、我らの三倍の兵力を持って、此の国を侵そうとしている。
そして我々は家族と離れ、故郷を離れ、この城を最後の防壁

として敵と対峙している。

ペルジア軍は長きに渡ってあまたの国々を襲い、兵士達は戦いを続けてきた。

我々は平和になれ、この戦が初陣の若者も多いことだろう。

一人ひとりの兵士の力を比べれば、我々は不利だ。

だからこの城を戦場に選んだ。

百戦錬磨の三倍の兵と戦い抜くための、我らの盾はクラコワの三重の防壁と、そして人だ。

祖先と同じように此の国に生まれ、育ち、子を授かりまた命をつないでいく、

長い長い人の絆が我々にはある。その絆を我らの力にしよう。

故に、その絆を心に感じないものは、今夜立ち去っても良い。

門を一つ開けておくから、そこから故郷にかえるがよい。

誰もとがめないし、止めることはない。恥じることもない。

私とともに、このアズールの剣と共に戦う、心の絆を持つものだけが残ればよい。」

アレスミリアンは、剣をさやから抜き、右手に掲げた。

魅入られたように、人々の目もその剣の輝きに吸い寄せられた、

「我が名はアレスミリアン。

故あって秘した、父の名はアズレクン・ロンダベル。

遠くアズールの名を継ぎ、いまアズールの剣を手に我らの敵を討たん。

願わくば、諸共よ。我と共に行き、我と共に帰らんことを！」

沈黙は、地鳴りのごとき叫び声で打ち破られた。

剣士達は剣を挙げ、剣を持たぬものは拳を突き上げ、魂の叫びを吹き上げて、アレスミリアンに呼応した。

黄昏の王国に日を戻し、死のふちから蘇ると美しき姫をさらい、単騎敵陣に乗り込んで生還した彼こそは、アズールの後継者で無ければならなかった。

数々の予言と、起こした奇跡（と人々は感じた）についての“謎”が、これで決着した。
彼はアズールの血を引くもの、故にそれは起こったのであると。

アレスミリアは何者か、この国の中で幾度と無く語り尽くされた疑問が、ついに明かされた瞬間であった。

アレスミアンの最後の言葉が、この会合の幕の合図であったが、人々はなんとなく去りがたい顔で広間にぐずぐずしていた。

やがて、一人の騎士がアレスミアンの前に進み出て、その剣の下に片ひざをつくると、続いて一人、一人と肩に剣を受けては、去っていった。

平民たちは、振舞い方が分からずに、前に進み出て、ただ辞儀をして去ろうとしたが、アレスミアンはその体を抱き寄せ、己はいつまでも民の傍らに居るということを、心から伝えようとした。

イーリアスはアレスミアンのそばにあり、その剣を預かった。そしてアレスミアンの幸福を、己のこととして感じていた。

イテカレスは、驚きの体で呆然と立っていた。
「お前、まさか知っていたんじゃないだろうな。」
とつぶやきながら、振り返った。

ニールリングは顔をしかめ、こぶしをつめが刺さるほどに硬く握りながらみじかく「いいや。」と答えた。

「なんて、顔してるんだ。」

ニールリングはふっと後ろを向くと
「並びたいなら早く並べよ。」とあって、広間を出て行った。

・・・なんでわかったんだ。魔物かあいつは。
それでもイテカレスは、並んだものかどうかわかっていた。
先ほどの一件が、気にかかったのだ。

ニールリングは一人部屋に戻ると、ようやくほっとした顔で思う存分、己の衝動を解き放った。

自分の主（もしくは師）が何者であろうと、彼にはどうでも良かった。
アレスミアンがアレスミアンであるだけで彼には十分であった。

西の支城と、その一帯の領主である彼の父母は、アレスミアンの身分を理由に、ニールリングがその従者のように振舞うことを好まなかった。

ゆえにニールリングは、半ば絶縁するように家を出て、アレスミアンの元に仕えてきた。それは家思いで、長子の彼にはつらい選択だった。

今夜、アレスミアンについての秘密が明かされることで、彼と彼の一族の問題は解消したのである。

けれど、彼が喜んだのはそのことではなかった。そのことは、とうにあきらめてもいいと思っていたのだ。

ニールリングには、長い道のりを、一人で秘密を抱えて生きるしかなかった、アレスミアンの重荷が少し軽くなったことがうれしかったのだが、それ以上に、自分も皆と同じように、これ以上の答が有ろうかという言うように思い、それを皆が受け入れたことがうれしかった。

アレスミア・スークリアが、アレスミアン・ロンダベルとして敬意を受けたことがうれしかった。

そして、ニールリングは、泣いている姿を誰にも見られなくなかったのだ。

アレスミリアンの言葉は、それを持ち帰った人の口からまた人の口へと、早朝に潮が満ちるように伝わっていった。

人々は灯りを囲んで目を輝かし、ある者は「ほうれ、俺が言ったとおりだろう。」と吹聴し、またあるものは「アズール・イクン王がよみがえった。」と騒ぎ立て、「では、此の国は誰が継ぐのだ？」と気の早いことをまくし立てては「それあ、イーリアス様とアレスミリアン様だろう。お二人はご結婚なさるのさ。」と、戦いのことなどまるで忘れてしまっているかのような騒ぎだった。

やがて、最初の一騒ぎが落ち着き始めた頃には、人々の気持の中で、この戦いの形がクラコワ対ペルジアというより、アズール対異国の蛮王という図式に変化していった。

それは、国を守るという悲壮感に満ちた受け身の戦いではなく、悪を滅ぼすという攻めの戦いへの心情の転換をもたらした。

そして何よりも、名誉を重んじる騎士達により大きな影響を及ぼしていた。

彼らは、国事に関わる立場にあったから、先王からの王位継承に、何か重大な疑義があることをうすうすは知っていたのだった。

アズレクンはその存在を疎む者の手によって、秘かに排除されたのではないか。

アズレクンは、リードヴェルトと秘かに結婚していたぐらいであるから、この北の古王国とのつながりが深く、騎士の中には旧知であったものも居ただろう。

おそらくは、非業の死を遂げたアズレクンの遺児が、幾歳月を経ている暴風に立ち向かおうとしている。

そして彼がアズレクンの遺児であることもまた、疑いようのないことだった。

なぜなら、カラバ公が、此の国の行く末をアレスミリアンに託すると宣言していたからである。

能力については疑いようもない彼にも、その出自の低さから異論を持つものも居たのだ。それを知りつつ、カラバ公が指名したということは、それが何の障害とならないことも知っていたからだ。

彼は正当な王の血を引いている。だから公の養子とはならなかったのだ、と。

凡庸な現王とは違い、非凡な才に満ち、不遇な境遇を自ら切り開き、いまだ年若い彼は、騎士という夢見がちな人種の偶像として、これ以上ないような存在であった。

「私は皆に受け入れられたらどうか。」

「不安ですか。」

アレスミリアンの胸にもたれさせた頭を起こしながら、問いかけた。アレスミリアンの表情からは、それが本当の不安なのかどうかは読み取れなかった。

「私も不安でした。カラバ公の養女となったとき、それからこの国を受け継いだとき。私には血のつながり以外の理由が無かったから、みなを受け入れてくれるかどうか不安でした。」

アレスミリアンは肩に腕を回した。

「でもあなたが側にいてくれたから、それを乗り越えることができました。

いえ・・・、本当はまだ乗り越えてはいないのです。けれども、これからも前に進んでいけると思っています。」

なおも肘で体を起こしながら、イーリアスは続けた。

「他の誰もがあなたを受け入れず、あなたが一人塔の上に立ち続けた

としても、私はあなたの側にいます。あなたのなすべきことを・・・。」

アレスミリアンは、肩に回した腕に力をこめ、イーリアスを再び引寄せた。

夜明け前。

いや夜が明けるにはまだ早く、東の空にはまだその曙光さえ届かず、星々がさえずりを楽しんでいる頃、男達は待ちきれずに城壁に向かった。

女達は竈に火をおこし、炊煙が、風のない冬空に高く高く立ち上っていった。

鳥たちがようやく目を覚ます頃には、城壁の上に立つ、数千の槍の穂が朝日にきらきらと輝き、男達の横顔を朱色に染め上げた。

朝日が最初の光を地のへりに点火したのを合図に、夜のうち開かれていた門は閉ざされた。そこから逃れた者が果たしていたのか、誰も知らない。

そんなことを気にとめる者は居なかったし、いたとしても、その者を憐れみさえすれ、非難することはなかったろう。

この夜、彼らは、アレスミリアンと共にアズールの戦いに加わることは、末代までの語りぐさになるだろうと話していたからだ。

クラコワ城市は、西方をユルノ側の流れに預け、その水を引き込んだ濠に北と東、南を囲まれている。

城市はこの丘陵地帯の一番大きな丘に築かれ、城郭はその最も高いところに位置し、長い年月と風雪に耐えてきた。

石壁は雨風に晒され、表面はざらざらと年老い、これが首都でなければ誰が見向きもしたろうかと、ペルジアのイズマイルはうんざりしていた。

アルシャーファの彼の宮殿は、色鮮やかなモザイクに装飾され、この季節でも庭園に新緑の絶えることはなかった。

彼がもし、このときロングルトの宮殿を見ていれば、気持は違ったかも知れない、彼の趣味に合うかどうかはともかく、それなりの歳月を経たとはいえ、絶えざる改築と増築を繰り返した宮殿は、この大陸の中央世界では、比類なき豪華さを誇っていたからである。

その、クラコワの攻略に辺り、イズマイルは東、北、南の三方から包囲し攻撃する陣を引いた。

どこか一面に集中すると、戦線が狭くなり彼の軍勢の優勢を生かし切れないためである。

そして彼は、夜を無為にはすごさなかった。

クラコワ攻略の差し当たっての障害は、ユルノ川の水をたたえた堀である。

この堀を越えない限り、最外郭の城壁にも取り付けない。

堀の深さはおよそ人の二倍もあり、到底、背の届くはずも無い。泳ぐか、埋めるか。

泳ぐ間は、まったく無防備である。これでは、いたずらに堀に浮かぶ死体を増やすだけだろう。

もしくは、城門への橋を渡りそこをこじ開けるだけである。

攻撃が限られれば、守る側にはやすく、攻める側はひたすら待つばかりとなる。

イズマイルは、クラコワ周辺の無人となった村の住居を打ち壊して、城壁までの橋をかけることにした。その打ちこわし作業が夜を徹して行われたのである。

戦端は例によって、太鼓の響きによって開かれた。東面の太鼓が最初に打ち鳴らされ、その共鳴として、北面と南面の太鼓が唱和した。

ペルジアの布陣では、正面に当たる東に二万、北に一万、南に一万五千。そして本営の守備にペルジアの生え抜きで構成された、直営軍五千が展開した。

三軍に分かれたペルジア軍は、弓兵の間断なき射撃による援護を受けながら、歩兵の前進を開始する。

歩兵は、かつて住居であったものの残骸を数人で抱えては、次々と堀のいくつかの箇所に入れ始めた。

全てを埋めるのではなく、堀を越えるための橋頭堡を築くのである。守備側も、それを傍観しているわけではなく、寄せ手側の意図が明らかになると、城壁の胸間からその集団に向けての集中攻撃が行われた。

歩兵の中には、木や石を放り込む代わりに、自らが積み石の一つとなって堀に落ち、水柱を上げるものも少なくなかったが、堀の幅が三十メートルにも及ぶ距離では、射撃も百中というわけには行かなかった。

堀に伸びた岬は徐々にではあったが、外城壁へと触手を伸ばしつつあった。

朝から始まった攻撃は、しばらくは直接の衝突が無いまま、消極的な弓の交換で進んでいたが、昼時に交代の太鼓が鳴らされると、敵、味方双方とも耳目を集中させるような変化がおきた。

東の城門に向かって、鐘突きを大きくしたような構造物が、橋を渡って接近を始めたのだ。

攻城兵器がいまだ到着しないイズマイルは、それを現地調達することにした。

手近な森林の木を切り出し、大雑把ではあるが、再利用もしない、

長期間の使用にも耐えないが、この数日の攻撃には動員可能な破壊兵器である。

数本の木材を束にして宙吊りにし、尻尾代わりにつけられた引き綱をひいては城門に打ち当てる、という頭の無い馬のような格好の、単純な仕掛けであったが、大きさと、その打ち付けられたときの轟音が、この戦闘の主役の座を一気に奪ってしまった。

城門は放火に備えた鉄張りとなっていたが、一撃一撃の衝撃に門扉全体が振動し、かんぬきは大きくたわみ、門扉を支える城壁に伝わる衝撃で、いずれそれは、内部に向かって倒壊するのではないかと思われた。

守備側は、弓矢による攻撃でこの破壊を排除しようとしたが、それは効果的といえなかった。

引き手は嚴重に防壁で守られ、矢はことごとく阻止されたからである。

次に内側からの補強を試みたが、日中は攻撃の振動が激しく、結局その作業は日没後まで持ち越されることになった。

開戦一日目は、こうして寄せ手側が城壁への手掛かりを構築する、土と木と石が中心の一日となった。

日暮れの合図とともに、ペルジアは自陣に撤退した。

初日の攻防による戦果は、堀を内側に侵食するいくつかの台座が作られたことと、三方の城門が今日一日はもったものの、深刻な被害を受けており、放置すれば早晚打ち破られるであろうこと。不用意に動き回って、慣れない城壁の上で足を滑らせた守備側の負傷者が数人。

攻撃側は、半ば捨て身で堀に突進し、矢に倒れた兵士たちの死骸が千か二千か。

そうした、兵士たちの亡骸は、一つ、又一つとかなたの方向に運び去られていた。

それはペルジア軍到着以来、もっとも無情な光景であった。

クラコワの兵士たちは、それを沈黙の中で見送った。夕日が沈みきるまでのオレンジ色の光を浴びながら、その日一日の体の疲労と心の落ち込みに、壁を支えに座り込んだ。

「やはりというべきか・・・。」

一度、口火を切りかけたが、そこで一度言いよどんだ。

「おぞましい、ひどい戦いになりました。」

ハイアルトは、兜だけを取った鎧姿で、

「命を捨てた敵というのは、戦いにくいものだ。後退することがない。

いずれかを討っている間に、他のものが迫ってくる。

今日の敵は・・・。いや、これまでの戦いぶりもそうだったが、とても人と人の戦いとはいえない。

まるで、冥界から迷い出た、亡者を相手にしているようだ。」
とアレスミリアンに応じた。

「明日もでしょうか。」

「そうだな。明日も同じことが繰り返されるだろう。ペルジアは外城壁を突破しない限り、何も出来ないのも同然。」

「ニール。城門は。」

「内側から、木材で補強をしています。城門そのものが粉々に碎けるか、城壁もろとも崩れ落ちるか、あるいは外側に引き倒されるかしない限り、しばらくはしのげます。」

「ああ、その手もあったか。外側に引き倒す。」

「外堀の状況は。」

「およそ三十箇所、埋め立てが始まっていますが、まだ、大人の背丈分程度延びて来たに過ぎません。」

「周辺の村々は、かなり打ち壊されたようだな。」

「ええ、この戦が終わっても、住むところが無いものが出てしまいました。寒い冬を越すのは堪えるでしょう。」

戦争というものは、情け容赦も無く人々の暮らしを破壊し、踏みにじる。

たとえ生き延びることが出来たとしても、大地が荒廃し、生きる寄り道を失った人々には、さらなる苦難が待っている。

おそらくその村に住んでいたものたちは、この光景を憤怒と嘆きで見ていたことだろう。顔を怒らせ、歯噛みをしながら涙を流していただろう。城壁の上から身を乗り出そうとしたものも、いるかもしれない。

かつて自分達の家だったものの残骸が、堀の中に沈められていく。まるで、波濤に砕かれた沈船のように。アレスマリアンは、そういうことを思っていた。

ハイアルトがその沈黙を破った。

「いまは、それを考えるはやめておこう。明日も今日と同じような攻防がつづく。特段のことが無ければ、もうお開きにしようか。」

ハイアルトは東の城壁から、時には自ら弓を放ち迎撃の指揮を行っていた。

銀に輝く鎧の背中には、白地にハイアルトの紋章を縫い取ったマントを翻し、城壁の上を縦横に行き交う姿は、その年齢を感じさせることは無かった。

地上から打ち込まれる矢に、胸壁の影に身を隠すことも無く、時には空中に浮かんだそれを手でわしづかみにするやいなや、手近な弓で射返したりし、守備兵を大いにわかせて見せた。

しかし、そうした彼も、夕暮れが近づくころには、少なからず疲労を感じずにはいられなかった。誰にもいいはしなかったが、年齢による体力の衰えはどうしようもない。

どうせ来るなら、とっとと来てくれないと、城壁をうろうろしているうちに、体の限界が来るのではないか、などと思っていた。

翌朝、クラコワの外城壁をはさんだ攻防は、昨日と同じように始まり、昨日と同じような損害を攻守にもたらし、昨日と同じ夕暮れに終わった。

イズマイルは、終日不機嫌だった。

「いつになれば、城壁に取り付けるのだ。いつになれば城門を突破するのだ。いつになれば、敵兵と剣を交えるのだ。お前たちは、このままここで雪に埋もれるつもりか！」

ブルタークのような、支城の攻略には無関心だった彼も、
— そのせいで、いま補給に悩まされているのだが —
敵の本営を前にして、一向に進展しない戦局に、この二日間の鬱憤はたまる一方であった。

彼の目はクラコワの城壁を見ず、脳裏にちらつくのはアズールの血を引くという者、アレスミアンの笑顔だった。

それは今も、ペルジアの無駄な努力をあざ笑っているようだった。

「どいつもこいつも、能無しばかり。もうよいわ。明日よりお前たちは、城門を打ち破る綱を引け！
これ以上の猶予はならんぞ！」

しかし臣下たちは、それだけは成さじと、
「おお、お待ちください。陛下。既に仕掛けは出来ております。
明日には必ずや城壁をおとして見せますゆえ、何卒。」
と、必死の形相で哀願した。

「その言葉、二言は無いな。」

イズマイルは、なおも怒りの様相を崩さなかったが、この者たちを戦場に送り出しても、どさくさに紛れて味方に背後から刺される事はあっても、目立つ活躍も出来ぬであろうと思い直した。

「ごさいません。」

「明日だぞ。よいな。」

一同は、そろって平伏した。

イズマイルはそれを見捨てる、奥へと引き込んでいった。

そこには、長旅に運ばれてきたとは思えないほど豪華な、毛足の長い敷物が敷かれ、周囲には、金糸・銀糸の刺繍が施された織物が張り巡らされていた。

織物には、植物の枝葉を意匠化した模様や、鹿や馬などの動物や、ある種の空想の生き物が縫い取られている。

イズマイルは、寝台に横たわると満足したように目を閉じた。荒涼とした初冬のクラコワの状景と、天幕を隔てるだけのこの部屋だけは別世界のような感じだ。

天蓋の上では夜の風が舞っていた。その上を雲は速く流れ、時折月を隠した。

ペルジアの被征服民兵は、弔いの祈りを行っていた。

この遠征が始まってから、もう何度も何度も繰り返してきた祈りだった。

彼らの神様は、こんなに故郷から離れた土地であっても、死者の魂を受け入れてくれるのだろうか。

そして魂たちは、迷わないで家に帰れたらどうか。

明日の戦いが終わったとき、誰かが俺の代わりに祈ってくれるだろうか。

野営地のかがり火が、白い煙に変わるころ、三日目の朝が来た。

戦いは太鼓の音で始まる。

が、この朝は、歩兵の突進は無かった。

高々と差し上げられた、厚みの無い塔のようなものの接近が始まった。

同時に、小ぶりの投石器による攻撃も始まり、まだ距離の目当てがつかず、何度も堀の中で大きな水柱をあげていたが、次第にそれは、壁にも直撃を加えるように近づけられた。

城壁の上で仁王立ちのハイアルトは、アレスミリアンに伝令を走らせた。

構造物としての均整を欠いた「塔」は、いかにも急ごしらえのため、城壁への接近の途中で倒れるものや、継ぎ目から崩壊するものも出たが、城壁への接近は止まらなかった。

「不恰好ですが、あれで堀を越すつもりなのは明らかですね。」

マクシミアを飛ばし、城壁の通路を、兵士たちの背後を早足で通過し、城外に向けた顔を戻さないまま、ハイアルトの傍らに来たアレスミリアンが言った。

「ペルジアもなかなかやる。堀を埋めるのが手間だと分かると、戦法を変えて来おった。不細工でいい加減な作りだが、そこは数で補おうというところだろう。半分しか持たなくても、二十も橋が出来れば、そこからなだれ込める。」

その塔は、森や林の木を切り倒し、それをそのまま支柱にしたものらしかった。

「堀を埋め立てた台座に立てれば、届くでしょうか。」

「届くつもりで作っているだろうからな。倒れてきたら、それだけでも城壁にも損害が出るだろう。いよいよ危なくなってきたな。」

奇妙な、およそ四、五十もの、不安定にゆれる巨人が接近しつつあった。

「お顔が、ほころんでおられますよ。」

「はっはっは、それは錯覚というものだ。私は元々こういう顔だ。

さてどうする司令官殿。」

アレスミリアンは、戦さを知らない。

どんなに予測し、想像を巡らせても、戦争はその筋書きを破り捨てる。

戦いが長ければ長いほど、その行くへはわからなくなる。

「少し早すぎる。シルからの連絡がまだありません。」

「来るのか、ルークス・カルフは。」

「必ず来ます。北の部族とわれらは、いまや一衣帯水。われらが滅びれば、彼らは元の暮らしにすら戻れないでしょう。我々が抜かれれば、次は彼らの世界が狙われる。」

「理屈はそうだが、な。」

「何よりも、われらは蒼天と大地に誓った仲です。彼らは、来ます。

必ず！」

並べた肩に、ハイアルト卿の手が置かれた。鉄甲に覆われた重い手だった。

「良い男になったな。アレス。」

「人を信じる事がなくて、誰が信を置いてくれるものか。お前が言うように、彼らはきっと来るだろう。」

アレスミリアンの顔に迷いはなかった。

「出来るだけ、外城壁を持たせましょう。こちらにも犠牲者は出るでしょうが、やむを得ません。」

「任せておけ。私が前線にある限り、ペルジアなんぞにクラコワの土を踏ませるものか。」

ハイアルトの目が、もう遊びは終わりだと語っていた。

「それから、民兵は第二城壁まで下がるのだ。あの橋げたを

使うなら、一度に進入できる敵の数も場所も限られる。われら騎士だけのほうが自在に動ける。」

「では、南と北の守りもそのように。」

イテカレスが矢継ぎ早に伝令を走らせた。一人はそのまま東の壁を走りまわり、二人はそこを素通りして南と北へ、そしてもう一人が、城へ向かって走っていった。

「うむ。 お前も、疾く去れ。」

アレスミリアンは動かなかった。

「どうした、早く行かんか。」

「私は、ここに残ります。」

「ばか者、はなからお前など頭数に入っておらん。他に成すことがあるだろう。」

「アズールの剣とともに戦うと、皆と誓いました。カラバ様もそうしてこられました。」

ハイアルト卿は、困った奴だというように腕組みをし、

「おい、カストラル。」

と手近にいた騎士を呼び寄せた。

「司令官殿が、ここに居座ると仰せだ。」

騎士は兜を取り、まだ若い顔をほころばせながら、

「アレスミリアン様、どうかこの場はわれらにお任せください。

私はこの身を砕かれても、クラコワを守り抜ければなんの悔いもありません。それはあなたがいて、この国の未来、我が家族の暮らし、領民の安寧を守ってくださると信じているからです。

どうか、我らにご信頼を。」

城壁の上は、第二城壁へ退去する民兵と、敵を迎え撃つ位置に移動する騎士の動きがあわただしくなっていた。

「わかった、私が間違っていた。だが、カストラル殿。この戦いの後で再び相まみえよう。かならず。」

「ええ、この剣に誓って。」

若者は、再び兜をかぶると、城壁へと戻っていった。

民兵の中にはなおも外城壁に留まり、敵を城壁から追い落とそうとするものも少なからずいた。そして、そうした平民への競争心は、騎士の誇りを一層燃え立たせた。

なおも接近する橋げたに対して、城壁から激しく矢が射られたが、接近を遅らせたことと、支えを失ったいくつかの橋げたが倒れた成果はあったものの、相当数の橋げたが、いまや城壁に向かって倒されようとした。

「くるぞ、ひとまず下がれ！」

それらはほぼ同時に、東と北と南から、倒れはじめはゆっくりと、ある角度を過ぎると、まるで鉈を木に打ち込むような速さで城壁に向かって倒れ落ちた。

石の碎ける音と、木材の崩壊する音と、もうもうと上がる土ぼこりの谷底から、ペルジア兵が楯を前面に押し立てて上り始めた。

衝突時の衝撃で、さらに数本の橋桁は堀の中へと水没した。

守備兵は弓で応戦し、それによりかなりの数のペルジア兵が堀の下へと落とされ、水しぶきを上げた。クラコワとペルジアの弓が空中で行き交い、次第に誰もが状況の渦巻きに巻き込まれ出した頃、この戦役で初めての剣と剣との戦いが何カ所かで開始された。

戦が無くなって久しいとはいえ、騎士達の働きはすさまじく、鋼鉄の鎧に完全に守られた武装においても、城壁に向かって上ってこなければならなかったペルジア兵とは比べものにならない。

ペルジア人の剣が鎧をこすっても、クラコワの剣はその間に彼らの皮膚と肉を切り裂いた。

外城壁を巡る攻防は、ただ数のみを投入し、休み無く攻勢を掛けるペルジアと、洗練された武闘によって、それを押し戻そうとする騎士達の、譲らぬ戦いで均衡していた。

ハイアルト卿は、左右に若い騎士を従え、自らは槍を振り回しては次々と敵兵に突き立てた。

ペルジア側は、後は城門を突き破り、背後からも外城壁の守備隊を襲うことが、次の目標となった。

城門への攻撃も、すでに三日目となっていた。

ペルジアは、それまでの城門への攻撃を一旦放棄し、城門を支える城壁の石を砕くことに方針を変えた。一見、衝撃に激しく動揺する城門は、打ち破ることもたやすいとみえたが、実際には動揺する事による衝撃の吸収により、なかなか崩壊には至らなかったからである。

そこで、揺るぎのない城壁部分に攻撃を絞り、枠ごと砕いてうち倒すというのが、新たな攻撃目標である。

早朝から始まった戦いは、すでに昼を回るころになっていた。

いつ終わるとも知れない攻防は、守備側の疲労と攻撃側の死傷者という、目に見える形でその成果をさらけ出していた。

外城壁の通路上は流血で赤く染まり、滑り止めにまかれた砂すら流れ出すのではないかと思われた。討たれた兵士はそのままの姿で倒れ、壁にもたれかかり、積み重なった。

そして、クラコワ騎士団の防衛線は徐々に後退していた。

城壁の向こうでは、新たな塔が接近を始め、城門を支える壁を砕く音は一層激しさを増していた。戦局は、あらゆる戦線でクラコワの不利に傾き始めていることを示していた。

「アレスミリアン様。」

ニールリングが、何かを決断すべき時が来たと、声をかけた。

「うん。」

民兵を投入して、あくまでも外城壁の戦線を維持するか。

しかし、それはもう戦術ではなく消耗戦でしかない。

早晩、持ちこたえることが出来ずに崩壊するだろう。

それでは騎士団を下げて、第二城壁まで後退するか。

けれども、それでは切り札を切りそこなう恐れがある。

切り札が手元に無い今は、やりたくない。

切り札がそろそろまで、犠牲を覚悟で時間稼ぎをする、か。

この決断に、クラコワの全ての人民の命がかかっていた。

アズール……。あなたならどうした。

イーリアス私はどうすればいい。

『あなたの為すべきことを。』

私は……。 私なら……。 私のなすべきことは。

『……。どうか、我らにご信頼を。』

先ほどの、若い騎士の言葉がよみがえってきた。

「ニールリング！」

「はっ！」

「やるぞ。」

「しかし、まだ……。」

「来る。彼らは必ず来る。」

アレスミアンは、迷いを吹き切った顔でニールリングを見た。

「我がなすべきは、信ずること。」

ニールリングはいかにも納得したという顔をし、

「では！」と、彼のなすべきことを果たしに出た。

伝令———！

「各城壁に伝えろ。第二城壁に撤退する。民兵は、一旦外城壁まで押し出した後、騎士団と一体となって撤退する。一人の取りこぼしも許さん。撤退後は外城壁への連絡橋を落とせ。

よいか、お前たちの誰かが倒されたとしても、それは捨てて走れ。

この命令だけは、必ず各城壁につたえるのだ。」

若者たちは、散っていった。

東の城壁では、ハイアルト卿が、槍を剣に換え、戦いの指揮を取っていた。

金属と金属の打ちあう音が、鎧が意志にぶつかる音が、人の体が魂を失う音がせめぎ合っていた。

「何だと、第二城壁まで下がれというのか。」

伝令を受けた口ぶりは不服そうだったが、返り血や、あるいは己の負傷から、血まみれになって戦っている騎士団が押されていることは分かっていた。

「よし、合図の角笛を鳴らせ。」

城壁の各所で角笛が鳴らされた、その角笛の音を受けてさらに角笛が鳴らされた。

それを合図に、第二城壁でいまや遅しと待ち構えた民兵が一斉に押し出し、ペルジア軍を一旦は外城壁の壁際に圧倒した。

城壁から堀にめがけて落ちて行くもの。橋桁から身を乗り出した瞬間に槍で刺されるもの。踏みつけられ圧死するもの。その一時だけは、クラコワが勢いを盛り返した。

しかし、それは長く続くものではなかった。遮二無二突進し、息が途切れるまで叩き続けても、息継ぎの時はやってくる。

腕が上がらなくなるまで剣を振り続けても、剣が折れるときもある。騎士団は、負傷兵をうちに囲んだ集団を作り、民兵と一体となって第二城壁に後退していった。

一旦は押されたペルジアも、引くと見ると逆に怒濤の寄せを見せ、野獣のごとく襲い掛かったが、槍ぶすまを防壁に、狭い連絡橋を後ずさっていく集団には、容易に襲いかかれず、第二城壁への連絡橋が落とされることでその目論見はたたれた。

しかし、クラコワ兵が撤退したことにより、外城壁はいまやペルジア軍の手に落ちた。

クラコワの国土は、第二城壁とその内側にしか存在しなかった。

興奮した兵たちは、我先に外城壁に上がると、次は城門の補強を落とし、門をはずして左右に開放した。堰を切ったように兵が乱入し、外城壁と第二城壁の間の空間は、見る見る敵兵で満たされていった。

この様子は、ペルジア陣のイズマイルとその本営からも遠望され、遠征以来の大戦果に本陣は沸騰した。ペルジアは全軍に侵攻を命じ、後続部隊は続々とクラコワ城内に吸い込まれていった。

イズマイルは、喜色を満面に現していた。「見たか。アレスミリアン。」

それと同じころ。ただ一方、敵の攻撃を免れていた西の防壁、ユルノ川から小舟がついた。

小舟が運んできた若者は、城の大きさに目を丸くしながら、待ちかねた衛士に伴われ、いくつもの通りといくつもの階段を駆け上がり、息も絶え絶えにアレスミアンの前に通された。

若者は肩で息をするのももどかしそうに、

「ルークス・カルフが率いる騎兵三千。ユルノ川上流を渡河しました。」と伝えた。

「ご苦労だった。ニール、状況は。」

「撤退は完了しました。外城壁から第二城壁までは、敵兵で溢れかえっています。後続部隊も一気に投入された模様です。」

すでに、五千の直営部隊と本営を残して、草原は空になっていた。五万の大軍が城内に突入し、本営も前進を始めていた。

イズマイルの前に勝利がひれ伏している。ペルジアの誰もがそう思った。

「よし、鎗矢を射よ。」

クラコワ城の塔にすえられたそれは、石弓を大きくしたようなものだった。

兵士三人がかりで、ようやく引くことが出来るその石弓につがえる矢は、どちらかと言えば鋸とでも言うべき大きさで、攻城では、文字通り鋸を打ち込み、それに繋がれた綱を引くことで城柵を引き倒す、というような用途に使われる。

その先端につけられた煙玉が点火され、掛け金がはずされ、引き絞られた両腕が激しく開放されると、それは白い煙を引いて、はるか天空の青に舞い上がり、長い尾を引いて落ちていった。

続けてさらに二度、それは繰り返された。

「何でしょうあれは。」

「何かの合図だな。」

「この期に及んで、何だ。」

ペルジアの本営は、それに気づいた。

しかし、イズマイルの目前で、クラコワは崩壊しつつあった。

「城を捨てるつもりか。」

が、しかしその予想は大きく外れた。

やがて、城壁の北辺の、はるか向こうから立ち上る土埃に、誰かが気づいた。

「新手か、・・・」

「いまごろ、どういう手合だ。」

「しかし、あの距離からではな。走りつかれて倒れるだろう。」

ペルジアはなおも楽観していた。

「おい、いやに速くないか。」

「あれは・・・人ではない。騎兵だ！」

気づいたときに、彼らは逃げるべきだった。

祖国ペルジアか、ロンダルトに向かって逃走すれば良かった。

けれども、勝利を目の前にしたという確信が、彼らの判断を誤らせた。

長き遠征、見たこともない深い森、初戦の不手際、いつ果てるとも分からぬ消耗戦。

その最後にたどり着いた、勝利の確信。

目の前に、手を伸ばせば届くところにある宝を、彼らはあきらめられなかった。

直衛部隊はイズマイルを中心に、防御の体制をとった。

しかし、騎兵の前の歩兵軍団など、例え数で倍したとしても物の数ではないことは、幾多の歴史的な戦いが証明している。

動かぬ的を射るのと、動く標的を、しかも狙われながら射るのではあまりにも精度が劣る。

さらに、ペルジアは、彼らの王を中心とした密集陣を取ったため、さほど狙わずとも誰かには当たりやすかった。

最初の、両側から挟んでのすれ違いざまの攻撃で、数百名の兵士が倒れた。

騎兵団は、十分に距離をもって反転すると、二度目の攻撃でまた数百名が、三度目も同じく・・・。

その攻撃の様は、クラコワの外城壁から、そして第二城壁からも見えた。

まるで、絵巻物を見るように、兵士たちは戦いの手を止めた。

城内に突入した兵士は、あまりの戦況の変容に、分かっていながらもなすすべ無く、傍観するしかなかった。

というより、半ば袋小路に閉じこめられたペルジア兵がとって返すには、外城壁とその外側の堀、そして狭い城門が再び障害となったからである。

この状況で、敵に背後を見せて救援に取って返すなど、自殺行為でしかなかった。

そう、このとき彼らは初めて知ったのである。

水を湛えた堀こそ無いが、第二城壁は外城壁よりも遙かに高く、二つの壁の間は身を隠すものもない、ただ何もない空間が広がっているだけであること。

彼らは激闘と多くの血をささげた末に、まんまとそこに誘い込まれ、第二城壁の上からはおびただしい数の矢が彼らに向けられていること。

そして、手薄になった本営は、騎兵隊に蹂躪され、いま壊滅しつつあること。

この、城塞こそが、大いなる罠であったことを。

何度目かの攻撃の後、イズマイルをはじめとした数百の騎馬が、ペルジアに向かって脱出をはかった。ルークスが率いる騎兵の半分は、イズマイルの集団を一定の距離を保って東に追っていった。

残りの半分は、残存兵の掃討にかかり、降伏をよしとしなかった生え抜きのペルジア兵は、最後の一兵まで戦って死んだ。

おそらく、生き残ったとしても、味方であった被征服民の兵士達に殺されることを覚悟していたからであろう。

イズマイルが勝利を確信したこの日、クラコワでの戦いは終わった。

イズマイルは、数日前にクラコワの首都をさらした決戦に持ち込んだアレスミリアを、心の中で認めた。しかしそのはかりごとが、あくまでも城の内と外、城壁を挟んでの戦いだと考えた。

首都を裸にし、首都そのものを大きな罠と化するとまでは思いよらなかった。

閉じこめられた兵達は、向けられた矢に対してなすすべも無かった。武装解除が伝えられ、その言葉はいろいろな言語に翻訳され広がっていった。

彼等を死地へと追い立てる、純粋なペルジア兵はもう居なかった。

長い行軍と、度重なる戦闘と、敗北による喪失感がすでに彼らを無力化していた。彼らを守る唯一の術であった剣は捨てられた。

主を失ったそれは輝きを失ない、嘆きの墓標のように積み上げられた。

それを見届けて、城壁の弓は引き下げられた。

ここ数日、クラコワ城を揺るがした雷鳴は去り、それらがまるで“うそ”だったような静けさになっていた。

城壁の上で人々は抱き合い、笑顔の花を咲かせた。

騎士はその手に誇りを取り戻し、平民たちは平和を手にした。

人々に祝福されながら、ハイアルト卿はアレスミアンの元に近付いた。

二人は、お互いの笑顔をこんなにまじまじと見たのは久しぶりだと、それはアレスミアンがまだ子供のころだったかもしれない、と思いながら、笑いあっていた。

「アレス、これでお前はこの国の主だ。」

ハイアルトは、アレスミリアンの胸当てをこつんと叩いた。

「だがな、私はお前に跪いたりせぬぞ。」

二人は朗らかに笑った。

「あなたに命令できるのは、この世にカラバ公とイーリアス様だけです。

私をご遠慮申し上げます。」

「ならよい。」

二人はもう一度笑いあった。

「ところで、カストラル殿はいずこに。」

「奴か、奴は先に旅立ちおったわ。」

「・・・そうですか。」

「外城壁を退却するとき、しんがりで平民を守り、敵兵の集団に鬼神のごとき戦いぶりだった。

死に顔は笑っておったよ。ことが成し遂げられたことを悟っていたのだろう。」

「・・・最後の砦。クラコワは人の絆で守られている。

いずれ、カストラル殿の家族には、私が会いに行きましょう。

彼の言葉でクラコワは救われたと、是非にもお伝えしたい。」

「父母と、まだ幼い弟妹がいるそうな。」

「そうか、、、ただつらい思い出を、呼び覚ますことだけになるかもしれない。それでも私は、会いに行かねばならないだろう。」

「・・・国の主が泣きたいときは、どこで泣けばよいのでしょうか。」

ハイアルト卿は、もう一度、アレスミリアンの胸当てを叩いた。

「ニール、おい、ニール！」

「なんだうるさいな！」

「そうつれなくするなよ。ほら、これ。」

イテカレスは、薄汚い布を少し広げた。

「酒だ。街のものはもう飲んでいるぞ。俺たちも一杯だけやろうぜ。」

「一杯だけって、お前もう飲んでるだろ。」

「おっと、何で分かったかな。まあ、お前とは一杯だけだ。」

「忙しいんだよ。」

「だから一杯だけ、な。」

ニールリングは仕方が無いなという顔で、イテカレスの杯を受け取った。

「ちょっと待てよ。」

とって自分の杯にも酒を注ぎ、

「クラコワと、われらがアレスミリアン様のために。」

とって目の高さに掲げた。

ニールリングは、「やくざな友情のために。」

と答え、気の効いた同輩を褒め称えた。

「さてと、ペルジア人たちにも回していいか。」

「うん？」

「もう無理に戦わなくていいんだぜ、彼らだって祝福していいだろう。」

「そうだな、“われらがアレスミリアン様”ならそういうだろう。」

「じゃあな、お互い生き残れてよかったな。」

イテカレスはそういい残してまた、街に出て行った。

その後ろ姿に向かって、お前が無事でうれしいよ、と心の中で言った。

ニールリングには、いまや捕虜となった、およそ五万のペルジア人たちの処遇の問題があった。

彼らに食料や飲み水、暖を取るための薪の提供、夜をしのぐための毛布、その他にも彼らの組織の把握や手を着けなければならない作業が、山のように彼の上に積み上げられたいた。

「こんなことなら、もう二、三日戦っていればよかったのに。」
そんな冗談も、勝ったから言えるんだなと一人で笑っていると、
周りの者たちが不審そうな目で抗議した。

「おい、だれか酒を取ってきてくれ。飲まずにやっつけられるか。」

ああ・・・、まずいな、イテカレスに似てきたかな。

第二城壁から主城への道は、勾配の緩急はあるがずっと上り坂がつづく。

喜びに溢れかえる人々のなかを、アレスミリアンはゆっくりと歩いて戻っていた。

市民たちは、この奇跡をもたらした指導者に、それまでの親愛の情に加えて、畏敬と感謝を捧げた。

彼の行こうとするところは、彼が行かねば成らないところ。

だからその行く手は、自然と人垣の道が開け、だれも行く手を遮ることは無かった。

宮城の前庭では、北から来た千五百の騎兵が右に、騎士たち左手に勢揃いしていた。

その前を、カラバ公を従え、壇上で待つイーリアスの前へと進んでいく。

アレスミリアンが前を過ぎる度に、騎士は剣を抜き正面に構えた。

アレスミリアンがイーリアスの前に立ち、口を開こうとしたそのとき、それは起こった。

「くそ！なんてことだ。」

イテカレスは丁度その時、街の顔役達とクラコワを戦時から平時へ戻す算段をしていた。

戦いが終わったと言え、城内に五万もの敵兵を抱えたこの状況は、当面続くのである。言葉も良く通じない、特に市民と彼らの接触が、有らざる騒ぎを起こさないとも限らない。

だから彼はその場に居合わせることは出来なかった。

アレスミリアンの負傷以来、常に彼に付き従っていたイテカレスにとっての痛恨の一事だった。

「なんて、巡り合わせが悪いんだ！ どうして誰も止めてくれなかったんだ。せめて俺が駆けつけるまで！」

イーリアスの春のような笑顔が揺れ、次の瞬間、アレスミアンは彼女の重みを全身で受け止め、後ろによろめいた。

「イーリアス！」

「よく、よくぞ、ご無事で・・・。」

騎士達は剣と盾を打ち鳴らし、北の部族は大声ではやし立てた。

カラバ公はあきれた。

アレスミアンは、ようやくの事で彼女の腕を首からはずすと、二人で壇上に立ち、騎士達を見下ろした。

新しい王国が生まれた。

それから数時間が経ち、夜が来た。
王国の一室の机上には、再び重い空気の固まりが乗せられていた。

「とにかく、今は割ける戦力がない。けれども私は、オルクサン殿に
救援を行うと約束した。それは果たさねばならないと思う。」
「いまから行っても……。軍団を回しても間に合わないだろう。
クラコワでさえ、外城壁を放棄しなければならなかったのだから……。」

ハイアルト卿も、麾下の騎士たちも、限界だった

「それでは、手遅れだと仰るのですか。」
「ひどいことを言うようだが、その通りだ。」
「姫よ、我々が、今こうしていること自体が奇跡のような
ものなのだ。ペルジアは強かった。イズマイルは、最後まで己の軍が
敗北するとは思っても見なかつただろう。」

カラバ公は、自分がイズマイルの立場だったとしても、同じ事を思った
だろうと感じていた。

イーリアスは一人孤立した気持だった。

「私が、一人で行ってきましょう。」
その一言に、一同は驚いて振り返った。

「あなたが言うことだから、何か算段が有るのですが、
いったいどうするおつもりです。」

「ロンダルトはもう落ちているでしょう。イーリアス。残念だが、
これは皆様の言われるとおりだ。私があなをここに引き留めたのは
そのためでもあった。

だが、ロンダルトを敵の手に渡してしまうつもりはない。

ペルジアの都から比べれば、ほんの目と鼻の先の、あんなところに
居座られては、クラコワの安全は仮初めのものでしかない。
そして、もし、王と王妃がどこかに落ちておられれば、

お助けできるかも知れない。

だから、イーリアス、しばらく待っていておくれ。」

「いえ、もういいのです、このうえあなたまで失ってしまったら、私・・・。」

「大丈夫。私は大丈夫だから。」

今夜はもう、誰も彼の言葉に反論するものは居なかった。

第二城壁の上から、かつてペルジアの兵士達だったもの達を眺める、二つの影があった。

夜はすでに更けており、彼方此方で燃えるたき火の炎が、男達の顔を赤々と照らしていた。水と十分な食料と酒まで与えられて、明日の朝が来ても、もう戦いにかり出されることもないという安堵感が、男たちから険しさを取り払っていた。

やがて二つの影は城壁を下り、男達の間を歩き始めた。

何者かと興味を見せるものもあり、そうでないものもあり、中にはイズマイルとの会見を見たものがあり、あれが敵の大將だとささやき合うものも居た。

やがて一つの集団の前で立ち止まると、二人のうちの一人が話しかけた。

「こちらの言葉は分かるか。」

たき火を囲んで、寄りかかったり座り込んだりしているもの達のうちから、一人の年長らしいものが立ち上がり応えた。

「私はしばらくここで暮らしたことがある。言葉も或程度わかるし、あなたが誰かも知っている。アレスミリア・・様と呼ぶべきかな。」

その男はペルジア兵には珍しく、真っ当な鎧と兜を身につけていた。顔立ちも他の集団よりはクラコワの人々に近かった。

「御名をお聞かせ願えようか。」

「ザヒル・シャハフ。アタリスの。」

「ではザヒル殿。貴方に頼みがある。お疲れのところ申し訳ないのだが、私と一緒にロンダルトまで行って頂きたいのだ。

これは、命令では無いのだけれど、断られると、私や此の国にとっては非常に困ったことになる。だから是非にも受けて頂きたい。」

勝利者の立場として、命令ではないのだがとこいつつ、断るなど

言うのは、それを命令というのでは無いかと。

この矛盾した言い回しを使う男が、本当に六万のペルジアを破ったのかと、違和感を覚えた。

「では翌朝までに、馬に乗れるものを十名ほど選んでおいて欲しい。

馬はもちろん、こちらで用意する。」

それだけ言い終わると、アレスミアンは、すたすたとまた闇の中へと消えていった。

「ロンダルトは、すでにペルジアの支配下に有るだろうと、我々は考えている。それを交渉により取り戻すのだ。

我々だけで行っては、交渉にたどり着く前に殺されてしまうだろう。あなた方は、今は捕虜の身だが・・・、その仲介をして欲しいのだ。

あなたがたの一団は、ペルジア軍の中でも比較的大きいし、装備も整っている、指揮官と話が出来る立場にあるだろう。」

ザヒルは、思案していたが、

「ペルジアを相手に交渉で国を取り戻すなど、あり得ない。

お前の主はどうにかしているのではないか。」

と率直に言った。

ここでイテカレスは、

「あなたはもう、嵌っている。」と笑いを含みながら返した。

「それはどういう事だ。」

「今、ペルジアの兵士達が、こうしてここにいることをどう思う。」

「うん？何のことだ。」

「これこそまさに奇跡だ。そうではないか？」

イテカレスは大げさに手を広げ、辺りを見回して見せた。

「見たくはないか。この奇跡は、少なくとも十万のクラコワ市民が目撃している。けれど、ロンダルトでこれから起こそうとしている奇跡は、彼らは見れない。」

「私には関係ないことだ。ペルジアに敗れ、またお前達にも敗れた。この先、ロンダルトとやらまで行って何となる。」

「あなたはいま敗れたと言ったが、私はそうは思っていない。あなたは、ペルジアに勝ったのだよ。生き残ること、それがこの戦いの勝利だ。

イズマイルには、この戦いには二つの目的があった。

一つは、アズールの国、クラコワとロンダルトを征服すること。もう一つは、その戦いでこれまで征服した土地の男達を戦いに

かり出し、消耗させ、反乱の芽を摘むこと。

そしてあなた達は生き残った。

不用意にも袋のネズミになったあなた達を、殲滅しようと思えば出来なくはなかった。けれどもそれをしなかったのは、私の主が、それを望まなかったからだ。」

「良くは判ら無いが、もし私がロンダルトに同行しないと云ったら・・・。どうするつもりだ。」

「なに、他の人物を捜すさ。私の主は、無理強いはしない。望んでいるのは、あの人のやろうとしていることを理解し、共に行動してくれることだ。

特に今度のことは、敵のただ中に乗り込むわけだからな。無理強いをして、肝心なときに裏切られては元も子もない。」

「私は、裏切るかも知れないぞ。」

「貴方の一団は、こんな状況の中でも良く統率がとれている。

武器を捨ててはいるが、周囲への警戒を怠らないし、他の集団といざこざを起こすこともない。

それは、あなた方が誇りを捨てていないからだ。誇りを重んじるものは、裏切りなどしない。」

ザヒルはなおも、彼がいかに行動すれば、彼らの集団にとって、ことを有利に運べるかを考えていた。生き延びたとはいえ、まだ先のことは分からない。果たして故郷に帰れるのか、それともここに留め置かれ、別のところに連れて行かれるのか・・・。

「お前は、私が嵌っている言ったな。それはどういう事だ。」

「もし私があなたの立場で、厄介ごとを避けようと思うなら、呼びかけには応えない。知らぬ顔を決め込んだらう。

だが貴方は応えてしまった。相手が私の主と知った上でね。それは貴方があの方に興味があり、それとの交渉が、何か自分たちの役に立つのではないかと期待しているからなのだ。」

その通りかも知れないと、ザヒルは思ってしまった。そして、ザヒルが本当に嵌ったのはこのときだった。

言葉に出して言われると、人はそれを意識してしまう。
好む、好まざるに関わらず、意識は行動に影響を及ぼす。

「そうだろう？」

「そうだ、な。」

「では、明日。」

と言うなり、イテカレスもまた、闇の中の人となった。

「おい！」

私は、承知したわけではないぞ、と言おうとしたが、もう手遅れ
だった。

「アレス、他に手だてはないの。」

「無い、と、思うよ。」

「誰か他の人が行くわけにはいかないの。」

「此の国に、アレスミリアンが一人しかいないのと同じくらい、

私以外にこの役は果たせないだろう。」

沈黙があった。

「私が一緒に行けば……。私は馬も乗れるし、ロンダルトにも

明るい。アストアシタ宮の秘密の通路や部屋も知っている。

私も一緒に。」

アレスミリアンは、黙って首を振った。

イーリアスの眼から、また涙があふれ出た。

「私を一人にしないで。」

イーリアスの涙を親指でぬぐい、髪をなでた。

「少しの間だけだよ。」

頬を両手で包む。

「大丈夫だから。」

抱き寄せる。

「心配しなくていい。」

「でも。」

見上げる。

「いつも済まない。」

見下ろす。

「あなたがなすべきことを……。そしてかならず……」

もう一度引き寄せて。

「約束する。」

夜に深く深く、沈みこむ。

戦いの名を忘れ、互いの名だけを、心に記しながら。

翌朝、アレスミアンを迎えたのは、アタリスの十人の騎士とイテカレスだった。

「何をしている。」

「今度こそ、お供します。」

「お前という奴は。」

「ロンダルトを解放した後、行政を立て直す必要があります。

ニールリングは堅物ですから、ロンダルトのような都には不向きです。

その点、わたくしのような如何わしさが、何かとよろしいかと。」

「分かった、分かった。お前が“やりて”なのは認める。だがな、命を捨てる覚悟が要るぞ。」

「もとより。あなたとともに居れば、いくつあっても足りません。

命を捨てる覚悟なぞ、とうに忘れてしまいました。」

「わたしはそんなに危ない橋を渡っているか。」

「殺されかけたのも、一度や二度ではないでしょう。まったく。」

ザヒルは、この主従のやり取りを横から眺めていて、この朝アレスミアンに、一言二言釘を刺そうと思っていたことが馬鹿らしく思えた。

いわく、同行はするが、家来になるわけではない。

何が起こっても、お前を守りはしない。

命を助けてもらったのだから、後ろから刺したりはしないが、途中で置き去りにするかもしれない・・・、などなど。

昨夜、まんじりともせず思い巡らしたことを、言わずには気が済まない。そう思ってやっては来たが、まるで衣服を脱ぎ捨てるかのように、生命を捨てる算段をしている二人に、なんと女々しいことをいうのか、と軽んぜられはしまいかと、気にしたのだ。

「弓、楯、槍、剣。」

「全てお返ししました、というか、好みのものを取っていただきました。」

もうどれが誰のだか。」

「それは申し訳ないことをしたな。ザヒル殿。」

「えっ、いや、は、こんな戦いにたいしたものは持ち込まん、
ので、ござい、ますよ。」

突然話を振られて慌てたザヒルは、家来ではないのだから
へりくだる必要はないという思いと、それではかえって虚勢を
張っているように見えないか、という思いが交錯し、言い損なって
しまった。

「彼らは？」

「一門の者を揃えた。そのほうが何かと都合がよい。」

「わかりました、紹介はこの夜にしましょう。先を急ぎます。」
というなり、マクシミアの足を南の城門に向け駆け出した。

その後をイテカレスが続き、

「今夜はミルトフォルトまで行きましょう！代えの馬と食料、
宿を用意するように使いを出してあります！」
と、馬上から叫んだ。

アレスミリアンは「分かった！舌をかむぞ！」と応えた。

その後を、少し遅れてザヒルの率いる騎士団が追った。

万が一、彼らが弓でアレスミリアンを狙っても、間のイテカレスが
障害となる。イテカレスはそんなことにはならないようにと願いながら、
びくつきながら馬を走らせた。

その夜、夕食の後で、一同は改めてお互いの顔を見合わせた。

「こちらから、タルヒム、イスファル、ケルクサス、・・・。

みな私の一門のものだ。気心の知れたものばかりだ。」

「私はアレスミリアン。この男は“いかれた”イテカレス。

敵兵に酒をおごるのが趣味だ。」

彼らのうちの半分ぐらいは、この話を理解できたらしい。

分からなかったものは、隣の男の腕をつつき、その男が翻訳して伝えると、手にした杯をイテカレスのほうに掲げ、何事か、彼らの言葉で乾杯とでも、いったのだった。

「おお、あの酒は、おまえのはからいか。」

ザヒルは既に、きこしめしており上機嫌になっていた。

「どうしてそれを。」

ご存知ですか、あなたはずっと奥にいたはず、とアレスミリアンに問いかけた。

「ニールリングは、そういうことはしない。」

「やれやれ、それでは私が、やくぎもの様ではありませんか。

まあそれも、仕方ありません。主が主ですから。」

「どういうことだ。」

「名を偽り、身分を偽り、王国の姫君を籠絡し・・・」

「その姫君の侍女に、ちょっかいを出しているのはどこの誰だったかな。」

「・・・・・・・・・・！」

一つの火を囲むと、その火が顔に熱を遷してほてらせるように、一座のものに共有感が伝染する。

このひと時を共有していること、話を共有していること、同じように酒を飲んでいること。ザヒルは改めて、この若者が征服王を蹴散らしたことが、信じられなかった。

この中の誰よりも華奢な体つきで、指も女のように細く、物言いも控えめ。

「どうにも、納得できぬ・・・なあ。」

と炎を見ながらいった。

「あなたは、クラコワに住まわれたことがあると言われましたね。」

「こんなことで、気を悪くしないで欲しいのだが。いろいろと調べることがあったのでな。

地理やら、人の動きやら、城のことなど、な。」

といったところで、口を湿らせた。

「我々の部族は、ペルジアとこの国の間にある。血の交わり、人、物の関わりが古くよりあったのだろう。顔つきも似ているし、言葉もある程度分かる。だから、探りにいかされたのだ。

その私が言うのだが、よもやペルジアが敗れるとは思っていなかった。我々がひとたまりもなく打ち負かされたペルジアが、イズマイルが逃げ帰るなど、今も信じられぬ。」

火の中で薪のはじける音がした。火の粉が、踊りながら空の闇に吸い込まれていく。その空には冬の星々がきらきらときらめく。

「美しい。星を見上げるのも、久しぶりの気がする。」

つられて、ザヒルも星を仰いだ。

「あの光るものは、一体何なのだろう。燃えさかる炎であればいつかは消える。けれども、私が子供のころより変わらず輝き続ける、あれは何だろう。」

「星は、星だ。」

ザヒルは、ロマンとは無縁かもしれない。

「はは、たしかに。星は星。だが星とは何だ。」

「・・・。」

「変わらず輝き続ける星も、いつかは消えるそうなの。流れ星となって。」

「イズマイルは流れ星か。」

「私がしているのは、ただの星の話ですよ。ザヒル殿。さて、イテカレス。宿の用意がしてあるといったな。」

「このような田舎ですから、仮の宿ですが・・・、いくつか民家を空けてくれました。」

ザヒルは、もう何年も屋根の下で眠っていない気がした。

粗末な寝床だったが、天井や壁に囲まれて眠りにつく安堵感は、何物にも代え難い思いがした。

うつらうつらとする間もなく、彼は眠りに落ちていった。その途中で、誰かが何かをいっているような気がした。

「我々もまた星のようなもの。いつか流れ星となって消えていく。夜は朝露に消え、昼も地平線に吸い込まれる。全ては無くなり、また再生される。」

「……ヒル、ザヒル、起きてください。」

しきりに体をゆすぶられて、ようやくザヒルは目を覚ました。

「なんだ、月がどうした……え。」

ザヒル・シャハフを起こしていた若者は、一体何を言っているの
だろうかと怪訝な顔をした。

ザヒルは、

「うっ、そうか。ロンダルトに向かっていたんだったな。」

と、身体を起こし、頭がはっきりするにつれ、それまでに自分が
何を口走ったかと、ひどく気になった。

昨日まで、戦場にいたの。そして、いま行動を共にしているのは、
その敵の首領なのだ。

この数日の変化に、頭と体がついて行かない。そんな感じだった。

戸外では、アレスミリアンと一族の若者たちの間に、何か話が
はずんでいようだった。

「ザヒル殿、日の上がりきらぬうちから申し訳ない。先を急ぐので。」

「いや、つい深寝しすぎたらしい。戦場では、草を踏む音でも

目が覚めるのだが。」

と、言い訳た。

イテカレスが、

「村のものが朝食を用意してくれております。パンとミルク、残念ながら
ワインはありません。」

と告げた。

「それは残念。」

ザヒルは、イテカレスの軽口に付き合うようになった自分がおかしかった。

あなたは、もう嵌っている、か。

これから敵の真っ只中に、それも死闘を演じた後の、戦場の血も
生々しい敵兵の中に乗り込むというのに、この軽さは何だ。

イズマイルの強さは明確だ。あれは目に見える強さだから。

彼らの強さは一体何だろう。

目に見えぬ強さ、とは一体なんだろう。

「せっかくおいでくださったのに、もうご出立とは。」

「いや、このたびの戦でいろいろ迷惑をかけた上に、重ねて出費を
させてしまった。長居をしすぎたくらいだよ。」

「とんでもございません。御用がお済の帰りには、是非にもお立ち寄
りくださいますよう。」

「ああ、そうさせてもらうよ。」

それには、まず生きて帰らねばならない。そういう行軍であることを、
村の者は知らない。

「イテカレス様も。村の娘供がさびしがっております故。」

「おまえは、あきれた奴だなあ。」

「ちっ、ち、違いますよ！何もしておりません。私はただ、炊事場で、
料理の出来かげんを気にしていただけです。」

「ロンダルトに着いたら、すぐに外出禁止令を出さないといけないな。

おう、行政のことはおまえの仕事だったな。これは都合がいい。

おまえが危険だから、娘を外に出すなと、おまえが触れを出すのだ。」

「先に行きますよ！」

「いや、すまないすまない、想像したらあまりにおかしくて。」

若者たちも笑っていた。

今日は、アレスミリアンとザヒルが並んで先行した。

マクシミアだけが昨日と同じだった。

他の馬同様、鞍を降ろし、冊につなごうとしたが、ひどく嫌がったのだった。

「アレスミリアン殿、先ほどは何を話しておられた。」

「ああ・・・、誘ったのです。イテカレスのように私の元に来ないかと。

国づくりのいい勉強になる。」

「国づくり？」

「その話はまた後です。先を急ぎましょう。」

マクシミアの疲れを計って、並足で駆けていたが、問題が無いと分かると疾走に移った。

夕刻にはロンダルトに入る予定だった。

丘陵と都の間には、生きた兵士の姿は無かった。

「やはり、終わっていたか。」

アレスミリアンがそういった後、それ以上のことは、誰も何も語らなかつた。

それは夕暮れのせいもあったかもしれない。

朱色に染められた城壁と大地は、それ自体が傷つき倒れた生き物のようにも見えた。兵士は、無残にも命果てたときの姿のまま、横たわっていた。ロンダルトは、城を墓標に力尽きていた。

オルクサンはどこに・・・、どこで討たれたか、必ず探し出さねばならない。

ザヒル・シャハフはペルジアの勝利に何も感じなかつた。かといって、ロンダルトに肩入れするのでもなかつたが、この二日間で、外形は同じでも、自分の中の物が、別のものに変質してしまっているような感じがした。

城門は破られたときのまま、残骸の山となり、姿をさらしていた。

数ヶ月前に訪れたときにはあんなに賑やかだった街区が、すっかりなりを潜め、人通りは無かつた。二騎と十騎は、アストアシタ宮の方へと馬を進めた。

外には見ない人も、家の中の方で、ひっそりと息を潜めているような気配がした。時折見える小さな明かりが、死の都にまだ息があると、控えめに主張していた。

「ザヒル殿。お願いいたします。」

「うん？ ああそうであったな。」

ザヒルは、一人の若者を呼び寄せ、彼らの言葉で何かを指示した。若者は、すぐに馬を駆けさせた。

「先乗りに行かせた。いきなり斬りつけられることは無いだろうが、会え

るかどうかまでは保障できないな。」

「彼らも、クラコワの様子を知りたがっているでしょう。会えますよ。」

宮城に近づくにつれ、人が増してきた。四万の軍団が、アストアシタ宮を取り巻いて宿営をはっている。洪水のような人の集まりだった。

広いロンダルトに分散することによる、襲撃の危険を警戒したのかもしれない。

戦いは終わったが、そのあとの措置は何もしていない。遺骸を片付けるとか、街路に積み上げられた障害物を撤去するとか、都としての機能を、元に戻そうという動きはなにもない。

そんな感じだった。

若者は、すぐには戻らなかった。

痺れを切らしたザヒルが、もう一人の若者を行かせようとしたとき、ようやく彼が別の男を伴って、戻ってきた。

「事実を信じようとしない。何回も何回も同じ話をした。結局この男がついてきたが、アレスミリアン様には会うと知っている。

この男の役目は知らない。」

ようなことを、彼らの言葉で話した。

ザヒルはただ一言、「話がついた。」とだけ言うと後は無言だった。

これから一体何が起こるか、起こったときにどう行動すべきか、そして、その決断に彼らの民族の将来がかかっていることに、初めて気がついた。

国づくりの役に立つ・・・というのは、こういうことだったのだろうか。いや、少し違う気がする。

が、何か気にかかる。

ロンダルトへの遠征軍の司令官は、アストアシタ宮を占拠し、まるで王のように振舞っていた。

長い長い廊下を、十二人と一人が進むと、両側に廷臣をはべらせた形で司令官が座っていた。

司令官は色が浅黒く、濃い眉と髭が、さらに全体の印象を黒々としていた。

イズマイルほどではないが、剣やベルトには多くの宝飾と金の飾りが施されていた。

先導した男は、そのまだはるかに遠い、下座の位置で立ち止まった。が、アレスミリアンはそれを無視して、すたすたと前に進んでいく。両側から剣士が飛び出し、行く手をさえぎろうとしたが、

「おい、そこのお前！ 誰の許しがあってそこに座っている！」と大声で叫んだ。

アレスミリアンの声は、反響のよい広間内にこだました。司令官は、通訳に耳打ちされ、改めて言葉を返した。

「だれの許しも受けない。これは私の椅子だ。」通訳は、かれにしては精一杯の口調で返した。

「その椅子は玉座だ！ 王しか座ることを許されぬ。王といえば、この国ではアビアント王、お前の国ではイズマイルだろう。

お前は王ではない、ただの司令官ではないか。このことを知ったら、イズマイルはなんと思うか。ロンダルトを征したことをいいことに、反逆の意思ありと思われても仕方が無いな。」
といいながら、なおも進んでくる。

警護の剣士は、意味はわから無いが、イズマイルの名が出たことで、これは何かひどいことに巻き込まれるのではないかと躊躇った。

「私はイズマイル様の忠実な僕だ。反逆の意思などあろうはずが無い。」

「では、それが玉座と知らなかった、というわけだな。」

「そうだ。」

司令官は、分かりにくいがほっとしたように見えた。

「ではとっとと降りろ！」

アレスマリアンは再び鋭く叫んだ。

司令官は、しばらく彼の独占物であった椅子を未練がましく手放すことにした。警士たちはいまやこの男がイズマイルの代理人ではないかと疑い、目立たぬように引き下がった。

「さて、」

といいながら、主を失った“玉座”に、アレスマリアンは腰を下ろした。

遠征軍の司令官は、顔を真っ赤にして何かわめいたが、通訳によるとそれは、

「お前は、何故そこに座っているのか。」

ということだった、らしい。本当のところは、なんといったのかペルジア人にしか分からなかった。

おそらく、もっとひどい言葉が尾ひれの辺りについていたのである。

アレスマリアンはザヒルを見、彼がうなづくのを見て、その訳が間違っていないことを確認した。

「私はイズマイルを敗走させた。そして私以外の王や後継者が居ない今、この国の王となった。私を王にしたのはお前達だ。だからお前たちの上座の、“玉座”に座っている。」

司令官は、後に分かったことだがこの男の名は、タラバスカニというらしい、口角に泡を飛ばしてわめき散らしたが、通詞も訳に困ったと見えた。

アレスミリアンは、鬱陶しそうにザヒルを指差すと、今度は二人の間で騒々しい言葉のつぶての投げ合いが始まった。

ザヒルが何の縁もない、クラコワ側の代弁者にされたのは、巡り合わせの不運としか言いようがなかった。

アレスミリアンには、二人が何を言い合っているのかは定かには判らなかったが、並び居る一同の変化を見ていると、一様に、何か信じられないような天変地異が起こったかのような振る舞いをしていたのが可笑しかった。

おそらく、イズマイルが敗走したところまでは伝わったらしい。

司令官は再びアレスミリアンに向き合い、
「それで、お前は何をしに来たというのだ。」
と、先ほどよりももっと赤い顔をしてくってかかった。

「今すぐ立ち去った方が良くぞ。ザヒル殿、あなたが通訳をしてくれ。」
ザヒルは言葉通りに伝えた。

「何を言う、我々はお前達の軍を破ってここを占領している。何故引き上げねばならん。ふざけるのもいい加減にしろ。」

「クラコワには、今、五万もの兵が留め置かれている。彼らはそのほとんどが、征服された民だ。

さて、我々も彼らをずっととどめておく訳にもいかない。というわけで、彼らは今、順々に帰途についている。鎧も兜も剣も携行を許されてな。」

これにはザヒルも少々驚いた。

驚いて、訳す前にアレスミリアンを見つめる時間が長かった。
タラバスカニがペルジアの言葉で何事か言うと、ザヒルは思い出したようにそれを訳し始めた。

そして「いったいどういう事だ。何を考えている。」
と、これはアレスミリアンへの問いかけだった。

「クラコワでは五万もの兵士を養えない。だから故郷に帰している。

ただ、それだけだ。

だがな、それはこちらの事情を話せばということで、五万の兵士が武器をもって征服された故国に帰る。その国の話は、また異なるのだ。」

ザヒルはまたアレスミリアンを見つめた。

「今、ペルジアのイズマイルに付き従うものは、まあ二十名かそこら

だろう。無事アルシャーファに帰り着いたとしても、守備の五千ほどが残っているに過ぎない。

そのうえ、イズマイルの不敗の神話は、彼らの目の前で崩れ去ったのだ。故郷で黙ってじっとしているわけが無かろう。」

ザヒルの表情は複雑だった。

「では、私の配下の者は。」

「それはここでは判らない。あなた方の帰りを待っているかも知れないし、先に帰ったかも知れない。ただし、あなた方にはこうして世話になっているから、何事にも特別な計らいをするようには言っています。つまり、待つも帰るも彼らの自由と言うことです。」

ザヒルはこの言葉は訳さなかった。

「おそらく、近々各地で反乱の火の手が上がるだろう。お前達がかんなところでのうのうと暮らしている間に、お前の国は無くなってしまう。だからとっとと帰れと言っているのだ。」

一同は、もはや混乱の中にあり、統率がとれなくなり始めていた。この中にも非ペルジアのペルジア兵がいたし、ペルジアの中でも、早計に帰るのもどうかと言うものもいれば、そうでないものもいる。

「イズマイルは、間違いなくアルシャーファに帰るだろう。

そのために、我々の騎馬軍団が監視に付いている。

何なら手紙を出してやっても良いぞ、ロンダルト攻撃の司令官は、イズマイルとペルジアの危機を知りながら、宮廷で酒盛りをしていたとな。

もし、此の国で略奪を働いたり、この宮殿の椅子一つでも持ち出してみろ。
イズマイルの許し無く、お前達が宝をくすねたと知らせてやろう。
おそらく、イズマイルは、生まれてこの方無かったような屈辱感を
味わっているだろうから、お前達の勝手な振る舞いを知ったら、
さぞや怒り狂うことだろう。」

ザヒルはこれを訳しながら、昨日までのアレスミアンと今の彼と、
どちらが本当の彼だろうかと考えていた。少年のように純粹で、
古狐のごとく老獪で、いずれにせよ、この程度の司令官では太刀打ち
出来まい。

「言うことはそれだけか。なあに、お前をこの場で切って捨てれば
良いだけでは無いか。」
司令官とて、おいそれと、脅しに引き下がるわけには行かなかった。

「はっはっは、出来もしないことを言うものじゃない。恥をかくだけだぞ。」
アレスミアンは”玉座”に深く身体を預けたまま、動かなかった。

司令官は、
「何だと。」
といいつつ、剣に手を掛けるそぶりをした。

その動きに対して、その場にいるもの達の動きが、それぞれの旗幟の複雑さを露呈した。

非ペルジアのペルジア兵も、剣に手を掛けたが、それはアレスミリアンに対してでは無かった。

それを見たペルジア兵は、またそれに対して剣を抜こうとした。

誰かが抜けば、ただ一人を切っただけでは済まない。
ロンダルト中にそれが広がる恐れがあった。

「やめよ！」
とペルジアの言葉で叫んだのは、ザヒル・シャハフで有った。

「殺るときは、黙ってぐっさり、だ。」
アレスミリアンは、いつかの闇討ちを思い出していた。

「さて、私は市中を見回りに出かけるとしよう、お前たちが荒らした都の、後片付けをせねばならん。

それから二日もすれば、騎兵三千が到着する。それから決戦しても良いぞ。

四万のうち、どれだけがお前に付くか見ものだな。」

そういい残して、アレスミリアンはアストアシタ宮の奥へと消えていった。

広間に残されたものは、先ほどの緊張がまだ解けずに居た。

司令官はめまぐるしく考えていた、それはアレスミリアンをどう始末するかではなく、どうすれば自分の身が守れるかについてであった。

ロンダルトを陥落させたとはいえ、敵国の真ん中で孤立していることは確実だった。

しかも、この都は攻めるにやすく、守るに難いことは身をもって承知している。

彼の後ろ盾は本国に逃げ帰り、そのため、彼が率いる軍も亀裂が入り始めている。ここでアレスミリアンの言うとおりの三千の騎兵がなだれ込めばどうなるか。

彼が考えているのは、どうやれば確実に身を守れるかであり、「行く」も「留まる」もその手段の選択肢でしかない。

「ここは、一度ひいたほうが良いのではないか。本国が不安定な状態で、敵国に孤立するのは得策ではない。

クラコワを落とせなかったことで、状況は変わったのだ。

お前は与えら を果たしたのだから、凱旋将軍として迎えられるだろう。」

ザヒルは、慎重に言葉を選んだ。

彼も変わり行く状況の中で、民族のために何が得策かを考えていた。

「そういうことであれば。」

と、やむをえないという態度を取り繕いつつ、

「本国のイズマイルさまが心配だ。これより帰還の準備に入る。

期限は明日の夕刻だ。」

と、一同に命令した。

非ペルジアのペルジア兵も、これには一様に従う姿勢を見せた。

ここで分裂しても、非ペルジア勢力の頭に立つものが居ない。

数では勝っても、所詮烏合の衆である。

統率された軍団に、勝てる見込みは薄かった。

それよりも、いち早く故郷に帰る道を選んだのである。

ペルジア兵はペルジア兵で、イズマイルへの忠誠を忘れては居なかった。司令官の決定は気に入らなくても、イズマイルは彼らの英雄だったのだ。

そしてザヒルは、アレスミリアンの後を追い、不案内な宮殿の奥へと入っていった。

「アレスミリアン様、あれって玉座でしたっけ？」

「しらんよ、そんなことは。」

「やっぱり、ちょっと違う気がしたんですよ。」

「おそらく、ウェルモンテ伯あたりの椅子じゃないかな、

あのごてごてした趣味の悪さは。」

「ああそうですか、って、あなたを狙った男の椅子ですよ！」

「椅子は、椅子だ。椅子に罪は無いさ。」

「そーんなもんですかねえ。でも先ほどの様子、相当の悪でしたよ。

あくどさが乗り移ったんじゃないですか。」

「馬鹿を言うな。 ちょっとうるさいぞ。」

「落ち着かないんですよ。今にも、後ろからペルジア兵が追っかけて来はしないかと。」

イテカレスは、時折後ろに首を曲げながら、不案内な通路をアレスミリアンを頼りに歩いた。

「この通路は、表立っては使っていない通路だ。各部屋への裏道さ。

普段は城の使用人たちが歩き回っている。時には王がこっそりと使うこともある。」

「どうりで、装飾も何もないわけだ。」

「城のもの以外に、知る者は無い。」

アレスミリアンは、突然立ち止まった。

「なんです？」

「アビアント王の、秘密の居室だ。」

私の叔父のな。

「開けないのですか。」

「・・・開けずに立ち去れるものなら、そうしたいが。」

扉を押し開ける両腕がぎこちなく、鉛でもまかれたように重かった。

室内が荒らされた様子は無かった。

その部屋の主の、永遠の眠りを乱すような騒動が、起こらなかった

ことは幸いだった。

月の光差す部屋には、花の香りが充満していた。

王と王妃が、眠るように横たわっている。

アレスミリアンが、アビアント王を見るのは初めてだった。

この宮城には何度か来たことがあるが、普段、表には出ない王と、地位の低い貴族のアレスミリアアが会うことは無かった。

しかし、

— オルクサンの面影がある、
と感じた。

「誰かある。」

何事も、起こらないかと思えたしばしの後に、片隅でことりと音がすると幻のように人が現れた。

「事の次第を説明してくれるか。私はアレスミリアン・スークリアだ。」

「存じてございます。わたくしは、ベルリナと申しまして、累代の王に仕える家のものでございます。アズレクン様によく似ておいででおられます。こういう言い方は変でございますが、お懐かしい思いがいたします。」

「父のことも知りたいが、今はこのお二人と、オルクサン殿のことを教えてくれ。」

「あの、、、イーリアス様は、」

「心配するには及ばぬ。」

「では。」

と言った後、こほん咳払いをして、ベルリナは語り始めた。

「ペルジアが来襲いたしましたして、オルクサン様は即座に出陣なさいましたが、いまだご帰還なさいません。そのうちに、都の中へとペルジアが攻め込んでまいりまして、間もなくこのお城も包囲されました。アビアント様と王妃様は、これが最後と思い定め、毒をあおられたのでございます。」

「花は。」

「宮殿に残りました私どもで、アビアント様が丹精込められた庭よりお持ちしております。」

「何故逃げなかったのだ。」

「私どもはみな、代々この宮殿に仕えております。このお城が動かない限り、私どももここを去るわけにはいきません。」

「ペルジアの王が来たらどうした。」

・・・とは聞かなかった。毎日、危険を承知で花を飾ってくれた、それでよい。

「オルクサン殿の消息は分からぬのか。」

「ペルジアが取り巻いていらい、出入りは殊の外難しく、外のことは全く分からなくなってしまいました。何処かに落ち延びておられることを、祈って参りました。」

— それは、難しい願いだ。

「ウェルモンテ伯は。」

「ペルジアが来る以前から、こちらではお見かけしません。」

— 逃げたか・・・。逃げるしかなかったろうな。

「そうか。彼らは明日には去るだろう。みなに、安心するように伝えてやってくれ。」

「承知仕りました。それで、あの、この後は、私どもは、どなたさまにお仕えすればよろしいのでしょうか。」

「今までどおり、この宮殿に奉仕してやればよい。」

「さようでございますか。それではそのようにいたします。」

「次はどちらへ。」

「いいか、あまりここで大きな声を出すと、秘密の通路が秘密でなくなる。しばらくその口を閉じている。」

そのあと、イテカレスはどこをどう歩いたのか分からないまま、気が付けばそこは調理場だった。

「もう話しても・・・、」

「いいぞ。」

「アレスミリア様、お腹すきませんか？」

「そうだな、ザヒル殿たちはどうしているだろう。」

しばし、と言い残してどこかへ走り去った。イテカレスには、そもそも秘密の通路などというものは、無用のものらしい。

アレスミリアンは、天井の高い厨房をぐるりと見回した。百や二百の料理人が、一斉に調理にかかれるような大きさの、調理台が置かれている。

夜会の時などには、大量の食材でうめつくされるのだろう。しかし、今はひっそりと静まり返っていた。

大きな柱の根本の、竈の前に座って一人で種火を守っている男がいた。その側に、腰をおろした。

「ミカケネエお方ですな。」

「名はなんと言う。」

「あしは、火の番をしております。」

「何か作れるか。」

「あしは火の番ですんで。」

「そうか、大事な供に何か食べさせてやりたいのだが・・・。」

「では、種火を竈に移さねばなりません。」

なんだ、聞こえているのではないか。

「料理人はどうした。」

「こんな夜中でございませ、料理人はねておりましゃ。」

「そうか。そんな夜中か。」

「貴族さまは、あまりこういうところにこられては、いけねえとおもいまし。」

はは、そのとおりだが、余計なお世話だ。いまは、行けるところが限られている。

種火の赤い炎が、守番とアレスミリアの顔を交互にちろちろと照らした。

「すまんな、城内をあまりうろうろすると、命にかかわるのでな。

お前は逃げなかったのか。」

「この火はクラコワの城から火を分けたそでしゃ。

千年燃え続けていると、親父が言ってオリましえ。

あしは、ずっとずーとの火の番でごぜまし。」

「そうか、千年燃えているか。」

「うそでしゃ。」

「え。」

「あしも、子供のころはしんじてごぜましたが、年をとると

なんとなくわかるものでごぜましよ。ひゅっひゅっ……。」

こいつ、食えぬやつだ。

「アレスミリア様。」

「ザヒル様をお連れしました。」

「おおなつかしや。」

「あなたは、ひどい男だ。」

誰かにも、そういわれたな。

「その埋め合わせに食事でもと思いましたが、ご覧の通り、

誰もおりません。」

「こんな夜中に、こないに人がいるとはめずらシエ。そな鍋でも

がんがん鳴らせば、誰か起きてきますしょ。」

イテカレスは一応アレスミリアンの顔を伺ったが、その時は鍋と木べらを両手に持っていた。

やれ、と言うようなそぶりを見て、十回ほど打ちならしたろうか。

「何をしている！いい加減にしろうるさい！ゼル何事だ。

おや騎士がいっぱい。

ペルジア人か？こんな夜中になんだ。」

「私は、」

と言いかけたアレスミリアンを制して、イテカレスが、

「クラコワから来たのだが、朝から飲まず食わずでね。何かできないか。」

「えっ、じゃあクラコワはまだ落ちてないのか。」

「落ちるも何も、ペルジアは退却したさ。」

男は驚き、信じられんというように首を振った。

「そいつァ、たいしたことだ。だがなあ、こんな夜中で回りも囲まれてる。

食べ物といっても今用意できるのは、パンと水と、酒ぐらいのもんだ

それでもよければ、食っていきな。」

といつつ、その手は灯りに火をつけ始めた。

「それ、チーズも有った。」

「ああ、十分だ、ありがたい。」

「ザヒル殿も酒が有れば良いでしょう。」

「うむ、まあそうだな。」

といつつ、まんざらでもない表情をしていた。

「さっきは、どうして止めたのだ。」

「あなたが名乗れば、城中の料理人や召使いが起きてきます。

そんなことになったら、何時になれば食事にありつけるかわかったものではありません。」

「なるほど、そういうものか。」

「それと、オルクサン様の居所がわかりました。」

「何！ 食事などしている場合ではないではないか！」

「いえ、もう、いつ伺っても同じ事です。」

「ということは……。そういうことか。」

「はい。」

その後、イテカレスは、何度かアレスミリアンの名前を呼ばねばならなかった。

「お気持ちは判りますが、ちゃんと食べてください。これから何が起るかも知れず、次は何時食べれるかも知りません。食べられるときには食べましょう。」
「ああ、そうだな。」

ニールリングには、こういう押し付けがましいところはない。アレスミリアンが悲しめば同じような悲しみを感じ、喜びをともにするようなところがあった。けれどもイテカレスは、アレスミリアンを、どこかで子供だと思っているようなところがある。精神が同調する、というようなことも無かった。

皆の前に、ゆであがったばかりの芋がおかれた。
「湯が沸いたのでな。パンよりはよほど腹の足しになるだろう。」
「ありがとう。エーと。」
「ただの料理人だ。」
「私はイテカレス。これからもちょくちょく世話になるよ。」
「いいさいいさ。」
”料理人”は、嬉しそうに身体を揺すった。

「千年の火で沸かした湯。その湯で湯がいたジャガイモか。」
「何ですか、それ。」

アレスミリアンは、ふらりと立ち上がると、火の番人の側に行った。
「ゼルというのだな。大事な仕事だな、それは。それのおかげで、柔らかな芋が食べられた。」

「いにゃ、ゼルはわしの名前ではねえでし。親父の呼び名でし。けど親父のなめも、ゼルでは無かったでしゅ。ひよとすると、千年ぐらいめえの誰かのなめかも知れでしや。ひよっひよっ……。」

どうもこの爺さんには勝てないな、とおもいつつアレスミリアンは心地よかった。

「城の主、王と王妃、それから王子がこの戦で命を落とされた。」

「どなたかは存知ましえんが、それはおふし合わしえなことやし。」

城に住みながら、その主に食事を作るための火種を守る仕事をしながら、主がどなたか知らない。

千年の種火よりも、軽いのか。

「もしこの火が消えてしまったら、どうするのだ。」

「ほれ。」

と、傍らに置かれたカンテラを持ち上げた。

「この火の元は、竈の火。油がある間ももえておりました。これから移せばよかやしゅ。これが消えれば、竈からうつしましえ。」

「両方消えたら。」

「しよしよめんどくせでしが、また火をおこせばよろしゅ。」

「そうか、そうだな。あたりまえのことだ。」

「でじなことは、火がいるときにいつでもつかえることやしゅ。」
火は使えればいい。千年の種火は、そのうちの一つに過ぎない。

大事なことは、か。大事なことはいつも民が教えてくれる。

「しよいえば、やっどこまえにも、おめ様みてな人がおいでさったでし。
おんなじよなことを聞かれたので、おもいだしまし。」

「どんなひとだった。」

「ひよっひよ、おべてわおりまっちゃん。やっどこまえのことやしゅしろう。」

父かもしれない。この城に住んでいたのだ。

「アレスミリア様。ザヒル殿が是非にと。」

「ああ、うん。」

私はきっと、種火なのだ。

そしてもう一つの種火がクラコワにいる。この世で、二つきりになってしまった。

「さて、そろそろ本当のところを聞かせてくれないか。」

「本当のところとは。」

「私は、あなたに請われて付いては来たが、こんな交渉などうまく行くものかと思っていた。でもあなたには勝算があったのだろう。それを聞く権利はあると思うのだが。」

アレスミリアンは、種火の方を振り返った。竈と老人は一つの影となっていた。

「イズマイルは、燃え盛る火のような男です。その火の強さにみな惑わされるが、緻密な男でもある。

ただ力だけを頼むだけではない。あなたのような人が何人もクラコワやロンダルトに送り込まれたに違いない。その証拠に、我々の戦力に合わせた用兵をし、迷うことなくロンダルトまで到達している。」

「今度の遠征で、彼は兵を分けざるを得なかった。クラコワとロンダルトの二都に対して、どちらか片方に集中すると、背後を突かれるおそれがある。

彼がクラコワを親征したのは、動員力が劣ってもクラコワ攻略が難航すると考えたからでしょう。実際にその通りでしたから。

とすると、ロンダルト攻略の司令官を別に置かなければなりません。

その人物には条件があります。忠誠心が強くかつ有能な男か、忠誠心はいまいちでも裏切る心配の無い男です。」

「なんだそれは、よくわからんな。忠誠心が強くかつ有能な男はともかくとして。」

「ペルジアの遠征軍は、クラコワに六万、ロンダルトに四万。違いますか？」

「まあ、それくらいだな。」

「クラコワの防衛力はおよそ二万。ロンダルトは四万ぐらいのものです。

お互いをたせば、八万と八万。」

「どうしてそういう計算になるのだ、敵同士を加えてどうする。」

「ロンダルトが落ちた後、クラコワを攻めようと思えば攻められぬことは無い、ということです。

ロンダルトは、この世界でもっとも豊かな都のひとつです。

これを我が物とすることが出来れば、あるいは我が物とする機会が
今この手にあるとすれば……。野心のある男なら、それを利用しようとするでしょう。」

「忠誠心があるか、度胸の無い男か、どちらかを据えるしかなかった
というわけか。それで？」

「私としては、忠誠心をあおるか、内部に波風を立てながら脅すか、
どちらかをとればよかったです。

とはいえ、先ほどの司令官は私にとって好都合でした。おそらく、
国を賭けた駆け引きなどやったことが無かったのでしょう。

もちろん今度の遠征のように、イズマイル自身が長期にペルジアを
離れるのであれば、それ相当の人物は、アルシャーファに残して
こないわけがないとは予想していましたが。」

「我々を故郷に返すなど、一言も言わなかったではないか！」

「それを言えば、ロンダルトまで来てくれなかったでしょう。」

「では、あれは嘘ではなかったのだな。」

「すでに帰還は始まっているはずです。」

「我々も帰ってよいのだな。」

「帰ってしまわれるのですか、我々を残して。」

といったのはイテカレスだった。

「まだ良いではないですか、せっかくこうしてお近づきになれたのに。」

「出立は、もう少し待たれたほうがよい。今頃は、脱走者が次々と
故郷を目指しているだろう。無用な混乱で命を落とすやも知れない。
ペルジア兵は、脱走者に追い討ちをかけるだろうから。」

その言葉通り、非ペルジアのペルジア兵は、夜の闇に隠れて
部族ごとに離脱を始めていた。
イズマイルが敗れたこと、が大きかった。

イズマイルというものが象徴する、ペルジアへの恐れがなくなったのだ。
新手の騎兵が間もなく到着するということが、それに追い討ちをかけた。

ペルジアの本隊に気づかれぬよう、黒雲の合間に顔を出した
月の明かりを頼りに、夜の闇の中へと逃亡した。

それらが無事に故国にたどり着けたかどうかは、語るものも

記すものも無い。

「イテカレス。」

「はい。」

「行こうか。」

「どこに行かれる。」

「あなた方は、ここでゆるりとされるがいい。戦の後始末は我々の仕事だ。」
長い夜が終わろうとしていた。

「どちらにおられる。」

城の外では朝靄がたち、白くかすんだ通りにはまだ動く人も無かった。

「名も無き街角の民の家に・・・。」

カラスが、空しく声を響かせて飛んだ。

ドンドンと扉を叩きながら、
「開けよ。クラコワから来たものだ。開けよ。」
とイテカレスが何度も繰り返した。

家の主は、窓の隙間から、表の様子を用心深く観察した後、
戸の門を開け、
「クラコワのお方とは。」とたずねると、
「こちらは、アレスミリアン様。御名は聞いたことがあるだろう。」
と、答えた。

男は頷きながら
「では、」
と、扉をより大きく開き、
「クラコワはいったい。」と重ねて尋ねる。

「ペルジアは追い払った。だからこうしてここに来ている。」
「なんと！ なんと・・・！ なんとということだ・・・」
周囲を気にし、抑えた声音だが口調は激しかった。

「ここに来たわけは、思い当たるな。」
「はい・・・。どうぞ、お入りください。」

男は、二人を招き入れると家の奥へ、さらに奥へと案内した。

「ここは隠し部屋でございます。部屋と部屋のハザマにあり、
外からは見えなくなっております。
こんなところに・・・おいたわしいことです。」

オルクサンの顔は血の気が無く、蠟のように無表情なことを除けば
顔に傷も無く、汚れも無くきれいだった。何かの呪いをとけば、目を開いて
動き出しそうな気がした。

「知っていることを話してくれ。」

「はい。戦が始まってから、私どもはじっと家の中に隠れておりました。」

外が騒がしくなっただけだったので、様子を伺ったところ、騎士や兵士が大勢逃げまわります。

その中に、戸板に横たわられたオルクサン様がおられました。

このまま逃げても敵に追いつかれて、酷いことをされるのではないかと思ひ、その騎士を呼びとめました。

その騎士も、わたくしと同じことを思っていたのでしょう。

オルクサン様を運び込まれると、よろしく頼むと言い残され、引き返して行かれたのです。

この部屋は家族が入れば精一杯で、ご自分が居れば迷惑がかかると思われたのでしょう。」

「息は、あったのか。」

「はい。 出血がひどく、朦朧とされていたようですが、しばらくは生きておられました。

しかし、私どもでは手の施しようも無く。」

「最後に、身を清めてくれたのだな。」

「それぐらいのことしか・・・。」

窓が無く、部屋と部屋の間であり外からは見えない部屋。

おそらくは、公にできなような用途に使われてきた部屋なのだろうな。こんなことに、役立つとは。

こんな所で、息を引き取るとは。

しばらく、嗚咽のせいで話が途切れた。

男が落ち着くのを待って尋ねた。

「何か、言っておられたか。」

「はい。でも、私どもにはよく聞き取れませんでした。ただ、・・・。」

少し、間を空けて顔を上げると、

「あなた様の名前を呼ばれたような気がします。その時は、微笑んでおられました。」

「私の名を・・・。」

今度の言葉には、自信がこもっていた。

「はい、その時は良く分かりませんでした、あなた様を見て

おそらくそうだったのかと、いまはわかります。」

「私の名なぞ、呼んでどうする！オルクサン！」

「泣いておられたよ。あんなに泣いておられるのを見たことが無い。
仲よかったのかなあ。」

イテカレスは、ニールリングに話している。

ロンダルトの戦後処理が、ひとまず終わって、クラコワに戻ってからのことだった。

「お二人は対照的だった。

お二人とも優れた方だが、お互いに自分に無いものを相手に見ておられたように思う。

友人としていられれば、いい関係だったかもしれない。けれどオルクサン様はそれを拒まれた。いろいろ理由はあるんだろうが、こういうときは、宿命とでも言うてしまうほうがいいんだろうな。

アレスミリアン様は智謀に優れているが、英雄的ではない。

オルクサン様は、理屈抜きに人をひきつける雰囲気を持っておいでだった。そういう星の下に生まれたということだ。

昼を照らす太陽と、夜を照らす月。

二つが重なると、どれほど明るくなると思う？」

「なんだそれ、謎解きか？」

「蝕が始まるんだ。月が太陽を喰らい、昼が夜のようになる。」

「ああ、聞いたことがある。それがお二人の関係といたいのか。」

「そんなところだ。」

「ふーん……。お前やっぱり頭いいな。」

「それで。ペルジアは、おとなしく退却したのか。」

「ああ、おとなしくはなかったがな。

あっちの大將、アストアシタ宮を後にするとき、

『打ち壊すには惜しい宮殿。しばし汝らに預けていこう。』

とって見得を切って出ていった。」

イテカレスは、まるで見ていたかのように伝えた。

「なかなかの役者ぶりじゃないか。」

それは見ものだったろうな、と、ニールリングは思った。

「けれどその時、奴に従っていたのはおよそ二万ぐらいだったよ。夜のうちに、

みんなとつとと逃げ出したらしい。」

「敵国の真ん中で孤立してはな。」

不敗の王が敗れたとあっては、逃げ出したくもなるだろう。

「しかも、いろいろと細かいものをくすねて行きやがった。みみっちいというか。」

「まるで、押し込み強盗だな。」

「アレス様は、いちいち記録して、イズマイルに送りつけると言っておられた。

あの方も細かいとは思っていたが、これほどとは。」

「ふっふーん。」

「いやな、笑い方をするな。」

「ペルジアでは、地上世界の総てのものは、イズマイルのものなんだ。」

「知ってるさ、それぐらい。」

イテカレスは、馬鹿にするなというふうに戻した。

「それを黙って失敬したと言うことは、だ。イズマイルへの反逆と言うことさ。」
つまり、こういうことさ。

「ペルジアの属州民はこれから、反乱の季節にはいるだろう。

しかも、ペルジア本体は戦力が低下している上に、ロンダルトの一件では、誰かが処罰されることになる。

そんなに大きな罰ではないだろうが、それが誰になるか、

おそらく罪のなすりつけ合いだ。いわゆる内憂外患をやつだな。

時を稼ぐには、丁度良い種をまいてくれた。」

「時を稼ぐか。また来るのだろうか。」

イテカレスは憂鬱だった。

「来て欲しくはないが、来るだろう。」

ニールリングは、その言葉とは裏腹に淡々としていた。

こちらの事情で何とかなるものではないさ、そんな感じだった。

「いっそ、殺せば良かったのに。」

「ロンダルトのことがなければそうしたさ。でもイズマイルが死んでいれば、ペルジア人はそのまま居座ったかもしれない。

不確定な要素は少ない方がいいんだよ。」

ニールリングは、アレスミリアンの考えが分かった。

「で、お前はどうしてたんだ。」

「えっ忙しかったさ。いろいろと。」

「そうじゃない。うちの大将が大泣きしてたときだよ。」

「誰に聞いたの？」

「いや。そうじゃないのか。」

「もちろん・・・、もらい泣きしてたさ。」

オルクサンの魂が、どこかに去ってしまった後の身体は、ペルジア軍の混乱が静まった後で運び出された。

アストアシタ宮への葬列は、市民達の長い人垣に見送られて進んだ。

市民にとっては、新王国の希望が死んだ日でもあった。イーリアスはすでに北に去り、王と王妃は自ら命を絶ち、王子は戦いの中の流れ星となった。

王の居ない王国はこれからどうなっていくのか。ペルジアが去った喜びの一方で、そんな不安がロンダルトの空を覆っていた。

王子の亡骸の傍らを歩くアレスミリアンが、先王の兄、アズレクンの遺子であることを、此の国の人たちは知らない。

だが、彼が此の国を取り戻したことは、皆が知っていた。此の国の行く末を決めるのは、彼かも知れない。

失望と希望が、死と生が、並んで歩いていた。

三人の遺骸は、王家の墓所へと葬られた。

「そうして居るうちに、ウェルモンテがどこからともなく現れたのさ。」
「どこからともなく？」

「気が付いたら、アストアシタ宮の元の鞆に収まっていたというわけ。」
「で、会われたのか。」
「もう心臓が飛び出すかと思うぐらい、ドキドキした。」
「じらすなよ。」

この時ほど、ニールリングがロンダルトに同行しなかったを、後悔したことはなかった。

アレスミリアンは、そのころアストアシタ宮の東宮を宿としていた。城に仕えるもの達は、以前王の家族に仕えていたのと同じように、アレスミリアンの身の回りを世話した。

二つの主を抱えて、不自然な緊張を抱えていた頃と比べると、いかにも安らかな日々であった。

変わったことと言えば、ザヒルを首領とした十人の騎士達が、今も城に留まっていたことである。

「酒に釣られたんじゃないかな。
あの親父、酒が入ると機嫌が良くなるんだ。でも、必ず誰かが迷子になって、城に届けられるのには参ったけど。
だって、クラコワの騎士だと思われる格好わるいじゃないか。」

そして、ある日突然、ウェルモンテが出し抜けに西宮に姿を現した。侍従がそれを奏上したとき、アレスミリアンは短く
「そうか。」
と、応えただけで、それまで読んでいた書物からしばらく顔を上げなかった。

「向こうはこっちにアレス様が居るのを知っていて、挨拶も何もしないで西宮に入ったんだぜ。失礼だと思わないか。」

「東宮に入らせないように、東宮に居られたんだからそれで

いいじゃないか。」

「・・・そうだったの、か。」

「王がいないのをいいことに、ぬけぬけと東宮に入れ、穢されたく
なかったのだろう。」

「それから随分経ってからだ。そう何日か経っていたよ。」

アレスマリアンは、イテカレスを使いやり、ザヒルと十人の騎士を呼び寄せた。

「そろそろこちらを引き払おうと思うのです。その前に、此の国を、人に預けねばならないのでその男に会いに行きます。ご一緒にどうですか。」

ザヒルは、もう大抵のことには慣れっこになっていたもので、軽い気持で「どこへなりと。」

と承諾した。西宮は、まだ元の賑わいを取り戻しては居なかったが、主を迎えたことで多少の活気は出始めていた。

「本当に、あきれたよ。こいつら、いままでどこに隠れていやがったって。俺も貴族だが、こんな奴らと同じと思われているかと思うと、腹が立って腹が立って。」

何の先触れもなく現れた、アレスマリアンと十人の騎士とイテカレスに、一同は。

「そう、なんて言うか、大鏡に向かって、今まさに椅子を振り下ろそうとするのを見守る瞬間ていうのかな。おれたち以外は、凍り付いたように誰も動かなかったよ。」

そうした雰囲気の中でも、ウェルモンテ伯は、さすがに動じた様子もなく、“彼の椅子”に深く身を沈めていた。

肘掛けに腕を立て、その手に顔をもたせかけたまま、歩み寄るアレスマリアンに向かって

「見ぬ顔だな。誰の許しを得て入ってきた。」と啖呵を切った。

「私の名を知らぬはずがない。何なら背中傷を見せても良いぞ。

お前が付けた傷だ。」

「ふん、何の事やら。」

アレスマリアンは、宮廷貴族ならはいつくばるようにする距離に

至っても、そのまま歩みを進め、ウェルモンテを見下ろす形で前に立った。

「知っているだろうが、アビアント王と后と、オルクサン殿はなくなられた。この世で王位の継承権を持つのは、イーリアスと私だけになった。

だがイーリアスは、すでにカラバ公の養女だ。此の国を継ぐことは出来ない。だから私が次の王になる。」

「お前のようなこの馬の骨とも知れぬものが、王位の継承者だと。お前が継げるといふのなら、既の番人でも連れてくるがいい。」

「はは・・・、私はそれでもいいが、それでは民が困るだろう。

王と仰ぐからには、それなりの理由が居るのだ。

馬の世話がうまくても、それが王では不服だろう。

年のせいで忘れたのか、此の国で、私がアズレクンの息子だと初めて気づいたのは、お前だぞ。お前が何もしなければ、誰も気づかなかったのだ。

そして、おまえがロングルトを捨てなければ、オルクサンは死なずに済んだかも知れない。私を王にしたのは、おまえ自身なのだ。」

先ほどまでの侮りと軽蔑の表情が、みるみるうちにゆがみ、憎しみとねじれた怒りが、深いしわの谷間からあふれ出した。

「誰かこの無礼者を放り出せ！ 王の名をかたる狼藉者だ！」
柱の影から衛兵の一団が現れ、一同を取り囲んだ。

「クラコワではどうかは知らないが、此の国の支配者はわしなのだ。おまえ達なんぞ、どうにでもしてくれるわ。」

肘掛けの柱頭を堅く握り閉め、獣ののように吼えかかった。けれども、アレスミアンには少しの狼狽える様子もなく、
「そうそう、言い遅れたが、あちらに控えているのは私の客人で、ザヒル・シャハフ殿だ。元はペルジアの将軍で、一人で十人を相手にされる。」

と、白々しく言った。

ザヒルは咳払いを一つすると、自国の言葉で自分の名を言い直すと、次に
「今のは間違っている、一度に百人だ。どこからでもかかってくるが良い。」

と言い放ち、剣も抜かずに腕組みをした。

ペルジアと聞いて、衛兵達の足は案山子の棒となった。なにせペルジアの恐ろしさは骨身にしみている上に、そもそも命からがら逃げたからこそ生き残った兵士達だ。

こんなところで命を落としては元も子もない。

この場の勝負はついた。

「ウェルモンテよ。今はおまえを殺しはしない。

確たる証拠もなく、殺してしまえば私刑になる。私はそんな国にはしない。けれども、私の命に逆らい、国を危うくするようなことをすれば、容赦はしないぞ。

さしあたり、東宮には一歩も近寄るな。王の血を穢す、おまえが足を踏み入れて良いところではない。」

そう言うと、くるりと背を向けて、ザヒルが先程の腕組みのまま睨みをきかせている、その場を立ち去っていた。

「なんていうかさ。格好いいんだけど、逆に痛ましいというか、さ。」

「うん？」

「おまえはほら、西の支城を継ぐんだろう。」

「ああ、いずれな。」

「アレス様って、そうしなくても良かったのに、結局、一番責任の重いものを背負わされるんだよ。

あの方って、本当はさ……。」

「王様じゃなくって、ただのアレスミリアで居たかったんだろうな。」

「おまえもそう思うよな。」

「それで、ロンダルトは？」

「王は空位のまま、ウェルモンテが当分仕切ってる。」

「まあ、今度の戦役の前もそうだったし、前王は居ても居なくても変わらない方だったからな。といえば変わっていないということか。」

とりあえず、この話はここまでかな、とニールリングは気を抜いた。

「前の王は……、無能を装っておられた。」

「えっ。」

イテカレスの思いがけない言葉に、ニールリングは驚いた。

「この世にアズールの種火を残すために、火を消さないために無能の振りをして、ウェルモンテに無用な警戒心を起こさせないようにしていた。

兄を殺害されて王位を継いだとき、この世に血脈を残すことを第一として、人に蔑まれようともずっと火を守り耐えて生きてきたのだ。決して無能な人ではないのだよ。」

イテカレスに何が起こったのか。

「どうして。よりによって、イテカレスがそんなことを知っているんだ。」

「俺が知ってちゃ悪いかよ。

っていうことを、帰りの道中でふとおっしやっただよ。」

「そんなとこだらうな、ほっとしたよ。熱でもあるかと思ったよ。」

「ああ、あたってるけどちょっとむかっと来たぜ。」

イテカレスは本当にむっとした顔をしていた。

聞くべき話を、今度こそあらかた聞き終えたことで、ニールリングは話を変えた。

「ところで、おまえこの頃、ちょっとガラが悪くなったんじゃないか。」

「うーん、こここのところ、市中の者とばかりつきあってたからかなあ。

楽しいぞ、民衆は。俺は長子じゃないから、家を継がなくてもいいし、身分を捨てるのもいいかもしれない。」

「酒が切れたな。取ってこさせようか？」

珍しくニールリングの方が気を利かせていった。

「いや、今日はもう休むよ。」

と言った、イテカレスの目は本当に眠そうに瞼に力がなかった。

「そうだな、引き留めて悪かったな、ご苦労様。」

「じゃな。」

と別れを告げて廊下を渡っていく間に、イテカレスはもう一つの言葉を思い出していた。

「イテカレス。おまえがいてくれて本当に良かったよ。ご苦労だったな。」

イテカレスとニールリングが再会を話している頃、アレスミリアンはイーリアスと向かい合っていた。

「皆亡くなられていた。私が王家の墓所に埋葬した。」

イーリアスは何も言わなかった。

声を出せば、そこから破れていってしまいそうな気がしたからだ。

「王と王妃は、永遠の眠りのための薬をあおり、静かに横たわっておられた。

まるで、眠っておられるだけのようにも見えた。

私がついたときには、城のもの達が良くしてくれいて、部屋中を花で満たしてくれていたよ。

オルクサン殿は、戦いの中で深傷を負われ、民家にかくまわれたがその時にはもう、手の施しようも無かった。敵の手に落ちなかったことは、幸いだったと思う。

ロンダルトは、いまはウェルモンテ伯が見ている。

元の賑わいを取り戻すには、今しばらく時間がかかるだろうが、逃げ出した人々も戻ってくるだろう。」

「もう少し話していた方がいいかい？」

イーリアスは頷いた。

「東宮は、いま誰の手も触れられないように閉ざしてある。

いや、王と王妃が居られた時のままに、花を変え、窓を開け、日の光で暖めることはしてもらっている。生きて、暮らしておられたときのままに保たれている。

あなたがもし訪ねたければ、そこは昔のままに迎えてくれるだろう。」

イーリアスはようやく口を開いた。

「父と母は、何故他の貴族のように、お逃げにならなかったのでしょうか。」

「判らないが、ロンダルトには、他のどこにも逃げ場を持たない民が沢山いた。

そのもの達を捨ててはいかれなかったのではないかな。」

「もしそうであれば、私は父母を誇りに思いましょう。」

アレスミリアンも、頷いていった。

「私も、立派につとめを果たされたと思うよ。」

クラコワは、戦いの傷から立ち直ろうとしていた。

その傷は美しい織物を引き裂いた、鋭い刃物の跡だった。

人々は、切り口の糸をほぐし、織り目を拾い、それを繕い、元のように縫い合わせた。

こうした、静かな夜の時間を何度か過ごしているうちに、その傷の記憶は薄らいでいく。

薄らいでは行くが、消えることはない。

死んだ人、死なせた人、向き合った無名の兵士の顔。

人の身体に、剣を打ち下ろした記憶。

槍を突き刺した手の感触。

突き立てられた矢の痛み。

恐怖、憎悪、高揚、人が人でなくなる瞬間。

還らなかった男の名前。

行方知れずの女の面影。

それらは時折縫い目をほどこいて顔を出し、人はまたそれを縫い合わせる。

「くふっ・・・、うっ、う・・・。」

悲しみは、両手で押さえても止まらなかった。

クラコワを守った代償は、決して小さくはなかった。

アレスミリアンがカラバ公を訪れたのは、翌朝になってからだった。

「・・・なんじゃ、ひどい顔をしておるな。」

「おそくなりまして。」

「うむ。近頃は、わしが一番後回しかと、小言の一つも言ってやろうと思ったのだが。」

「もうしわけ・・・」

と、いおうとするのを手で制して、

「事情は分かっておる。あらまは、ニールリングがな。」

「そうですか。」

「イーリアスの様子はどうか。」

「覚悟はしていたと思いますが、相当の悲しみようでした。」

「肉親を一度に失うのはつらいことだ。自分と血のつながりのあるものが、みないなくなるというのは、世界にたった一人になってしまったような気がする。寒くて、寂しいものだ。」

「本当にこれでよかったのかと。」

「人は、己の意思だけでは生きられない。

そのときそのときの有りように、身を振り回されることもある。

それに沿えねば、苦しいことになる。

正しいと思うこともな、十年先、百年先にそれでどうなることか。

お前が選んだ道が正しかったかどうか、わしにも分からぬよ。

だが、お前の選択が、一人の大事な人の命を救ったことは確かだ。

今はそれで良しとせよ。」

「・・・そうですね、この度のことがうまく運んだので、何かもっと他にも出来ることがあったような気がしていましたが、・・・本当のところ、私にはもう精一杯でした。運も味方してくれたかもしれない。カラバ様の仰せの通りです。」

「さて、ロンダルトはどうするのだ。」

「三年のうちには、私が、王に立たねばならないと思っています。」

「そうか、ついに行ってしまうのか。」

「替わって頂けますか。」

「たわけえ、わしはもう引退だと申したに。ところで何ゆえ三年なのだ。」

「イズマイルが、ペルジアを固めてまた来るからです。今度は無事返すわけには行かないでしょう。」

「ウェルモンテはどうするのだ。」

「牙を抜きにかかりましょう。そうすれば、遠からずあの宮殿からは出て行くでしょう。」

「今のお前なら、一息に息の根を止められるぞ。」

「いえ・・・、これ以上イーリアスの身内を消してしまうわけにはいきません。」

「そう・・・だな。」

その選択が、いつか誤りを導くかもしれない、と、カラバ公は口に
しなかった。

肉親を殺される悲しみと傷みを、一番知っているのはアレスミリアン
自身なのだから。

そして冬がもうそこまで来ていた。

翌日、国境までイズマイルを追っていったシルヴェスタとルークス、そしてキリアンデルが帰還した。

「よう、ちゃんと首が繋がってるじゃないか。目出度いな。」

「お見送りご苦労様でした。」

「まったくだ、やろうと思えばいつでもやれたのに、シルが止めるのだよ。」

「いやそう簡単ではなかったさ。」

シルヴェスタが牽制した。

この三人が揃うのは何年ぶりだろう。

「まあな、逃げ足は速かった。こちらもかなり無理を押して、長駆してやってきたからな。馬の足が伸びなかった。雪も降ってくる。」

「ブルタークの包囲も解いていただきましたし。」

と、いい添えたのはキリアンデル。

「そうそう。われながらよく働いたぞ。」

「ではごゆるりと休息を。」

「いや、そうゆっくりしてはおれないのだ。北の地が氷雪で閉ざされる前に帰らねば。」

「では。今宵だけでも。」

「そうだな。やっと昔の借りも返したことだし。酒でも振舞っていただこうか。」

「それならいいお相手がいます。」

「ほう、イテカレスとかじゃないだろうな。」

冗談じゃないぞというように、覗き込んだ。

「いえいえ、元ペルジアのザヒル・シャハフ殿と申される。」

「ペルジア。それはいったい、どういうつながりなのだ。」

これにはルークスも驚いた。

「ロンダルトの一件で、懇意になりました。」

「ふーん。ロンダルトか。どういうことになっている。」

「オルクサン殿は、お討ち死に。王と王妃は自害されました。」

「それでは、姫はたいそう気落ちしておられるだろう。」

そう言うルークスの声も沈んでいた。実直な男なのである。

「ええ。」

「よし、姫もお呼びしてパーッとやるか。」

「えっ。」

「こんな陰気な城で、一人部屋に閉じ込めておいても、死に取り付かれるだけだぞ。

なあに人は、みないつかは死ぬんだ。残ったものは、死んだ人間の分まで生きていくんだよ。」

「いやしかし。」

「だめだな、あなたは……。キリアンデル殿！」

「はい。」

この中では新参者のキリアンデルは、脇で遠慮し、この奇妙な取り合わせのやり取りを楽しんでいた。

「お使い立てして申し訳ないが、ご妻女に、姫を連れ出す算段をお願いできないだろうか。」

「ということは、リディアも出席するのですか。」

「男ばかりで飲んで何が面白い！」

「いやー、リディアに見ていられると、酔いが醒めてしまいます。」

「シル！何とかしろよ。」

クラコワの男は何でこんなにだらしないんだ。ペルジアを破った男たちだろう！」

独り身のシルヴェスタは苦笑するしかなかった。

「なんの騒ぎですか騒々しい。」

聞きなれた男たちの声を耳にして、ニールリングまで集まってきた。

「おうニール、久しぶりだな。」

「これはルークス様。奥まで聞こえておりますよ。」

「今宵は宴会だ、お前も来い。」

「それについては、もうイテカが走り回っております。まもなく用意が整うでしょう。」

「姫のお席も用意しろよ。」

困った親父がまた一人増えてしまった。やれやれ、

「それは、アレスミリアン様に伺いませんと。」

「それが、ぜんぜん駄目なのだ、この男は。女にはからっきし
意気地が無い。」

さすがにこの城の中で、その呼び方は遠慮していただかなくては。

「ルークス様、いずれ連合王国の王位を継がれる方に、この男、
呼ばわりはちょっと。」

「な・ん・だ・と！この、どこの馬の骨とも分かん男が、なんで王位を継ぐんだ！」

一同は顔を見合した。

そうか、ルークスはまだ知らなかったのだ。

「姫がおいでになりました。」

イーリアスは、半ば、国を背負うものとしての義務感から体を起こした。

みな、この国を守るために戦ってくれた人たち。今日会わなければ、またいつ顔を見れるかも分からない。

体も心も重かった。鉛を飲んで、それが身体の中をめぐっているような気分のままだった。

「おお！姫。ささこちらへ。」

とルークスに示され、広間の様子を見回して驚いた。

椅子もテーブルもない。複雑で象形的な意匠の厚い敷物と、クッションが置かれただけの床に、思い思いの姿で腰を下ろし、背もたれに身体を預け、杯を酌み交わす男達がいた。

「もう、だらしない。」

と苦笑いしながらリディアが酒瓶を運んできた。

城内の女たちが

「リディア様がそのようなことを。」と、止めるのを制して動き回っていた。

イーリアスが上に目をやると、そこには薄い布が天幕状に張られていた。

何か、子供に戻ったような気がした。よく寝台に転がって天蓋を飽きずに見ていたものだった。あのころ、あんなことの何が面白かったのだろう。

「イーリアス様。ルークス様のお隣は危のうございますから、

こちらにお掛けなさいませ。」

とリディアが自分の席、と覚しきところに手を引いた。

「これは、いったい。」

「イテカの趣向で、北の部族ふうの宴会だそうです。」

と、ニールリングが応えた。

「いや、こんなのを我々の宴会と思ってもらっては困る。

第一こんなに濁りのない酒は出ないし、寝そべっても草のにおいの

一つもしない。だいたいおまえはだなあ・・・」

「ああーまた始まった。あの方、酔うとどうもお説教好きになるらしいんです。若いときに好きかってやってた割にはくどいんですよね。」
いや、そういう男ほど、年をとるとくどくなる。

その隣では、シルヴェスタとザヒルが、皆には判らぬ言葉で話しては大笑いし、酒は静かに飲むべきだと思っているハイアルトの眉間をしかめさせた。

「イーリアス様、お酒は・・・。」
リディアのすすめに、
「普段は頂きませんが、今日は頂戴しましょう。」
「そうそう、男ばかりに楽しい思いをさせてはもったいない。あら、切れてしまったわ。だんな様、キリアンデル様。」
リディアは、首をあちこちへと向け、キリアンデルを探した。

「なんだい。」
「これ。なくなっちゃいました。」
「あー、はいはい。どこに行けばいいのかな。」
「その辺りに向かって、酒もってこいって、いえばよろしいのですよ。一城の主なのだから。」
「わたくしが参ります。」
と、ニールリングが、これ幸いとルークスの隣を逃げ出した。

「あっ、逃げたな！よしイテカちょっと来い。いい話をしてやろう。」
「えー、ずるいぞニール。しょうがないなあ。こうなったらあのおやじ、潰してやる。」

「あのお、いつもこのように、キリアンデル様がお酒を？」
「いつもではありません。時々、たまーにですよ。」
ーリディア様、お酒を召されると、人が変わるんだわ。
いや、人は変わらない。本性が現れるだけだ。

「なにをいう、私の槍を受けて、まともにたっぺられるものなどこの地上におらんわ！」
突然、ハイアルト卿（だろう、おそらく）の音が響いた。

「ほっほ一。これは聞き捨てならない。私とて少々名の知られた、もののふの家柄。いざ尋常に勝負と願おうか。」

負けじとザヒルがそれに応えた。

シルヴェスタは、この酔っ払いたちが何を言い出すかと、なだめにかかった。

「いやお二人とも、ここは姫の御前ゆえ、お控えなされたほうが。」

「なに、姫とな。」

と、ザヒルが初めて気づいたように言った。

「おお、まことの姫じゃ。」

姫君。これなるザヒル・シャハフ、騎士道にかけて、御身にかかる災厄の楯となり、剣となってお守り申す。」

「何をいっとる。つい先日、壁の向こうから攻め込んできたのはおぬしだろう。」

「んん。何のことかな。」

「ふん、とぼけるのか。」

「わしも、こんなに美しい姫が城の主と存じておれば、あんな驚っ鼻のイズマイルなんぞに従うものか！

姫、どうかこれより、私めがあなた様に忠誠を誓うことをお許してください。」

イーリアスはおかしかった。いずれも、危機に当たって鋼の強さを誇った男たちである。それがまるで子犬がふざけあうようだ。

「許します。これよりクラコワの騎士として、忠勤に励みなさい。」

「おお、まこと嬉や。しかし、我が祖国はいまだペルジアの支配下に・・・。」

ハイアルト卿が、片ひざを立てて身を乗り出した。

「わたしに任せろ。」

「なんとハイアルト殿。」

「わたしの槍働きと、おぬしの剣にかけて、ペルジアなんぞ追い払ってくれる。」

「それでこそ、まことの騎士！」

「だめだ、あれは完全に出来上がっちゃってる。それより姫様。

このイテカレスの願いをお聞きください。」

イテカレスの目はすでに潤んでいた。

「なんでしょう。」

「姫様のおつきのもので、ジュディスという者がおられるでしょう。彼女をわたくしに下さい。」

「まあ、イテカ。女はものではありませんよ。」

イテカレスは、声のしたほうに顔を向け言った。

「ですがリディア様。わたくしはどうしても彼女と・・・。」

「いません。」

「はっ？」

イテカレスは、再びイーリアスの方を向いた。

「私の周りに、ジュディスという名の娘はおりません。婆やならいますが。」

「ば、婆や？ジュディスが？の、呪いでもかけられたのでしょうか

、あんなに若くて輝くような娘が、ばあやに変わってしまうとは・・・。」

「ジュディスは、こちらに来る前から婆やでしたわよ。」

リディアは、馬鹿には付き合っていないとばかりに、

「イテカ、ちょっと頭を冷やしなさい。飲みすぎです。

ニール！頭から水をかけておやりなさい！

まったく男達と来たら、だらしない。」

いや、男の本質はだらしないものだろう。特に、酒と女の前では
そうなるものだ。

イテカレスは、いまだ娘が老女に変わってしまった事に納得が
いかないようで、ぶつぶつ言っていた。

ニールリングは、これ以上の深入りにわが身の危険を感じ、
酒の調達役に徹していた。

キリアンデルは、出来るだけリディアの監視の届かない
ところで手足を伸ばし、ルークスは若者をとっかえひっかえ
捕まえては、武勇伝を吹きちらかしていた。

「ところで、リディア様、アレスミリアン様の姿が見えませんが、・・・」

「あら。先程までいらしたはずなのに。

ふーん。姫様。ちゃんと紐をつけておきませんか、どこへ行ってしまおうか
分かりませんよ。

男なんてものは、若い女と見たらほんと見境無いんだから。」

「キリアンデルさまが、ですか。」

「いいえ、あの人にはそんな度胸はありません。」

それはそうだろう、とイーリアスも思った。

「では、アレスミリアン様に紐ですか。」

「そうそう。」

イーリアスは、アレスミリアンの腰に紐をつないで、
その先を持っている自分を想像してみた。

「何を笑っているんだい。」と聞きなれた声がした。

「まあ。どこに行ってらしたのですか。」

「ちょっとね。」

「リディア様が、紐をつけておかないと、どこに行ってしまうか
分からない、とおっしゃっています。その・・・若い女の人とか。」

「若い女？いや、ちょっと、くそ親父殿と会っていた。」

アレスミリアンは上機嫌だった。

「カラバさまと？」

「お許しを頂いてきたんだよ。いろいろ小言を頂戴したけど。

何でわしを呼ばんのだとか・・・あれこれ。」

「なんですか。」

じれったい。

「ん、酔ってる？」

「酔ってません、酔うほども飲んでません。あなたこそ、ちょっと
お酒臭い。」

「じゃ乾杯しよう。ニール、酒。みんなに酒。」

ニールリングは、器用に人々の間をすり抜け、酒をついで回った。

「なにに乾杯するの！」

もうほんとにじれったい！

アレスミリアンは高らかに言った。

「では、イーリアスとわたしの婚約を祝して。乾杯！」

「何だとお！ふざけるなアレスミリアン！」

これを誰が言ったかは、いまだに分からない。

「われは姫に忠誠を誓った騎士なるぞ！この無礼者そこに直れ！」

これは、なんとなく想像がつく。

「アレスミリアンさまー。ジュディスがおばあさんになってしまいました。

もうどうしたら呪いが解けるのか・・・」

「おれは、一生独身がいいんだあ！」

えーい、もうこの酔っ払いども！

アレスミリアンとイーリアスの婚約は、落ち着きを取り戻しつつあるクラコワの、冬の暖炉に良く燃える、暖かな薪を提供した。

だが実際の婚姻は、イーリアスが今は喪に服しているため、それがあけることを待つ必要がある。

イーリアスは、ゆっくりとそれを乗り越えようとしていた。

「一度ロンダルトに帰り、父や母、兄の弔いをしてきます。」

「そうだね、そうするといい。でも、もう雪の季節だから。」

クラコワは一夜のうちにうっすらと雪に包まれていた。

ルークスは、酒のにおいも抜けないうちに、あわてて北へと帰っていった。

これから、クラコワから北の地方は、春まで溶けることのない雪に覆い尽くされていく。

「雪って不思議。一晩で何もかも真っ白にしてしまう。」

「まだまだ、これは始まりでしかない。これからもっと積もるんだよ。」

クラコワが、冬に空を閉ざされるころ、ロンダルトの宮廷は大きな騒動に揺れていた。

「これで、二十五件目でございます。ウェルモンテ様。」
「今頃になって土地を返せなどと、くそっ。こんなもの、握り潰せと何度も言うおる。」

「それが、そうにも参りませんで。他の皆様のも合わせると、既に二百件に近く上っているかと。これだけの量ともなりますと、握りつぶすのも手に余る上に……。」

「なんだ。」

「この後、いくら出てくるか見当もつきません。」

「裏に、あ奴が居るということは分かっている。だがいくら訴えられようと、正当な手続きで手に入れた領地だぞ。あ奴は法を曲げるような男ではない。嫌がらせのつもりか。」

「いやそうではありませんで。」

「もちろん、そんな洒落た男ではないことは承知だ。」

「手続きには問題ありませんが、そのう、もっと根本のところに問題があります。」

「もっと手短かにいえんのか。」

「あれらの土地は、領主や農民たちの借金のカタとして取り上げた土地。

ところが、その借金の利率が、法で定められた利率を越えております。」

「法などもう何十年も前のものだろう。そんなものを守っている奴などおらんわ。」

「しかし、法は法でございますゆえ。」

「まあよいわ。何十も何百もの訴えを一つ一つ審議しても、全てをやり終えるのに何年かかることか。

その間に、何か別の方法を考えてやれば……。」

「それで一体いくらなのだ。その利率というのは。」
カラバ公は、およそ金勘定などというものとは縁が無い。

「金一に対して、銅が五十の割合です。それが、およそ銀が
二の割合で取引されております。
次の年、豊作であれば利子と元金のいくらかは返せるでしょう。
けれど不作が続き、食うに困ればまた借りるしかないのです。」

なるほどな。次から次へと増えていくというわけか。

「しまいには、土地を手放すしかないということだな。」
「牛を売り、土地を売り、家を売り。子供すら手放すものもいると
聞いております。」
「ふむ。で、どうするのだ。一つ一つ詮議するのか。」

「いえ、そんな面倒なことはしません。そんなことをすれば、
何年もかかります。三年のうちにロンダルトを掌握しなければ、
ペルジアに対抗できません。ですから一息にやります。
違法な利息は借主に返還すること。もしそれが出来ないなら、
取引を無効とみなし土地を返却すること。借主がいな場合は、
一旦国に収めそれを再配分する。という勅を出します。
わたくしの名で。」

「ウェルモンテだけで無くロンダルトの宮廷に群がる貴族どもにとっては
大きな打撃だろうな。
で、何故、儂に話に来た。お前の名で出すのであれば、相談せずとも
よいだろう。」
こういう、遠まわしのやり方はわしの趣味には合わないのだ、とでも
言いたげだった。

「お忘れですか。わたくしは、まだ即位したわけではありません。
正式には王ではないのです。ただそれは伏せておいて、署名はただの
アレスミリアン。」
「わしの名前を隣に書けとでもいうのか。わしは既に引退しておるのだぞ。」

アレスミリアンは、ついに本音を打ち明けた。

「イーリアスの身内を狙い撃ちするのは。いまの彼女にそんなことは、させられません。」

同じころ。同じ城の中、いつもの二人。

「これは、宣戦布告だな。」

「お前のところは大丈夫なのか。」

「はは、あのあたりはいまだに物々交換だぞ。不作のときはみんな不作。

豊作のときはみんな豊作。みんな一族みたいなもんさ。」

「もし従わなければ、どうする。」

「最後は力で脅すしかないのだろう。ザヒルのおっさん喜ぶぞ。」

「内戦になることは避けなければ。」

「うーん。頭が割れそうだ。」

「それだ！いいぞイテカ。」

「何がいいんだ。俺の頭を割っても何もでないぞ。」

「違う、向こうの頭を割るんだよ。新王につくか、古臭い宰相に従うか。

なに、元の領地を取り上げるといっているわけではないし、代価を払って手に入れた土地、証明のできないものには手を付けないんだ。丸裸にするわけじゃない。

それに、狙いがウエルモンテ伯だということは、みな分かっているからな。彼らは忠誠心で結びついているわけではない。悪いようにはしないとってやれば。」

そこでイテカレスは口を挟んだ。

「ニール、いいか。お前は俺と違って頭が切れる。」

「なんだ、改まって。」

「お前は、アレス様の考えを綿密に仕立て上げることが出来る。

俺はどっちかって言うと実行部隊だからな。」

「うん、お前の行動力には感心する。」

「いいんだよ、そんなことは。俺が言いたいのは、下手をすると

殺されるぞ、ってことさ。追い詰めすぎるとほら、“急須が猫かぶり”だっけ。」

「それをいうなら“窮鼠猫をかむ”。」

「それぞれ。」

「わかったよ、ありがとう。」

「夜道は気をつけろよ。もっともそれは、俺よりお前が詳しいだろうが。」

ニールは過去の事件を思い出した。そして忘れていたことを思い出した。「イテカ・・・」と呼ぼうとしたが、相棒はもうどこかに出かけていった後だった。

あのとき、彼の同行人を狙った毒矢は、ロンダルトの宰相から放たれたという噂が流れた。

そして、アレスミリアンが助かったのは、解毒の薬を常用しているからで、それは彼の父が同じやり方で暗殺されたからということだった。

ということは、アレスミリアンの父、アズレクンを殺したのはウェルモンテで、アレスミリアンの婚約者はその孫・・・。

胸の底で、何かがざわめいた。

「ウェルモンテ様。お呼びでしょうか。」

呼ばれたのは、代々ウェルモンテ家の家宰として仕える、これといって特徴の無い顔のクワスルトンであった。

「勅令の件。」

「はい。他家ではすでに整理が始まっております。が、金銀がそんなに急に用意できるはずもなく、結局は土地を手放すしか無いようでございます。」

と無表情に語った。

「腰抜けばかりじゃのう。昨日までは、わしの前で床を頭で磨いておったに……。」

わしの土地は返さんぞ、誰があんな偽の勅に従うものか。」

「アレスミリアンさまと、カラバ様の御名が……。」

「ロンダルトの王はまだ決まっておらん。宰相はわし。ロンダルトのことを決めるのは、わしじゃ。」

勅など知ったことか。」

クワスルトンは、特徴の無い顔をことさら困ったようにゆがめ、

「それが、そういうわけにも参りませんかと。」

「なんだ。」

「市民は、既にアレスミリアンさまを新王と呼んでいます。」

それから、他の領主の土地が返還されております。当家だけ何もしないと参らないでしょう。

また、残念なことに、旧領主への思い入れを残す領民も多く、領民の不満が昂じれば暴動が起こりかねません。」

「鎮圧してしまえ。」

クワスルトンは、特徴の無い顔を驚いたように引き伸ばし。

「もしそんなことになれば、責任を問われます。」

「責任を？問うだと。誰が。どうやって。」

クワスルトンは、特徴の無い顔を、いかにも当たり前のこととでも

言うように口を尖らせ、

「新王が、力で持って。」といった。

「あ奴は頭がいい。それに民衆思いだ。そこが弱点でもある。

もし武力に訴えるなら、内乱を覚悟せねばならん。ペルジアの傷から、ようやく立ち直ろうとしているこの国で、そんなことはすまい。

わしなら気にせんがのう。」

「内乱というのは、それなりに戦力が拮抗し、しばらくその状態が

続いていることと思います。ウェルモンテ家の力だけでは、半日と

抵抗できません。」

「何じゃと。」

「当家はいまや、孤立しつつあります。どちらに付くか良く考えろ、

悪いようにはしないと、以前から新王によしみを通じているものから、誘いが出ているようです。

ロンダルトの王家が尽きた今となつては、ウェルモンテ様につこうにも大義がございません。」

宰相は、それには答えなかった。

「ウェルモンテ様？」

老人はもういいというように片手を振った。

家宰はそのまま下がっていった。

ウエルモンテが、あきらめたかどうか気がかりだった。

もしこのうえ何かしでかせば、この家は滅びる。

この家に繋がる一門をはじめ、郎党や従僕、家族にまで累を及ぼすやも知れない。

もう潮時なのだ。家は家長の私物ではない。主が誤ったときは、幸が正さねば成らない。言葉で言って聞かないようであれば、他の手段を考えねばならないだろう。

クワスルトンの、これといって特徴の無い顔が、苦悩に歪んでいたが、それと気づくものはいなかった。

クワスルトンが去ってから、長い間、ウエルモンテは腰掛けたまま動かなかった。

夕暮れが近くなり、部屋に灯りがともされても、じっと空中を見つめていた。心に去来するものは何であったろう。

王に嫁いだ娘と、次の王を約束されていた孫を失った時点で、彼の望みはすでに潰えていた。

そして残りの人生の栄華も、いまや奪われていこうとしている。

もし、アレスミリアンの前に頭をたれ、臣下の礼をとればそれは許されたかもしれない。しかしそれはウエルモンテの業が許さなかった。

「あやつ、どうしても許さん。」

すべてあの男のせいだ。あの男が娘を拒まねば、こんなことにならなかったものを。

あの父子だけは絶対に許さん！

この冬に起きたことはそれだけだった。
表立った事件と呼べるものは。

しかし、ニールリングとイテカレスは相変わらず忙しかった。
この春の訪れと共に、アレスミリアンはロンダルトで王に即位する。
その準備に忙殺されていたのだ。その即位式にはロンダルトだけ
ではなくクラコワの貴族たちも出席する。

そしてその後の宴席には誰もが参加できる、いわばお祭り騒ぎのようなもの、
それがアレスミリアンの希望であった。ロンダルトもクラコワも無く、
貴族も平民も無い。戦いの悲しみを忘れて春の訪れを祝おう。

「言うのは簡単だがな。準備するほうの身にもなってくれよな。」
「そうそう。」

「しかもロンダルトだけ、勝手にわかんないし。」
「そうそう。」

「だ・る・ま・さんがこ・ろ・ん・だ。」
「そうそう。」

「おい、ニール。」
「ん、なんだい。」

「お前さっきから、そうそう、ばかりで何も聞いてないだろう。」
「ははっ、すまない。」

「何か考え事か。」
「うーん。政治上の、極めて難しい話を、だな。」
「ふーん。ならいいや。」
「おい、ちょっとぐらい聴けよ。」
「いいよ、結論だけで。」

「お前にも関係してるんだぞ。問題はだな、俺たちがどうするかってことだ。」
「それはロンダルトに行くか、ということか。」

「おっ、いい勘してる。」

「俺は行くさ。アレスミリアンさまの行くところ、どこだって俺は行く。」

「ジュディス、ばあさんを残して？」

「うう・・・その話はやめようぜ。もういいんだ。縁が無かったんだ。」

「セシリーって言うらしいぜ。」

「・・・何で知ってたんだ。」

「イーリアス様に伺った。多分セシリーのことでしょうって、笑って
おっしゃってたぞ。」

「ええ！まさか。イーリアス様にまで知れてしまったのか。」

「お前、酔っ払ってイーリアス様に絡んだの覚えてないのか。」

「嘘だろ、おい、嘘だといってくれ。でないともう顔をあわせられない。」

「あわせてもよいと仰ってたぞ。」

「本当か！」

「セシリーには幸せになって欲しい、って。いつも尽くしてくれて
ばかりだからってな。」

「ちょっとまで、イーリアス様はどちらにおられることになるのだ。」

「喪が明けるまでは婚儀はむりだからな。クラコワだろう。」

「それはないよ。せっかくのチャンスなのに。ロンダルトに行くべきか、
行かざるべきか。それが大問題だ。くそー。」

「ばか、とりあえずあってみないとわからないだろ。」

数日後、セシリーは雪の窓辺に頬を心もち紅くして立っていた。

イーリアスと並んでいるときは、イーリアスの放つ輝きに隠れ目立たないが、こうして一人いると、なぜその美しさに気づかないのかが不思議に思われるようであった。

「セシリー殿、お待ちになりましたか。」

イテカレスは、精一杯気取って声をかけた。セシリーは優雅に腰をかがめ応えた。

「セシリー殿わたくしは、・・・」

と、イテカレスが言い出すのをさえぎって、
「イテカレス様のご活躍はいろいろ伺っておりますし、何度かお話をさせていただいたことは、良く覚えております。」
「それは、たいへん光栄。」

イテカレスは天にも昇る心持だった。

けれども、

「わたくし、イーリアス様がお幸せになられるまで、イーリアス様のお側を離れるつもりはありません。イーリアス様が喪に服しておいでの間は、わたくしも同じように致します。」

「そんな。」

イテカレスの心は、羽を失った鳥のように天空から墜落した。

「では、ごきげんよう。」

そう言うと、セシリーは去っていった。

イテカレスの恋は終わった。

と、城中の事情通たちは思っていた。

特にザヒルなどは、彼がなぜ今頃になっても国に帰らないのか、誰もが不思議がっていたのだが、
「まあ若いうちにはいろいろあるさ。」

としたり顔で、酒の肴に舌鼓を打った。

が、当の本人はというと

「いやあ、ばーさんじゃなくて良かったよ。名前が分かるっていいことだ、うんうん。

だって、夢の中で名前を呼ぼうにも、困るんだよ。

セシリー殿・・・いい御名だ。」

と、全くめげていなかった。

「ところでニール。お前女に興味ないのか。」

「いや、そんなことはない。」

「でも、余り聞かないな、そういう話。誰と逢引したとか、別れ話がこじれたとか、何とか。」

「婚約者がいるからな。」

「○×△※γ>@¥+（しばし回答不能）・・・いつから！」

「うーんよくは知らない。家同士が決めたことだからな、顔も知らないんだ。」

「良くそんなことを言われるな、会ったことも無い女と結婚するのか。」

「まだ十四歳かそこらだぞ。いま会っても、この先どう変わるかわからないだろう。」

「ニール、お前って、少女嗜好だったのか！」

「いいかげん、・・・刺すぞ。」

暁に紅く照らされて、目を細めた。その先にはもぞもぞと蠢く平原が見えた。

しばらくして、朝日は少しずつ地平から持ち上げられ、大地の起伏によってさえぎられていた光が届きはじめると、平原は異邦からの侵入者に形を変えた。

平原を埋め尽くす4万の大軍から、ときの声が上がった。大地がうねるように動き始めた。

ペルジア軍は、全軍をロンダルトの正面に投入した。矢の交換に始まった戦闘は、お互いに退くことを知らない兵士たちの圧力により、次第に城壁をめぐる攻防へと移っていった。

ロンダルトの城壁は、クラコワのそのように水を湛えた堀は無く、高さも無い。簡素なはしごをかけるだけでも、その垂直の頂に到達することが出来る。

楯よりも頑丈な遮蔽物であり、弓矢での戦いに高所を取れるという有利はあったが、ロンダルトはそれを防衛線とするには大きすぎた。

これといった攻城兵器が到着しないのは、ロンダルトの攻略軍も同様だった。クラコワで本軍と分離し、さらに王国の奥へと侵入してきたのである。

食料も、兵器も、補給に関する全てが、本体よりも厳しい条件下にあったし、司令官はその実情をよく知っていた。

彼らは、盾を密集させ、数人ずつの集団でじりじりと防壁に接近した。しかし、城壁からの矢が十分に届く距離にいたると、矢の打撃力に負け、それ以上進むことは難しくなった。

そうした集団が一定の数を揃えたところで、それ以上の性急な接近を諦めたのは、国境近くのブルターク城攻略の苦い経験があったからだ。無闇に近づいて、思いもよらぬ方法での反撃を食らうことを警戒した。

盾と盾の間隙から、城壁の上に居並ぶ甲冑姿の騎士たちが、まだ昇りきらぬ日の光を反射して輝いていた。

次に攻撃側は矢来を築き、城側からの矢よけとした。その背後から城壁の上の、ロンダルト兵めがけて矢を射掛けはじめた。

万を越える射手の激しい矢のやり取りがしばらく続いた後で、攻城側は、射撃の援護を受けながら、また集団での接近を試みた。

その接近を止めようと、城壁から大胆にも半身を乗り出して弓を引いたものは、逆に肩を貫かれて後ろに倒れた。

それが、この戦いで、ロンダルト側の一人目の死者だった。

ペルジア兵の接近は、城壁に近づくにしたが、彼らの消耗を大きくした。

朝からの戦闘は途切れることなく続き、昼ごろには城壁直下の位置まで、かなりのペルジア兵が到達していた。

しかし、彼らの前には、まだ城壁がそびえ立っていた。それを越えねば城内に入れない。

城内に入れねば、飢えが待っている。

飢えが蔓延すれば、士気が落ち、規律がゆるみ、軍団が崩壊する。そうすれば、待っているのは死だけだ。おそらくは、無慈悲な殺戮が待っているだろう。

今度ばかりは、彼らにも戦わねばならない切実な理由があった。

ペルジアは、組織だって動いた。

どこか一箇所が突出しても、そこが集中的に叩かれるてしまう。

小鳥が、大鳥を攪乱するために群れで飛ぶように、城壁に昇るための梯子が、ゆうに百を越える拠点で一斉にかけられた。

「来るぞ！」と、誰かが叫んだ。

そんな事は、今眼の前で起こっていることだ。みな言われなくても分かっている。

叫んだ者もそれは承知している。

けれども、その場にいる誰かが、叫ばずには居られなかったのだ。

城壁から身を乗り出せば、城外からの矢の餌食になる。むしろ、上がりきった瞬間の敵兵を突き刺す。あわよくば、そのまま梯子に転落させ、後続の兵を巻き添えにする。

しかし、ペルジア兵もまた、その対抗として短弓を肩から外し、目に付く城兵に向かって、矢継ぎ早に攻撃を繰り返す。

城壁の上で、点と点で始まった攻撃は、線と線になり、やがて面へと広がっていった。

オルクサンは自ら城壁に立ち、矢を放ち、剣を振るい、指揮し、味方を奮い立たせるという超人的な働きを行っていた。

オルクサンに従う兵士一万五千が、城壁を楯に四万の敵軍と交わす死闘は、すでに戦略の戦いではなく、個人と個人の格闘であった。

特にオルクサンの立つ本隊は、殺到した敵兵を騎士の集団がなぎ倒す戦いで拮抗していた。

「だれか、ザルウィー伯に使いを！今すぐ切り込めと。」

兵一万を擁するザルウィー伯の軍団は、敵の右翼に側面から攻撃をかけるべく、左翼に布陣していた。伝令は敵兵を大きく迂回して、ザルウィー伯の陣へと駆け込んだ。

「オルクサン様からの伝令。今すぐ敵を討てと！」

ザルウィーは、伝令に向かって大きくうなずいた。

「あい分かったと。」

伝えられるものならな。

「第一軍と第二軍は前進。」

ザルウィーはそれでも前線を前に進めた。しかしこの攻撃はあまり効果的ではなかった。

同じ頃、ペルジア軍は、司令のタラバスカニが、膠着する戦線に痺れを切らし始めていた。

「えい。城壁の突破にいつまでかかっている。」

「敵正面の抵抗が強く・・・。」

「そんなことは当たり前だ。左翼と右翼を、ロンダルトの側面攻撃にまわせ。」

夜になり、一度引くとなると、大きな犠牲を払って突き破った

防衛戦を修復させる機会を与えることになる。

それに、今日一日の攻撃を跳ね返したことで、ロンダルト側の士気も上がるだろう。

長期戦で挑むなら、初戦の進退なぞ気にする必要はない。けれども、この戦いは短期で決着させなければならなかった。

ザルウィーの軍とペルジアの右翼が接触し、そこで戦闘が始まった。そして、それ以上ザルウィー軍は前に進むことが出来なくなった。

一方、ペルジアの左翼がロンダルトの側面に回ったのをみて、オルクサンは正面の守備兵を割いて右翼の防衛線に回さざるを得なくなった。

そうせねば、背後をつかれる。

ロンダルトの兵力は、いくつかの貴族の脱落のせいもあって、四万に満たなかったのだ。

彼らは、表向き兵の動員のために所領に戻り、軍団を編成してロンダルトに戻ってくるという動きをしていたが、本音は、ロンダルトに戻るつもりは無かった。

彼らは宮廷を泳ぎ回る貴族であり、戦など全く無縁で、かつ、無力な存在だった。そしてロンダルトの実情も良く知っていた。

「この都を守りきれはるはずが無い。」

この広大な都の四辺を守るのは、彼らのような戦いの素人にも、いや、だからこそどのようにして守るのか想像も出来なかった。

そして、彼らが今まで宮廷でやってきたことは、どうやって身を守るか。守りながら利を得るか、についてである。

どちらが生き残ってもどちらにでもつける方法、オルクサンが勝ち残れば兵は集めたが遅参した、何しろ、戦いには素人なため何かと手間取ってしまったと言い訳、ペルジアが勝てば、責任は全てオルクサンに押し付けた上で、自分たちは何もしなかったと申し開くつもりであった。

結局、オルクサンは、当初あてにしていた数の兵を、手にすることが出来なかった。

彼の腹心が、

「この兵力差でペルジアと戦うのは不可能です。ここは一旦ロンダルトを明け渡し、ニオノスに撤退して反撃しましょう。」と進言したが、オルクサンは拒否した。

「撤退。」

そういえば、誰かもそんなことを言っていた、とオルクサンは心のなかで復唱した。

我々は、圧倒的不利か。

確かに兵は足りない。しかし、

「撤退すれば兵が増えるのか。逆に撤退している間に脱落者が増えるだけだぞ。ここに居る者たちは、ロンダルトを守るために集まった者達だ。俺や王家を守るためではない。

あの、ジジイの傀儡の王を守るために、命を捧げるものなどいるものか。」

ニオノスに引き、数千の兵と立てこもり、一体誰が救いに来てくれると言うのだ。何日待てば援軍が来るのだ。

アレスミリアンなら勝てるのか。クラコワとて、今は同じ状況だ。クラコワは戦い、ロンダルトは逃げた。そんな事が、俺に出来るものか！

その夜、オルクサンは女と最後の夜を過ごした。

ザルウィー伯もまた、多くの貴族のうちの一入だった。
彼は揮下の一入を、死闘に追いやるつもりは無かった。

「第一軍と第二軍は前進。ただし深入りはするな。ペルギア右翼の足をとめればよい。」

この都は広すぎる。この兵数ではここは守りきれない。ここで全員討ち死にしたら、だれがこの国を守るのだ。

都が落ちてても、それは一つの都市が落ちただけに過ぎない。
ロンダルトの民には悪いが、これは無駄な戦いだ。

彼は冷静に判断をした。一旦ペルギアに落とさせても、クラコワと連合して奪い返せばよいだけのこと。ウェルモンテがとっとと逃げ出した都を、あの王家のために何で守ってやる必要があるものか。

ザルウィー家は、ロンダルトの有力な貴族であるが、ウェルモンテが策謀により宮廷内での勢力を伸ばすにつれ次第に首都での存在感を失った。

ヨクアルは、所領に引くことで無用の争いを避けた。彼は成りあがりのウェルモンテを嫌っていたし、その傀儡の王も、王とその後、つまりウェルモンテの娘との間に誕生した王子と姫にも、何の愛着も敬意も持たなかった。

長い歴史を持ち、半ば独立国として存在する地方の領主であるザルウィー家を、刹那的な宮廷での権力争いなどに巻き込むのは愚かなことだと考えた。

ザルウィーにとっては、首都ロンダルトは所領以外の他所の土地のひとつでしかなかった。

ヨクアルが出陣したのは、ロンダルトの戦闘がそのまま地方へと波及し、戦火が広がることをけん制するためである。
したがって、今彼の手元にある一万の兵は、ぜひとも温存しておき

たかった。

クラコワは持ちこたえるだろう。

彼ならそれが出来るはずだと、希望を込めてそう思っていた。

右翼に兵を割いたことで、オルクサンの防衛線は目に見えて弱体化した。

戦闘は、各所で城壁上の陣地の攻防にうつっていた。人と人が、
剣と剣がぶつかり合い、多くの血が流され、命を切り刻まれた体が倒れ、
踏みつけにされ、捨て置かれた。

ペルジア兵は、抵抗を受けることなく、次々と城壁に上がり始めた。

ついに、側近の騎士が叫んだ。

「オルクサン様、ここは一時退却しましょう！」

「退却！ どこへ退却するというのだ。王宮か。」

「都を捨てるのです。もう持ちません。」

都を捨てる・・・。

「そして流離うのか、永遠に。」

受け入れてくれるところなど、あるはずが無い。

そう思った、そのときだった。強い衝撃が足の付け根を貫いた。その矢の飛んできた方を見た瞬間、続いてわき腹にも矢を受け、こらえきれずにオルクサンは倒れた。

痛みはその後から襲ってきた。

「だれか！ オルクサン様を後方へ。」
ペルジア兵の壁が、もうそこまで迫っていた。

「何を言う、俺はここを動かんぞ！俺が退いて、だれがこの国を守るのだ！」
剣を杖に、なんとか起き上がろうと力を込めた。

「だれかっ、早くお運びしろ！」

オルクサンは、最初は体を両側から担がれ、次に戸板に乗せられ市街へと運ばれていった。

出血がひどかった。体が急速に熱を失っていった。何度か体を起こそうと試みたが、力が喪われそれは出来なかった。

暗くなってきたな、もう夕暮れか。おれはどこに行くのだ。

「さっ、早くこちらへ！」
どこへ行くのだ。

「わたしは、戻らねばならん。あとは頼んだぞ。」

どこだ、どこへ戻るというのだ、俺を連れて行け。オルクサンは手を伸ばしたつもりだったが、手首すら持ち上がらなかった。

「出血がひどい。手の施しようが無い。」
誰か、怪我をしているのか。

「だ・れ・だ。だれか、けがをしているのか。」
しずかだな。こんなに静かなのは初めてだ。

父上、母上、イーリアス……。

子供のころは良かった。王宮の庭で、花と緑の間を駆け廻っていた。

幸せだったあのころ……。

俺はどうしてこんな所に来てしまったのだろう。

これが俺の本望だったのか。

戦いで勝つことが。戦いで死ぬことが。果たして俺の生き方だったのだろうか。

王となるには、何かが足りなかったのだろうか。

お前の、言うとおりになったようだな。

「アレス……。」

そんなことは分かっていたさ。

けれども、俺は、やはりお前には従わん。

だが、妹だけは呉れてやる。お前には、それでももったいない……。

「どうだ、見よ！ペルジアの旗兵が行くぞ。」

タラバスカニは興奮していた。
進軍の太鼓の音がひととき大きく響いていた。

「よいか、みなに伝えよ。この都はいまよりイズマイル様の治める都となる。

この都に根のあるものは一木一草、足のあるものは犬、猫、椅子にいたるまで、全てイズマイル様の者だ。
決して邪にするではないぞ。」

それだけ言うと、タラバスカニは満足した。

これで、私が入城の際にやるべきことを全てなしたことは、明らかになる。イズマイル様への忠節も疑いない。

いや、まだほとんど手付かずで残った右翼の敵軍も気になるのだ。
うかうかと略奪などしている間に、急襲されては元も子もなくなるからな。

まだ気を緩めるわけには行かんのだ。都の一つを落としたとはいえ、これだけ大きな国だ。

我々が掌握したのは、手にすくったほんの一握りの土に過ぎないことを、忘れてはならない。

もちろん、このときはまだ、わずか三日後にこの都を後にすることになるとは思ってもいなかった。

しかも、それが一度撤退した一万の敵軍ではなく、たった一人の男に追い出されるとは。

左翼を一万の兵で固めていたヨクアルは、敵兵が次々と城壁を越え始めたのを見て、
「これまでだな。兵を引くぞ。」と命じた。

早朝から夕暮れ近くまで、よく持った方だな。

やがて、城門が空けられたのか、それまでバラバラに城壁を目指していたペルジア軍が、支流が大河に流れ込むように、一つの流れとなって入城を始めた。

にらみ合いを続けている敵の右翼軍と、互い兵を引くにはこのときしかない。しかし、ロンダルトの落城を遠望していたヨクアルの胸には、それまでは予期しなかった喪失感が湧き起こった。

たかだか都の一つが落ちたに過ぎない。想定したとおりのことが起こっただけではないか。

が、城壁が落とされたということは、王子は落命したということだ。であれば、王と王妃も最早長くはあるまい。

おそらく、失ったものは都だけではないのだ。

国の誇りと、平和な時代と、そして何かはっきりとは分からない美しいものが、この国から失われてしまったのだろう。

この都はいつか回復されねばならない。この都がペルジアの支配下にある限り、ロンダルトの諸州は侵攻にさらされ、戦い続けなくてはならない。

都を取り戻すか、我々が征服されるか。それには数ヶ月かかるか、数年かかるか。

今はっきりと言うことは出来ないが、長い戦乱の時代が始まるのだろう。

家は焼き払われ、森は切り開かれ、民は鋤や鍬や畑を失い、行く所を無くし、家族は離散して流浪するだろう。

はるかな異国に連れ去られ、奴隷として売られる者も
いるかもしれない。

本当にこれでよかったのだ、と言い切る確信が、ヨクアルから
失われてしまっていた。

「あの時、城壁で戦っていた騎士も多くは討たれました。ですからこの話は、いろいろな切れ端をつなぎ合わせて、おそらくこうだったのだろうと・・・。」

クラコワの、アレスミアンの部屋では、長い物語がようやくその幕を下ろそうとしていた。

「ああ、無理を承知で頼んだことだからね、充分だよ。」
「何か、仕置きをなさるのですか、逃げた貴族とか、例えばザルウィー伯とか。」

「いや、わたしが知りたかったのは、オルクサン殿がどのような最後を迎えられたかということだ。いずれ、折りを見てイーリアスに話すことになるだろう。それまでは、この話は伏せておいてくれ。ニールやイテカにもね。」
「承知しました。」

「ご苦労だったね、ワーズワード。」

部屋を辞するときが来たことを知りつつも、
「あのお、一つ伺っていいでしょうか。」

彼は若者らしい好奇心から、アレスミアンに尋ねた。

「なんだろう。」
「アレスミアン様なら、どうなさいましたか。ロンダルトを守るのであれば。」

「そうだね・・・。」
少し考えてから。

「例えば、都を空っぽにして、敵が入城したところで火を放つ。敵が逃げだしてきたところを討つ。出口が限られるから、それは効率的にやれるだろう。」
「それって、ロンダルトを守ることになりますか。」

ワーズワードは不満そうだった。彼には、生まれ育ったこの都を焼くことなど、出来ない相談だった。

「都なぞまたつくればいいさ。人が生きてさえいれば。建物はまた建てられる。」

「それでは、城壁で死んだ騎士たちがあわれです。」

ワーズワードは自分が見聞きしてきたことを思いだし、彼らに同情的だった。

「彼らは、長く人々の記憶に留められるだろう。しかし、死んでしまったら元も子もない。」

「記憶・・・か。騎士道を貫いて死んだ騎士は、伝説の王の国へと魂が導かれると聞いたことがあります。」

「私も聞いたことはある。」

「本当でしょうか。」

「きっと嘘だな。伝説の王だかなんだか知らないが、そんなことを言うからみんな戦って死にたがるんだ。生きて、生き抜く方が余程大変なのだから。」

ワーズワードは若いだけに、憧れが強く浪漫的でもあった。だからアレスミリアンの答えには不満だった。

時に城壁を背に、敵兵と戦って、夕日の赤に染まりながら死に行くことを夢想することすら在った

「なんだか、かっこ悪いですね。」

「その通り、かっこ悪い王様だ。」

この冬のアレスミリアンの周辺は、ひとまずペルジアの件が片付いたことにより徐々に穏やかだった。アレスミリアンは、多くの時間をイーリアスと過ごすようにしていた。

イーリアスは、雪に埋もれる冬のありがたさを思っていた。失ってしまった人々への悲しみを、雪が覆ってくれるような気がした。

徐々に訪れた平和な日々だった。それはクラコワの街も同じだった。

「あの黒い点々はなに。」

雪原に点々と小さな穴が互い違いに連なって、それが光線の加減で暗く見えていた。

「狐の足跡だろう。餌を探して歩いていたんだらうね。」

「えさ？」

「野ねずみ、野うさぎ……。」

「まあ。かわいそう。」

「あの足跡をたどると、狐の巣穴にもかわいい子狐が待っている。」

「どうしても食べないわけにはいきませんか。」

「川が凍っては魚もとれないしね。」

「狐は、魚も採るんですの。」

「そう、こう尻尾を川にたらし、つんつん、つんつん。」

「狐がつりをするのですか。」

「冬の月夜にうたた寝をすると、川が凍って尻尾が抜けなくなってしまふんだ。春になると尻尾の短い狐がいるのはそのためなんだよ。」

「まあ、かわいそうに。」

「……うそだよ。」

「もう。また！うそつき。」

冬の、青い空が広がっている。

二人の過ごした、最後の季節が終わろうとしていた。

アレスミリアンがアストアシタ宮を久しぶりに訪れたのは、ようやく春の花のつぼみが膨らみ始めるころだった。

アレスミリアンの宮城入りに先だって、ウェルモンテ伯は、アストアシタ宮から退場した。

一騒動あるか、と期待していた宮廷貴族は、意外な事の収まりに多少気落ちした。

彼らは、いまだ自分の身の振り方を見つけあぐねていた。ウェルモンテが本当に下りたのか、それともそれは見せ掛けだけだろうか。

見せ掛けであれば、おいそれと表立ってアレスミリアンになびくわけにもいかない。

そう考えあぐねている間に、クラコワから、カラバ公とその他主立った者が、ロンダルトの城門をくぐった。

さながら、古王国が丸ごと引っ越してきたような様相である。

カラバ公にとっては、数十年ぶりの訪問であった。この前に来たときは、、、アビアントの即位の時だった。

「花の都、と詠ったものもいたが、その花が毒の実をつけようとはな。誰も思うまいて。」

そんな詠嘆を、こぼした。

其処此処につけられた戦の傷跡は、まだ回復されていなかったが、クラコワとは違う開放感と温暖な気候は、旧式の武人であるカラバ公にも心地よかった。

ましてこの度は、王国の枝に実り、木本体を腐らせようとする毒の実が落ちた後である。

鎧兜も槍も傍らには無かったが、すこぶる上機嫌であった。

ただ毒の実は、木から落ちてもお悪臭を放っていた。

イーリアスは改めて弔いを行った。

ロンダルトの市民は、唯ひとり残った先王の家族に、深い哀悼を捧げた。

イーリアスを垣間見たものは、随分と大人の様子になったと噂した。
そして、いずれアレスミリアンのもとに嫁ぐのだろうという言葉で、
その話題を締めくくった。

そうすることが、良いだろうと。

ウェルモンテ伯と、アレスミリアンの争いを避けるためにも。

ペルジアとの戦争以来、争い事は何に寄らず、人々のところを不安にさせた。

市民の不安は、都の回復を送らせる。

外敵が去った今、新旧権力者の交代に伴う内乱の勃発が、人々の最も恐れるところだった。

イーリアスは、東宮に入った。

そこは、かつての住居であり、失われた一族の思い出の宮殿であった。

アレスミリアンは、先王への遠慮から西宮に入った。

多くの人々が亡くなった先の戦いから、まだ日もあまり立たず、人々の記憶もまだ新しい。

先王が、自ら命を絶った東宮に、軽々しく立ち入るべきではないという考えだった。

ただ、これ以上即位を先に延ばすつもりもなかった。

アレスミリアンの即位は、現在の王家の系譜中で、最高の序列にあるカラバ公が、アレスミリアンに冠をかぶせるという形式で行われた。

儀式には、古王国と新王国の主立った貴族が参列し、その間をアレスミリアンがカラバ公の前まで進み、頭上に王の印を頂いた。

この群衆の中には、ハイアルト卿、キリアンデルとリディア、ニールリングの父で西の支城の主、ザルウィー伯などがいたが、ウェルモンテ伯は病気を理由に欠席した。

ロンダルトの貴族達は、目の前で執り行われる儀式を見てもなお、突然現れたこの後継者に、未だ釈然としない気持を持つものがいた。

その間、イーリアスは、カラバ公の背後からこの出し物を見守っていた。

そう、これはただの出し物に過ぎなかった。

アレスミアンがロンダルトに登場するという、衆目を集めずには置かない事件に隠れて、ロンダルトに新たな商館が開かれた。

その主は、北の部族との交易と、東方との間接取引のルートを持つ、当代きっての商人だった。

かれは、特別に一代限りの貴族の称号を与えられ、昇殿が許される身分となった。

従って彼に限っては、商業大臣に付け届けをおくらなくても、政治に口を出すことが出来た。

ロンダルトの商業者は同業者としての彼への依存を強める事になる。

一方、ロンダルト市街の民政も、住民や商工者の代表に委ねられることとなり、その組織を担当したのがイテカレスだった。

彼の貴族にしては庶民受けする性格が、クラコワと同じようにロンダルトでも役だった。

新たに創設された自治組織は、その希望や要望を、宮廷貴族に献金を添えて願い上げるのではなく、イテカレスを通路として王に送られてくる。

貴族達は、ウェルモンテを捨てるかアレスミアンに付くかを考えあぐねている間に、いままで自分たちが存在意義としていた口利きの利権が形骸化し、中抜きされてしまっていることを知らなかった。

「あまり、綺麗なやり方ではないが、ことは急を要する。」

「そうですか。」

「賛成してはくれないのですか。」

「いや。そうではないが・・・、そうでなければ、ロンダルトには来ない。」

「不服そうですね。」

「わたしは生涯独身の気軽な身の上。一つところに留まるなど性に合わない。」

「では、嫁を取りますか。」

「いかに王様の命令とはいえ、そればかりは承服いたしかねます。」

「はは、それは誰の真似？」

「いや、貴族だったらこれくらいのことは言うのかなと、
真似じゃあ無い。」

「違いますよ。ロンダルトの宮廷貴族は、委細承知いたしましたと
いって下がった後、舌をべろっとだす。」

「いやはや、それでは、どこかの王様と一緒にじゃないか。」

アレスミリアンは、冗談はここまでとでも言うように真顔を作って、

「東の国の情報収集をよろしく。」

「うん。私の商館は取り壊されたろうが、商人のつながりとは、
そういうものではないからね。

まして、ペルジアのような多国籍の人間が集まるようなところでは、
裏道はいくつでも作れる。

東の街道は当分使えないが、山越えでも南回りの海からでも、
行こうと思えばどこからでもいける。戦のせいで欲しいものが
手に入らず、やきもきしていることだろう。

それは、商いも情報も同じだ。向こうもこちらの様子が
知りたいだろう。」

「だから、当分は私の声と耳の届くところにいて欲しいのです。」

「委細承知いたしました。おっと、舌はだささないよ。」

「二枚あるのがばれるからですか。」

「いや、二枚はない。が、ちょん切られても生え変わる。」

ところで、と。

「ウェルモンテがあっさり引き下がったのが、どうにも気に入らないんだが。」

「何か、たくらんでいるのでしょうか。」

そこまでは分からない。

「食事とかは大丈夫なのか。また毒を盛られるとか。」

「この宮殿にいる限りは大丈夫でしょう。料理人は信用できる男です。この館にいるものは、この館についている付属物のようなものです。」

この館に利益をもたらすものは守ってくれますが、逆にそうではないものには何もしてくれません。私が彼らを保護してやる限り、私に危害を加えることはありません。

宮殿も四百年もたっていると、それ自体が一つの生き物のようになるのですね。彼らは代々この館に奉仕することで生計を立てています。

それと比べれば、わたしなぞ、王様とか言ってふんぞり返ってもたかだか三十年ばかり椅子に腰掛けているだけの存在でしかありません。」

「何にせよ、用心するに越したことは無い。このままで幕引きなどありえないからな。」

あまり口にすることはなかったが、誰もが懸念していることだった。

しかし、イーリアスの唯一残った親族でもある。強引に排除する、ということは出来なかった。

「ところで、今宵の宴には。」

「ああ充分用意したさ。なにせ王様からの贈り物だからな。」

物をケチるわけにはいかない。

貴族達の驚く顔が目に浮かぶよ。今夜は中央貴族、明日は地方貴族、明後日は平民の代表。」

「これは偽装ですから、盛大に、派手にやらねばなりません。」

「で、この費用はどこから出るんだ。」

「クラコワ近くの丘の上に、宝の山があります。」

クラコワの近くの丘？雑草しか生えない丘に何が埋まってるんだ。

せいぜい芝草と、そのなれの果ての牛の糞ぐらいしか。いやまてよ、
確か今は。

「あれか……。おいおい、あれを売り払うのか。イズマイルの
残していった、本営の天幕を。たしかに移動用の天幕とはいえ、
王の使うものだからな。織物といい敷物といい、かなりの値打ち
品が揃っているだろう。」

「そのほか衣装に装飾品、調度品。」

「うーん。イズマイルが知ったら怒るだろうな。」

「王の癖にけち臭いと笑うでしょう。わたしは育ちが貧しかったので、
かまいませんが。」

「やれやれ、またひとつ仕事が増えた。」

これだからこの男は、と、シルヴェスタは首の後ろあたりを
トントンと叩いた。
退屈させてくれないな。まったく。

その日、東宮を訪れた一人の男がいた。

男は誰に気兼ねする様子も無く回廊を渡り、それを見たものも誰も咎める様子は無かった。男にはそこを歩くだけの身分と資格があり、理由ももっていたからだ。

一時の後、その男は来た道に戻り、アストアシタ宮を後にした。

訪れたときとなんら様子は変わらなかったが、それ以前に持ち合わせていた威厳や、人に与える畏怖が消えうせ、一回り小さくなったようだった。

それは単に、王宮から出て日の光にさらされたからかもしれないし、彼の崇拜者が相次いで離れていったからかもしれない。

老人は、かつて彼の住まいであった西宮を一度だけ振り返ると、満足げに城を後にした。

アストアシタ宮での宴は三日間行われた。

アレスミリアンは玉座には座らず、人々の間を巡り、祝辞を受け、時に手を取り、時に肩を抱き、時には祝杯を挙げ、人々の心のわだかまりを溶かしていった。

全ての招待客には贈り物が用意され、彼らはそれを持ち帰って、驚いた。

そこには、彼らが目にしたこともない、東方の国々の、そう、ペルジアよりもっと遠くの国々の産物が含まれていた。

乳香、香木を刻んだ彫刻、香料、香を焚き込んだ織物・・・それらの香りは、世界の広がりをもたらした。

世界はロンダルトとクラコワに限らず、ペルジアはもとより、はるか遠くにもまだ見ぬ国が広がっている。

それは、ロンダルトの宮廷の一角で繰り広げられた、陰鬱な政治の時代に辟易していた人たちに、新しい時代が戸口を広げて待っているような期待感を抱かせた。

「姫は？」

あくびをしていたニールリングに、顔を紅くしたイテカレスが声をかけた。

「ご気分が悪いとかで出てこれないんだ。」

「残念だな、いい絵になったのに。」

「お前が探しているのは姫じゃなくって、」

「それもある。」

「こりないやつ。でもあんなことの後だからな。こういう宴席に出るのを、控えておられるのかもしれない。ところで、首尾は。」

「うん、こんな処で言うのもなんだが、上手くいくだろう。」

町の者たちは期待しているよ。自分たちを捨てて逃げた貴族連中を、相当恨んでいるようだからな。」

やれやれ、立ちっぱなしで疲れたよ。床でもいいから、どこかに座り込みたいぐらいだ。

「こうして平民の力が強くなると、またいろいろ問題が起こるんだろうな。ここは、クラコワとは違うから。」

「それはまた、その時代のものが解決するさ。その能力が無ければ滅びるだけだ。」

「ここにいる貴族たちも、何も知らずに騒いでいるが・・・。」

「おっと、その話はよしたほうがいい。なにせここは噂話で政が成り立っていたところだから。どこで誰が聞き耳を立てているかわからないぞ。」
イテカレスは首をすくめた。

イーリアスはあのこと以来、東宮に引きこもったままだった。

アレスミリアンはそれを気にかけていたが、彼自身が主賓となるこの宴の忙しさに紛れ、何も出来ないでいた。

この騒動の影では、商業者と平民を組織するため、のシルヴェスタとイテカレスの活動が進んでいた。

商業者組合と平民の自治組織が、宮廷貴族に対抗する勢力となる。彼らの間に生じた利害関係は、王が調整する。

それが、王権を強化することになる。

三日目の夜、アレスミリアンは一人横たわっていた。

宴の騒々しさが、まだ耳に残って反響しているようだった。背中は、甲羅を貼り付けたように重く突っ張り、足はひざを立てることすら億劫だ。

「終わった。とにかく終わった。あとは結果を手繰り寄せるだけだ……。」

何か独り言をいったような気がしたが、それすら自分の声だかどうだか、分からなかった。

……さま。アレスミリアン様。
ひそかに呼ぶ声がした。

「だれだ。」

「イーリアス様付きの、セシリーでございます。イーリアス様が、お越しいただきたいとおっしゃっておられます。」

「わかった、すぐ行く。」

アレスミリアンは、西から東への長い道のりを急ぎ足で渡っていった。

こんな夜中に、しかもアレスミリアンが疲労の底にあることが分かっている時に呼び出すなど、極めて異例のことだ。

東宮の部屋は明かりも無く、人の気配がなかった。

星明り、月明かりの中で、総ての調度が有るべきところに納まり、調和した雰囲気の中に、そこにいるべき人だけが居なかった。

前庭に続く大窓が開け放たれ、そこから月光に浄化された風が吹き込んで、薄いカーテンを揺らしている。

光に誘われるように露台に出てみると、純白の衣装をまとったイーリアスが、石造りの手すりに寄りかかり立っていた。

「イーリアス。」

イーリアスは全ての憂いから解き放たれたような、柔らかな微笑を湛え振り返った。
月の光に音があれば、さらさらと流れるような振動が聞こえたかもしれない。

「花嫁のようだね。」
「今宵は、あなたとの結婚式です。」

絹のすれる音がして、イーリアスは寄り添った。

「いいよ、お姫様。今はこれしかないけど。」
アレスミリアンは、指輪を抜くとそれにイーリアスの指を通した。

「母が父さんからもらい、それを僕が譲り受けた。」
「うれしい・・・。」

月の光にかざすと、銀色の文様が浮かび上がった。
花が落ちる音がした。
白い花がいくつもいくつも積み重なっていた。

「雪みたい。クラコワの雪が来たみたい。」

「気分は良くなったのかい。」
「ええ、とても。なにもかも・・・」
「何もかも？」

夜風を受けてベールが膨らんだ。金色の髪が、今は銀色に輝いていた。

「あなたと初めてクラコワで会った十歳の春から、私はあなたのお嫁さんになるのが夢でした。
あなたは私に花を摘んでくれました。
とてもうれしかった。
だってそれまで、誰もそんなことをしてくれる人が、居なかったのだから。」

クラコワ内城の中庭に、ささやかな庭園があり、雪を被る冬以外の季節には、その時々の花が咲いていた。

アレスミリアンは故郷を離れ、その花々にしばし生家の花畑を思い浮かべ、懐かしんでいた。

「初めは、誰だか知らなかったんだ。」

「それまでは、お城の外に出たことがなかった。

クラコワでは、市場に出かけたり、民家の屋根裏に忍び込んだり、城壁の外に出てみたり。

みんなあなたが教えてくれました。人の本当の暮らしはここにあるんだと言って。

私は、いつもドキドキして・・・。

だから、あなたが遠くの方に出かけているときはつまらなかった。

いつ還ってくるかも知れないし、城にいるのはおじさんばかりだし。」

「遊んでばかりいるわけにもいかないよ。ずっと子供ではられないんだ。

それに、何もしないでは、あの城にいることさえ出来なかったんだ。私は。」

「意地悪で。」

「はいはい。」

「あなたと私に、血のつながりがあると聞いたとき、

・・・本当に驚いた。

もしかしたら、あなたとは結婚できないのかと。

それでは、今までの人生はなんだったんだろう。

私のこの気持ちはどうになってしまうのだろう。」

「そんなことにはならない。」

「どうして話してくださらなかったの。」

なんの事だ・・・。

「お祖父さまが来たの。」

「ウェルモンテ、伯が？」

「あなたの命を狙ったこと、そして、同じ方法であなたのおとうさまを亡き者とし、代わりに私の父を王位につけたこと。」

「まさか、何故そんなことを。」

悪寒が、アレスミリアンの背筋を駆け上がってきた。

「あなたはそのことを恨みに思って、ロンダルトを見捨て、

父と母と・・・、兄を見捨てた。」

「違う！それはちがう！」

イーリアスは、傍らから短剣を出した。

「この剣は、母の守り刀。これであなたを刺せ。

恨みを晴らすのだ、と。」

剣は冷ややかな光を放ち、この世とのつながりを断ち切るのにはこの上ない、鋭利さを備えているように見えた。

「十歳の春、あなたと出会った春。
私が初めて夢を知った春。
でも、あなたはその時から知っていたのですね。
私が仇の血を引くものだ。
私に優しくしてくれたのは、私を利用するため？」

「私は誰も恨んでなどいないし、復讐する気もない。
イーリアスが誰の血筋だろうと関係ない。
小さなイーリアスは、今も私のイーリアスだ。
北の地で、季節はずれの吹雪に合って死にそうになったとき、
君の事を思い、君に会うために還ってきた。
もしも君が他の誰かのところに嫁ぐなら、さらって北の大地に
逃げるつもりだった。
それが私の望みであり、君の望みだと信じた。」

「いつかあなたは話してくれました。北の人々の暮らしぶりを。
本当に、行ってしまえば良かったのかも知れない。」

かしゅん、という乾いた音を立て、力なく短剣が落ちた。

「あなたの命を絶たない限り、お祖父さまは、この先も
あなたの命を狙い続けるといった。
けれども私はあなたを守りたい。
あなたの代わりに刺されることになってもいい。
だからといってお祖父さまの命を奪うことも出来ない。
ずっとそれで悩んでいました。
眠れず、何ものどを通らず。そのことばかり考えていました・・・。
でも、もういいの。」

イーリアスの身体が、力を失い始めた。
アレスミリアンは彼女を強く抱き留めた。

「イーリアス。どうした、イーリアス。」
「眠い、アレスミリアン。とてもねむい、、、。
わたしを愛してる？」

「ああ、愛している。」

アレスミリアンには、なにが起ころうとしているのかが、
分かり始めた。

そして、それが分かっているながら、もうどうすることも
出来ないと言うことも。

「よかった・・・。

あなたに、愛されたまま、あなたの腕のなかでねむれて・・・。」

「だめだイーリアス、眠ってはいけない。」

この世で最も美しいものが、命よりも大切なものが、

「これでいいの。わたしはしあわせ。

あなたにあいざされてゆける・・・ずっと、ずっと、

あなたのそばに・・・。」

腕の中から消えようとしている。

どんなに強く抱いても、魂が離れていくのを、止めることが出来ない。

「逝くな。私を一人残して逝くな！あなたのために強くなったのに。

あなたのために、此の国を守ったのに。

私を残していくな。私をひとりに・・・。」

腕の中のイーリアスは、すでに寝息を立てていた。

その寝顔は、いつか、死が彼にも訪れるときまで忘れ得ぬ、
美しい微笑みを湛えていた。

花が落ちる音がした。

白い花が、いくつもいくつも積み重なり、
純白のイーリアスが使い残した時を、積み重ねているようだった。

月の光は、絶え間なく二人を照らし続ける。

星は宇宙を巡り続ける。

イーリアスは永い眠りにつき、世界は一時の眠りに沈んでいる。

その胸の動きは、浅くなり・・・、
小さくなり・・・、
長くなり・・・、

途絶えた。

だれが間違えたのか。何故こんな事になったのか。
幾度考えてもどうしても判らなかつた。
あのとき、出会っていけない二人であつたはずはないのに。
なにもかも、あと少しだったのに。
必ず守れたはずなのに。

アレスミリアンは、イーリアスの身体を抱いたまま、
いつまでも泣いていた。
それから、どれぐらいの時間が過ぎたのかは判らない。

どこかにいた侍女達が、アレスミリアンからイーリアスを
引き離そうとした。
アレスミリアンは嫌々をしたが、イーリアスを楽にしてあげる
のだといわれ、ようやく手を離した。

そのころには、彼がいったい誰なのか、判らないような風体になつていた。

イーリアスの身体は、柔らかな寝台に横たえられ、
そのまま何百年も眠り続けるようにも見えた。
その顔は幸せそうに微笑んでいた。

今やその部屋は、総ての調和を失つて、ぐるぐると回り始めた。

アレスミリアンは短剣を拾うと、深い闇の中へ飛び出していった。

ガンガンと、固いもので扉を殴りつける音が闇の中に響いていた。

「くっそ、どこのどいつだこんな夜中にうるさい。」

番人は悪態をつきながら、まだまぶたの開かない目をこすり、気付けに酒を一口あおってから扉の内側に立った。

「おい、やめろ！うるさいぞ。こんな夜中になんだ！」
扉を叩く音は収まった。

「王だ。扉を開けろ。」
「なんだと、言うに事欠いて、王様がこんな夜中に来るわけが無い。もっとうまい嘘をつくんだな。どこの馬の糞だ。」

「アレスミリアン・ロンダベルだ。開けないと、ぶち破るぞ。」
「へっ、やってみな。」

アレスミリアンはマクシミアを後ろ向かせると、
「やってくれ」といった。

マクシミアは前足を支えに、後ろ足を上げると、扉に向かってたたきつけた。
板が砕ける音、棒が折れる音、砕けた木片が跳ね回る音がひとしきりしたあと、扉はただの穴と化していた。

その向こうには、驚いて腰が砕けた番人が、目と鼻と口を丸くあいたまま倒れていた。

アレスミリアンはマクシミアを待たせると、用のない男には見向きもせず、屋敷の中へと入っていった。

轟音に目覚めた家人たちが、着の身着のまま飛び出してきた、侵入者の前に立ちはだかった。

「何者だ！」

「王だ。何度も言わせるな。ウエルモンテはどこだ。」

「王だと。王がこの屋敷に来たことなど一度も無いわ。

しかもこんな夜中に。」

「いや、まて確かに見覚えがある。何か証明は・・・。」

「お前たちの主人につけられた矢の傷が背中にある。」

家人たちは、その言葉の恐ろしさにたじろいだ。

恐ろしいことだが、我々の主人ならやりかねない。

「ウエルモンテはどこだ。」

そのとき、奥から現れた、これといって特徴の無い顔をした男が言った。

「こちらでございます。どうぞ非礼の段はお許してください。」

一度灯の落とされた屋敷に、再び灯りがともされた。

家宰が前に立ち、灯籠の灯りで先導しながら、長い長い廊下を渡った。

暗闇に沈む回廊は、冥府に続く道のように思えた。

ウェルモンテの部屋は屋敷の奥まったところに、何の変哲もない扉に仕切られて有った。

扉の前で立ち止まり、家宰が声をかけた。

「ご主人様。アレスミリアン王がお越しで・・・」

全てを言い終える前に、アレスミリアンは「もうよい」というように扉を開け勝手に入っていった。

ウェルモンテは、寝台の上に半身だけを起こしたまま、事の次第を計りかね、戸惑っていた。

アレスミリアンはしばらくの間、このみすぼらしい老人を見下ろして無言のままたっていた。

アストアシタ宮の、黄金の装飾に囲まれた「黒の宰相」の姿はここにはなかった。

乾いた皮膚と、落ちくぼんだ二つの穴に眼球をぎらぎらさせた、服を着た“はげネズミ”の姿がそこにあった。

この男が、君臨した四十年間どれだけの人が泣いたことだろう。

母や、イーリアスやオルクサンのように。

先に口を開いたのは、ウェルモンテだった。

「なに用じゃ。」

「用か。そうだった、忘れるところだった。この剣に覚えがあるだろう。」

先ほどまでイーリアスが手にしていた短剣を取り出した。

「それは。どうしてお前が持っている。まさか、イーリアスを。」

「この世の境を渡ってしまった。」

「なに！ お前が殺したのか！」

「殺すだと。お前すら生きているのに、私が他の誰を殺すというのだ。

イーリアスが自ら選んだのだ。

彼女の美しい心は誰も汚せない。

穢れの無い道を彼女は選んだのだ。

お前ごときが手を触れてはいけなかったのだ。」

愚かにも、ウェルモンテはこの結末を予想していなかった。

「わしは！わしは！お前の、おまえが。
おまえがあらわれるからこんなことに。
おまえさえいなければ。わしの栄華はゆるぎなかったのに！
毒でも死なず、戦でも死なず、クラコワばかりかロンダルトまで。
わしが生涯をかけて築き上げたものを全て奪い、
そのうえイーリアスまで奪っていく。
くそお。お前さえいなければ。」

誰も、この夜のようなアレスミリアンの顔を、見たことはなかったろう。

「陰謀と、殺人と、賄賂と、腐敗と、墮落がお前の生涯か。
私を殺したければ、何度でもそうするがいい。
私はそれを全てはねつける。
私はお前を殺さないからな。
私がいる限り、お前は憎悪の炎にその身を焦がし続けるだろう。
生きる限り苦しむがいい。
夜も昼も、夢の中でも私を憎しめ。
そしてその恨みが晴らされることが無いことを、思い知るがいい。
生きることがお前の罰だ。」

もし見たことがあるとすれば、人の憎悪というものが
どういうものかを悟ったに違いない。

ウェルモンテの口からは、もう言葉が出てこなかった。
言葉の代わりに大きく肩で息をしながら、食いしばった口の間から
漏れる、憎しみのこもった風音だけを繰り返していた。

アレスミリアンは、もうこれ以上この場所に留まりたくなかった。
この、悪意の臭気に満ちた部屋の空気を、吸い込みたくなかった。

アレスミリアンが去った部屋から、ケモノのような叫び声が聞こえてきた。

「マクシミア、どこかへ連れて行っておくれ。

どこでもいいよ。私をどこかへ運び去っておくれ。」

馬は、気まぐれな主人を背にすると、どこかにあてがあるように走り出した。

馬はいつか市街を抜け、城外を走っていた。

先程まで二人を照らしていた月は、すでに今日一日の生業を終え、西に帰ろうとしている。
草も木も石も見えなかった。

マクシミアの足音だけが、まだ大地だけはこの世に残っていることを耳に教えた。

アレスミリアンは、ただイーリアスのことを思っていた。
どうすればこんなことにならずにすんだのか、そればかりを考えていた。
もしオルクサンが生きていれば。
もしイズマイルが攻めてこなければ。
アレスミリアンがカラバ公の元へ行かなかつたら。
ウェルモンテが父を殺さなかつたら。

イーリアスは死なずにすんだかもしれない。

十歳の時から見続けていた愛らしい少女。
何時も何時も私の後を追いかけてきて、私が困る顔を見ては嬉しそうにしていた。

愛しさえすればなんとかなると思っていた。
子供の時からそう思ってきたから、そうとしか、それしか考えられなかった。

亡霊が私を追いかけてくる。
この場所で、あの戦で死んだ兵士達の亡霊が、私からイーリアスを奪い去ろうとしている。

そんなに寂しいのか、死の世界は。
お前達は夜に生きるがいい。だが私は昼を生きるものだ。

イーリアスを私から奪うな、お前達とは世界が違うのだ。

イーリアスを冥界に連れ去るな。

イーリアスは冥府の女王ではない。

イーリアスは現世の女王なのだ。

日が暮れる前まで、ほんの数時間前のこの世界は希望に満ち、
未来への道が輝いていたのに。その道を私とイーリアスは歩いていく
はずだった。

これからが、二人の本当の暮らしになるはずだった。

愛らしかった子供のころ、わがままで、おてんばで、会うたびに
美しく大人になっていったイーリアス。

賢く、国と民を愛した。

私はクラコワの城中で、たった一人の子供だった。

それから十数年、傍にいるときも、そうでないときも、
彼女のことを想い、彼女を支えにして、歴史に抗い人と争い、
絶望すら葬って生きてきた。

そしてまた、世界に一人でとり残されてしまった。

私は、これから一人で生きていかねばならない。

イーリアスのいない世界を、ずっと一人でいかなければならない・・・。

いいや、戦いを続け、此の国を守る理由などまだあるのだろうか。
このまま北へと走り続け、ユルノ川に落ちてしまえ・・・。
私もまた、死者の国へと流されていく、一つの骸となるのだ。

私の身体は海に沈み、魚となり、泥に沈み、海藻となるだろう。
けれども、魂だけはイーリアスの元へと流れ着く。

イーリアスに言えば良かった。死者の国の、川縁で待つがいいと。
私はそこに流されていくからと。

イーリアスは、長い竿で私の魂を引き寄せ、私もまた、死の世界で
蘇るのだ。イーリアスの居ない現世など、もうどうでもいいではないか。

私はもともと王国などいらなかったのだ、現世の王などどうでもいい・・・。

私が乗っているこの馬は、何のために走っているのだ。
何処に向かっているのだ。もうイーリアスは居ないのに。

けれど、長い夜の彷徨いにも終わりはやってくる。
あたりは、日が昇る前の空の明かりにをうけて蒼く、闇に埋もれて
見えなかったものも、その姿を蘇らせる朝が来た。

亡霊は日の光に打ち消され、生きた鳥たちが空を行き交った。
生命の拍動が、白く立ち上る靄となって朝の空気を満たし始める。

家の窓に再び灯りがともり。炊煙と小麦の焼ける匂いがする。
眠っていたもの達が、目をこすりながら夢の中から現へと還ってくる。

「ここか。ここに帰れというのか。お前は。」

アストアシタ宮の、今はまだ暗い影がそこに立っていた。

棺の中のイーリアスは、なおも眠っているかのようだった。

白い衣装はかわりなく、とりどりの花が敷き詰められていた。

胸の下に組んだ指には、アレスミアンの指輪が、
彼がそうしたままにはめられていた。

アレスミアンは、せめてイーリアスが、幸せな気持ちで逝った
とだけは信じたかった。

最後の口付けの後、棺は閉じられ、先に眠る家族の側に葬られた。

見送る人々は、薄命だった姫の安らかな眠りと、
王国の悲劇がこれ以上続かないことを祈った。

— イーリアス編 完 —

「黄金の麦畑」

連載中

「黄昏の王国」

イーリアス編

アリシア編

— 僕カノシリーズ —

「僕が彼女に殺された理由（わけ）」

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった。」

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」

「僕と彼女と複雑な関係者たち」

「僕と彼女と単純な関係式」

「僕と彼女と校庭で」

「僕と彼女と校庭で 夏」

「僕と彼女のエリア」

「僕と彼女のインベンション」（次回）

— その他 —

夕暮れの赤ちょうちん

いもうと

サマータイム・ブルーズ

危険なドライビングマジック

デフラグメント

インフルエンス あのころの僕たち

花舞い、名残り雪

詞画集「ただ憧憬だけを」

写真集「空と雲と、ときどき月」

写真集「夢みる桜」